

研究紀要

第17号

2011

目次

序石田 彰

論文・研究ノート

- ◇愛鷹・箱根山麓における後期旧石器時代後半期前葉の石器群
—編年及び年代の整理—中村 雄紀 (1)
- ◇静岡県における縄文時代の¹⁴C年代の集成と検討三好 元樹 (15)
- ◇静岡県における有茎尖頭器の利用柴田 亮平・三好 元樹・中村 雄紀 (25)
- ◇東海地方の鉄器の出現杉山 和徳 (39)
- ◇遠江・駿河の頸部を呑み込む矢柄をもつ鉄鏃の意義
—無茎式・短茎式鉄鏃との比較を通じて—大谷 宏治 (53)
- ◇神力坊と三卷上人の経筒—西日本の廻国経筒2—足立 順司 (65)
- ◇三島ヶ嶽経塚小考—富士山本宮浅間大社所蔵写真資料から—勝又 直人 (79)
- ◇静岡県下における19世紀鑄造銭貨の遺失経過について岩名健太郎 (93)
- ◇力石の考古学的検討
—函南町仁田館遺跡出土「力石」の紹介を兼ねて—岩本 貴 (101)

資料紹介

- ◇藤枝市寺家前遺跡から出土した柄付き鉄製鎌について中川 律子 (111)



(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所



序

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所は、昭和59年5月の設立以来、県内各地で埋蔵文化財に関する多くの発掘調査や保存処理を実施してきましたが、既に200冊を超える調査報告書として、その成果を公表してまいりました。

日常の調査業務の基盤として必要な研究活動についても、設立以来、日々研鑽を積み重ねてきましたが、公開の場として昭和61年度に第1号を刊行した『研究紀要』は、一時の中断はあったものの、今回で17号を数えるまでになり、研究所の大きな財産となっています。

本号では旧石器から近世までの各時代にわたる論文・研究ノート10編、資料紹介1編を掲載することができました。当研究所の職員が日常業務と並行しながら、地域史解明のために問題意識を持ち、まとめあげたものです。

日頃の調査業務をはじめ、今回の研究活動に御理解・御協力いただいた方々に厚くお礼申し上げますとともに、本書が広く活用され、今後の考古学研究や地域史研究に多少なりとも資するところがあれば幸いと存じます。

平成23年1月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
所 長 石 田 彰

愛鷹・箱根山麓における後期旧石器時代後半期前葉の石器群

—編年及び年代の整理—

中村雄紀

要旨 愛鷹・箱根山麓における後期旧石器時代後半期前葉（AT降灰期以降、砂川期以前、愛鷹・箱根第3期に相当）の石器群の変遷を、近年増加が著しい新出資料を組み込んで整理した。当該期の石器群を大別7群に分け、その上で南関東の編年、及び年代測定データとの対応関係を考察した。第I黒色帯から第Iスコリア層までが南関東V層下部段階からV層上部段階に相当し、休場層直下黒色帯から休場層下位がIV層下部段階からIV層中部段階に相当するという対応関係が認められ、前者の年代が約30000-28000 cal BPとなる一方、砂川期の年代が23000 cal BP頃で与えられるところから、IV層下部段階からIV層中部段階並行期が相対的に長期間に及んでいた可能性を指摘した。

キーワード：愛鷹・箱根山麓、後期旧石器時代後半期前葉、第I黒色帯、第Iスコリア層、休場層直下黒色帯、休場層下位、IV層下部・V層段階、放射性炭素年代

1. はじめに

静岡県東部地域では、最近数年間で愛鷹山麓をはじめとする第二東名関連調査遺跡の報告書刊行が進み、利用可能となった旧石器時代の遺跡のデータが大幅に増加している。愛鷹山麓では後期旧石器時代でも前半期の石器群が注目される傾向にあるが、それ以上に後半期の石器群の資料の増加は著しい。当該時期の重層遺跡が多く、また放射性炭素年代測定や黒曜石の原産地推定分析など、石器群の基本的なデータの充実が図られている。

一方で、当地域における一般的な編年観は1995・1996年の「愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年」（静岡県考古学会1995・1996）（以下、愛鷹・箱根編年、その中の特定の期に言及する場合は愛鷹・箱根〇期と略す）から大きく変化しない状況が続いている。出土層位の対比から位置づけられた大別時期については大きく変化することはないが、現在のデータは石器群の変遷や内容についてかつてより詳細に迫ることを可能としている。本稿では、当地域における後期旧石器時代後半期前葉（AT降灰期以降から砂川並行期以前、愛鷹・箱根編年で言うところの第3期に相当）の変遷を、新出資料を取り入れ、年代測定の成果と対比した形で整理する。

2. 後期旧石器時代後半期前葉の編年研究

愛鷹・箱根山麓における後期旧石器時代後半期前葉は愛鷹・箱根第3期としてまとめられてきた。これについては1995年以降いくらかの修正が行われている（笹原千2004、笹原芳2005、高尾2006）ものの大枠では現在も受け入れられている。愛鷹・箱根第3期は南関東地方のIV層下部・V層段階に並行するものと考えられており、南関東地方との対比する形での整理も行われてきた（伊藤1996、須藤1996）。最近では全国的な編年対比の中での位置づけも提示されている（森先2007・2010）。筆者も愛鷹・箱根山麓のこの時期の石器群について述べたことがあるが（中村2005・2006・2009）、資料の増加に伴い修正の必要がある点も出てきているので本稿で現在の見解を提示する。

ところで、南関東地方の当該期の編年の問題点について伊藤健氏（2007）がまとめているが、その中の幾つかは静岡県東部地域にも当て嵌まる。まず文化層については、文化層の設定に関する問題もさることながら、1遺跡（厳密には調査区）で1文化層とされた資料が短絡的に1単位として扱われることも問題である。遺跡の範囲は行政的に定められたものにすぎないため、単に同一遺跡内というだけでは資料の一括性は担保されない。それ以上の層位的分離が不可能なため同一文化層に整理されていても、無批判

に数10~100m離れた遺構同士を1まとめに扱ったり、単独出土資料まで一緒にして石器組成を論じたりするのは厳密性を欠く議論である。また、同一時期の遺物群を自然層位で分断している可能性が高い事例も散見される。このように編年の単位となる個別石器群の検証が必要である点は関東地方と同様である。

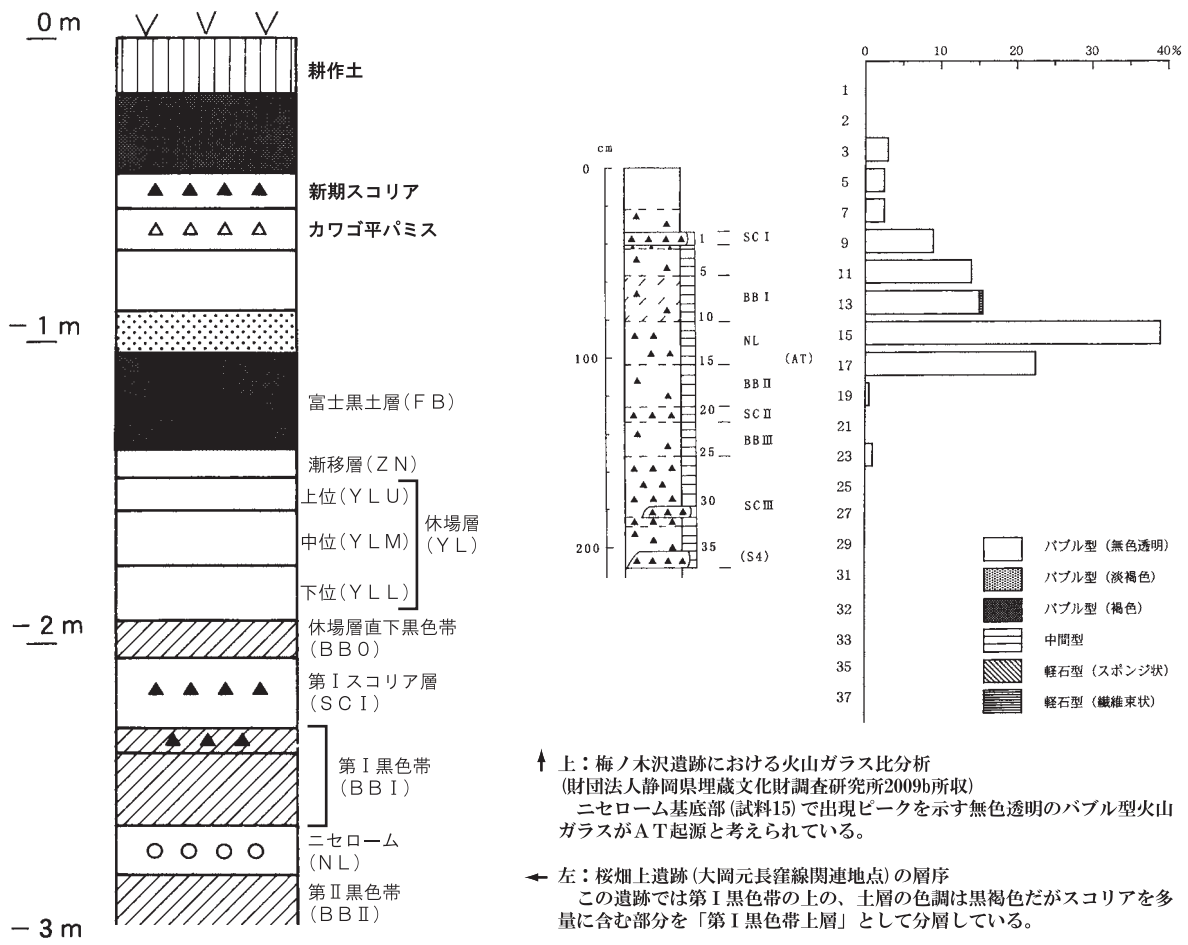
また、砂川期の直前期にあたる愛鷹・箱根山麓の第3期終末、南関東のIV中亜段階(伊藤1991)、或いはIV層下部・V層最新段階(国武2003)に並行する時期の位置づけも見直すべき点である。1995・1996年の愛鷹・箱根編年では第3期を休場層直下黒色帯まで、第4期を休場層下部から、と位置付けていたが、その後休場層出土の石器群に第3期終末に位置づけられるものがあることが明らかになってきている。この点について明瞭な形で問題提起されたのは寺林遺跡(笹原千2004)においてである。寺林遺跡第III文化層の石器群は主として休場層下・中部から出土しているが、第4期よりむしろ第3期に近い特徴をもち、両者

の過渡期として位置づけられた。同様に、従来第4期、砂川並行期以降に位置づけられていた休場層出土の石器群には第3期の終末として再評価が必要なものが含まれている。

本稿ではこうした事項に留意して編年の整理を行う。

3. 遺跡と層位

まず、当地域の遺跡の層序について確認しておく(第1図)。火山ガラス等を対象としたテフラ分析によると、愛鷹・箱根山麓ではATの降灰層準はニセローム下部に位置づけられている。後期旧石器時代後半期前葉に相当する石器群は主として第I黒色帯から第Iスコリア層、休場層直下黒色帯、休場層下位にかけて出土する。これについては愛鷹山南麓から箱根西麓の広い範囲で同様の層序堆積が確認されている。但し細部では遺跡間で分層基準が一致していない可能性があるので層序の対比を検討する際には注意が必要である。例えば休場層の3分割については休場層内



第1図 愛鷹山麓における遺跡の層序

のスコリア層が確認されない場合や休場層と休場層直下黒色帯が分離されない場合があり、また第Ⅰスコリア層・第Ⅰ黒色帯についても、中間に黒褐色でスコリアが多い層が分けられる場合があるが、この部分を第Ⅰスコリア層・第Ⅰ黒色帯のいずれに含めるか、取り扱いが遺跡によって異なっている（第1図左）。

4. 石器群の変遷

(1) 検討の方法

既存の編年において行われているように、当地域では（第Ⅰ黒色帯と休場層直下黒色帯とで区分するなど）出土層位に基づいて整理を行えば石器群の変遷はある程度まで捉えることが可能であるが、出土層位を現在以上に詳細に対比するのは容易ではない。また、石器群の変化は本来ある程度連続的であり、ある時点で全体が置き換わるというものではないはずである。そのため、ここでは層位に基づいて時間軸を輪切りにするのではなく、技術形態学的特徴と出土層位との双方を考慮して、第Ⅰ黒色帯から休場層下位の石器群をA群からG群の大別7群に分類した上で石器群の変遷を考察する。

(2) AT降灰直前からAT降灰期（第2図）

第Ⅱ黒色帯からニセロームの石器群では、大形の石刃・剥片製ナイフ形石器を特徴とする石器群と小形の剥片製ナイフ形石器を特徴とする石器群とがあることが知られている。石材はホルンフェルスや黒曜石を主とするが、同時期の南関東のように信州産黒曜石中心の遺跡が主体となる現象は認められない。

大形の基部加工尖頭形石刃石器を特徴とする西洞遺跡b区BBⅡU（沼津市教育委員会1999）のような石器群もあるが、清水柳北遺跡東尾根NL（1～5）（沼津市教育委員会1989）、イタドリA遺跡第Ⅰ文化層（6～8）（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2009d）など、5cm以下の小形のナイフ形石器を主体とする石器群が一般的である。清水柳北遺跡東尾根NL下部の石器群では、2cm程度の小形のナイフ形石器に、ホルンフェルス製の大型粗製石刃が伴っている。

(3) A群（第3図）

子ノ神遺跡第Ⅱ文化層（1～5）（沼津市教育委員会1982）、桜畑上遺跡（第二東名）第Ⅴ文化層（6～8）（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2009c）、陣場上B遺

跡第Ⅱ文化層（9～14）（長泉町教育委員会1994）など、第Ⅰ黒色帯下部の石器群である。層位的にはAT降灰期に後続する時期に位置づけられる。いずれも小形の石刃・縦長剥片製ナイフ形石器、搔器、楔形石器を主体とする石器群である。石刃・縦長剥片製石器については清水柳北遺跡東尾根NLなどと同様であるが、一般的剥片による搔器や楔形石器を伴う点が異なっている。ホルンフェルス製の大型石刃は桜畑上遺跡で出土しているが、刺突具に用いられる例は見られない。石材は子ノ神遺跡第Ⅱ文化層が柏峠産黒曜石、桜畑上遺跡（第二東名）第Ⅴ文化層が信州産黒曜石と、1種に偏る傾向がある。

この他、清水柳北東尾根BBⅠ下部の石器群（1～6号ブロック、配石など）の石器群も同様の特徴をもち、黒曜石製の小形のナイフ形石器、搔器にホルンフェルス製石刃を伴う。また、西山遺跡第Ⅱ文化層（石器集中部分）（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2006）は定型的石器が搔器のみの石器群であるが、出土層位から上記の石器群と同時期と考えられる。

(4) B群（第4図）

A群に比して大形・厚手の石刃・剥片を素材とする刺突具・加工具が主体となる石器群をB群としてまとめ、以下のようにBⅠ群とBⅡ群とに細分する。

BⅠ群は先細りの石刃を素材とする基部加工尖頭形石器（主としてホルンフェルス製）と厚手剥片製の搔器（主として信州や箱根産の黒曜石製）などから成る石器組成が一般的で、桜畑上遺跡（県道大岡元長窪線関連）BBⅠ（1～3）（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2003a）、中見代第Ⅱ遺跡第Ⅶ層（4～6）（沼津市教育委員会1989a）、中村分遺跡BBⅠ（三島市教育委員会1998）などがある。

BⅡ群はこれに加えて、尖頭形の角錐状石器や、その加工技術の影響を受けたと考えられる厚形鋸歯縁加工による背部調整のナイフ形石器が伴うものである。上ノ池遺跡第Ⅲ文化層（7～12）（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所1998）、イラウネ遺跡第Ⅲ文化層（4・5号ブロック）（18～22）（長泉町教育委員会1986）、中見代第Ⅲ遺跡第Ⅵ層（沼津市教育委員会1989a）などである。また、桜畑上遺跡（東駿河湾環状道路関連）第Ⅱ文化層エリアE（13～17）（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2010b）の石器群では基部加工が鋸歯状調整となるナイフ形石器が出土しており、BⅡ群に位置づけられる可能性がある。尾上イ

ラウネ北遺跡BB I（沼津市教育委員会1992）のナイフ形石器も欠損品ではあるが類品の可能性がある。角錐状石器は出土例が僅かであり、上ノ池遺跡の他、零細な資料だが観音洞G遺跡BB I（三島市教育委員会1994）の例が挙げられる。また、八田原遺跡BB I（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所1997）、加茂ノ洞B遺跡BB I（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所1996）などのように大形石刃と厚形搔器とから成る石器群もB群に含まれるものと考えられる。

なお、桜畑上遺跡（県道大岡元長窪線関連）BB Iでもホルンフェルス製の角錐状石器様の石器1点が出土している（第4図2）。これは右側縁基部側と左側縁とを急斜度の鋸歯縁加工で成形し、右側縁上半はやや平坦な剥離で成形されたもので、先端は尖らないが折損している可能性がある。加工技術には角錐状石器からの影響が伺えるが、角錐状石器そのものとは言い難い形態である。

B群においては、黒曜石製搔器の素材をはじめとする一般的剥片製作に関しては関連する接合資料や石核が遺跡内でしばしば出土するが、石刃（主にホルンフェルス製）に関しては遺跡内で石核や接合資料の例に乏しく、製作を示す資料がほとんど出土しない傾向にある。

出土層位は第I黒色帯中部～上部である。桜畑上遺跡の資料から、県道大岡元長窪線関連地点BB Iや東駿河湾環状道路関連地点第II文化層は出土層位、及び炭素年代からA群の第二東名関連地点第V文化層より後出と見られる。

(5) C群（第5図）

梅ノ木沢遺跡第VI文化層（1～6）（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2009b）、イラウネ遺跡第III文化層（1～3号ブロック）（7～11）、桜畑上遺跡（東駿河湾環状道路関連）第II文化層エリアB（12～14）がある。

縦長剥片素材の基部・一側縁加工ナイフ形石器、基部加工尖頭形剥片石器、素材を横位に用いた切出形石器など、一般的剥片主体の石器群である。厚形の剥片素材である搔器類と粗製の大形石刃がこれに伴う。

出土層位は、梅ノ木沢遺跡第VI文化層、桜畑上遺跡（東駿河湾環状道路関連）第II文化層エリアBは第I黒色帯上部出土とされるが、イラウネ遺跡第III文化層（1～3号ブロック）については第I黒色帯出土という以上の情報がない。

(6) D群（第6図）

中見代第I遺跡第II文化層（1～5）（沼津市教育委員会1989b）、西大曲遺跡BB I（6～10）（沼津市史編さん委員会2002）など、石刃・縦長剥片製の二側縁加工・一側縁加工ナイフ形石器を主体とする石器群。ナイフ形石器素材より一回り大きい大形石刃が伴い、西大曲遺跡では大形の石刃製削器も出土している。この他、小形の剥片・石刃石器群としては清水柳北遺跡東尾根BB I上部（6～8号ブロック）があり、黒曜石製の小形ナイフ形石器とホルンフェルス製石刃とから成る。

出土層位は第I黒色帯上面から第Iスコリア層に包含されていたとされる。

(7) E群（第7図）

両側縁を急斜度鋸歯状加工で成形した角錐状石器、或いは片側縁を急斜度鋸歯状加工で成形したナイフ形石器など尖頭形の角錐状石器類と、切出形石器が発達する石器群をここに含める。

角錐状石器類は子ノ神遺跡第III文化層（1～7）、上ノ池遺跡第II文化層（8～10）、野台南遺跡第IV文化層（11～13）（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2009a）、桜畑上遺跡（第二東名）第VI文化層（20～22）、中見代第II遺跡第V層で出土しており、桜畑上遺跡、野台南遺跡、中見代第II遺跡でホルンフェルス製、子ノ神遺跡で信州産黒曜石製、上ノ池遺跡で信州産・柏峠産黒曜石である。中見代第II遺跡、子ノ神遺跡や上ノ池遺跡では厚い側縁加工による小形の切出形石器が伴う。

一方、梅ノ木沢遺跡第VII文化層（14～19）では、厚手の縦長剥片の両側縁を加工した大形の切出形石器があり、中見代第III遺跡第VI層でも同形態のもの（23）が出土している。

出土層位では桜畑上遺跡（第二東名）第VI文化層がやや下位に位置づけられ、第I黒色帯上部から第Iスコリア層で出土している。その他の石器群は第Iスコリア層上部から休場層直下黒色帯に位置づけられており、層位的には近接した位置づけが与えられる。角錐状石器は第I黒色帯中の遺跡で散見されていたが、この時期に集中的に現れる。

(8) F群（第9図）

角錐状石器に代わって急斜度加工をもつ砲弾形のナイフ形石器が現れ、これに各種のナイフ形石器、切出形石器が伴う1群である。砲弾形のナイフ形石器のある石器群とし

ては西大曲遺跡休場層Dブロック（1～4）の石器群が早くから知られていたが、下ノ大窪遺跡第Ⅲ文化層（5～10）（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2008a）、秋葉林遺跡第Ⅶ文化層石器集中14-16（13～21）（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2009c）、梅ノ木沢遺跡第Ⅷ文化層などに見られるものは同種の石器として位置づけられる。これらの石器群では、砲弾形ナイフ形石器は厚手で縦長の素材を縦位に用いるが、これに対し薄手の縦長剥片製の一側縁・二側縁加工ナイフ形石器もある。また、幅広の素材を横或いは斜位に用いた切出形石器があるが、これにも厚形、薄形両様が見られる。

また、同様の層位から出土している基部・先端加工のナイフ形石器や一側縁加工のナイフ形石器のみから成る池田B遺跡（11・12）（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2000）、桜畑上遺跡（東駿河湾環状道路関連）第Ⅲ文化層エリアA、同エリアBもこの1群に含めておく。

出土層位は休場層直下黒色帯上部から休場層の最下部を中心とする。

(9) G群（第10図）

F群に層位的に後続する、主として休場層下位から出土する石器群を一括する。石器群が主に休場層中位から下位に包含され、礫群が休場層下位から中位の下部に位置づけられる1群として抽出されるが、石器群の技術形態学的特徴ではF群と共通する要素が多く見られる。

秋葉林遺跡（第5地区）第Ⅷ文化層（1～6）、向田A遺跡YL4号ブロック（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2007）、中林山遺跡（20～23）（三島市教育委員会2002）では厚手の側縁加工をもつナイフ形石器、切出形石器が見られ、これに対し塚松遺跡第Ⅲ文化層22号ブロック（16～19）（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2008b）、入ノ洞B遺跡第Ⅲ文化層（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2008b）、清水柳北遺跡東尾根休場層10ブロック群、桜畑上遺跡（東駿河湾環状道路関連）第Ⅳ文化層エリアJなどでは薄手の二側縁・一側縁加工ナイフ形石器、切出形石器が主体である。寺林遺跡第Ⅲ文化層（7～15）（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2003b）では遺物集中ごとにこれらの様々な要素が入っている（註1）。

なお、かつては休場層下位から「愛鷹・箱根第4期」として設定され、砂川並行期の石器群が出土すると見なさ

れていたが、ここに見たように休場層下位では基本的に砂川期より遡る石器群が出土し、砂川並行期の石器群の出土層位は主に休場層中位となる（中村2006）。

5. 編年の整理と対比

第Ⅰ黒色帯から休場層下部までの石器群を仮にA～Gの7群にまとめたが、ここでこれらの時間的な前後関係を整理し、また南関東の編年との並行関係を整理する（註2）。

すでに述べた通り、この時期の石器群は南関東においてIV層下部・V層段階（註3）と呼ばれてきた時期に相当し、地域間の対比も実践されてきた。IV層下部・V層段階は伊藤健氏の論考（1991）以来4つの時期に分けて理解されることが一般的である。

A群はAT降灰期のVI層段階から連続的な様相をもち、V層下部段階とされる湘南藤沢キャンパス構内遺跡第Ⅴ文化層（第10図3～6）（慶応義塾1992）の石器群に対比される。また、小形剥片製ナイフ形石器を主体とする点では栗原中丸遺跡第Ⅶ文化層（同図1・2）（神奈川県埋蔵文化財センター1984a）に近い内容をもっている。

B群は石刃製基部加工尖頭形石器主体のB1群と鋸歯状調整のナイフ形石器が現れるB2群とに分けたが、石刃製基部加工尖頭形石器と鋸歯状調整ナイフ形石器とは共伴する場合もあり、両者の層位的差異は愛鷹・箱根山麓では明瞭ではない。南関東地方では石刃製の基部加工・側縁加工のナイフ形石器はV層下部段階（第10図）、鋸歯状調整によるナイフ形石器はV層上部段階（第11図）に主体となる。したがって、A群の主なもの、及びB1群がV層下部段階、B2群がV層上部段階に対比される。

C・D群は基部・側縁加工のナイフ形石器や基部加工尖頭形石器が主体となっている。V層上部段階には基部・側縁加工のナイフ形石器や基部加工尖頭形石器主体の石器群（第11図1～5）も見られることから（註4）、この段階に対比されるものと考えられる。

E群は、愛鷹山麓において角錐状石器が最も多くなるなど、IV層下部段階（第12図）に対比される。関東地方では長狭で大形の切出形石器が発達し、素材を横位に用いる例が多いのに対し、愛鷹山麓では縦位で同様の形態が実現されている（第7図18、23）。但し、E群の一部は層位的にも年代測定においてもC群とほぼ同時期に位置づけられ、時期的に重なる部分もあったようである。

第1表 愛鷹・箱根山麓の石器群の年代

| 遺 跡 | 文化層 | 遺 構 | 層位 | 測定番号 | 炭素年代(yrBP) | 較正年代(cal BP) |
|-----------|------|---------------|--------|------------|-------------|---------------|
| 向田A | YL | 炉跡01内 | YL | IAAA-60498 | 19250 ± 90 | 23010 - 23270 |
| 向田A | YL | 炉跡01内 | YL | IAAA-60499 | 19130 ± 100 | 22870 - 23170 |
| 向田A | YL | 炉跡01 (RG06) | YLL | IAAA-10528 | 15550 ± 60 | 18670 - 18750 |
| 梅ノ木沢 | | 炭化物集中007 | YL 4 | IAAA-80612 | 17910 ± 80 | 21370 - 21510 |
| 梅ノ木沢 | | 炭化物集中012 | YL 5 | IAAA-80611 | 18950 ± 80 | 22690 - 22930 |
| 桜畑上(第二東名) | VI | 1号炭化物集中 | BB I U | IAAA-80599 | 23420 ± 100 | 28090 - 28250 |
| 桜畑上(第二東名) | VI | 1号炭化物集中 | BB I U | IAAA-80600 | 23600 ± 100 | 28190 - 28390 |
| 梅ノ木沢 | VI | 1号礫群 | BB I | IAAA-80616 | 23460 ± 110 | 28100 - 28280 |
| 梅ノ木沢 | VI | 3号礫群 | BB I | IAAA-80613 | 23620 ± 100 | 28200 - 28400 |
| 梅ノ木沢 | VI | 5号礫群 | BB I | IAAA-80615 | 23450 ± 110 | 28100 - 28280 |
| 細尾 | IV | BL22 | BB I | PLD-13810 | 23396 ± 74 | 28080 - 28220 |
| 観音洞B | | BB1 1号炉跡 | BB I | N-5608 | 23700 ± 680 | 27810 - 29350 |
| 観音洞B | | BB1 1号炉跡 | BB I | N-5609 | 24400 ± 570 | 28570 - 29790 |
| 桜畑上(東駿河湾) | II | エリアE | BB I | IAAA-90927 | 24180 ± 110 | 28730 - 29390 |
| 桜畑上(東駿河湾) | II | エリアE | BB I | IAAA-90928 | 24190 ± 100 | 28760 - 29400 |
| 桜畑上(東駿河湾) | II | エリアE | BB I | IAAA-90929 | 24340 ± 100 | 28990 - 29570 |
| 桜畑上(県道) | BB I | RG05 | BB I | PLD-1431 | 24610 ± 100 | 29560 - 29760 |
| 桜畑上(県道) | BB I | RG05 | BB I | PLD-1433 | 24540 ± 110 | 29460 - 29720 |
| 桜畑上(県道) | BB I | RG05 | BB I | PLD-1434 | 24320 ± 100 | 28950 - 29550 |
| 桜畑上(第二東名) | V | 10号炭化物集中 | BB I L | IAAA-80594 | 24850 ± 100 | 29730 - 29890 |
| 桜畑上(第二東名) | V | 10号炭化物集中 | BB I L | IAAA-80595 | 24900 ± 110 | 29760 - 29940 |
| 桜畑上(第二東名) | V | 7号炭化物集中 | BB I L | IAAA-80596 | 24930 ± 110 | 29770 - 29970 |
| 桜畑上(第二東名) | V | 7号炭化物集中 | BB I L | IAAA-80597 | 24990 ± 110 | 29810 - 30030 |
| 桜畑上(第二東名) | V | 8号炭化物集中 | BB I L | IAAA-80598 | 25010 ± 110 | 29820 - 30040 |
| 桜畑上(第二東名) | V | 3号炭化物集中 | BB I L | IAAA-80601 | 25090 ± 110 | 29860 - 30120 |
| 西山 | II | 1号炭化物集中 | NLa | IAAA-41163 | 25110 ± 120 | 29870 - 30150 |
| 西山 | II | 1号炭化物集中 | NLa | IAAA-41164 | 25230 ± 130 | 29940 - 30240 |
| 西山 | II | 1号炭化物集中 | NLa | IAAA-41165 | 24960 ± 130 | 29790 - 30010 |
| 西山 | II | 1号炭化物集中 | NLa | IAAA-41166 | 24820 ± 130 | 29700 - 29900 |
| 西山 | II | 2号炭化物集中 | BB I L | IAAA-41167 | 25150 ± 130 | 29900 - 30180 |
| 西山 | II | 2号炭化物集中 | BB I L | IAAA-41168 | 25160 ± 130 | 29900 - 30200 |
| 向田A | NL | 炭化物集中域03 | NL | IAAA-60494 | 25420 ± 120 | 30060 - 30400 |
| 向田A | NL | 炭化物集中域03 | NL | IAAA-60495 | 25390 ± 110 | 30050 - 30370 |
| 向田A | NL | 炭化物集中域03 | NL | IAAA-60496 | 25160 ± 120 | 29900 - 30180 |
| 向田A | NL | 炭化物集中域03 | NL | IAAA-60497 | 25370 ± 120 | 30020 - 30360 |
| 向田A | NL | 炭化物集中域05 | NL | IAAA-60500 | 25170 ± 120 | 29910 - 30190 |
| 向田A | NL | 炭化物集中域05 | NL | IAAA-60501 | 25010 ± 120 | 29820 - 30060 |
| 向田A | NL | 炭化物集中域07 | NL | IAAA-60502 | 25690 ± 130 | 30330 - 30750 |
| 向田A | NL | 炭化物集中域07 | NL | IAAA-60503 | 24910 ± 110 | 29770 - 29950 |
| 向田A | NL | 炭化物集中域07 | NL | IAAA-60504 | 25180 ± 120 | 29920 - 30200 |
| 向田A | NL | 炭化物集中域07 | NL | IAAA-60505 | 25190 ± 110 | 29920 - 30200 |
| 向田A | NL | 炭化物集中域06 | NL | IAAA-60506 | 25440 ± 110 | 30080 - 30420 |
| 向田A | NL | 炭化物集中域06 | NL | IAAA-60508 | 25090 ± 120 | 29860 - 30120 |
| 向田A | NL | 炭化物集中域06 | NL | IAAA-60509 | 25430 ± 120 | 30070 - 30410 |
| 向田A | NL | 炉跡03内 | NL | IAAA-60510 | 25210 ± 110 | 29930 - 30210 |
| 向田A | NL | 炭化物集中域04 | NL | IAAA-60511 | 25100 ± 110 | 29870 - 30130 |
| 向田A | NL | 炭化物集中域04 | NL | IAAA-60512 | 24870 ± 110 | 29740 - 29920 |
| 向田A | NL | 炭化物集中域04 | NL | IAAA-60513 | 25080 ± 120 | 29860 - 30120 |
| 向田A | NL | 第1黒色帯 | NL | IAAA-61099 | 24450 ± 140 | 29160 - 29660 |
| 向田A | NL | ニセローム層 | NL | IAAA-61100 | 24840 ± 150 | 29700 - 29920 |
| 向田A | NL | 炉跡02 (SU01) | NL | IAAA-10616 | 25630 ± 120 | 30260 - 30640 |
| 向田A | NL | 炉跡02 (SU01) | NL | IAAA-10617 | 19550 ± 70 | 23360 - 23500 |
| 向田A | NL | ブロック13 (SU02) | NL | IAAA-10618 | 24760 ± 90 | 29680 - 29840 |
| 桜畑上(県道) | | SX05 | NL | PLD-1435 | 25330 ± 110 | 30000 - 30320 |

第2表 相模野・武蔵野台地等の石器群の年代

| 遺 跡 | 文化層 | 遺 構 | 層位 | 測定番号 | 炭素年代(yrBP) | 較正年代(cal BP) |
|-----------|-----|------------------|---------|-------------|-------------|---------------|
| 福田丙二ノ区 | II | 2号礫群 | B 1 | Tka-11591 | 19440 ± 430 | 22840 - 23780 |
| 福田丙二ノ区 | II | 2号礫群 | B 1 | Tka-11598 | 18970 ± 440 | 22190 - 23250 |
| 福田丙二ノ区 | II | 4号礫群 | B 1 | Tka-11601 | 19240 ± 700 | 22180 - 23860 |
| 福田丙二ノ区 | II | 5号礫群 | B 1 | Tka-11602 | 18770 ± 330 | 22030 - 22990 |
| 福田丙二ノ区 | II | 7号ブロック隣接 | B 1 | Tka-11603 | 19220 ± 330 | 22730 - 23390 |
| 福田丙二ノ区 | II | 7号ブロック隣接 | B 1 | Tka-11605 | 19460 ± 350 | 22940 - 23700 |
| 福田丙二ノ区 | II | 1号礫群 | B 1 | Tka-11611 | 19300 ± 270 | 22850 - 23410 |
| 福田丙二ノ区 | II | 1号礫群 | B 1 | Tka-11537 | 19660 ± 440 | 23080 - 24120 |
| 宮ヶ瀬中原 | V | P 1 炉址 | B 1 L | Beta-97116 | 18920 ± 100 | 22650 - 22930 |
| 宮ヶ瀬上原 | V | | B 1 L | Beta-97117 | 19240 ± 100 | 22990 - 23270 |
| 宮ヶ瀬上原 | V | | B 1 L | Beta-97118 | 19470 ± 100 | 23290 - 23450 |
| 用田大河内 | VI | 第7石器集中 | BB 2 L② | Beta-125304 | 22880 ± 80 | 27660 - 27920 |
| 用田大河内 | VI | 第7石器集中 | BB 2 L② | Beta-125305 | 21840 ± 120 | 25920 - 26480 |
| 用田大河内 | VI | 第7石器集中 | BB 2 L② | Beta-125306 | 21330 ± 50 | 25160 - 25540 |
| 用田大河内 | VI | 第7石器集中 | BB 2 L② | Beta-128829 | 22850 ± 180 | 27170 - 27910 |
| 用田大河内 | VI | 第7石器集中 | BB 2 L② | Beta-130869 | 22790 ± 200 | 27120 - 27860 |
| 津久井城跡馬込地区 | 4 | 2号礫群 | B 2 U | IAAA-81382 | 24570 ± 110 | 29500 - 29740 |
| 武蔵台 | | A98-SX29 | V b | PLD-9904 | 22100 ± 90 | 26260 - 26720 |
| 武蔵台 | | B91-SX19 | V b | PLD-9906 | 22440 ± 90 | 26920 - 27520 |
| 武蔵台西地区 | 4 | A97-SX48 (炉跡状遺構) | V b | Beta-182635 | 24150 ± 200 | 28640 - 29400 |
| 武蔵台西地区 | 4 | A97-SX72 (炉跡状遺構) | V b | Beta-156136 | 23940 ± 150 | 28470 - 29170 |
| 武蔵台西地区 | 4 | A97-SX98 (炉跡状遺構) | V b | Beta-182636 | 24530 ± 300 | 28860 - 29740 |

F群からG群は先述の通り連

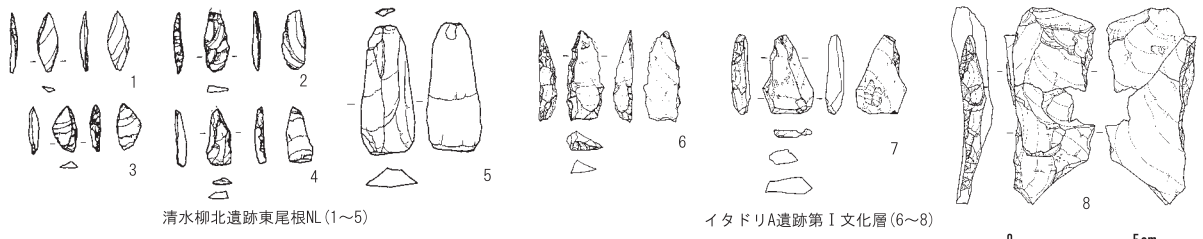
続的に捉えられ、主要器種の型式等では区分があまりはっきりしない。また検討の余地があるが、現段階では、F群は国武貞克氏(2003)によりIV層下部段階の新相に位置づけられた一群(自由学園南遺跡:第12図19~25など(自由学園南遺跡調査団1991))、G群は代官山遺跡第VI文化層(第13図7~10)(神奈川県埋蔵文化財センター1984b)、武蔵台遺跡IV中(11~14)(都立府中病院内遺跡調査団1984)などのIV層中部段階(第13図)とされる石器群とそれぞれ対比されるものと予測される。特に秋葉林遺跡第5地区第VIII文化層の石器群は明花向遺跡C区(第13図1~6)(埼玉県埋蔵文化財調査事業団1984)、花沢東遺跡第III文化層(15~18)(恋ヶ窪遺跡調査会1984)のものなどよく類似している。

以上、A~G群の前後関係と南関東の編年との対比をまとめると第14図のようになる。

6. 石器群の年代

最後に、前節までで扱った石器群の変遷と年代測定により得られた年代値との関係をまとめておく。

愛鷹山麓の旧石器時代の遺跡ではしばしば炭化物集中が発見される(礫群などと重複している場合もあるが、まったく遺物を伴わない場合もある)。主としてそうした炭化物集中から得



清水柳北遺跡東尾根NL (1~5)

イタドリA遺跡第I文化層(6~8)

第2図 ニセロームの石器群

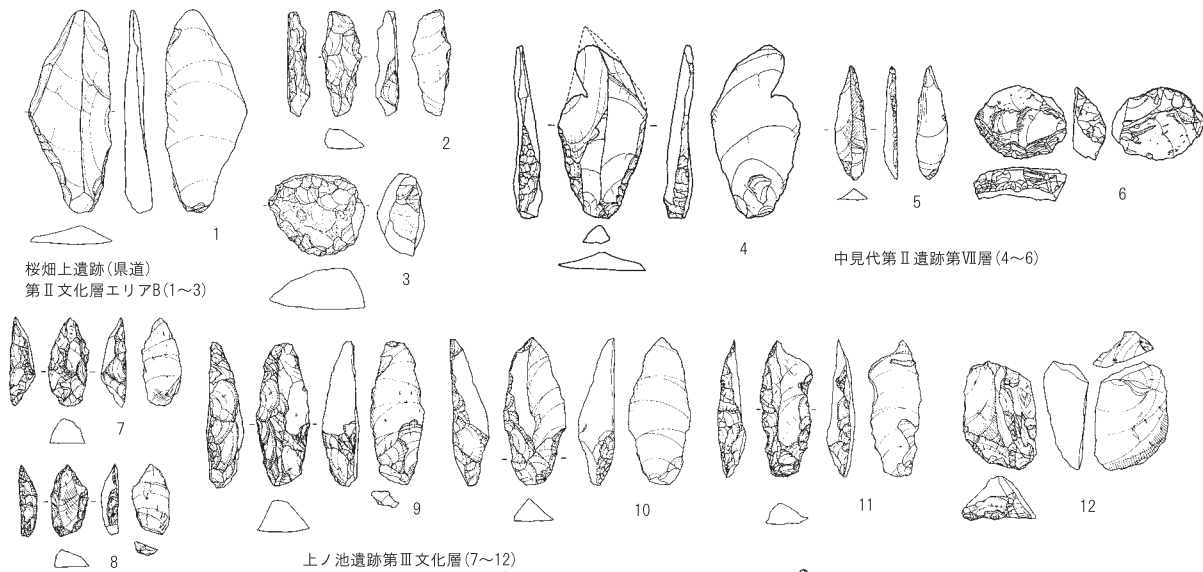


子ノ神遺跡第II文化層(1~5)

桜畑上遺跡(第二東名)第V文化層(6~8)

陣場上B遺跡第II文化層(9~14)

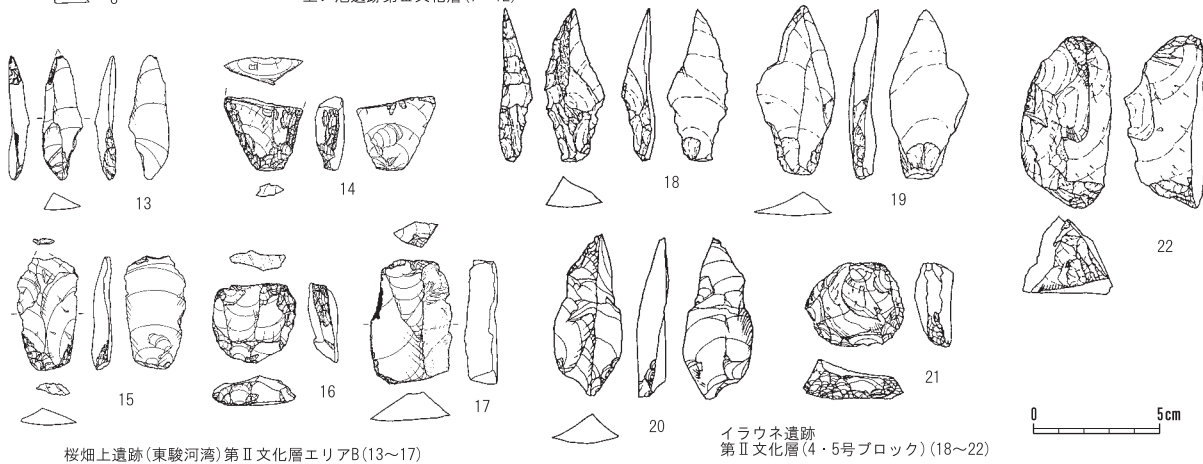
第3図 A群の石器群



桜畑上遺跡(県道)
第II文化層エリアB(1~3)

中見代第II遺跡第VII層(4~6)

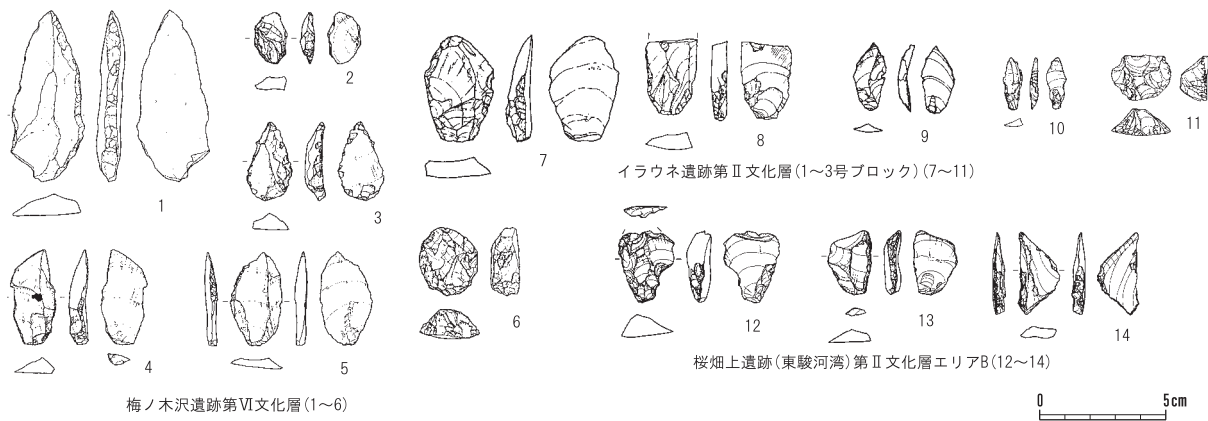
上ノ池遺跡第III文化層(7~12)



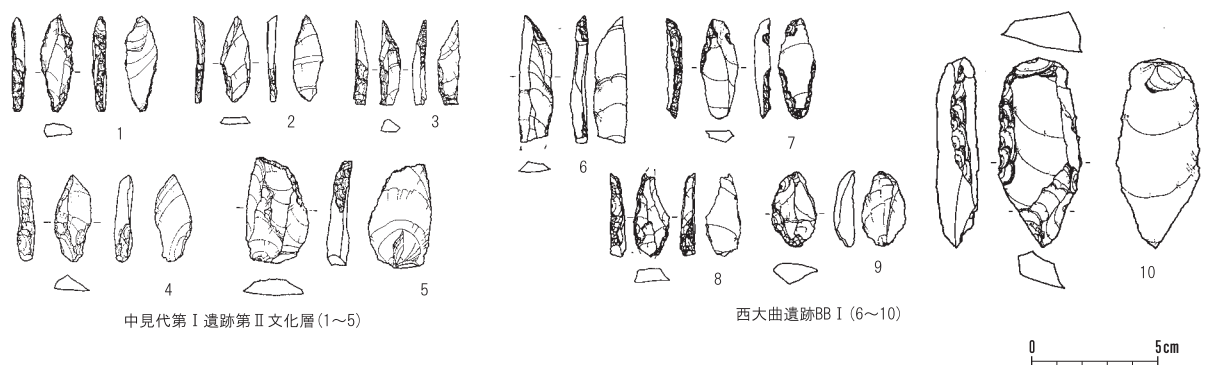
桜畑上遺跡(東駿河湾)第II文化層エリアB(13~17)

イラウネ遺跡
第II文化層(4・5号ブロック)(18~22)

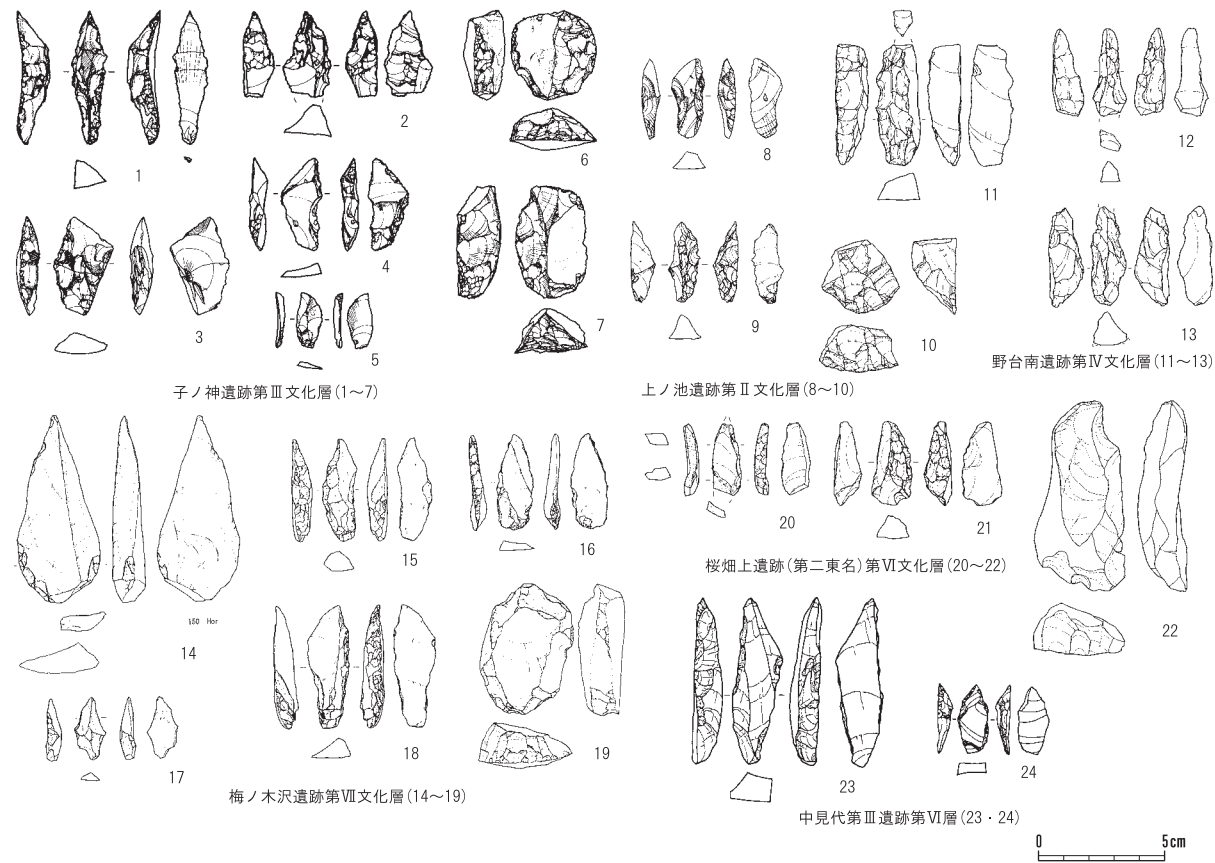
第4図 B群の石器群



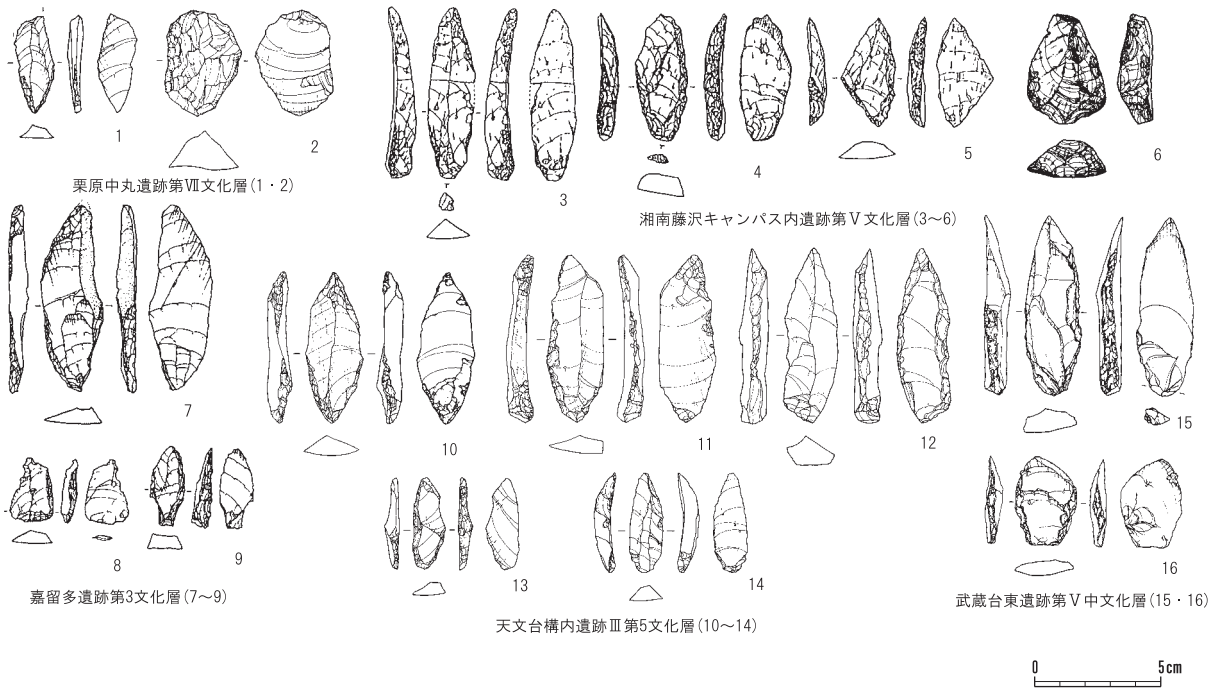
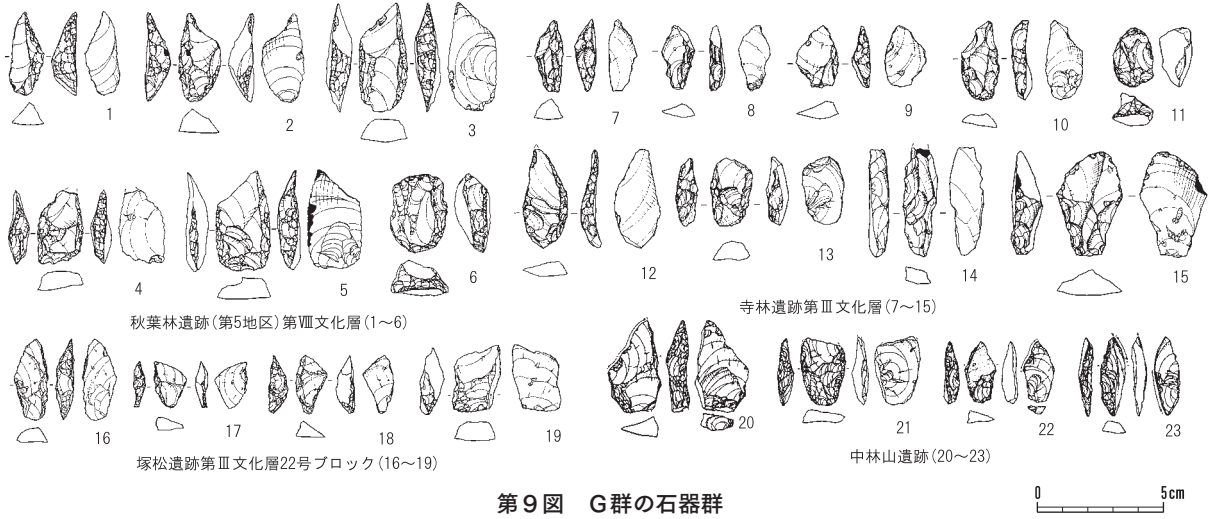
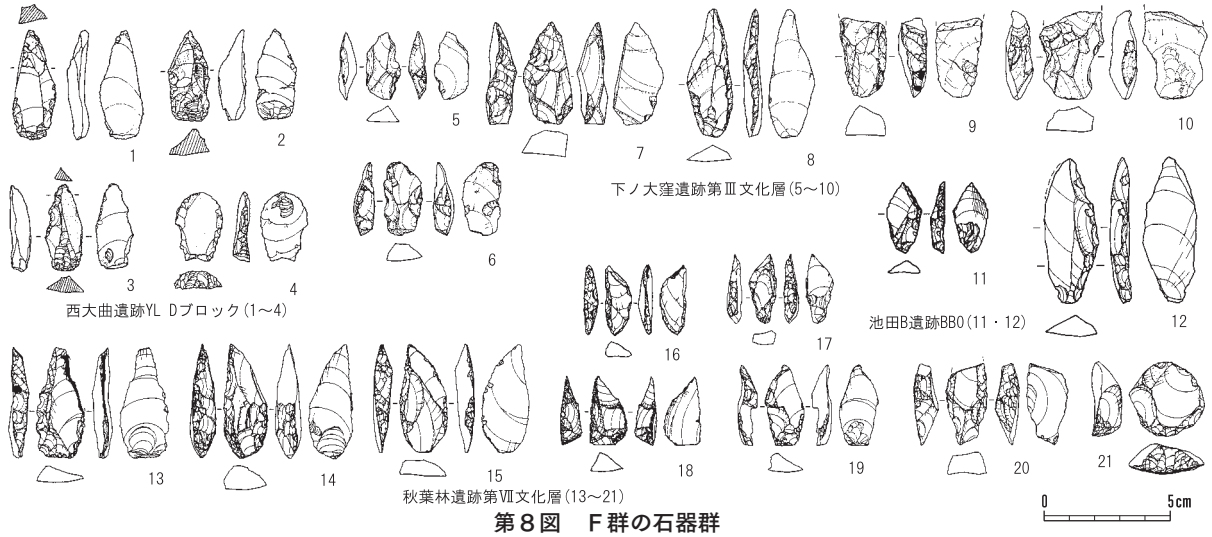
第5図 C群の石器群

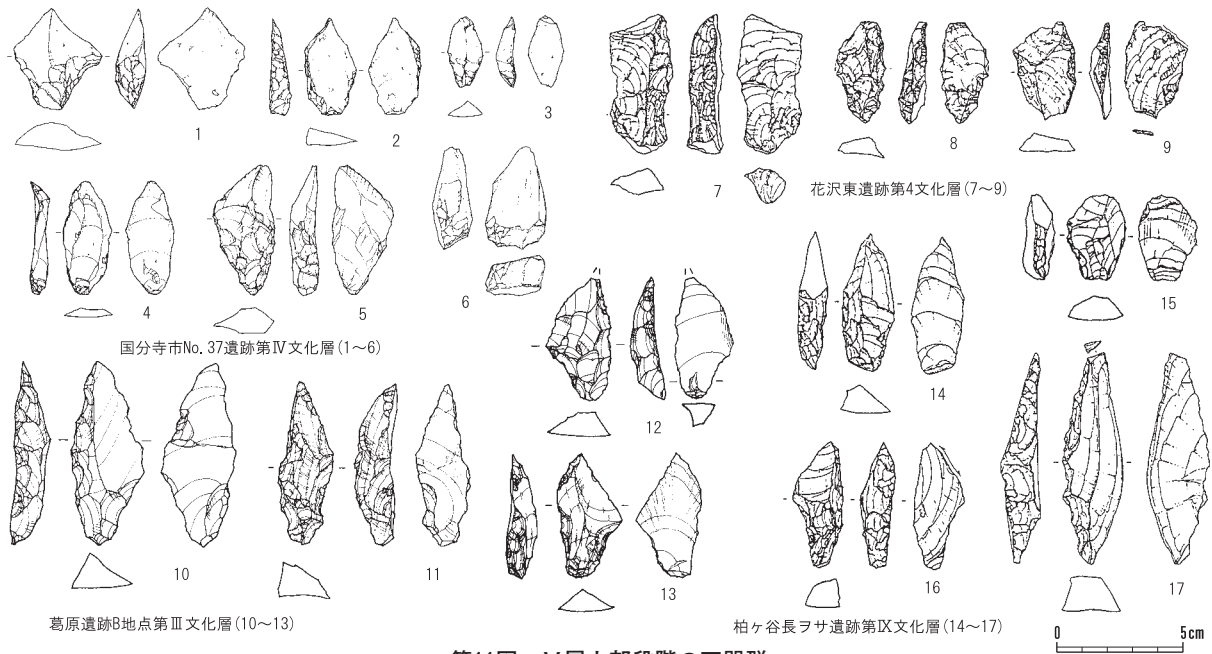


第6図 D群の石器群

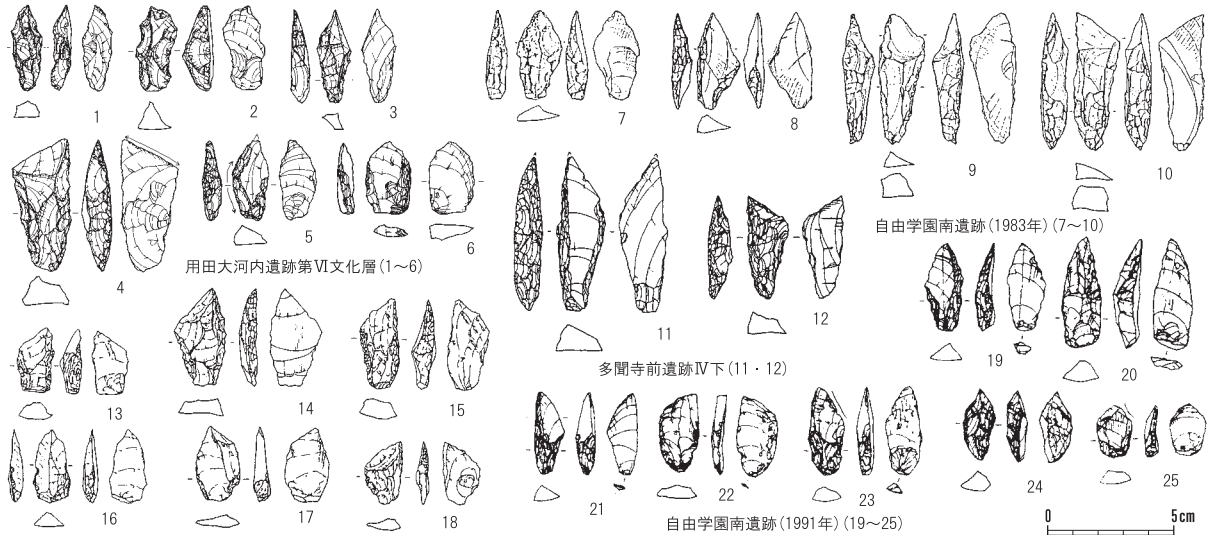


第7図 E群の石器群

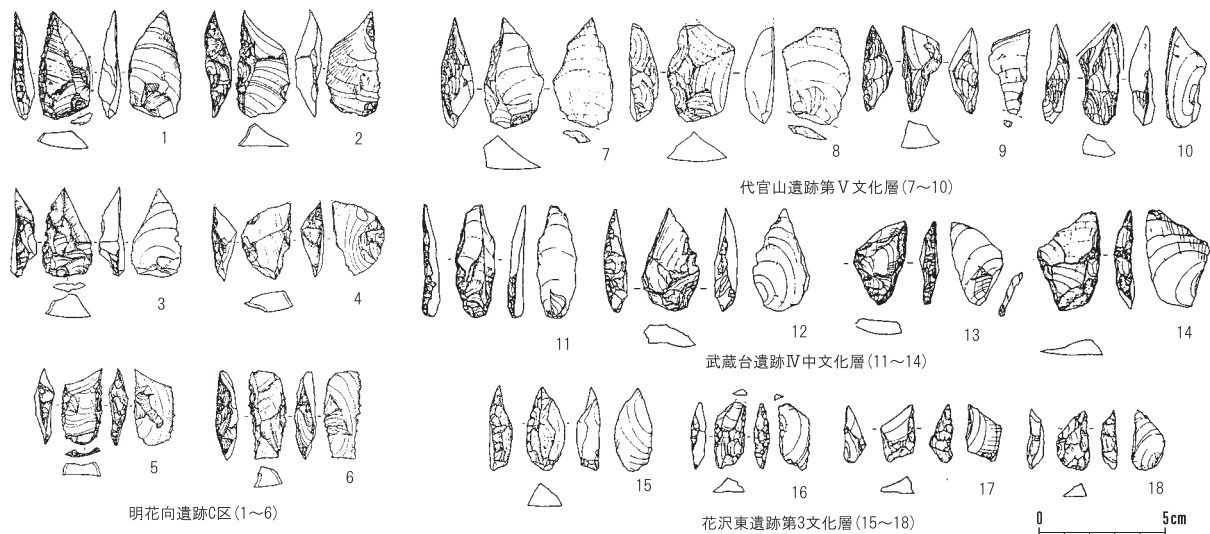




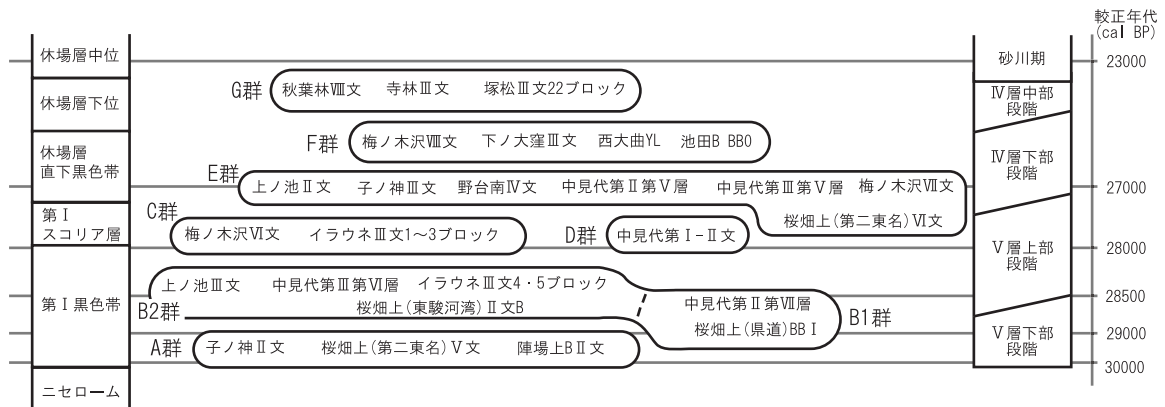
第11図 V層上部段階の石器群



第12図 IV層下部段階の石器群



第13図 IV層中部段階の石器群



第14図 石器群の変遷と年代の模式図

られた試料のAMS法による放射性炭素年代測定の事例が近年蓄積されつつあり、本稿の対象となる第I黒色帯前後に関しても複数の遺跡でデータが得られている。旧石器時代の炭素年代のデータ集成は三好元樹氏（2010）によるものがあるが、その後報告された資料を追加し、CalPal2007-Hulu (Danzeglocke et al. 2007) による較正年代（誤差範囲は1標準偏差）とともに第1表に示した（ニセロームから砂川並行期前後の休場層までを含めた）。また合わせて、関連する時期の相模野台地、武蔵野台地等の炭素年代を同様に第2表に示した（註5）。

愛鷹山麓の遺跡におけるニセロームについては約25000～25500 BPの年代が得られている。これは約24500～25000 BPとされるATの降灰年代に比して若干古い値であり、先述したテフラ分析の結果とやや整合しない点が残る（三好2010）点には注意が必要であるが、年代の前後関係は層位的関係と大きく矛盾しないため、ここではこの値に基づき整理を行う。

第I黒色帯下部のA群では桜畑上遺跡（第二東名）第V文化層で29700-30100 cal BP前後の年代が得られている。また、西山遺跡でも同様の年代値が得られている。

これに後続する第I黒色帯の石器群であるB1群の桜畑上遺跡（県道大岡元長窪線関連）BBⅠでは29000-29800 cal BP、B2群の桜畑上遺跡（東駿河湾環状道路関連）第II文化層では約28700-29600 cal BPとなっている。但し後者はB2群の典型例とは言い難く位置づけは確定的でない。なおV層上部に位置づけられる武蔵台遺跡西地区第4文化層でも28400-29400 cal BPの測定結果がある。

第I黒色帯上部～第Iスコリア層の遺跡では梅ノ木沢遺跡第VI文化層（28100-28400 cal BP）、細尾遺跡第III文化

層（28100-28200 cal BP）、桜畑上遺跡（第二東名）第VI文化層（28100～28400 cal BP）とそれぞれ近い値が得られている。このうち桜畑上のみE群であるが、この石器群はE群の中では層位的に他より古く位置づけられることから、E群の多くはこれより新しい年代となる可能性が高い。

静岡県東部ではこれ以降休場層まで年代測定の報告例がなく、IV層下部、IV層中部にあたる年代値のデータが抜けている。南関東ではIV層下部段階の武蔵台西地区第4文化層で26900-27500 cal BP、用田大河内遺跡第VI文化層で（値が分散しているが）25200-27900 cal BPといった値が得られている（註6）。

愛鷹山麓の砂川並行期の年代はデータが乏しいが向田A遺跡の炉跡01がこれに当たるものと考えられる。炉跡01は休場層下層上面で検出されたもので、砂川期に相当するブロック08の石器群が重複して分布する。年代は22900-23300 cal BPであり、これは相模野台地の砂川期石器群（福田丙二ノ区遺跡、宮ヶ瀬中原遺跡、宮ヶ瀬上原遺跡）の年代とほぼ一致するものである（註7）。

以上の年代値を前節でまとめた石器群の変遷と対比させると第14図右側のようになる。

7. 結語

本稿では愛鷹山麓を中心とした層位的事例に基づき石器群の変遷を捉えた上で南関東地方の編年との対比、年代測定データとの対比を行った。その中で注意すべきこととして以下の点が挙げられる。

まず、当然予測されたことだが捉える事のできた編年上の区分が愛鷹・箱根山麓と南関東とは必ずしも整合的ではない。V層下部段階とV層上部段階との区分は愛鷹・箱

根山麓では層位的には明瞭でない一方、IV層下部段階などは愛鷹・箱根山麓では層位的に細分される可能性がある。但し、検討対象となる資料数が関東地方に比べて限定的である点には留意しなければならない。

また、現時点で得られるデータを見る限りでは、第I黒色帯下部から第Iスコリア層に相当する年代幅が較正值・未較正值でほぼ同じ約2000年間であるのに対し、第Iスコリア層から砂川並行期の年代には未較正で約4000年、較正值で約5000年の開きがある。すなわち、V層下部～V層上部段階に比してIV層下部～IV層中部段階、砂川期に相当する時間幅が倍以上となることを示している。

今回はほとんど石器群の区分と年代の整理に終始してしまったが、石器群の系統や石材消費の観点からも整理しておく必要がある。今後の課題としつつ筆を置きたい。

註

1 筆者はかつて寺林遺跡第III文化層の石器群の尖頭器の共伴を積極的に捉えたことがあったが(中村2006)、他遺跡の出土事例等を勘案し現在では懐疑的に考えている。少なくとも漸移層出土の黒曜石製のものはこの文化層に編入する必然性は薄いと見られる。

2 筆者は愛鷹・箱根第3期を細分したことがあるが(中村2006・2009)、これは必ずしも南関東の4細分と対応させたものではない。

3 IV層下部・V層段階の4期区分は、細分時期の呼び方が論者によって特に統一されていないが、ここでは煩雑を避け、武蔵野台地南部の層名に基づき古いほうから「V層下部段階」、「V層上部段階」、「IV層下部段階」、「IV層中部段階」と呼ぶこととする。

4 第11図1のような基部加工尖頭形石器はこの時期に広域的に見られる石器とされている(森先2007)。

5 第1・2表の年代測定データは以下の文献に所収のものである。

向田A遺跡：財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2007、梅ノ木沢遺跡：同2009b、桜畑上遺跡(第二東名)：同2009c、細尾遺跡：同2010a、桜畑上遺跡(東駿河湾)：同2010b、桜畑上遺跡(県道)：同2003a、西山遺跡：同2006、観音洞B遺跡：三島市教育委員会1994、福田丙二ノ区遺跡：かながわ考古学財団1999、宮ヶ瀬中原遺跡：かながわ考古学財団1997a、宮ヶ瀬上原遺跡：かながわ考古学財団1997b、用田大河内遺跡：かながわ考古学財団2004、津久井城跡馬込地区：かながわ考古学財団2010、武蔵台遺跡：東京都埋蔵文化財センター2010、武蔵台西地区：東京都埋蔵文化財センター2004

6 この他、津久井城跡馬込地区第4文化層の年代測定データもあるが、出土層位、石器群の内容と比べて極端に古い値であるため検討対象から外した。

7 梅ノ木沢遺跡でも近い年代値のデータが得られている

が、炭化物と共伴する石器群は未報告(執筆時)のため明らかではない。

引用・参考文献

《論文等》

伊藤 健 1991 「ナイフ形石器の形態と変遷」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』X、81-107頁

伊藤 健 2007 「ナイフ形石器文化編年の形成過程：V層・IV層下部段階の解体へ向けて」『旧石器研究』第3号、111-126頁

国武貞克 2003 「両面調整石器群の由来：関東地方V層・IV層下部段階から砂川期にかけての石材消費戦略の連続性」『考古学』I、52-77頁

笹原千賀子 2004 「愛鷹・箱根山麓第3期の石器群：第3期から第4期へ、寺林遺跡の編年的位置」『財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所設立20周年記念論文集』73-86頁

笹原芳郎 2005 「愛鷹・箱根旧石器時代編年の現状と課題」『地域と文化の考古学I』明治大学考古学研究室、91-106頁

静岡県考古学会 1995 『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年予稿集』静岡県考古学会シンポジウムIX

静岡県考古学会 1996 『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年収録集』静岡県考古学会シンポジウムIX

須藤隆司 1996 「中部・東海・北陸地方におけるV・IV層段階の石器群：列島内対比の視点から」『石器文化研究』5、451-464頁

須藤隆司 2006 「中部地方の地域編年」『旧石器時代の地域編年の研究』、同成社、103-140頁

高尾好之 2006 「東海地方の編年」『旧石器時代の地域編年の研究』、同成社、61-102頁

中村雄紀 2005 「愛鷹・箱根山麓における「ナイフ形石器終末期」の遺跡群」『石器文化研究』12、121-146頁

中村雄紀 2006 「後期旧石器時代後半期の居住形態の地域的様相：愛鷹・箱根第3期・第4期の遺跡群」『東京大学考古学研究室研究紀要』第20号、1-36頁

中村雄紀 2009 「旧石器時代」『桜畑上遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第208集、271-274頁

中村雄紀 2010 「まとめ」『桜畑上遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第232集、163-170頁

三好元樹 2010 「愛鷹・箱根山麓の旧石器時代14C年代の集成と検討」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』第16号、1-8頁

森先一貴 2007 「角錐状石器の広域展開と地域間変異：西南日本後期旧石器時代後半期初頭の構造変動論的研究」『旧石器研究』第3号、85-110頁

森先一貴 2010 『旧石器社会の構造的変化と地域適応』六一書房

Danzeglocke, Uwe, Bernhard Weninger, and Olaf Jöris, 2007, Online Radiocarbon Age Calibration: www.calpal-online.de.

《報告書》

柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団 1997 『柏ヶ谷長ヲサ』

神奈川県埋蔵文化財センター 1984a 『栗原中丸遺跡』神奈川県埋蔵文化財センター調査報告3

- 神奈川県埋蔵文化財センター 1984b 『代官山遺跡』神奈川県埋蔵文化財センター調査報告11
- かながわ考古学財団 1997a 『宮ヶ瀬遺跡群X』かながわ考古学財団調査報告10
- かながわ考古学財団 1997b 『宮ヶ瀬遺跡群XII』かながわ考古学財団調査報告18
- かながわ考古学財団 1999 『福田丙二ノ区遺跡』かながわ考古学財団調査報告68
- かながわ考古学財団 2004 『用田大河内遺跡』かながわ考古学財団調査報告167
- かながわ考古学財団 2010 『津久井城跡馬込地区』かながわ考古学財団調査報告249
- 慶応義塾 1992 『湘南藤沢キャンパス構内遺跡 第2巻』恋ヶ窪遺跡調査会 1984 『花沢東遺跡』
- 国分寺市遺跡調査会 2003 『国分寺市No.37遺跡発掘調査概報II』
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1984 『明花向・明花上ノ台・井沼方馬堤・とうのこし』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第35集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996 『加茂ノ洞B遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第71集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997 『八田原遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第87集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998 『上ノ池遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第99集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2000 『池田B遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第122集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2003a 『大岡元長窪線関連遺跡I』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第138集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2003b 『寺林遺跡・虎杖原古墳』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第142集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2006 『西山遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第170集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2007 『向田A遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第178集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008a 『下ノ大窪遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第190集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008b 『裾野市富沢・桃園の遺跡群』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第193集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009a 『大岡元長窪線関連遺跡III』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第205集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009b 『梅ノ木沢遺跡II』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第206集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009c 『秋葉林遺跡I』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第207集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009c 『桜畑上遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第208集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009d 『イタドリA遺跡・イタドリB遺跡・イタドリC遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第211集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010a 『細尾遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第222集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010b 『桜畑上遺跡I』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第224集
- 自由学園南遺跡調査団 1983 『自由学園南遺跡』
- 自由学園南遺跡調査団 1991 『自由学園南遺跡』
- 世田谷区遺跡調査会 1982 『嘉留多遺跡・砧中学校7号墳』
- 多聞寺前遺跡調査団 1983 『多聞寺前遺跡II』
- 東京都埋蔵文化財センター 2004 『武蔵国分寺跡関連遺跡(武蔵台西地区)』東京都埋蔵文化財センター調査報告第149集
- 東京都埋蔵文化財センター 2010 『武蔵国分寺跡関連遺跡・武蔵台遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第239集
- 都営川越道住宅遺跡調査団 1999 『武蔵台東遺跡』
- 都立府中病院内遺跡調査団 1984 『武蔵台遺跡I』
- 長泉町教育委員会 1986 『中尾・イラウネ・野台』
- 長泉町教育委員会 1994 『平畦遺跡・陣場上B遺跡』
- 沼津市教育委員会 1982 『一般国道246号裾野バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第27集
- 沼津市教育委員会 1989a 『土手上・中見代第II・第III発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第43集
- 沼津市教育委員会 1989b 『中見代第I遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第45集
- 沼津市教育委員会 1989c 『清水柳北遺跡発掘調査報告書その2』沼津市文化財調査報告書第48集
- 沼津市教育委員会 1992 『尾上イラウネ遺跡発掘調査報告書II』沼津市文化財調査報告書第53集
- 沼津市教育委員会 1999 『西洞遺跡(b区-1)発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第69集
- 沼津市史編さん委員会 2002 『沼津市史 資料編 考古』
- 練馬区遺跡調査会 1987 『葛原遺跡B地点調査報告書』
- 三島市教育委員会 1994 『五輪・観音洞・元山中・陰洞遺跡I』
- 三島市教育委員会 1998 『中村分遺跡 天台B遺跡 台崎C遺跡』
- 三島市教育委員会 2002 『三鷹市埋蔵文化財発掘調査報告書VII』
- 三鷹市遺跡調査会 2004 『天文台構内遺跡IV』

Lithic Industry in the Early Part of Late Upper Paleolithic around Mt. Ashitaka and Hakone

: Its Chronological Division and Dating

Yuuki NAKAMURA

Summary: Using an increasing number of data newly brought from excavation sites at the foot of Mt. Ashitaka-Hakone, this paper describes chronological sequences of the above area's lithic industries belonging to the early part of late Upper Paleolithic (which corresponds to the period between the AT tephra fall and Sunagawa Phase of Kanto region) .

Firstly the industries excavated in the Black Band I, Scoria Layer I, Black Band 0 and the Lower Yasumiba Loam of the said region are subdivided into seven groups. Then the correspondence with the chronological sequence and the radiocarbon age of South Kanto region are considered. The industries from Black Band I and the Scoria Layer I are chronologically parallel with the Layer V lower and Upper Phases of South Kanto region, c.30,000-28,000 cal BP, and those from the Black Band 0 and Lower Yasumiba Loam are parallel with the Layer IV Lower and Middle Phases, their age is older than 23,000 cal BP. My results suggest that the phases of the Black Band 0 and the Lower Yasumida Loam can be longer than expected archaeological chronology.

Key words: foot hills of Mt.Ashitaka and Hakone, early part of late Upper Paleolithic, BlackBand I, Scoria Layer I, Black Band 0, Lower Yasumiba Loam, Layer V and Lower Layer IV Phase, radiocarbon age

静岡県における縄文時代の¹⁴C年代の集成と検討

三好元樹

要旨 時間の長さを明らかにすることは、型式学や層位学では難しく、自然科学分析によって主に行われている。¹⁴C年代測定を用いた縄文時代の研究はAMS法の利用により大きく進展しており、特に土器付着炭化物の測定が可能になった点が重要である。土器付着炭化物は土器そのものの年代を示し、土器型式に年代を与える作業に役立つ。本論では、他地域で作られた時間軸を参照しつつ、これまでになされた静岡県の¹⁴C年代を概観した。特に他地域で測定が進められていない、早期後葉～前期初頭の土器について詳しく検討した。また、それぞれの土器型式に与えられた年代をもとにして、遺構出土炭化物の年代を土器型式に対応させていった。土器付着炭化物の測定例は、未だ不十分であり、より多くの分析が行われるのを待って、それぞれの土器型式の年代は更新される必要がある。

キーワード：縄文時代、¹⁴C年代、AMS法、土器付着炭化物、較正年代、条痕文系土器

はじめに

過去の事象を対象とする考古学において、時間は基礎的かつ重要な要素である。一方で、考古学の基底をなす型式学や層位学は、相対年代、つまり事象の前後関係を示すのみで、時間の長さを明らかにすることができない。時間を明らかにする方法としては、文献に記されている、あるいは遺物自体に記されている年代を参照して、時間軸を作り上げていく方法が用いられた。そういった文字資料が残されていない時代については、考古学において時間を語るためにもっぱら自然科学分析の手法が用いられている。年輪年代測定法や熱、光ルミネッセンス法、黒曜石水和層法、そして¹⁴C年代測定法が挙げられる。

本論では静岡県域で行われた¹⁴C年代測定例を集成し、その現状の把握を試みたい。旧石器時代については既に別稿で集成している（三好2010）。ここでは旧石器時代に続く縄文時代について検討を進めることとする。

1 ¹⁴C年代の縄文時代研究における利用

¹⁴C年代測定法を用いた研究はAMS法の利用により、大きく進展している。AMS法は従来のβ線法と異なり、¹⁴Cの数を直接数える方法で、前処理を経て作成されるグラフナイトが0.1～1 mgという少量で計測可能である。また、計測時間も比較的短く、精度の高い分析が可能となった。

少量の資料で分析が可能となったことの大きな利点の1つは土器に付着した炭化物の測定が可能となったことである。

土器に付着した炭化物は内容物のオコゲや燃料のススであると考えられ、使用あるいは焼成に関わる過程で土器に残されたと考えられる。厳密には使用と製作の時間は一致していないが、主に煮炊きに用いられた土器が長期間伝世するとは考えにくく、縄文時代の時間幅で議論する限り、この点はほぼ問題にならないだろう。土器と共伴した炭化材の年代から、土器の年代を決定する方法も有効ではあるが、遺構の継続期間が長い可能性や混ざり込みが起こった可能性が捨てきれない。より共時性の高い土器付着炭化物の年代測定は、土器の年代を明らかにする最も有効な方法といえるだろう。

土器付着炭化物を基礎に据えた研究方法は、山本直人によって示されたものが参考になる。その方法は、まず土器付着炭化物を用いた土器型式（様式）の年代決定を優先して行って年代軸を構築し、土器を伴わないが、炭化物を伴う遺構などがどの土器型式に対応するかを明らかにするというものである（山本1999・2008）。

本論では静岡県における¹⁴C年代測定例から、どこまで土器型式の年代について議論可能かを検討した後に、遺構に伴う炭化物の年代測定例について考えてみたい。

2 土器付着炭化物の¹⁴C年代の検討

ここでは土器付着炭化物の¹⁴C年代の検討を行いたい。静岡県における測定結果を検討する前に、小林謙一によって示されている（小林2008）、関東地方を中心とした東日本の土器型式の年代を確認しておく（註1）。ここで示されている年代は、IntCal04によって校正された年代値である。

草創期

隆起線文 15500～13200calBP

押圧縄文 13000～12300calBP

多縄文・無文 12000～11000calBP

早期

撚糸文系 11500～10500calBP

（稻荷台式） 11090～10690calBP

無文・沈線文系 10450～（8500ころ）calBP

条痕文系（8500ころ）～7000calBP

前期

花積下層式 不明（7000～6700calBP）

関山式 不明（6700～6450calBP）

黒浜式 6450～6050calBP

諸磯式 6050～5600calBP

十三菩提式 5600～5470calBP

中期

五領ヶ台式 5470～5380calBP

勝坂式 5380～4900calBP

加曾利E式 4900～4420calBP

後期

称名寺式 4420～4240calBP

堀之内式 4240～3820calBP

加曾利B式 3820～3470calBP

曾谷式 3470～3400calBP

後期安行式 3400～3220calBP

晚期

大洞式 3220～2350calBP

このように、ほぼ断絶ない年代値が示されている。ただし、静岡県に存在する土器型式の全てがここに示されているわけではない。また、小林のものには示されていない早期前半の押型文系土器の型式については、遠部慎によって年代がまとめられている（遠部2009）。

大川式 11100～10700calBP

第1表 静岡県における土器付着炭化物の¹⁴C年代測定

| 遺跡名 | 土器型式 | 分析番号 | ¹⁴ CBP | 文献 |
|---------|------|-------------|-------------------|---------------|
| 草創期 | | | | |
| 大鹿窪遺跡 | 隆起線文 | Beta-167672 | 11,380 ± 50 | 小金澤2003 |
| 丸尾北遺跡 | 表裏縄文 | IAAA-80894 | 10,090 ± 40 | 加速器分析研究所2009b |
| 丸尾北遺跡 | 表裏縄文 | IAAA-80890 | 10,080 ± 50 | 加速器分析研究所2009b |
| 丸尾北遺跡 | 表裏縄文 | IAAA-80892 | 10,050 ± 40 | 加速器分析研究所2009b |
| 丸尾北遺跡 | 表裏縄文 | IAAA-80895 | 10,030 ± 50 | 加速器分析研究所2009b |
| 丸尾北遺跡 | 表裏縄文 | IAAA-80891 | 10,020 ± 50 | 加速器分析研究所2009b |
| 丸尾北遺跡 | 表裏縄文 | IAAA-80893 | 9,990 ± 40 | 加速器分析研究所2009b |
| 丸尾北遺跡 | 表裏縄文 | IAAA-80896 | 9,990 ± 40 | 加速器分析研究所2009b |
| 丸尾北遺跡 | 回転縄文 | IAAA-80886 | 9,970 ± 40 | 加速器分析研究所2009b |
| 丸尾北遺跡 | 回転縄文 | IAAA-80888 | 9,760 ± 50 | 加速器分析研究所2009b |
| 丸尾北遺跡 | 回転縄文 | IAAA-80887 | 9,730 ± 50 | 加速器分析研究所2009b |
| 早期～前期初頭 | | | | |
| イタドリA遺跡 | 茅山下層 | IAAA-80619 | 7,180 ± 40 | 加速器分析研究所2009d |
| イタドリA遺跡 | 茅山上層 | IAAA-80618 | 5,560 ± 40 | 加速器分析研究所2009d |
| 下ノ大窪遺跡 | 打越 | IAAA-51651 | 6,600 ± 50 | 加速器分析研究所2008a |
| 佛ヶ尾遺跡 | 打越 | IAAA-50815 | 6,560 ± 40 | 加速器分析研究所2007 |
| 佛ヶ尾遺跡 | 打越 | IAAA-50810 | 6,520 ± 40 | 加速器分析研究所2007 |
| 佛ヶ尾遺跡 | 打越 | IAAA-50809 | 6,460 ± 40 | 加速器分析研究所2007 |
| 佛ヶ尾遺跡 | 打越 | IAAA-50808 | 6,450 ± 40 | 加速器分析研究所2007 |
| 佛ヶ尾遺跡 | 打越 | IAAA-50814 | 6,450 ± 40 | 加速器分析研究所2007 |
| 佛ヶ尾遺跡 | 打越 | IAAA-50806 | 6,350 ± 40 | 加速器分析研究所2007 |
| 尾巻遺跡 | 下吉井 | IAAA-82050 | 6,370 ± 40 | 原田2010 |
| 尾巻遺跡 | 下吉井 | IAAA-82051 | 6,240 ± 40 | 原田2010 |
| 桜畑上遺跡 | 下吉井 | IAAA-80602 | 6,220 ± 30 | 加速器分析研究所2009c |
| 野台南遺跡 | 下吉井 | IAAA-80965 | 6,120 ± 40 | 加速器分析研究所2009a |
| 野台南遺跡 | 上ノ山 | IAAA-80962 | 6,780 ± 40 | 加速器分析研究所2009a |
| 野台南遺跡 | 入海 | IAAA-80963 | 6,520 ± 40 | 加速器分析研究所2009a |
| 野台南遺跡 | 入海 | IAAA-80966 | 6,460 ± 40 | 加速器分析研究所2009a |
| 佛ヶ尾遺跡 | 石山 | IAAA-50822 | 6,520 ± 40 | 加速器分析研究所2007 |
| 下ノ大窪遺跡 | 石山 | IAAA-51650 | 6,410 ± 40 | 加速器分析研究所2008a |
| 野台南遺跡 | 木島 | IAAA-80964 | 6,220 ± 40 | 加速器分析研究所2009a |
| 佛ヶ尾遺跡 | 条痕文 | IAAA-50818 | 6,700 ± 40 | 加速器分析研究所2007 |
| 佛ヶ尾遺跡 | 条痕文 | IAAA-50821 | 6,430 ± 40 | 加速器分析研究所2007 |
| 野台南遺跡 | 条痕文 | IAAA-80961 | 6,350 ± 40 | 加速器分析研究所2009a |

| 遺跡名 | 土器型式 | 分析番号 | ¹⁴ CBP | 文献 |
|---------|-------------|-------------|-------------------|---------------|
| 前期・中期 | | | | |
| イタドリA遺跡 | 清水ノ上Ⅱ～上の坊併行 | IAAA-80623 | 5,620 ± 40 | 加速器分析研究所2009d |
| イタドリA遺跡 | 清水ノ上Ⅱ～上の坊併行 | IAAA-80620 | 5,600 ± 40 | 加速器分析研究所2009d |
| イタドリA遺跡 | 清水ノ上Ⅱ～上の坊併行 | IAAA-80621 | 5,590 ± 40 | 加速器分析研究所2009d |
| イタドリA遺跡 | 清水ノ上Ⅱ～上の坊併行 | IAAA-80622 | 5,550 ± 40 | 加速器分析研究所2009d |
| 桜畑上遺跡 | 諸磯 | IAAA-80603 | 5,060 ± 40 | 加速器分析研究所2009c |
| 的場遺跡 | 十三菩提 | IAAA-90125 | 5,140 ± 40 | 加速器分析研究所2010b |
| 的場遺跡 | 五領ヶ台 | IAAA-90127 | 4,730 ± 40 | 加速器分析研究所2010b |
| 野台南遺跡 | 曾利 | IAAA-80968 | 4,200 ± 30 | 加速器分析研究所2009a |
| 野台南遺跡 | 曾利 | IAAA-80971 | 4,150 ± 30 | 加速器分析研究所2009a |
| 野台南遺跡 | 曾利 | IAAA-80970 | 4,140 ± 30 | 加速器分析研究所2009a |
| 野台南遺跡 | 曾利 | IAAA-80972 | 4,120 ± 30 | 加速器分析研究所2009a |
| 野台南遺跡 | 曾利 | IAAA-80967 | 4,040 ± 30 | 加速器分析研究所2009a |
| 的場遺跡 | 大歳山 | IAAA-90124 | 4,940 ± 30 | 加速器分析研究所2010b |
| 的場遺跡 | 大歳山 | IAAA-90126 | 4,830 ± 40 | 加速器分析研究所2010b |
| 的場遺跡 | 大歳山 | IAAA-90123 | 4,730 ± 40 | 加速器分析研究所2010b |
| 的場遺跡 | 大歳山 | IAAA-90129 | 4,720 ± 40 | 加速器分析研究所2010b |
| 野台南遺跡 | 加曾利E | IAAA-80969 | 4,090 ± 30 | 加速器分析研究所2009a |
| イタドリA遺跡 | 縄文 | IAAA-80624 | 5,370 ± 40 | 加速器分析研究所2009d |
| 後期・晩期 | | | | |
| メノト遺跡 | 宮滝 | PLD-5440 | 3,150 ± 25 | 小林ほか2007b |
| 清水天王山遺跡 | 羽状沈線 | IAAA-30470 | 3,120 ± 50 | 小林ほか2008 |
| 清水天王山遺跡 | 羽状沈線 | IAAA-30471 | 3,340 ± 110 | 小林ほか2008 |
| 清水天王山遺跡 | 羽状沈線 | IAAA-30465 | 3,090 ± 50 | 小林ほか2008 |
| 的場遺跡 | 無文 | IAAA-90128 | 3,130 ± 30 | 加速器分析研究所2010b |
| 清水天王山遺跡 | 無文 | Beta-189941 | 3,130 ± 40 | 小林ほか2008 |
| 清水天王山遺跡 | 無文 | IAAA-30468 | 3,120 ± 60 | 小林ほか2008 |
| 清水天王山遺跡 | 無文 | IAAA-30466 | 3,040 ± 50 | 小林ほか2008 |
| メノト遺跡 | | PLD-5441 | 3,510 ± 25 | 小林ほか2007b |
| 栗下遺跡 | | PLD-6924 | 3,260 ± 25 | 小林ほか2007a |
| メノト遺跡 | | PLD-5439 | 3,170 ± 25 | 小林ほか2007b |
| 栗下遺跡 | | PLD-6925 | 2,985 ± 20 | 小林ほか2007a |
| 栗下遺跡 | | PLD-6926 | 2,665 ± 20 | 小林ほか2007a |

神宮寺式 10600～10400calBP
 神並上層式 10250～10200calBP
 山形文期 10200～9900calBP
 黄島式 9550～9350calBP
 高山寺式 9350～9150calBP
 終末期 9050～8750calBP

以下では、適宜これらの測定値を参照しながら、静岡県における土器付着炭化物の¹⁴C年代を検討していきたい。

第1表はその一覧表である(註2)。年代の幅は1標準偏差(その範囲に収まる確立が68.26%)で示している。2010年9月までで、10遺跡から62点の分析結果が得られている。大鹿窪遺跡が富士宮市、清水天王山遺跡が静岡市、メノト遺跡と栗下遺跡が掛川市に所在する以外は、愛鷹山に位置する遺跡である。

¹⁴C年代測定は、過去の¹⁴Cの濃度が一定であったと仮定して年代の決定が行われる。だが、時期によって¹⁴Cの濃度が変化していたことが明らかとなっているため、実際の年代に近い値を得るには年代較正を行う必要がある。較正に用いられる較正曲線は年輪年代や有孔虫の¹⁴C年代、サングのウラン・トリウム年代を利用して作成される。

本論では2009年に発表されたIntCal09を用いて年代較正を行う。先述の小林が用いたIntCal04とは異なるプログラムであるため、較正年代にズレが生じることとなるが、12600calBP以降の新しい年代には変化がないためほぼ影響はない。また、較正及び図面の作成にはOxCal.JP4.1のプログラム(Ramsey 2009、大森ほか2010)を用いた。

本論では較正年代を議論する際に、1標準偏差の年代によって議論を進めることとする。2標準偏差では時間幅がありすぎて、土器型式間の前後関係があいまいになってしまうからである。

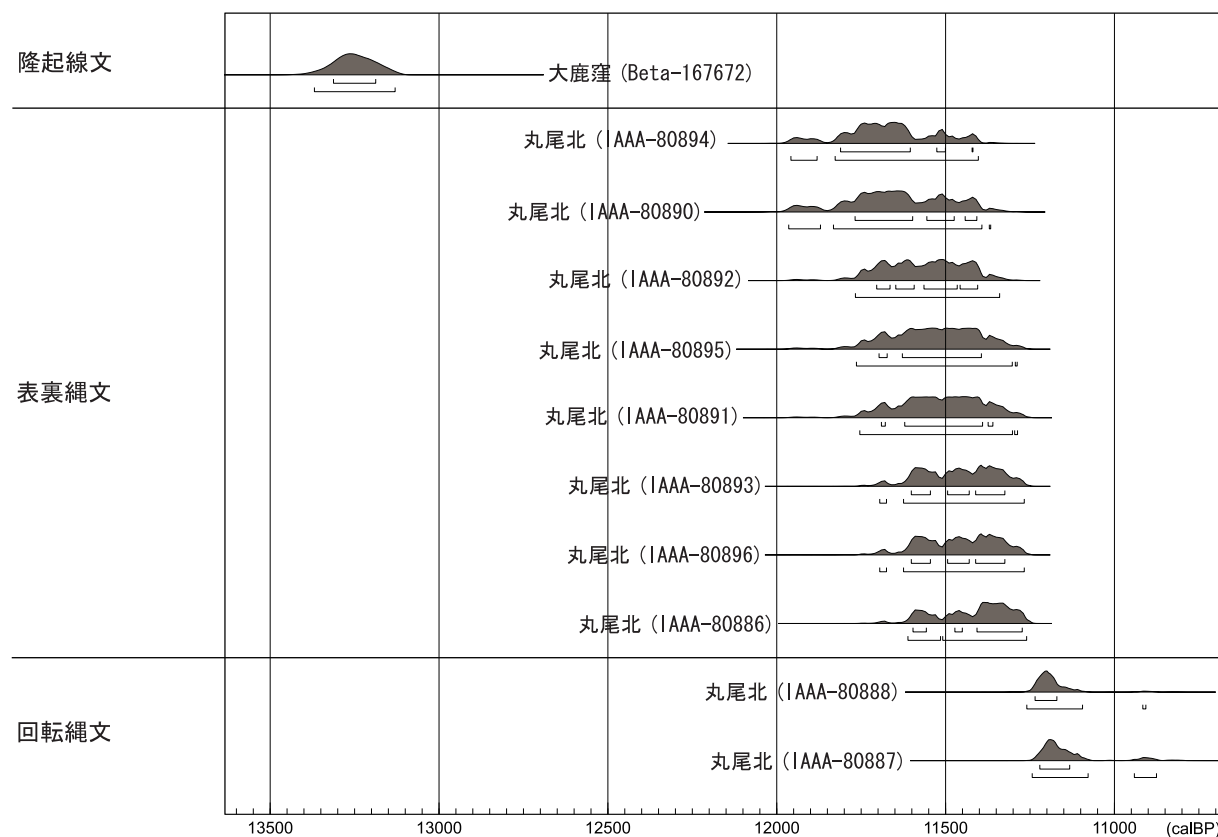
以下、年代のまとまりごとに便宜的に区分した時期ごとに型式ごとの年代を確認していく。

草創期(第1図)

隆起線文1点、表裏縄文7点、回転縄文3点の測定が行われている。隆起線文以外は全て丸尾北遺跡の資料である。それぞれの土器型式は明確に時期を違えている。

隆起線文は13313～13188calBPであり、隆起線文土器の中でも最も新しい時期に位置付けられる。

表裏縄文は多数の分析結果があるが、まとまりのある値



第1図 縄文時代草創期の較正年代

を示しており、約11800～11250calBPに納まる。多縄文土器段階の中頃のものと考えられる。

回転縄文土器は約11250～11150calBPに納まることから、多縄文土器段階の終わり頃に位置付けられる。

表裏縄文と回転縄文がそれぞれにまとまりをみせ、時期を違えている。このことから、丸尾北遺跡における多縄文土器段階の居住は継続してなされたのではなく、少なくとも1回の断絶があったことが分かる。

早期～前期初頭

早期前葉～中葉の測定結果は未だ発表されていない。一方で、早期後葉の条痕文土器は比較的多くの測定例がある。この時期の年代については次章でより詳細に検討することとする。

前期・中期（第2図）

測定例は多くないが、まとまった測定結果がある土器型式も存在する。一方で、多くの土器型式は測定例が乏しく、現状で静岡県資料のみでの議論は困難である。

イタドリ A遺跡の資料が分析された清水ノ上Ⅱ式～上の坊式併行の土器の年代は約6450～6300calBPにまとまる。関東の黒浜式と同時期ということができよう。これは

従来の編年における併行関係の認識と整合している。

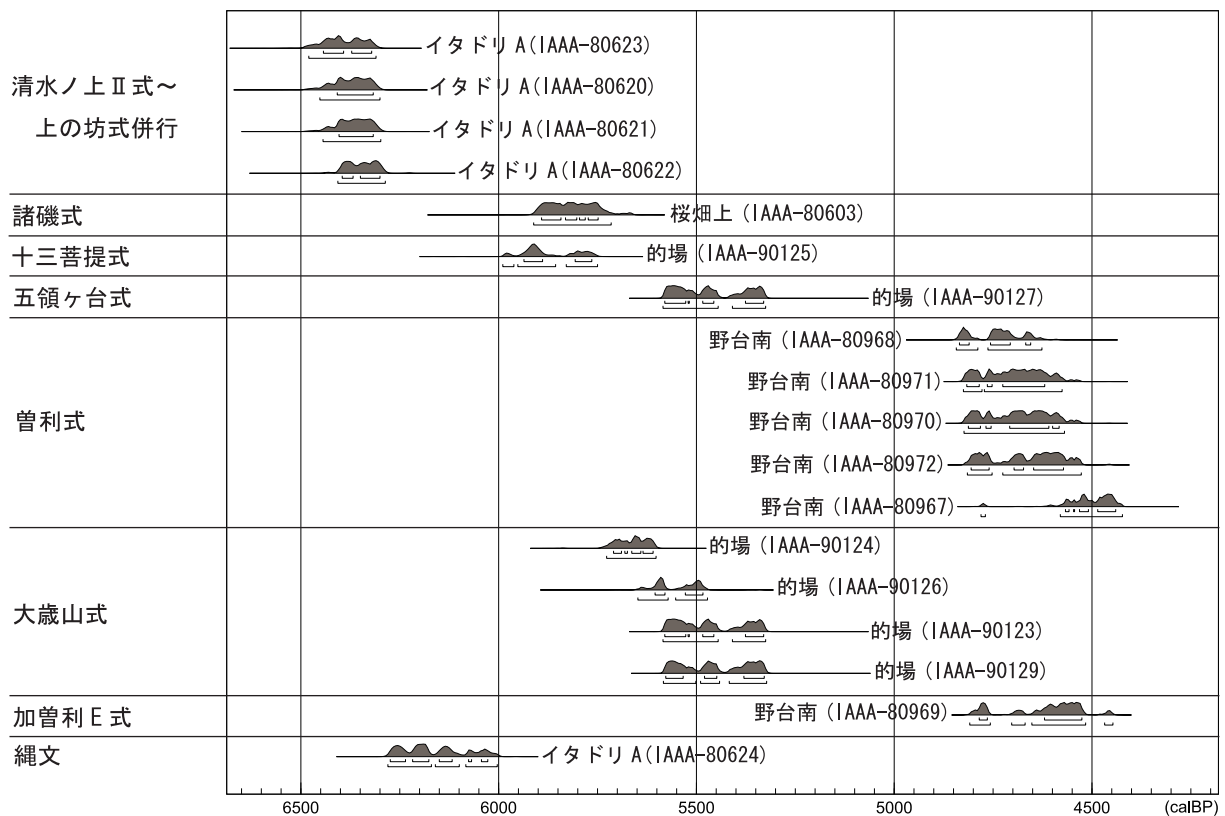
諸磯式は5892～5749calBPの1点のみが測定されている。測定された土器は諸磯b式であり、この値は小林による諸磯b式の年代である5950～5750calBPと一致する。

十三菩提式も5936～5765calBPの1点のみが計測されている。値は想定される年代よりも古く、何らかの影響で測定値が古く出ていると考えられる。

五領ヶ台式も5580～5330calBPの1点のみが計測されている。五領ヶ台式の年代とされる5480～5370calBPの間に含んでおり、整合的といえるだろう。また、五領ヶ台式に後続する勝坂式は、静岡県の資料では測定されていない。

曾利式土器は野台南遺跡で多くの測定例がある。曾利Ⅲ式とⅣ式の測定で、約4850～4450calBPの範囲に年代がまとまる。小林による加曾利E式の年代と重複しており、併行しているといえる。

大歳山式は十三菩提式と併行すると考えられている型式である。的場遺跡の資料4点が測定されているが、年代にばらつきがある。小林による十三菩提式の年代と重複するものが多く、十三菩提式と併行すると考えるのは妥当であ



第2図 縄文時代前期・中期の較正年代

るが、同じ場遺跡で測定された五領ヶ台式の年代とほぼ一致するものが半数である点は注意しておく必要があるだろう。

加曾利E式は1点の測定がなされており、同じ野台南遺跡で測定された曾利式の年代と一致している。

イタドリA遺跡では縄文が施された型式不明の土器が1点測定されている。6274～6028calBPであり、小林による黒浜式の年代と併行する可能性が高い。同じイタドリA遺跡で測定された清水ノ上II式～上の坊式併行の土器と、型式としては同一のものと考えられることができるが、年代にはずれがあり、異なる居住の時点で残された可能性がある。

後期・晩期

最も測定例が乏しい時期で、型式が明確なものは1点のみである。現状では議論が困難であり、今後の分析の蓄積が期待される。ただし、東海地方の晩期の土器型式である清水天王山式の標識遺跡として知られる清水天王山遺跡では、胴部片の分析がまとまって行われている。これらの測定例は約3400～3150calBPにまとまっており、清水天王山遺跡の年代を考えるうえで有効であろう。この年代は小林による後期安行式の年代と重複する部分が多く、後期末の年代を示していると考えられる。清水天王山式が晩期の土器であることは矛盾しており、今後の分析増加を待つて、改めて検討する必要がある。

3 縄文時代早期後半～前期初頭の年代

今回集成を行った中で、最も分析結果がまとまっていたのが、早期後半～前期初頭の土器であった。一方で、この時期は小林による関東の年代では測定例が少なく、詳細がつかめていない時期である。

また、この時期の東海地方は、関東地方を中心とする条痕文系土器と東海条痕文系土器が入り交じる状態にある。両者の併行関係は共伴事例や型式間の影響関係をもとに検討が可能であるが、¹⁴C年代測定の成果はそれらを補完し、あるいは新たな知見をもたらす得るものとする。分析件数は未だ十分というには程遠い状況であるが、研究の端緒として縄文時代早期後半～前期初頭の年代について考えてみたい。

当該期の土器型式は概ね第3図のように変遷すると考えられている。ここに示されている型式の年代について議論

を進めるにあたって、静岡県域の資料に加えて、当該期の土器の¹⁴C年代測定が行われている千葉県間見穴遺跡、愛知県八王子遺跡、滋賀県入江内湖遺跡の分析結果を加えて議論を進める。

まずは、関東地方を中心に分布する条痕文系土器について考えていきたい。間見穴遺跡では、底部、あるいは胴部片であるが、鶴ヶ島台式～茅山下層式と考えられる資料が測定されている。約8150～7850calBPの年代であり、8017～7961calBPの茅山下層式の測定例と一致する。茅山下層式の年代として、8000calBP前後を想定しておいていいだろう。

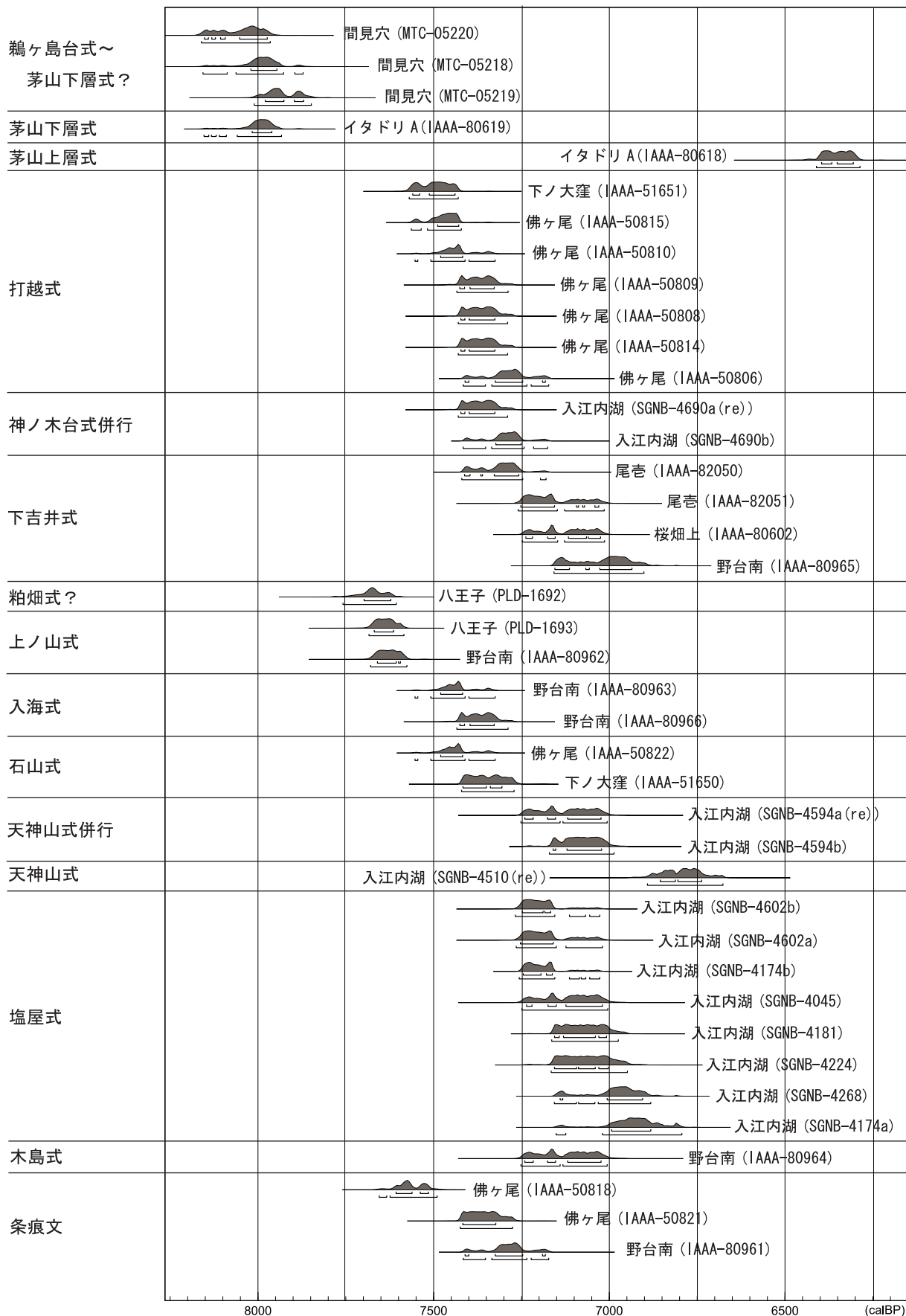
茅山上層式はイタドリA遺跡の6396～6306calBPの1点のみである。この値は、同じイタドリA遺跡で分析された清水ノ上II式～上の坊式併行の土器の年代とほぼ一致している。報告書に掲載されている土器は茅山上層式と考えてよいと考えられるため、この値は異常値といえる。茅山上層式の年代としては、先行する茅山下層式の測定例と後続する打越式の測定例との間の7850～7550calBP周辺の年代を想定しておいていいだろう。

打越式は佛ヶ尾遺跡を中心に愛鷹山南東麓でも北よりの遺跡での測定例がある。約7550～7200calBPの幅の年代が得られている。ただし、それに続く神之木台式併行の土器も7400～7250calBPの年代が得られており、重複する部分が多い。今後の資料増加を待つて、両型式の年代を考えていく必要がある。

下吉井式は約7400～6950calBPの年代が得られている。早い段階の年代は神之木台式と併行しており、今後の資料増加を待つて整理が必要であろうが、より遅い時期までの

| 関東系 | 東海系 |
|-------|------|
| 子母口式 | |
| 鶴ヶ島台式 | |
| 茅山下層式 | |
| 茅山上層式 | 粕畑式 |
| 下沼部式 | 上ノ山式 |
| 野川式 | |
| 打越式 | 入海式 |
| | 石山式 |
| 神ノ木台式 | 天神山式 |
| | 塩屋式 |
| 下吉井 | |
| 花積下層式 | 木島 |

第3図 縄文時代早期後半～前期初頭の土器型式



第4図 縄文時代早期後半～前期初頭の較正年代

測定結果が得られており、神之木台式に後続する型式として妥当な年代と考えられる。

ここからは東海条痕文系土器の年代をみていきたい。条痕文系土器と比べて型式間の年代の重複が多く、年代を考えるのが難しい。

粕畑式と考えられる資料が八王子遺跡で測定されており、約7700～7600calBPの年代が得られている。1点のみが測定されている上ノ山式の7660～7595calBPと重複しているが、八王子遺跡で粕畑式と上ノ山式の間のような様相の土器が多く出土していることから、妥当な年代といえそうである。

入海式の約7500～7350calBPは石山式の7500～

7300calBPと大きく重複する。野台南遺跡で測定された入海式の資料は入海Ⅱ式であり、入海式でも新しいものであるが、入海式と石山式の年代的関係は、今後の資料増加をまって議論を行う必要があろう。

天神山式併行、天神山式、塩屋式、木島式の測定が行われているが、いずれも年代が重複しており、それぞれの年代を定めるのが難しい。天神山式並行が約7250～7000calBP、天神山式が6855～6737calBP、塩屋式が約7250～69000calBP、木島式が7241～7024calBPの年代が得られている。天神山式の年代は縄文時代前期の年代が出ており、おそらく汚染等の影響で新しい年代が出ていると考えられる。天神山式、塩屋式、木島式の年代は7250～

第2表 静岡県における遺構出土炭化物の¹⁴C年代測定

| 遺跡名 | 遺構名 | 共伴土器型式 | ¹⁴ C推定型式 | 試料形態 | 分析番号 | ¹⁴ CBP | calBP (1σ) | 文献 |
|--------|--------------|---------|---------------------|------|-------------|-------------------|-------------|---------------|
| 池田B遺跡 | 1号集石焼土 | — | 押型文(大川) | 炭化物 | Beta-127647 | 9590 ± 50 | 11094-10787 | 古環境研究所2000 |
| 池田B遺跡 | 2号集石焼土 | — | 押型文(大川) | 炭化物 | Beta-127648 | 9480 ± 50 | 11061-10605 | 古環境研究所2000 |
| 池田B遺跡 | 11号住居跡炉 | 大歳山 | 大歳山 | 炭化物 | Beta-127649 | 4750 ± 50 | 5584-5334 | 古環境研究所2000 |
| 池田B遺跡 | 5号住居跡覆土 | 下吉井 | 下吉井 | 炭化物 | Beta-127650 | 6200 ± 50 | 7170-7008 | 古環境研究所2000 |
| 池田B遺跡 | 焼土9 | — | 押型文(大川) | 炭化物 | Beta-127651 | 9510 ± 50 | 11067-10695 | 古環境研究所2000 |
| 池田B遺跡 | 8号住居跡覆土 | 下吉井 | 下吉井 | 炭化物 | Beta-127652 | 6240 ± 50 | 7253-7029 | 古環境研究所2000 |
| 桜畑上遺跡 | SB-01覆土 | 鶴ヶ島台 | 押型文(黄島) | 炭化物 | PLD-1430 | 8500 ± 30 | 9527-9492 | 山形2003 |
| 桜畑上遺跡 | SF-20覆土 | 五領ヶ台 | 十三菩提 | 炭化物 | PLD-1432 | 4760 ± 40 | 5583-5470 | 山形2003 |
| 中峯遺跡 | FP-09覆土 | — | 勝坂(藤内) | 炭化物 | PLD-1436 | 4500 ± 30 | 5285-5054 | 山形2003 |
| 大鹿窪遺跡 | 7号竪穴状遺構 | 押圧縄文 | 押圧縄文 | 炭化物 | Beta-167428 | 10910 ± 60 | 12866-12684 | 小金澤2003 |
| 大鹿窪遺跡 | 5号竪穴状遺構 | 押圧縄文 | 押圧縄文 | 炭化物 | Beta-170267 | 10850 ± 40 | 12777-12634 | 小金澤2003 |
| 大鹿窪遺跡 | 3号焼土跡 | 条痕文 | 子母口? | 炭化物 | Beta-167429 | 7580 ± 40 | 8414-8369 | 小金澤2003 |
| 佛ヶ尾遺跡 | 住居跡 | 早期 | 押型文(終末期)? | 炭化物 | IAAA-50823 | 7920 ± 50 | 8969-8635 | 加速器分析研究所2007 |
| 下ノ大窪遺跡 | 7号土坑覆土 | — | 諸磯(a・b) | 木炭 | IAAA-51642 | 5010 ± 40 | 5876-5661 | 加速器分析研究所2008a |
| 下ノ大窪遺跡 | 12号竪穴住居跡床面直上 | 東海系条痕文 | 清水ノ上Ⅱ? | 木炭 | IAAA-51643 | 6630 ± 40 | 7566-7485 | 加速器分析研究所2008a |
| 下ノ大窪遺跡 | 15号竪穴住居跡炉覆土 | 打越・石山 | 打越・石山 | 木炭 | IAAA-51644 | 6420 ± 40 | 7417-7316 | 加速器分析研究所2008a |
| 下ノ大窪遺跡 | 2号竪穴住居跡炉覆土 | 打越・入海 | 打越・入海 | 木炭 | IAAA-51645 | 6410 ± 40 | 7417-7306 | 加速器分析研究所2008a |
| 下ノ大窪遺跡 | 8号竪穴住居跡床面直上 | 打越 | 打越 | 木炭 | IAAA-51646 | 6480 ± 40 | 7432-7328 | 加速器分析研究所2008a |
| 下ノ大窪遺跡 | 19号集石 | 条痕文 | 下吉井 | 木炭 | IAAA-51647 | 6080 ± 40 | 7000-6888 | 加速器分析研究所2008a |
| 下ノ大窪遺跡 | 22号集石 | 打越等・諸磯b | 打越 | 木炭 | IAAA-51648 | 6390 ± 40 | 7414-7269 | 加速器分析研究所2008a |
| 棚返遺跡 | 土坑54覆土 | — | 清水天王山 | 炭化物 | IAAA-70335 | 2860 ± 40 | 3061-2895 | 加速器分析研究所2008b |
| 棚返遺跡 | 焼土跡1覆土 | — | 押型文(終末期) | 炭化物 | IAAA-70336 | 8080 ± 50 | 9120-8810 | 加速器分析研究所2008b |
| 棚返遺跡 | 1号住居跡覆土 | 藤内 | 曾利 | 炭化物 | IAAA-70337 | 4350 ± 40 | 4961-4859 | 加速器分析研究所2008b |
| 棚返遺跡 | 1号住居跡覆土 | 藤内 | 勝坂 | 炭化物 | IAAA-70339 | 4560 ± 40 | 5319-5068 | 加速器分析研究所2008b |
| 棚返遺跡 | 焼土5覆土 | — | 称名寺 | 炭化物 | IAAA-70340 | 3810 ± 40 | 4284-4097 | 加速器分析研究所2008b |
| 内野山V遺跡 | 4号土坑 | — | 押型文(黄島) | 炭化物 | IAAA-71087 | 8580 ± 50 | 9583-9496 | 加速器分析研究所2008c |
| 稲荷林遺跡 | 焼土11 | — | 勝坂(藤内) | 炭化物 | IAAA-72316 | 4520 ± 40 | 5299-5062 | パリオ・サーヴェイ2009 |
| 稲荷林遺跡 | 焼土23 | — | 勝坂(藤内) | 炭化物 | IAAA-72317 | 4530 ± 40 | 5306-5063 | パリオ・サーヴェイ2009 |
| 稲荷林遺跡 | 焼土28 | — | 勝坂(藤内) | 炭化物 | IAAA-72318 | 4510 ± 40 | 5293-5056 | パリオ・サーヴェイ2009 |
| 尾沓遺跡 | SX 4-1 | 木島 | 木島? | 炭化物 | IAAA-82052 | 6020 ± 40 | 6910-6795 | 原田2010 |
| 尾沓遺跡 | SX 4-1 | 木島 | 木島? | 炭化物 | IAAA-82053 | 6030 ± 40 | 6936-6800 | 原田2010 |
| 尾沓遺跡 | SX 4-1 | 木島 | 木島? | 炭化物 | IAAA-82054 | 6020 ± 40 | 6910-6795 | 原田2010 |
| 尾沓遺跡 | SX 4-1 | 木島 | 木島? | 炭化物 | IAAA-82055 | 6040 ± 40 | 6947-6800 | 原田2010 |
| 秋葉林遺跡 | 1号集石 | — | 押型文(大川) | 炭化物 | IAAA-80604 | 9490 ± 50 | 11063-10609 | 加速器分析研究所2010a |
| 秋葉林遺跡 | 2号集石 | — | 押型文(大川) | 炭化物 | IAAA-80605 | 9490 ± 40 | 11061-10675 | 加速器分析研究所2010a |
| 秋葉林遺跡 | 3号集石覆土上層 | — | 押型文(神宮寺) | 炭化物 | IAAA-80606 | 9310 ± 50 | 10583-10425 | 加速器分析研究所2010a |
| 秋葉林遺跡 | 3号集石覆土下層 | — | 押型文(大川・神宮寺) | 炭化物 | IAAA-80607 | 9420 ± 50 | 10704-10585 | 加速器分析研究所2010a |
| 秋葉林遺跡 | 1号集石 | — | 押型文(大川) | 炭化物 | IAAA-80608 | 9570 ± 40 | 11074-10776 | 加速器分析研究所2010a |
| 細尾遺跡 | 1号住居 | 押型文 | 諸磯b | 炭化物 | PLD-13806 | 5075 ± 25 | 5896-5754 | 伊藤ほか2010a |
| 細尾遺跡 | 1号住居 | 押型文 | 諸磯b | 炭化物 | PLD-13807 | 5050 ± 25 | 5889-5745 | 伊藤ほか2010a |
| 細尾遺跡 | 1号住居 | 押型文 | 諸磯b | 炭化物 | PLD-13808 | 5050 ± 25 | 5889-5745 | 伊藤ほか2010a |
| 茗荷沢遺跡 | 4号焼土 | — | 押型文(大川) | 炭化物 | PLD-13801 | 9510 ± 35 | 11063-10703 | 伊藤ほか2010b |
| 茗荷沢遺跡 | 2号焼土 | — | 打越 | 炭化物 | PLD-13802 | 6595 ± 25 | 7555-7460 | 伊藤ほか2010b |
| 茗荷沢遺跡 | 2号集石 | 打越 | 打越 | 炭化物 | PLD-13803 | 6410 ± 25 | 7416-7311 | 伊藤ほか2010b |
| 茗荷沢遺跡 | 3号集石 | 打越 | 打越 | 炭化物 | PLD-13804 | 6410 ± 25 | 7416-7311 | 伊藤ほか2010b |
| の場遺跡 | FC005 | — | 勝坂 | 炭化物 | IAAA-90130 | 4540 ± 40 | 5312-5065 | 加速器分析研究所2010b |
| の場遺跡 | 土坑5 | 十三菩提式 | 古墳時代前期 | 炭化物 | IAAA-90131 | 1770 ± 30 | 1724-1620 | 加速器分析研究所2010b |
| の場遺跡 | 遺物集中域2 | 大歳山 | 大歳山 | 炭化物 | IAAA-90132 | 4820 ± 40 | 5600-5483 | 加速器分析研究所2010b |
| の場遺跡 | 住居状遺構 | — | 古墳時代前期 | 炭化物 | IAAA-90133 | 1720 ± 30 | 1693-1569 | 加速器分析研究所2010b |
| の場遺跡 | 集石18 | — | 十三菩提・五領ヶ台 | 炭化物 | IAAA-90134 | 4750 ± 40 | 5583-5335 | 加速器分析研究所2010b |
| の場遺跡 | 集石26 | 入海 | 十三菩提・五領ヶ台 | 炭化物 | IAAA-90135 | 4750 ± 40 | 5583-5335 | 加速器分析研究所2010b |
| の場遺跡 | 土坑23 | — | 勝坂(藤内) | 炭化物 | IAAA-90136 | 4490 ± 40 | 5284-5048 | 加速器分析研究所2010b |
| の場遺跡 | 集石22 | — | 十三菩提・五領ヶ台 | 炭化物 | IAAA-90139 | 4750 ± 40 | 5583-5335 | 加速器分析研究所2010b |

7000calBPを前後する時期に該当すると考えるが、具体的な年代の幅は今後の測定の増加を待って改めて検討する必要があるだろう。

条痕文が施された型式不明の土器が3点測定されている。これまでの測定例の検討をふまえて、それらの土器の型式について推定しておく。佛ヶ尾遺跡の7607～7515calBPの土器は入海Ⅱ式の測定値よりも若干古い年代であるため入海Ⅰ式の可能性がある。もう1点の7417～7323calBPの土器は入海Ⅱ式と石山式に類似した年代の測定例がある。野台南遺跡の7411～7182calBPの土器は年代幅が広いが、石山式や天神山式の年代が推定される。

4 遺構出土炭化物の年代と型式の推定

縄文時代の¹⁴C年代測定は土器付着炭化物だけでなく、その他の炭化物についても行われている。遺構の年代を明らかにするために、遺構から出土した炭化物の年代測定を行った例が多い。土器を伴わない遺構の時期を明らかにするための有効な手段といえる。ただし、遺構の構築とは関わりがない土器が遺構内から出土することがあるのと同じように、炭化物も遺構の時期と関わりがないものが混ざりこむことがあることを想定しておく必要がある。

第2表に、これまでに静岡県で行われた遺構出土炭化物のAMS法による測定例を示した。測定された炭化物の較正年代を示すとともに、遺構に伴って出土した土器から推定される型式と¹⁴C年代から推定される土器型式を併記した。型式の推定には小林2008と遠部2009の年代を主に用い、補完的に本論における土器付着物の測定結果を利用した。

土器を伴わない遺構の年代を推測するための方法として、炭化物の¹⁴C年代はよく機能しているということが出来る。例えば、秋葉林遺跡では多くの押型文系土器が出土しており、遺構出土炭化物の¹⁴C年代も全てその時期に位置付けられる測定結果が得られている。

また、土器が伴う遺構も、出土した土器の型式と¹⁴C年代から推定される型式が一致するものが多い。一方で、一致しないものも存在するが、汚染等による分析値の誤りや、土器と炭化物のいずれかあるいは両方が混ざりこんだものと考えられる必要があるだろう。細尾遺跡の1号住居は土器の点数も少なく、炉周辺の覆土から得られた炭化物を複数点測定していることから、炭化物の年代が遺構の年代を

示している可能性が高く、土器は混入したと考えることができる。

おわりに

静岡県でこれまで行われた¹⁴C年代測定例を集成し、その内容を確認した。特に関東の年代が利用できない状況にある早期後半～前期初頭について詳しく検討したが、十分な測定量が得られていないことは明らかであった。今後¹⁴C年代測定を進めていくにあたり、遺構出土炭化物の測定と併せて、土器付着炭化物の測定を行っていく必要がある。縄文時代の共時的な社会関係を議論するための基礎である、より詳細な時間軸の構築が望まれる。

本論執筆にあたり中村雄紀、柴田亮平、水野蛍の諸氏は文献の検索等でご高配を賜った。感謝申し上げます。

註

1 小林はより詳細な土器型式の年代を提示しているが、本論は詳細な議論には至らないため、大枠の土器型式(様式)の年代値を記した。

2 遠部ほかによって、伊東市の草創期・早期の年代測定例が発表されている(遠部ほか2010)。分析結果の詳細が検討できなかったため、今回の集成には含めていない。それによると、多縄文土器(三の原遺跡)が10000¹⁴CBP前後、押型文土器(東大室クズレ遺跡、ジンジ山遺跡)が9000-8700¹⁴CBP、鶯ヶ島台式土器(物見台公園遺跡)が7690±40¹⁴CBPの分析結果を得たとのことである。

引用・参考文献

- 伊藤茂・尾寄大真・丹生越子・廣田正史・小林紘一・Tatidze, Z.・Jorjoliani, I.・中村賢太郎2010a「細尾遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定」『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告222 細尾遺跡』pp.271-275
- 伊藤茂・尾寄大真・丹生越子・廣田正史・小林紘一・Tatidze, Z.・Jorjoliani, I.・中村賢太郎2010b「茗荷沢遺跡・藤ボサ遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定」『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告223 沼津市井出・石川神ヶ沢の遺跡群』pp.157-160
- 大森貴之・西本寛・中村俊夫2010「較正解析プログラムOxCalの日本語化について」『日本文化財科学会第27回大会研究発表要旨集』pp.144-145
- 遠部慎2009「上黒岩遺跡の押型文土器の炭素14年代測定」『国立歴史民俗博物館研究報告154 愛媛県上黒岩遺跡の研究』国立歴史民俗博物館、pp.511-523
- 遠部慎・宮田佳樹・小林謙一2010「東海地方における縄文時代草創期から早期の炭素14年代測定」『日本文化財科学会第27回大会研究発表要旨集』pp.130-131
- 加速器分析研究所2007「佛ヶ尾遺跡(第二東名No.147地点)

- 年代測定結果報告』『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告175 佛ヶ尾遺跡』 pp.286-288
- 加速器分析研究所2008a「年代測定結果報告書」『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告190 下ノ大窪遺跡』 pp.369-374
- 加速器分析研究所2008b「棚返遺跡（第二東名No.153地点）年代測定結果報告」『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告191 棚返遺跡・今里遺跡』 pp.162-163
- 加速器分析研究所2008c「内野山V遺跡出土炭化物放射性炭素年代測定（AMS測定）」『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告193 裾野市富沢・桃園の遺跡群』 pp.359-361
- 加速器分析研究所2009a「野台南遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）」『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告205 大岡元長窪線関連遺跡Ⅲ』 pp.143-148
- 加速器分析研究所2009b「丸尾北遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）」『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告210 丸尾北遺跡』 pp.255-258
- 加速器分析研究所2009c「桜畑上遺跡における放射性炭素年代」『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告208 桜畑上遺跡』 pp.285-288
- 加速器分析研究所2009d「イタドリA遺跡における放射性炭素年代」『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告211 イタドリA遺跡・イタドリB遺跡・イタドリC遺跡』 pp.219-221
- 加速器分析研究所2010a「放射性炭素年代調査報告書」『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告216 秋葉林遺跡Ⅱ』 pp.249-252
- 加速器分析研究所2010b「的場遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）」『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告227 的場古墳群・的場遺跡』 CD
- 小金澤保雄2003「年代測定分析の結果」『大鹿窪遺跡・窪B遺跡（遺構編）』 芝川町教育委員会、pp.231-232
- 古環境研究所2000「静岡県、池田B遺跡における放射性炭素年代測定」『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告122 池田B遺跡』 pp.134-135
- 国立歴史民俗博物館炭素14年代測定グループ2007「放射性炭素年代測定（3）」『入江内湖遺跡Ⅰ』 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会、pp.298-304
- 小林謙一2008「縄文土器の年代（東日本）」『総覧縄文土器』 アム・プロモーション、pp.896-903
- 小林謙一・今村峯雄・坂本稔2008「土器付着炭化物の炭素14年代測定について」『清水天王山遺跡（本文編第1分冊）』 静岡市教育委員会、pp.281-290
- 小林謙一・坂本稔・尾寄大真・新免歳靖・松崎浩之2005「千葉県間見穴遺跡出土資料の¹⁴C年代測定」『千葉県文化財センター調査報告506 船橋印西線埋蔵文化財調査報告書4』 pp.251-256
- 小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・瀬戸薫・Tatidze, Z.・Jorjoliani, I.2007a「放射性炭素年代測定」『県営農免農道整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』 自然化学分析編、掛川市教育委員会、pp.14-18
- 小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・Tatidze, Z.・Jorjoliani, I.・藤根久2007b「放射性炭素年代測定」『県営農免農道整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』 自然化学分析編、掛川市教育委員会
- 原田雄紀2010「放射性炭素年代測定」『沼津市文化財調査報告書98 尾壺遺跡（第2次）・清水柳北遺跡（第2次）発掘調査報告書』 沼津市教育委員会、p.299
- パリオ・サーヴェイ2009「稲荷林遺跡から出土した炭化材の放射性炭素年代測定」『沼津市文化財調査報告書95 稲荷林遺跡（第2次）発掘調査報告書』 沼津市教育委員会、pp.127-128
- パレオ・ラボ2003「八王子遺跡出土縄文土器付着物の放射性炭素年代測定」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書112 八王子遺跡』 pp.71-72
- 三好元樹2010「愛鷹・箱根山麓の旧石器時代¹⁴C年代の集成と検討」『静岡県埋蔵文化財研究所研究紀要』 16、pp. 1 - 8
- 山形秀樹2003「放射性炭素年代測定」『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告138 大岡元長窪線関連遺跡Ⅰ』 pp.248-250
- 山本直人1999「AMS¹⁴C年代測定法による低湿度型貯蔵穴の分析」『動物考古学』 12、pp. 1 -15
- 山本直人2008「縄文土器の年代（西日本）」『総覧縄文土器』 アム・プロモーション、pp.904-909
- Ramsey C. B., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon*, 5-1, pp.337-360

Study on the Radiocarbon Ages in the Jomon Period

Motoki MIYOSHI

Summary: To clarify a length of time is mostly dependent on the natural scientific analysis, neither on the typology nor on the stratigraphy. By employing the AMS, the radiocarbon dating to the Jomon period is largely advanced. Especially, this progress is established because of the dating method which uses carbon attached to potteries. Carbon attached to potteries can date a pottery itself and also can give dates to a style of pottery.

In this paper, I indicate the radiocarbon ages now in use in Shizuoka comparing with a chronology established in another region. In particular, I examine the potteries of the late phase of initial to the beginning of early Jomon period which is untouched by other region. On the basis of dates given to styles of pottery, I match radiocarbon ages to styles of pottery.

Examples of radiocarbon dating are still insufficient. Awaiting further analysis, the dates given to styles of pottery should be renewed.

Key words: Jomon period, radiocarbon ages, AMS (Accelerator Mass Spectrometry), carbon attached to pottery, calibration, Jomon pottery decorated with incised lines

静岡県における有茎尖頭器の利用

柴田亮平・三好元樹・中村雄紀

要旨 有茎尖頭器は縄文時代草創期前半の特徴的な石器であるが、県内では近年の大規模工事に伴う発掘調査の結果、資料数が大幅に増加している。そのため、本論では静岡県内から出土した有茎尖頭器の集成をおこなった。集成の結果、511点の有茎尖頭器が出土しており、その大半が東部地域に集中すること、旧石器時代遺跡の密集地域であった磐田原台地では出土例に乏しいことがわかった。また、石器群として出土する例に乏しく、大半が散在的な出土の様相を見せることを再確認した。東部地域ではホルンフェルス（頁岩）と安山岩が利用石材の約8割を占め、近傍の石材に依存していることが分かった。その一方で、残りの2割には青森県深浦八森山産の黒曜石など遠隔地の石材が少数含まれていることが明らかとなり、縄文時代草創期の地域・社会関係を明らかにする上での課題が浮かんできた。

キーワード：有茎尖頭器、縄文時代草創期、隆起線文土器

はじめに

今から約15700～11500年前の約4200年間に及ぶ（小林2007）縄文時代草創期は日本列島における人類史の大きな転換点の1つである。氷河期であった旧石器時代から温暖な縄文時代に至る、急激な気候変動が縄文時代草創期には生じた。まず、約15500年前に本格的な温暖化が始まる。温暖化はそのまま進むことなく、約13200年前には急激に寒冷化する。ヤンガー・ドリアス相当期といわれるこの寒の戻りが終わり、再び温暖が始まる約11500年前は縄文時代草創期と早期の境目と一致する（工藤2005）。

更新世から完新世への激しい気候変動の影響と考えられるが、残された石器も他の時期と異なるものが多い。そうした遺物の1つとして有茎尖頭器が挙げられる。狩猟具と考えられる有茎尖頭器は、九州地方ではその数は少ないものの、北海道から本州まで、日本列島の各地で出土することが知られている。地域や時期によって形態に違いが認められ、「立川型」、「小瀬ヶ沢型」、「柳又型」、「花見山型」などといった型式名称をつけて呼ばれることもある。

有茎尖頭器は隆起線文土器の時期に使用されるようになり、多縄文土器の時期までは存続しないと考えられる（光石2008、藤山2009）。その時期の気候は、縄文時代草創期なかごろの若干暖かい時期にあたる。旧石器時代から用いられていた槍と縄文時代に主体的に用いられるようになる

弓矢とが交錯する時期に現れた有茎尖頭器の様相を明らかにすることは、当時の社会の変化を考えるうえで、欠くことができない。

有茎尖頭器の研究は近年特に顕著であり、有茎尖頭器についての著書が出版され（長井2009）、雑誌においても特集号が組まれた（旧石器文化談話会2008）。長井謙治の著書では、有茎尖頭器の身部に残される特徴的な剥離面である「斜行剥離」の向きが北海道と本州とで異なっており、動作連鎖の違いが存在したという指摘がなされている（長井2009）。この指摘は有茎尖頭器研究から発信された、石器研究、延いては物質文化研究についての新たな研究指針の投げかけとして評価できる。

1 研究の目的と方法

本州以南の有茎尖頭器は、単独で出土することが多く、石器群が捉えられるような出土例に乏しいことが知られている。これは一定期間の居住の場ではなく、短期間の狩猟の場に残されることが多かったことの反映とみて取れる。

静岡県においてもその出土状況は変わらず、単独出土資料が大半を占める。多数の旧石器時代、縄文時代の集落が確認されている愛鷹山山麓においても単独出土例は多数あるものの集落と考えられる遺跡は未だ発見されていない。

今後とも爆発的に当該期の集落遺跡の発見が相次ぐこと

は望めない以上、狩猟活動により単独で残されることが多いという有茎尖頭器の特徴を評価した研究を進めていくことが有効であろう。関東平野南西部においては既に、居住地外の資料を評価する研究が始められている（藤山2007）。

その基礎的作業として、静岡県における有茎尖頭器を体系的に集成することが有効であると考えた。有茎尖頭器の集成は古くは1970年代に旧石器時代の遺物集成の中で行われている（秋本1972・1976）。1990年代に入ると、静岡県史に有茎尖頭器についての項が設けられ、県全域の有茎尖頭器が一覧表にされている（瀬川1992）。また、愛鷹・箱根山麓の縄文時代草創期の資料集成においても有茎尖頭器の集成がなされている（池谷1996）。今回の集成では県全域を対象とし、石材や計測値を記載することで、今後の分析に有効なものを作成することを目指した。

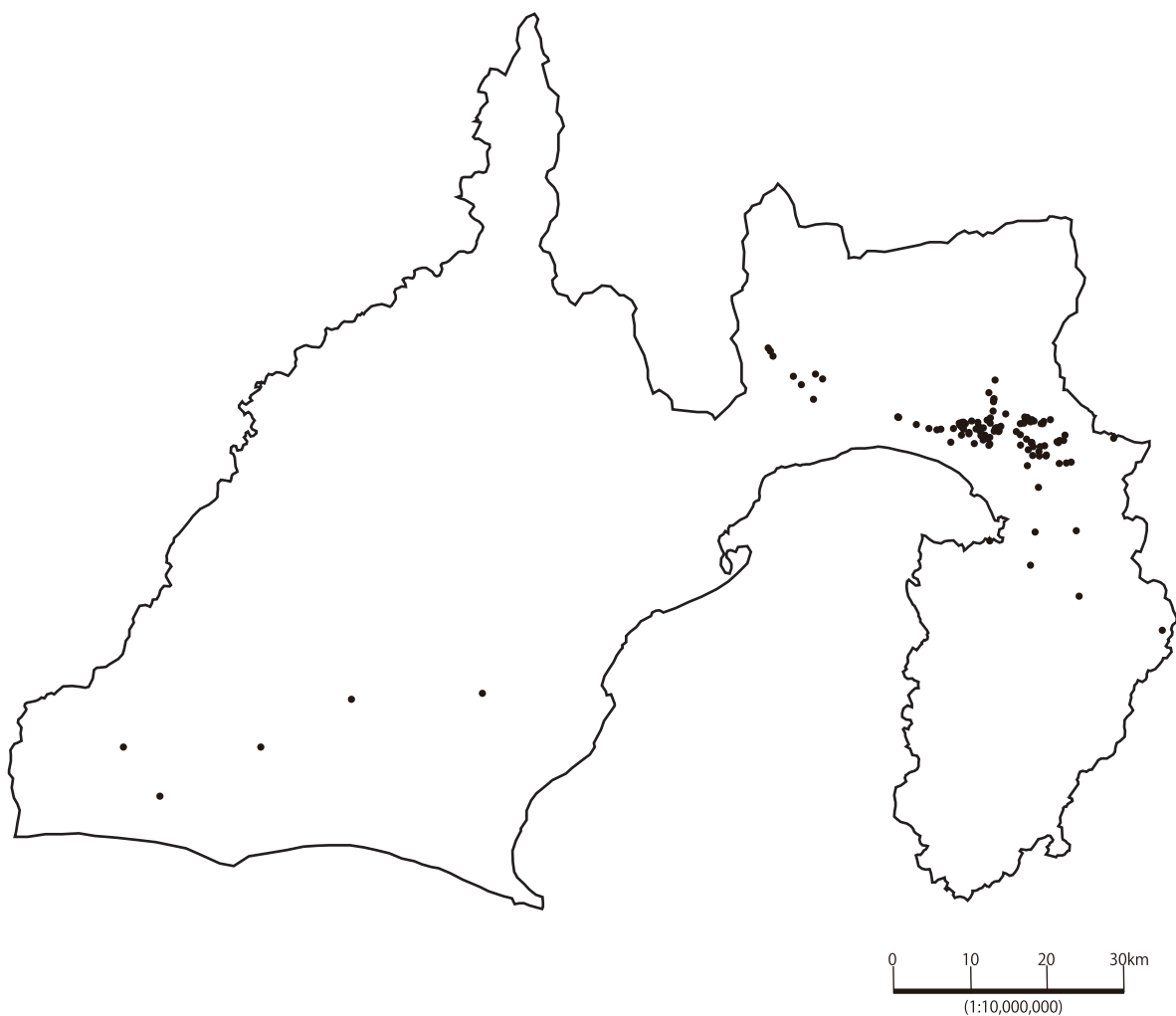
集成は執筆者で分担して行った。報告書や県史・市史な

どに記載があるものを集成の対象とした。実測図や写真が公表されていない、遺跡名のみ記載のものについては除外した。計測値が記載されていないものについても、図上から略測可能なものは略測した値を記した。

2 静岡県内の有茎尖頭器出土遺跡の分布

第1図は静岡県内における有茎尖頭器の出土遺跡である。分布から東部の愛鷹・箱根山麓周辺に極端に集中していることが分かる。当地域は旧石器時代遺跡の集中地域でもあり、旧石器時代から継続して生活の場として利用されていたことが伺える。ただし、先述のとおり当該期の集落遺跡は未だ発見されていない。

静岡県の旧石器時代遺跡が、愛鷹・箱根山麓周辺と磐田原台地に集中域が分かれていることは、すでに周知の事実である。しかし、今回の集成結果を見てみると愛鷹・箱根山麓周辺とは反対に、磐田原台地ではほとんど確認できな



第1図 静岡県有茎尖頭器出土遺跡分布図

かった。磐田原台地では、愛鷹・箱根山麓周辺とは異なり、細石器段階以降、遺跡が激減することとなる。

その理由を考えていく上で注目したいのが、2つの地域の利用石材の違いである。在地の石材として、愛鷹・箱根山麓周辺ではホルンフェルス、磐田原台地では頁岩系の石材をそれぞれ主体的に利用している。これは2つの地域で時期を問わず共通しているが、愛鷹・箱根山麓周辺では主要な石器を中心として黒曜石をも主体的に用いている。黒曜石の原産地は時期によって推移するが、中部高地産や神津島産などの遠距離石材が多量に含まれていることが、これまでの研究で明らかになっている。逆に磐田原台地では、黒曜石は少数しか利用されていない。この利用石材の違いは、そのまま両者の行動範囲の違いに直結していたと考えられている(笹原2010)。

縄文時代草創期では、遠隔地の石材を使用した製品が、散発的に確認される例が各地で認められている。磐田原台地で遺跡数が激減する理由として、当地における狭い行動範囲が、縄文時代草創期の生業・生活パターンと噛み合わなかった可能性が考えられる。現状では乱暴な推論に過ぎないが、可能性の一つとして示しておきたい。

また、富士山西南麓にあたる富士宮市域で分布が確認されていることに注目したい。当地域は富士宮市(旧芝川町)大鹿窪遺跡を除いて、本格的な縄文時代草創期の遺跡は確認されていない。しかし、富士宮市下高原遺跡が確認され、「後期旧石器時代の遺跡が展開する時期に泥流が多発し、大地を覆い尽くした」(財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2010f)と考えられていた当地域で本格的な旧石器時代遺跡が存在していたことが明らかにされた。当地域の石材は愛鷹・箱根山麓周辺と似通った様相を呈しており、同様に旧石器時代から縄文時代草創期まで継続して生活の場として利用されていた可能性も考えられる。今後の研究が期待される。

3 静岡県の有茎尖頭器の特徴と概要

今回集成された有茎尖頭器出土地は110遺跡122地点に上るが、これらはほとんどが単独出土の遺跡である。表層や後世の遺構・包含層からの出土の事例が多いのも事実であるが、広範囲にわたって発掘調査された遺跡でも有茎尖頭器は散発的に出土するのみであることが多い。現在、有茎尖頭器に共伴する遺物について議論することができる資

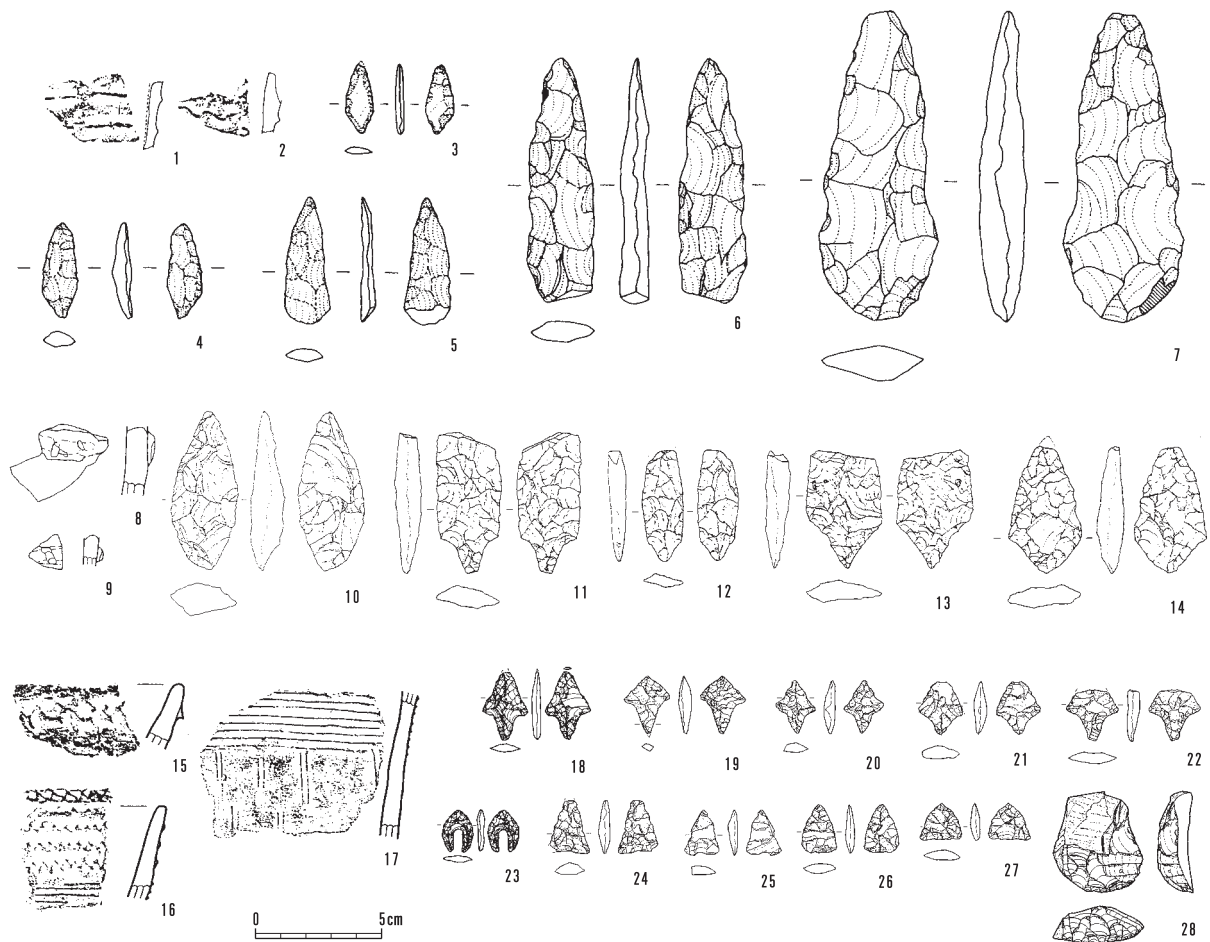
料が出土しているのは、富士宮市小塚遺跡、同・大鹿窪遺跡、伊豆市甲之背遺跡、島田市旗指遺跡の4遺跡のみである。

旗指遺跡は窯跡として有名であるが、その調査に伴って縄文時代の遺物が発見された(旗指遺跡第1地点)。草創期の資料は尖頭器、有茎尖頭器、石鏃、削器類、楔形石器、剥片、石核など約6000点の石器と、隆起線文土器、微隆起線文土器、爪形文土器、多縄文系土器が出土したとされる(澁谷1990)。有茎尖頭器は隆起線文系土器に関連付けられるであろうが、土器は多縄文系が主体である。有茎尖頭器に関する詳細が報告されていないため集成表には入っていないが、有茎尖頭器は4点出土したとされ、身部と茎部の境の屈曲部から弱く内湾して逆三角形の茎部のつき、身部と茎部が2:1程度となる形態のものが見られる。有茎尖頭器の分布が希薄な県中西部では貴重な発掘資料である。

小塚遺跡、甲之背遺跡、大鹿窪遺跡は県東部の有茎尖頭器密集地帯の周縁部に位置する。

小塚遺跡(芝川町教育委員会1995)は富士川の支流である芝川に面した丘陵上に位置し、富士川系ホルンフェルス製石器を主体とする石器製作跡が見つかっている。有茎尖頭器3点(第2図3~5)、未製品と考えられる加工の粗い尖頭器(6・7)や加工のある剥片が合わせて23点、その他削器、剥片、石核などが出土している。茎部の形態が分かる有茎尖頭器は2点だが、(風化のためそれほど明瞭には捉えられないが)逆刺は発達せず基部側で両側縁が「く」字形に屈曲し、そのまま逆三角形の基部につながる形態である。この2点は長さ4cmに満たない小形のものであるが、破片や未製品からはより大形の有茎尖頭器の存在が伺える。石器製作跡付近では早・前期など異なる時期の土器が混在して出土しているが、その中でも細隆起線文土器(1・2)が草創期の石器群に伴うものと考えられている。

甲之背遺跡(中伊豆町教育委員会1996)は城川を臨む丘陵状に位置する。遺跡のある丘陵の基盤岩はガラス質黒色安山岩であり、城川でもその転礫が採取できるなどガラス質黒色安山岩原産地に立地した遺跡であり、主として同石材によって尖頭器等の石器製作が行われていたものである。資料は早期以降のものと混在して出土したとされているが、尖頭器、有茎尖頭器、石鏃、搔器、削器などが草創期の石器と考えられる。草創期の土器は隆起線文土器(第2



第2図 小塚遺跡（1～7）・甲之背遺跡（8～14）・大鹿窪遺跡（15～28）出土遺物

図8・9)の他、爪形文と見られる小土器片が少数出土している。尖頭器(10)は未製品を含めて49点あり、器体中央付近に最大幅のある木葉形のものである。有茎尖頭器は15点あり、茎部の形態からは2類に分けられる。すなわち、①基部側で両側縁が内湾し、逆台形の茎部がつくもの(11・12)、②基部側で両側縁が「く」字形に屈曲し、そのまま逆三角形の茎部となるもの(13・14)である。茎部の形態の差はかつてから編年的な差と見なされることが多いが、この遺跡に関しては相伴しているようである。

大鹿窪遺跡(芝川町教育委員会2006)は芝川流域で、小塚遺跡より上流の地点に位置する。3-3C区の10号竪穴状遺構で草創期前半の資料が出土している。遺跡近傍に産する石材が石器群の主体をなしていた前記2遺跡に対し、この地点の石器群は黒曜石主体である。有茎尖頭器(第2図18～22)は小形の「花見山型」とされる形態で、全て黒曜石製である。茎部に対して身部が極端に短いもの(19)もあり、尖頭部が何らかの理由で再加工された可能

性がある。この他、黒曜石製の石鏃(23～27)、搔器(28)などが草創期の石器とされる。黒曜石の産地は一部しか分析がなされていないが、有茎尖頭器には柏峠産のもの(18)がある一方、石鏃には信州産のもの(23)がある。多量に出土している剥片類については詳細不明であり、有茎尖頭器が遺跡内の製作によるものかは判断できない。草創期の土器は隆線文土器(15～17)が主体で、押圧縄文土器、無文土器も出土しているが、有茎尖頭器は隆線文土器に伴うものと考えられる。隆線文土器は口縁部に押圧隆線、胴部に微隆線という構成のものが見られる。

現状をみる限り県内の有茎尖頭器は他地域と同様、隆線文系土器段階に位置づけられるようであるが、有茎尖頭器の型式と相伴する土器・石器、詳細な編年的位置づけ等の探求は今後課題となっていくであろう。

利用石材については報告により基準が統一されていないので大雑把な把握しかできないが、数量的にまとまっている富士市・富士宮市以東の県東部地域についてまとめてお

くと、有茎尖頭器の石材名の記載のあった496点中、安山岩・玄武岩系の石材が199点（このうち、黒色〔緻密質／無斑晶質〕安山岩など、ほぼ確実にガラス質黒色安山岩に含まれるもの132点）、ホルンフェルス（「頁岩」も合算）200点であり、この2種で大半を占める。次いで黒曜石が50点で、原産地分析の事例が少ないため明らかではないが、信州産、神津島産、柏峠産が主に用いられていたようである。他に、凝灰岩系、珪質頁岩、チャートなどが見られる。稀少な例としては、桜畑上遺跡（第二東名）で瑪瑙製が1点ある。

富士川系ホルンフェルス、ガラス質黒色安山岩は後期旧石器時代以来県東部地域における主要な石材であるが、小塚遺跡、甲之背遺跡は、それぞれの石材の採取地点近傍であることを背景に立地していたものと考えられる。遺跡数が限定されているので断定的な結論は出せないが、原産地近傍に石器製作地点が立地し、愛鷹山麓等では一時的な滞在地点のみを残す移動頻度の高い居住パターンであったことが示唆される（中村2010）。ホルンフェルスと安山岩とで有茎尖頭器の石材の8割を占めるという事実はこの地域で活動した集団が日常的な活動領域の近傍の石材に強く依存していたことを示す。

残る2割の石材に関してはホルンフェルス、ガラス質黒色安山岩とは別の供給パターンを考える必要があるが、資料に限られており議論できる状況にない。但し、地域内の居住パターンの中では説明のつかない希少石材の存在は注目される。丸尾北遺跡では、破片であるが有茎尖頭器の可能性のある資料1点について、深浦八森山産黒曜石製であるとの分析結果が出ている（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2009d）。縄文時代草創期の遺跡では原産地の遠い石材が散発的に出土する事例が各地で散見されており、これもその中の1例と言える。また、珪質頁岩・硬質頁岩等も産出地はほとんど分かっておらず、同様の長距離移動を経たものが含まれる可能性が高い。こうした事例は広域にわたる石材の交換・流通を示すものと考えられ、当該期の地域・社会関係を明らかにする上で今後とも注視が必要であろう。

おわりに

今回の集成により、県内では東部を中心に500点以上の有茎尖頭器が出土していることが分かった。このうち実に約280点が西暦2000年以降に報告されたものである。第二東名をはじめとする大規模発掘調査事業は県内では漸く終息を迎えつつあるが、近年における資料の著しい増加が改めて浮き彫りとなった。

蓄積された資料を放置せず、過去の歴史の解明に役立てていくことは今後の我々の責務である。本研究は、県内では未だ不明確なところの多い縄文時代草創期像の解明の端緒となるべきものである。

なお、本稿は執筆者で討議の上、「はじめに」と1を三好が、2と分布図の整理を柴田が、3を中村がまとめた。

引用文献（資料集成と重複するものは第1表にまとめた）

- 池谷信之 1996 「愛鷹・箱根山麓の縄文時代草創期の遺物」『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年 収録集』旧石器文化談話会 2008 『旧石器考古学』70
国立歴史民俗博物館 編集 2009 『企画展示 縄文はいつから!? 1万5千年前になにがおこったのか』財団法人歴史民俗博物館振興会
工藤雄一郎 2005 「本州島東半部における更新世終末期の考古学的編年と環境史との時間的対応関係」『第四紀研究』44-1
小林謙一 2008 「縄文時代の暦年代」『歴史のものさし』縄文時代の考古学2、同成社
笹原芳郎 2010 「静岡県」『日本列島の旧石器時代遺跡—日本旧石器（先土器・岩宿）時代遺跡のデータベース—』日本旧石器学会
澁谷昌彦 1990 「旗指遺跡第I地点」『静岡県史 資料編1』
長井謙治 2009 『石器づくりの考古学』同成社
中村雄紀 2010 「静岡県東部における縄文時代草創期後半から早期の石器群：石器群から見た居住パターンの変化について」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』第16号
藤山龍造 2007 「氷河時代終末期の狩猟活動論」『古代文化』58-3
藤山龍造 2009 『環境変化と縄文社会の幕開け』雄山閣
光石鳴巳 2008 「近畿地方における有茎尖頭器の基礎的研究」『旧石器考古学』70、旧石器文化談話会

第1-1表 静岡県の有茎尖頭器文献一覧

| | | |
|----------------------|-------|--|
| 秋本真澄 | 1972 | 「駿豆地方における先土器時代遺物」『駿河小塚』芝川町教育委員会・沼津考古学研究所 |
| 秋本真澄 | 1976 | 「先土器時代遺物について」『陣場上・平畝遺跡』長泉町教育委員会 |
| 熱海市史編纂委員会 | 1967 | 『熱海市史 上巻』熱海市役所 |
| 伊東市教育委員会 | 1992 | 『東大室クズレ遺跡』 |
| 磐田市教育委員会 | 2009 | 『遠州広域水道用水供給事業寺谷浄水場築造工事等に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 |
| 大仁町教育委員会 | 1969 | 『大仁町の旧石器・縄文文化』 |
| 大仁町教育委員会 | 1986 | 『仲道A遺跡』 |
| 掛川市史編纂委員会 | 1997 | 『掛川市史 上』 |
| 函南町教育委員会 | 1989 | 『函南スプリングゴルフ場用地内埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅰ)』 |
| 函南町教育委員会 | 2001 | 『上原遺跡』 |
| 加藤学園考古学研究所 | 2002 | 『佐野片平山遺跡群』 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 1985 | 『茶木畑遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第8集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 1994 | 『焼場遺跡(A地点)』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第55集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 1995 | 『下原遺跡Ⅰ』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第64集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 1996a | 『加茂ノ洞B遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第71集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 1996b | 『焼場遺跡B地点・五百司遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第73集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 1997b | 『北神馬土手遺跡 他Ⅱ』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第89集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 1997c | 『道下遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第93集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 1997a | 『八田原遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第87集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 1998a | 『徳倉B遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第100集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 1998b | 『桧林A遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第101集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 2000a | 『押出シ遺跡(遺物編)』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第119集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 2003b | 『大岡元長窪線関連遺跡Ⅰ』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第138集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 2003a | 『鉄平遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第137集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 2004 | 『上松沢平遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第145集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 2005 | 『来光川遺跡群Ⅱ』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第157集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 2006 | 『西山遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第170集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 2000b | 『池田B遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第122集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 2007a | 『佛ヶ尾遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第175集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 2007b | 『向田A遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第178集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 2008a | 『元野遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第189集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 2008b | 『下ノ大窪遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第190集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 2008c | 『棚返遺跡・今里遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第191集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 2008d | 『老平遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第192集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 2008e | 『裾野市富沢・桃園の遺跡群』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第193集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 2009a | 『矢川上C遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第200集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 2009b | 『秋葉林遺跡Ⅰ』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第207集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 2009c | 『桜畑上遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第208集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 2009d | 『丸尾北遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第210集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 2009e | 『イタドリA遺跡・イタドリB遺跡・イタドリC遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第211集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 2010a | 『細尾遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第222集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 2010b | 『沼津市井出・石川神ヶ沢の遺跡群』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第223集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 2010c | 『桜畑上遺跡Ⅰ』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第224集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 2010d | 『的場古墳群・的場遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第227集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 2010e | 『天ヶ沢遺跡・古木戸A遺跡・古木戸B遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第228集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 2010f | 『下高原遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第229集 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 2010g | 『梅ノ木沢遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第233集 |
| 笹津海祥・瀬川裕市郎・関野哲夫・杉山治夫 | 1976 | 「清水柳遺跡の土器と石器」『沼津市歴史民俗資料館紀要』1、沼津市歴史民俗資料館 |

第1-2表 静岡県の有茎尖頭器文献一覧

| | | |
|-----------|-------|--|
| 島田市教育委員会 | 1976 | 『旗指古窯址群』 |
| 芝川町教育委員会 | 1995 | 『小塚遺跡』 |
| 芝川町教育委員会 | 2006 | 『大鹿窪遺跡・窪B遺跡』 |
| 裾野市 | 1992 | 『裾野市史』第1巻 |
| 駿河考古学会 | 1971 | 『上長窪遺跡群』 |
| 瀬川裕市郎 | 1992 | 「有舌尖頭器」『静岡県史 資料編3』 |
| 中伊豆町教育委員会 | 1996 | 『甲之背遺跡』 |
| 長泉町 | 1971 | 『長泉町郷土誌』 |
| 長泉町教育委員会 | 1976 | 『陣場上・平畦遺跡』 |
| 長泉町教育委員会 | 1981 | 『八分平B・富士石遺跡』 |
| 長泉町教育委員会 | 1986 | 『中尾・イラウネ・野台』 |
| 長泉町教育委員会 | 1990 | 『上山地遺跡』 |
| 長泉町教育委員会 | 1994 | 『平畦遺跡・陣場上B遺跡』 |
| 長泉町教育委員会 | 2001 | 『木戸遺跡・中見代遺跡・東野II橋下遺跡』 |
| 長泉町教育委員会 | 2006 | 『追平B遺跡』 |
| 沼津市教育委員会 | 1980 | 『西大曲遺跡発掘調査概報』沼津市文化財調査報告 第20集 |
| 沼津市教育委員会 | 1980 | 『長井崎遺跡発掘調査報告書』沼津市埋蔵文化財発掘調査報告書 第18集 |
| 沼津市教育委員会 | 1982 | 『一般国道246号線裾野バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』 |
| 沼津市教育委員会 | 1988 | 『土手上・中見代II・III遺跡発掘調査報告書』沼津市埋蔵文化財発掘調査報告書 第43集 |
| 沼津市教育委員会 | 1990a | 『清水柳北遺跡発掘調査報告書その2』沼津市文化財調査報告 第48集 |
| 沼津市教育委員会 | 1990b | 『広合(b・c・d区)・広合南遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書 第49集 |
| 沼津市教育委員会 | 1991 | 『広合遺跡(e区)・二ツ洞遺跡(a区)発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書 第52集 |
| 沼津市教育委員会 | 1992 | 『尾上イラウネ遺跡発掘調査報告書II』沼津市文化財調査報告 第53集 |
| 沼津市教育委員会 | 1993 | 『二ツ洞遺跡(b・c区)発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書 第54集 |
| 沼津市教育委員会 | 1994 | 『大谷津遺跡・井手丸山古墳発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書 第55集 |
| 沼津市教育委員会 | 1995 | 『土手上遺跡(b・c区)発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書 第56集 |
| 沼津市教育委員会 | 1996b | 『柏葉尾遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書 第61集 |
| 沼津市教育委員会 | 1996a | 『西洞遺跡(a区)・葛原沢遺跡発掘調査報告書』沼津市埋蔵文化財発掘調査報告書 第59集 |
| 沼津市教育委員会 | 1999 | 『西洞(b区-1)遺跡発掘調査報告書』沼津市埋蔵文化財発掘調査報告書 第69集 |
| 沼津市教育委員会 | 2000 | 『鳥谷アラク遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告 第75集 |
| 沼津市教育委員会 | 2001 | 『葛原沢IV遺跡(a・b区)発掘調査報告書1』沼津市文化財調査報告書 第77集 |
| 沼津市教育委員会 | 2002 | 『西洞(c・d区)遺跡発掘調査報告書』沼津市埋蔵文化財発掘調査報告書 第78集 |
| 沼津市教育委員会 | 2005 | 『埋蔵文化財調査報告書5』沼津市文化財調査報告書 第87集 |
| 富士宮市教育委員会 | 1981 | 『月の輪遺跡群』富士宮市文化財調査報告書 第1集 |
| 富士宮市教育委員会 | 1983 | 『若宮遺跡』富士宮市文化財調査報告書 第6集 |
| 富士宮市教育委員会 | 1985 | 『上石敷遺跡』富士宮市文化財調査報告書 第8集 |
| 富士宮市教育委員会 | 1997 | 『滝戸遺跡』富士宮市文化財調査報告書 第23集 |
| 三島市教育委員会 | 1987a | 『片平山遺跡群I』 |
| 三島市教育委員会 | 1987b | 『北原菅遺跡』 |
| 三島市教育委員会 | 1990 | 『三島スプリングスC.Cゴルフ場内埋蔵文化財発掘調査報告書I』 |
| 三島市教育委員会 | 1992 | 『三島スプリングスC.Cゴルフ場内埋蔵文化財発掘調査報告書II』 |
| 三島市教育委員会 | 1994 | 『五輪・観音洞・元山中・陰洞I』 |
| 三島市教育委員会 | 1994 | 『五輪・観音洞・元山中・陰洞II』 |
| 三島市教育委員会 | 1998 | 『中村分遺跡 天台B遺跡 台崎C遺跡』 |
| 三島市教育委員会 | 1999 | 『初音ヶ原遺跡』 |
| 三島市教育委員会 | 2002 | 『初音ヶ原B遺跡 第4地点』 |
| 三島市教育委員会 | 2004 | 『南山D遺跡 東山遺跡 香音II・D遺跡 奥山遺跡』 |
| 三島市教育委員会 | 2009 | 『三島市埋蔵文化財発掘調査報告XIV』 |

第2-1表 静岡県 の有茎尖頭器集成

| 遺跡名 | 所在 | 遺物番号 | 石 材 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重さ | 備 考 | 文 献 |
|--------------|------------|---------|-----------|--------|--------|-------|--------|-------------------------------|------------|
| 大越遺跡 | 熱海市大越 | 第1図 | 玄武岩質 | 8.48 | 1.79 | 0.54 | — | 実測図より計測 | 熱海市史1967 |
| 東大室クスレ遺跡 | 伊東市富戸 | 第132図16 | 黒曜石 | 2.95 | 2.16 | 0.80 | — | 実測図より計測 | 伊東市教委1992 |
| 焼場遺跡A地点 | 三島市川原ヶ谷 | 第71図1 | 黒色緻密安山岩 | 5.3 | 1.95 | 0.55 | 5.5 | | 静岡県埋文1994 |
| 焼場遺跡A地点 | 三島市川原ヶ谷 | 第71図2 | 黒色緻密安山岩 | 7.8 | 1.35 | 0.55 | 5.1 | | 静岡県埋文1994 |
| 焼場遺跡A地点 | 三島市川原ヶ谷 | 第71図3 | 黒色緻密安山岩 | 1.85 | 1.55 | 0.5 | 1.8 | | 静岡県埋文1994 |
| 焼場遺跡A地点 | 三島市川原ヶ谷 | 第71図4 | 黒曜石 | 1.7 | 1.8 | 0.5 | 1.2 | | 静岡県埋文1994 |
| 焼場遺跡B地点 | 三島市川原ヶ谷五百司 | 第56図45 | 緻密安山岩 | 2.20 | 1.10 | 0.40 | 1.10 | | 静岡県埋文1996b |
| 焼場遺跡B地点 | 三島市川原ヶ谷五百司 | 第56図46 | 黒曜石 | 1.75 | 0.90 | 0.45 | 0.50 | | 静岡県埋文1996b |
| 焼場遺跡B地点 | 三島市川原ヶ谷五百司 | 第56図47 | 緻密安山岩 | 2.20 | 1.60 | 0.55 | 1.80 | | 静岡県埋文1996b |
| 焼場遺跡B地点 | 三島市川原ヶ谷五百司 | 第56図49 | 緻密安山岩 | 6.10 | 1.80 | 0.75 | 6.50 | | 静岡県埋文1996b |
| 陰洞C遺跡 | 三島市川原ヶ谷陰洞 | 第201図1 | 玄武岩 | 7.62 | 1.48 | 0.50 | 5.05 | | 三島市教委1994 |
| 観音洞G遺跡 | 三島市観音洞 | 第98図1 | 玄武岩 | 7.53 | 1.49 | 0.49 | 5.35 | | 三島市教委1994 |
| 観音洞B遺跡 | 三島市観音洞 | 図版96-1 | 頁岩 | — | — | — | — | 写真図版のみ | 三島市教委1994 |
| 北原倉遺跡 | 三島市北原倉 | 第21図1 | — | 7.31 | 1.33 | 0.49 | — | 実測図より計測 | 三島市教委1987b |
| 佐野片平山G遺跡第1地区 | 三島市佐野片平山 | 第90図3 | 緻密黒色安山岩 | 5.34 | 1.67 | 0.73 | — | 実測図より計測 | 加藤学園考研2002 |
| 佐野片平山G遺跡第1地区 | 三島市佐野片平山 | 第90図4 | 緻密黒色安山岩 | 3.40 | 1.60 | 0.64 | — | 実測図より計測 | 加藤学園考研2002 |
| 佐野片平山G遺跡第1地区 | 三島市佐野片平山 | 第90図5 | 緻密黒色安山岩 | 4.81 | 2.12 | 0.77 | — | 実測図より計測 | 加藤学園考研2002 |
| 佐野片平山G遺跡第1地区 | 三島市佐野片平山 | 第90図6 | 緻密黒色安山岩 | 4.98 | 1.64 | 0.71 | — | 実測図より計測 | 加藤学園考研2002 |
| 佐野片平山G遺跡第1地区 | 三島市佐野片平山 | 第90図7 | 緻密黒色安山岩 | 9.27 | 1.51 | 0.85 | — | 実測図より計測 | 加藤学園考研2002 |
| 佐野片平山G遺跡第1地区 | 三島市佐野片平山 | 第90図8 | 頁岩 | 5.34 | 1.42 | 0.80 | — | 実測図より計測 | 加藤学園考研2002 |
| 佐野片平山G遺跡第2地区 | 三島市佐野片平山 | 第97図1 | 硬質凝灰岩 | 6.59 | 1.58 | 0.85 | — | 実測図より計測 | 加藤学園考研2002 |
| 陣笠山A遺跡 | 三島市佐野片平山 | 第154図4 | 緻密黒色安山岩 | 2.9 | 1.9 | 0.4 | — | 実測図より計測 | 加藤学園考研2002 |
| 加茂ノ洞B遺跡 | 三島市沢地河洞 | 第22図48 | 黒色緻密安山岩 | 7.05 | 1.30 | 0.45 | 3.7 | | 静岡県埋文1996a |
| 加茂ノ洞B遺跡 | 三島市沢地河洞 | 第22図49 | 玄武岩 | 5.20 | 1.45 | 0.90 | 5.7 | | 静岡県埋文1996a |
| 加茂ノ洞B遺跡 | 三島市沢地河洞 | 第22図50 | 頁岩 | 4.30 | 1.55 | 0.55 | 2.9 | | 静岡県埋文1996a |
| 加茂ノ洞B遺跡 | 三島市沢地河洞 | 第22図51 | 頁岩 | 3.00 | 1.45 | 0.50 | 1.8 | | 静岡県埋文1996a |
| 加茂ノ洞B遺跡 | 三島市沢地河洞 | 第22図53 | 黒色緻密安山岩 | 4.80 | 2.05 | 0.80 | 6.3 | | 静岡県埋文1996a |
| 加茂ノ洞B遺跡 | 三島市沢地河洞 | 第22図54 | 黒色緻密安山岩 | 2.80 | 2.10 | 1.10 | 7.0 | | 静岡県埋文1996a |
| 八田原遺跡 | 三島市沢地八田原 | 第45図220 | ガラス質黒色安山岩 | 5.0 | 1.7 | 0.6 | 4.5 | | 静岡県埋文1997a |
| 八田原遺跡 | 三島市沢地八田原 | 第46図221 | 頁岩 | 4.6 | 1.55 | 0.35 | 2.2 | | 静岡県埋文1997a |
| 八田原遺跡 | 三島市沢地八田原 | 第46図222 | 頁岩 | 4.7 | 1.4 | 0.45 | 3.24 | | 静岡県埋文1997a |
| 八田原遺跡 | 三島市沢地八田原 | 第46図223 | ガラス質黒色安山岩 | 8.5 | 1.7 | 0.45 | 6.0 | | 静岡県埋文1997a |
| 八田原遺跡 | 三島市沢地八田原 | 第46図224 | 頁岩 | 5.6 | 1.9 | 0.65 | 6.5 | | 静岡県埋文1997a |
| 八田原遺跡 | 三島市沢地八田原 | 第46図225 | ガラス質黒色安山岩 | 5.8 | 1.8 | 0.4 | 3.5 | | 静岡県埋文1997a |
| 八田原遺跡 | 三島市沢地八田原 | 第46図226 | 頁岩 | 3.4 | 2.1 | 0.6 | 2.2 | | 静岡県埋文1997a |
| 八田原遺跡 | 三島市沢地八田原 | 第46図227 | ガラス質黒色安山岩 | 3.9 | 2.35 | 0.7 | 5.8 | | 静岡県埋文1997a |
| 八田原遺跡 | 三島市沢地八田原 | 第46図228 | ガラス質黒色安山岩 | 3.05 | 1.7 | 0.8 | 2.65 | | 静岡県埋文1997a |
| 八田原遺跡 | 三島市沢地八田原 | 第46図229 | ガラス質黒色安山岩 | 5.2 | 2.1 | 0.85 | 8.2 | | 静岡県埋文1997a |
| 八田原遺跡 | 三島市沢地八田原 | 第46図230 | ガラス質黒色安山岩 | 4.5 | 2.0 | 0.8 | 6.55 | | 静岡県埋文1997a |
| 南山D遺跡 第1地点 | 三島市玉沢 | 第47図1 | ガラス質黒色安山岩 | (2.50) | 1.30 | 0.30 | (0.65) | | 三島市教委2004 |
| 南山D遺跡 第2地点 | 三島市玉沢 | 第69図1 | ホルンフェルス | (5.30) | 1.30 | 0.40 | (2.50) | | 三島市教委2004 |
| 庚申松遺跡 | 三島市玉沢 | 第80図1 | — | (7.20) | 1.70 | 0.50 | — | 実測図より計測 | 秋本1976 |
| 御座松遺跡 | 三島市玉沢 | 第80図5 | — | 5.40 | 1.90 | 0.80 | — | 実測図より計測 | 秋本1976 |
| 山神社遺跡 | 三島市塚原新田 | 第16図8 | 黒曜石(中部高地) | 3.28 | 2.11 | 0.62 | 2.59 | 黒曜石産地は肉眼鑑定、観察表では石織(本文では有茎尖頭器) | 三島市教委2009 |
| 塚原初音ヶ原遺跡 | 三島市塚原新田 | 第14図16 | ホルンフェルス | 5.71 | 1.60 | 0.55 | 5.26 | | 三島市教委2009 |
| 北原遺跡 | 三島市塚原新田 | 第80図7 | — | (4.90) | 1.10 | 0.40 | — | 実測図より計測 | 秋本1976 |
| ネーゴ山遺跡 | 三島市秋ヶ窪 | 第80図3 | — | (6.20) | 2.00 | 0.80 | — | 実測図より計測 | 秋本1976 |
| 徳倉B遺跡 | 三島市徳倉 | 第69図29 | ガラス質黒色安山岩 | (52.5) | (16.0) | (3.0) | (4.0) | | 静岡県埋文1998a |
| 徳倉片平山B遺跡 | 三島市徳倉片平山 | 第20図36 | 安山岩 | 1.1 | 1.25 | 0.45 | 3.63 | 旧・片平山遺跡群No.6地点 | 三島市教委1987a |
| 徳倉片平山I遺跡 | 三島市徳倉片平山 | 第28図14 | 黒曜石 | 4.35 | 1.29 | 0.55 | 4.05 | 旧・片平山遺跡群No.9地点 | 三島市教委1987a |
| ソノエンサレB遺跡 | 三島市徳倉片平山 | 第81図1 | 玄武岩 | 6.03 | 1.21 | 0.43 | 3.65 | | 三島市教委1990 |
| ソノエンサレB遺跡 | 三島市徳倉片平山 | 第81図2 | 玄武岩 | 4.97 | 0.61 | 0.69 | 6.30 | | 三島市教委1990 |
| 徳倉片平山K遺跡 | 三島市徳倉片平山 | 第52図1 | 黒曜石 | 3.07 | 1.61 | 0.77 | 2.95 | | 三島市教委1990 |
| 徳倉片平山K遺跡 | 三島市徳倉片平山 | 第52図2 | 玄武岩 | 4.43 | 1.33 | 0.49 | 3.20 | | 三島市教委1990 |
| 徳倉片平山L遺跡 | 三島市徳倉片平山 | 第30図1 | 玄武岩 | 6.39 | 1.92 | 0.67 | 7.55 | | 三島市教委1990 |
| 徳倉片平山L遺跡 | 三島市徳倉片平山 | 第30図2 | 玄武岩 | 3.90 | 1.54 | 0.67 | 3.15 | | 三島市教委1990 |
| 中村C遺跡 | 三島市徳倉片平山 | 第59図1 | 玄武岩 | 6.70 | 2.21 | 0.40 | 5.15 | | 三島市教委1992 |
| 中村C遺跡 | 三島市徳倉片平山 | 第59図2 | 玄武岩 | 4.55 | 1.33 | 0.40 | 2.65 | | 三島市教委1992 |
| 中村C遺跡 | 三島市徳倉片平山 | 第59図3 | 黒曜石 | 4.36 | 1.92 | 0.82 | — | 実測図より計測 | 三島市教委1992 |
| 中村C遺跡 | 三島市徳倉片平山 | 第59図4 | 玄武岩 | 2.22 | 1.70 | 0.32 | 1.05 | | 三島市教委1992 |
| 中村C遺跡 | 三島市徳倉片平山 | 第59図5 | 玄武岩 | 3.50 | 1.88 | 0.30 | 1.40 | | 三島市教委1992 |
| 徳倉片平山J遺跡 | 三島市徳倉片平山 | 第112図1 | 玄武岩 | 3.75 | 1.55 | 0.44 | 2.55 | | 三島市教委1992 |
| 道下遺跡 | 三島市谷田 | 第20図1 | — | 5 | 1.8 | 0.48 | — | 厚さ・重さは実測図より計測 | 静岡県埋文1997c |
| 松林A遺跡 | 三島市谷田石神 | 第48図1 | ホルンフェルス | 8.6 | 1.8 | 0.40 | 7.4 | | 静岡県埋文1998b |
| 松林A遺跡 | 三島市谷田石神 | 第48図2 | ガラス質黒色安山岩 | 6.5 | 1.5 | 0.35 | 6.3 | | 静岡県埋文1998b |
| 松林A遺跡 | 三島市谷田石神 | 第48図3 | 細粒安山岩 | 7.2 | 1.6 | 0.36 | 5.5 | | 静岡県埋文1998b |
| 松林A遺跡 | 三島市谷田石神 | 第48図4 | ホルンフェルス | 6.3 | 2.0 | 0.53 | 7.3 | | 静岡県埋文1998b |
| 松林A遺跡 | 三島市谷田石神 | 第48図5 | ガラス質黒色安山岩 | 5.6 | 1.9 | 0.54 | 5.8 | | 静岡県埋文1998b |
| 松林A遺跡 | 三島市谷田石神 | 第48図6 | ガラス質黒色安山岩 | 5.1 | 1.9 | 0.46 | 6.0 | | 静岡県埋文1998b |
| 松林A遺跡 | 三島市谷田石神 | 第48図7 | ガラス質黒色安山岩 | 4.75 | 1.4 | 0.60 | 3.7 | | 静岡県埋文1998b |
| 松林A遺跡 | 三島市谷田石神 | 第48図8 | ガラス質黒色安山岩 | 4.75 | 1.5 | 0.60 | 4.1 | | 静岡県埋文1998b |
| 松林A遺跡 | 三島市谷田石神 | 第48図9 | ガラス質黒色安山岩 | 4.7 | 1.35 | 0.40 | 2.2 | | 静岡県埋文1998b |
| 松林A遺跡 | 三島市谷田石神 | 第48図10 | 細粒安山岩 | 6.8 | 1.3 | 0.63 | 7.3 | 植刃で記載 | 静岡県埋文1998b |
| 初音ヶ原B遺跡第3地点 | 三島市谷田大原 | 第228図2 | ホルンフェルス | 12.50 | 1.25 | 0.62 | 8.50 | | 三島市教委1999 |
| 初音ヶ原B遺跡第3地点 | 三島市谷田大原 | 第228図5 | ガラス質黒色安山岩 | 7.77 | 2.23 | 0.77 | 13.45 | | 三島市教委1999 |
| 初音ヶ原B遺跡第3地点 | 三島市谷田大原 | 第229図6 | ガラス質黒色安山岩 | 6.68 | 2.14 | 0.83 | 11.50 | | 三島市教委1999 |
| 初音ヶ原B遺跡第3地点 | 三島市谷田大原 | 第229図8 | ガラス質黒色安山岩 | 5.40 | 1.54 | 0.39 | 3.55 | | 三島市教委1999 |
| 初音ヶ原B遺跡第4地点 | 三島市谷田大原 | 第10図8 | 珪質頁岩(灰色) | 5.96 | 1.22 | 0.30 | 2.80 | | 三島市教委2002 |
| 押出シ遺跡 | 三島市谷田押出シ | 第101図6 | 無珪晶質安山岩 | (5.19) | 1.33 | 0.41 | (3.60) | | 静岡県埋文2000a |
| 押出シ遺跡 | 三島市谷田押出シ | 第101図7 | ガラス質黒色安山岩 | (4.25) | 1.77 | 0.63 | (4.80) | | 静岡県埋文2000a |
| 初音ヶ原A遺跡第2地点 | 三島市谷田初音ヶ原 | 第228図3 | ガラス質黒色安山岩 | 4.35 | 1.23 | 0.39 | 3.35 | | 三島市教委1999 |
| 初音ヶ原A遺跡第2地点 | 三島市谷田初音ヶ原 | 第228図4 | ガラス質黒色安山岩 | 3.12 | 1.50 | 0.44 | 2.60 | | 三島市教委1999 |
| 初音ヶ原A遺跡第2地点 | 三島市谷田初音ヶ原 | 第229図7 | ホルンフェルス | 5.88 | 1.74 | 0.71 | 8.20 | | 三島市教委1999 |
| 初音ヶ原A遺跡第2地点 | 三島市谷田初音ヶ原 | 第229図9 | 細粒凝灰岩 | 5.58 | 1.80 | 0.48 | 4.20 | | 三島市教委1999 |
| 初音ヶ原A遺跡第2地点 | 三島市谷田初音ヶ原 | 第229図10 | ガラス質黒色安山岩 | 4.76 | 1.55 | 0.40 | 2.95 | | 三島市教委1999 |
| 下原遺跡 | 三島市塚原新田下原 | 図22-1 | 黒色緻密安山岩 | (0.54) | (2.0) | (0.6) | (6) | | 静岡県埋文1995 |

第2-2表 静岡県の有茎尖頭器集成

| 遺 跡 名 | 所 在 | 遺物番号 | 石 材 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重さ | 備 考 | 文 献 |
|---------|---------------|----------|-------------|--------|--------|--------|-------|---------|------------|
| 下原遺跡 | 三島市塚原新田下原 | 図22-2 | 頁岩 | (3.75) | (2.05) | (0.75) | (6.1) | | 静岡県埋文1995 |
| 下原遺跡 | 三島市塚原新田下原 | 図22-3 | 頁岩 | (3.7) | (2.2) | (0.9) | (8.5) | | 静岡県埋文1995 |
| 下原遺跡 | 三島市塚原新田下原 | 図22-5 | 凝灰岩質頁岩 | (4.75) | (1.8) | (0.65) | (4.1) | | 静岡県埋文1995 |
| 下原遺跡 | 三島市塚原新田下原 | 図22-6 | 黒色緻密安山岩 | 2.7 | 1.6 | 0.6 | 1.7 | | 静岡県埋文1995 |
| 台崎C遺跡 | 三島市大谷田台崎 | 第180図6 | 凝灰岩系 | 7.46 | 2.03 | 0.63 | 10.00 | | 三島市教委1998 |
| 中村分遺跡 | 三島市大谷田台崎 | 第81図15 | ガラス質黒色安山岩 | 3.65 | 1.50 | 0.50 | 1.35 | 石籤で報告 | 三島市教委1998 |
| 天台B遺跡 | 三島市大谷田台崎 | 第159図1 | ガラス質黒色安山岩 | 4.85 | 1.00 | 0.40 | 1.50 | | 三島市教委1998 |
| 天台B遺跡 | 三島市大谷田台崎 | 第159図2 | 黒曜石 | 6.30 | 1.23 | 0.50 | 3.20 | | 三島市教委1998 |
| 天台B遺跡 | 三島市大谷田台崎 | 第159図3 | ガラス質黒色安山岩 | 6.60 | 1.50 | 0.50 | 4.05 | | 三島市教委1998 |
| 天台B遺跡 | 三島市大谷田台崎 | 第159図4 | ガラス質黒色安山岩 | 5.20 | 0.90 | 0.30 | 1.50 | | 三島市教委1998 |
| 天台B遺跡 | 三島市大谷田台崎 | 第159図5 | ガラス質黒色安山岩 | 5.11 | 1.10 | 0.40 | 2.25 | | 三島市教委1998 |
| 天台B遺跡 | 三島市大谷田台崎 | 第159図6 | ガラス質黒色安山岩 | 4.40 | 1.34 | 0.40 | 2.90 | | 三島市教委1998 |
| 天台B遺跡 | 三島市大谷田台崎 | 第159図7 | ガラス質黒色安山岩 | 6.20 | 1.31 | 0.50 | 4.35 | | 三島市教委1998 |
| 天台B遺跡 | 三島市大谷田台崎 | 第159図8 | ガラス質黒色安山岩 | 5.80 | 1.40 | 0.40 | 4.25 | | 三島市教委1998 |
| 天台B遺跡 | 三島市大谷田台崎 | 第160図9 | ガラス質黒色安山岩 | 4.22 | 1.25 | 0.40 | 1.95 | | 三島市教委1998 |
| 天台B遺跡 | 三島市大谷田台崎 | 第160図10 | 頁岩 | 3.50 | 1.20 | 0.30 | 0.85 | | 三島市教委1998 |
| 天台B遺跡 | 三島市大谷田台崎 | 第160図11 | ガラス質黒色安山岩 | 5.90 | 2.00 | 0.54 | 5.70 | | 三島市教委1998 |
| 天台B遺跡 | 三島市大谷田台崎 | 第160図12 | ガラス質黒色安山岩 | 5.16 | 1.57 | 0.34 | 3.90 | | 三島市教委1998 |
| 天台B遺跡 | 三島市大谷田台崎 | 第160図13 | ガラス質黒色安山岩 | 4.53 | 1.44 | 0.45 | 3.50 | | 三島市教委1998 |
| 天台B遺跡 | 三島市大谷田台崎 | 第160図14 | ガラス質黒色安山岩 | 3.25 | 1.25 | 0.34 | 1.85 | | 三島市教委1998 |
| 大奴田場A遺跡 | 田方郡函南町桑原大奴田場 | 第78図1 | 黒色緻密質安山岩 | 5.16 | 2.21 | 0.48 | - | 実測図より計測 | 函南町教委1989 |
| 大奴田場A遺跡 | 田方郡函南町桑原大奴田場 | 第78図2 | 黒色緻密質安山岩 | 3.75 | 1.35 | 0.49 | - | 実測図より計測 | 函南町教委1989 |
| 柳沢B遺跡 | 田方郡函南町桑原柳沢 | 第10図85 | 黒色緻密質安山岩 | (7.7) | 1.6 | 0.5 | - | 実測図より計測 | 函南町教委2001 |
| 上原遺跡 | 田方郡函南町桑原上原 | 第165図1 | ガラス質黒色安山岩 | 5.28 | 1.25 | 0.41 | - | 実測図より計測 | 函南町教委2001 |
| 上原遺跡 | 田方郡函南町桑原上原 | 第165図2 | ガラス質黒色安山岩 | 4.38 | 1.59 | 0.60 | - | 実測図より計測 | 函南町教委2001 |
| 上原遺跡 | 田方郡函南町桑原上原 | 第165図3 | チャート | 3.70 | 1.45 | 0.40 | - | 実測図より計測 | 函南町教委2001 |
| 上原遺跡 | 田方郡函南町桑原上原 | 第165図4 | ガラス質黒色安山岩 | 2.59 | 1.38 | 0.61 | - | 実測図より計測 | 函南町教委2001 |
| 上原遺跡 | 田方郡函南町桑原上原 | 第165図5 | ガラス質黒色安山岩 | 3.99 | 1.36 | 0.52 | - | 実測図より計測 | 函南町教委2001 |
| 五反田遺跡 | 田方郡函南町仁田 | 第136図1 | ガラス質黒色安山岩 | 2.95 | 1.95 | - | 4.0 | | 静岡県埋文2005 |
| 五反田遺跡 | 田方郡函南町仁田 | 第136図2 | 黒曜石 | 3.95 | 1.8 | - | 4.6 | | 静岡県埋文2005 |
| 伊道A遺跡 | 伊豆の国市三福伊道 | 第55図8 | 頁岩 | 1.65 | 1.67 | 0.45 | 1.05 | | 大仁町教委1986 |
| 馬の背遺跡 | 伊豆の国市田中山馬の背 | 25 | - | 9.9 | 1.6 | 0.8 | - | 実測図より計測 | 大仁町教委1969 |
| 土沢遺跡 | 伊豆の国市田中山土沢 | 図版4上 | - | - | - | - | - | | 大仁町教委1969 |
| 土沢遺跡 | 伊豆の国市田中山土沢 | 図版4上 | - | - | - | - | - | | 大仁町教委1969 |
| 甲之背遺跡 | 伊豆市(旧中伊豆町)甲之背 | 第44図51 | 黒色緻密安山岩 | 4.15 | 2.40 | 0.86 | 7.50 | | 中伊豆町教委1996 |
| 甲之背遺跡 | 伊豆市(旧中伊豆町)甲之背 | 第44図52 | 黒色緻密安山岩 | 3.04 | 2.12 | 0.83 | 4.53 | | 中伊豆町教委1996 |
| 甲之背遺跡 | 伊豆市(旧中伊豆町)甲之背 | 第44図53 | 頁岩 | 3.08 | 1.26 | 0.48 | 1.54 | | 中伊豆町教委1996 |
| 甲之背遺跡 | 伊豆市(旧中伊豆町)甲之背 | 第44図54 | 安山岩 | 2.24 | 1.35 | 0.60 | 1.39 | | 中伊豆町教委1996 |
| 甲之背遺跡 | 伊豆市(旧中伊豆町)甲之背 | 第44図55 | 安山岩 | 4.37 | 1.79 | 0.61 | 5.42 | | 中伊豆町教委1996 |
| 甲之背遺跡 | 伊豆市(旧中伊豆町)甲之背 | 第44図56 | 黒色緻密安山岩 | 4.37 | 3.50 | 0.93 | 11.51 | | 中伊豆町教委1996 |
| 甲之背遺跡 | 伊豆市(旧中伊豆町)甲之背 | 第44図57 | 黒色緻密安山岩 | 3.67 | 1.36 | 5.50 | 2.90 | | 中伊豆町教委1996 |
| 甲之背遺跡 | 伊豆市(旧中伊豆町)甲之背 | 第44図58 | 黒色緻密安山岩 | 4.61 | 2.12 | 0.83 | 8.87 | | 中伊豆町教委1996 |
| 甲之背遺跡 | 伊豆市(旧中伊豆町)甲之背 | 第44図59 | 黒色緻密安山岩 | 3.78 | 2.53 | 0.77 | 7.48 | | 中伊豆町教委1996 |
| 甲之背遺跡 | 伊豆市(旧中伊豆町)甲之背 | 第44図60 | 黒色緻密安山岩 | 2.16 | 1.75 | 0.39 | 1.37 | | 中伊豆町教委1996 |
| 甲之背遺跡 | 伊豆市(旧中伊豆町)甲之背 | 第44図61 | 黒色緻密安山岩 | 2.01 | 1.38 | 0.39 | 0.89 | | 中伊豆町教委1996 |
| 甲之背遺跡 | 伊豆市(旧中伊豆町)甲之背 | 第44図62 | 黒色緻密安山岩 | 2.02 | 1.89 | 0.72 | 2.06 | | 中伊豆町教委1996 |
| 甲之背遺跡 | 伊豆市(旧中伊豆町)甲之背 | 第45図63 | 安山岩 | 4.89 | 1.36 | 0.57 | 4.01 | | 中伊豆町教委1996 |
| 甲之背遺跡 | 伊豆市(旧中伊豆町)甲之背 | 第45図64 | 黒色緻密安山岩 | 3.22 | 1.50 | 0.51 | 3.15 | | 中伊豆町教委1996 |
| 甲之背遺跡 | 伊豆市(旧中伊豆町)甲之背 | 第45図65 | 安山岩 | 6.46 | 2.41 | 1.06 | 14.71 | | 中伊豆町教委1996 |
| 佛ヶ尾遺跡 | 裾野市大畑 | 第25図1 | チャート | 8.3 | 2.1 | 0.4 | 8.2 | | 静岡県埋文2007a |
| 下ノ大窪遺跡 | 裾野市大畑下ノ大窪 | 第245図1 | ホルンフェルス | (6.90) | 1.41 | 0.50 | 3.3 | 先端部欠 | 静岡県埋文2008b |
| 下ノ大窪遺跡 | 裾野市大畑下ノ大窪 | 第245図2 | ホルンフェルス | (3.40) | 1.66 | 0.60 | 3.8 | 先端部欠 | 静岡県埋文2008b |
| 下ノ大窪遺跡 | 裾野市大畑下ノ大窪 | 第246図50 | ガラス質黒色安山岩 | 4.90 | 2.23 | 0.80 | 7.7 | | 静岡県埋文2008b |
| 老平遺跡 | 裾野市大畑老平 | 第82図1 | ホルンフェルス | (2.64) | 1.20 | 0.47 | 1.3 | 先端部欠 | 静岡県埋文2008d |
| 老平遺跡 | 裾野市大畑老平 | 第82図2 | 黒曜石(諏訪屋ヶ台) | (2.88) | 1.50 | 0.5 | 1.2 | 先端部・基部欠 | 静岡県埋文2008d |
| 老平遺跡 | 裾野市大畑老平 | 第82図3 | 黒曜石(神津島忍馳島) | (5.04) | 1.80 | 0.65 | 5.4 | 先端部・基部欠 | 静岡県埋文2008d |
| 老平遺跡 | 裾野市大畑老平 | 第82図4 | ガラス質黒色安山岩 | (4.97) | 1.81 | 0.8 | 5.5 | 先端部欠 | 静岡県埋文2008d |
| 塚松遺跡 | 裾野市北野富窪 | 第87図5 | ガラス質黒色安山岩 | (6.2) | 1.6 | 0.4 | 4.52 | 先端部・基部欠 | 静岡県埋文2008e |
| 塚松遺跡 | 裾野市北野富窪 | 第87図6 | 珪質頁岩 | (4.4) | 1.1 | 0.4 | 2.29 | 先端部欠 | 静岡県埋文2008e |
| 塚松遺跡 | 裾野市北野富窪 | 第87図7 | ガラス質黒色安山岩 | (3.2) | 1.7 | 0.6 | 2.85 | 先端部・基部欠 | 静岡県埋文2008e |
| 塚松遺跡 | 裾野市北野富窪 | 第87図8 | ガラス質黒色安山岩 | (3.7) | 1.6 | 0.7 | 2.86 | 先端部欠 | 静岡県埋文2008e |
| 塚松遺跡 | 裾野市北野富窪 | 第87図9 | ホルンフェルス | (7.9) | 2.0 | 0.6 | 10.29 | 先端部・基部欠 | 静岡県埋文2008e |
| 塚松遺跡 | 裾野市北野富窪 | 第87図10 | 輝石安山岩 | 5.5 | 0.6 | 1.5 | 4.65 | | 静岡県埋文2008e |
| 塚松遺跡 | 裾野市北野富窪 | 第87図11 | 細粒安山岩 | (5.1) | 2.0 | 0.7 | 6.37 | 先端部欠 | 静岡県埋文2008e |
| 塚松遺跡 | 裾野市北野富窪 | 第87図12 | ホルンフェルス | 5.5 | 1.6 | 0.6 | 5.14 | | 静岡県埋文2008e |
| 柳返遺跡 | 裾野市今里柳返 | 第72図1 | ホルンフェルス | 4.18 | 1.88 | 0.69 | 5.4 | | 静岡県埋文2008c |
| 尾畑遺跡 | 裾野市桃園尾畑 | 第5図1 | チャート | 6.1 | 2.3 | 0.5 | - | 実測図より計測 | 裾野市1992 |
| 細野沢遺跡 | 裾野市千福が丘 | 第5図2 | 頁岩 | 5.9 | 2.4 | 0.5 | - | 実測図より計測 | 裾野市1992 |
| 細尾遺跡 | 駿東郡長泉町上長窪東細尾 | 第143図361 | 輝石安山岩 | 5.74 | 1.76 | 0.62 | 5.04 | | 静岡県埋文2010a |
| 細尾遺跡 | 駿東郡長泉町上長窪東細尾 | 第143図362 | ガラス質黒色安山岩 | (6.53) | 1.72 | 0.52 | 5.84 | | 静岡県埋文2010a |
| 細尾遺跡 | 駿東郡長泉町上長窪東細尾 | 第143図363 | ホルンフェルス | 6.61 | 1.12 | 0.42 | 3.22 | | 静岡県埋文2010a |
| 細尾遺跡 | 駿東郡長泉町上長窪東細尾 | 第143図364 | ホルンフェルス | (2.31) | 1.98 | 0.62 | 3.78 | | 静岡県埋文2010a |
| 細尾遺跡 | 駿東郡長泉町上長窪東細尾 | 第143図365 | 細粒安山岩 | (5.00) | 1.89 | 0.74 | 6.74 | | 静岡県埋文2010a |
| 細尾遺跡 | 駿東郡長泉町上長窪東細尾 | 第143図366 | ホルンフェルス | (4.29) | 1.08 | 0.32 | 1.96 | | 静岡県埋文2010a |
| 細尾遺跡 | 駿東郡長泉町上長窪東細尾 | 第143図367 | ガラス質黒色安山岩 | (4.12) | 1.48 | 0.71 | 4.49 | | 静岡県埋文2010a |
| 細尾遺跡 | 駿東郡長泉町上長窪東細尾 | 第143図368 | ホルンフェルス | 4.79 | 1.51 | 0.52 | 4.16 | | 静岡県埋文2010a |
| 細尾遺跡 | 駿東郡長泉町上長窪東細尾 | 第143図369 | ホルンフェルス | (3.70) | 1.46 | 0.74 | 3.55 | | 静岡県埋文2010a |
| 池田B遺跡 | 駿東郡長泉町鉄平 | 第86図12 | 黒曜石 | 2.96 | 1.91 | 0.45 | 1.6 | | 静岡県埋文2000b |
| 池田B遺跡 | 駿東郡長泉町鉄平 | 第86図13 | ガラス質黒色安山岩 | (2.72) | 1.81 | 0.42 | 1.4 | | 静岡県埋文2000b |
| 池田B遺跡 | 駿東郡長泉町鉄平 | 第86図14 | 黒曜石 | 3.62 | 1.90 | 0.53 | 2.3 | | 静岡県埋文2000b |
| 池田B遺跡 | 駿東郡長泉町鉄平 | 第86図15 | ホルンフェルス | 4.20 | 1.45 | 0.63 | 2.9 | | 静岡県埋文2000b |
| 池田B遺跡 | 駿東郡長泉町鉄平 | 第86図16 | ガラス質黒色安山岩 | (4.16) | 1.67 | 0.67 | 3.7 | | 静岡県埋文2000b |
| 池田B遺跡 | 駿東郡長泉町鉄平 | 第86図17 | ガラス質黒色安山岩 | (4.04) | 2.13 | 0.58 | 3.8 | | 静岡県埋文2000b |
| 池田B遺跡 | 駿東郡長泉町鉄平 | 第87図18 | ホルンフェルス | (3.84) | 1.56 | 0.55 | 3.1 | | 静岡県埋文2000b |
| 池田B遺跡 | 駿東郡長泉町鉄平 | 第87図19 | ガラス質黒色安山岩 | (3.34) | 1.14 | 0.41 | 2.2 | | 静岡県埋文2000b |
| 池田B遺跡 | 駿東郡長泉町鉄平 | 第87図20 | ガラス質黒色安山岩 | (3.40) | 1.09 | 0.41 | 1.8 | | 静岡県埋文2000b |
| 池田B遺跡 | 駿東郡長泉町鉄平 | 第87図21 | ホルンフェルス | (5.63) | 1.46 | 0.60 | 7.0 | | 静岡県埋文2000b |
| 池田B遺跡 | 駿東郡長泉町鉄平 | 第87図22 | ホルンフェルス | (3.25) | 1.00 | 0.55 | 1.9 | | 静岡県埋文2000b |

第2-3表 静岡県の有茎尖頭器集成

| 遺 跡 名 | 所 在 | 遺物番号 | 石 材 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重さ | 備 考 | 文 献 |
|----------|--------------|----------|-----------|--------|--------|------|-------|----------------------|------------|
| 池田B遺跡 | 駿東郡長泉町鉄平 | 第87図23 | ホルンフェルス | (3.72) | 1.62 | 0.52 | 3.6 | | 静岡県埋文2000b |
| 池田B遺跡 | 駿東郡長泉町鉄平 | 第87図24 | ホルンフェルス | 6.68 | 1.74 | 0.51 | 5.8 | | 静岡県埋文2000b |
| 池田B遺跡 | 駿東郡長泉町鉄平 | 第87図25 | ホルンフェルス | (7.47) | 1.55 | 0.83 | 10.9 | | 静岡県埋文2000b |
| 池田B遺跡 | 駿東郡長泉町鉄平 | 第87図26 | ホルンフェルス | (3.39) | 1.30 | 0.62 | 3.9 | | 静岡県埋文2000b |
| 追平B遺跡 | 駿東郡長泉町東野八分平 | 第82図1 | 安山岩 | 6.9 | 2.0 | 0.7 | 9.01 | 実測図より計測 | 長泉町教委2006 |
| 追平B遺跡 | 駿東郡長泉町東野八分平 | 第82図2 | 安山岩 | (5.3) | 1.7 | 0.4 | 3.71 | 実測図より計測 | 長泉町教委2006 |
| 追平B遺跡 | 駿東郡長泉町東野八分平 | 第82図3 | 安山岩 | 3.4 | 1.7 | 0.5 | 2.11 | 実測図より計測 | 長泉町教委2006 |
| 追平B遺跡 | 駿東郡長泉町東野八分平 | 第82図4 | ホルンフェルス | 8.3 | 1.4 | 0.7 | 6.48 | 実測図より計測、尖頭器として報告、基部欠 | 長泉町教委2006 |
| 追平B遺跡 | 駿東郡長泉町東野八分平 | 図なし | ホルンフェルス | — | — | — | 5.98 | 遺物番号407 | 長泉町教委2006 |
| 平畦遺跡A地点 | 駿東郡長泉町下長窪平畦 | 第13図11 | 頁岩 | 4.80 | 1.30 | 0.70 | 3.54 | | 長泉町教委1994 |
| 平畦遺跡A地点 | 駿東郡長泉町下長窪 | 第13図12 | 頁岩 | (9.40) | 1.80 | 0.70 | 10.49 | 基部欠 | 長泉町教委1994 |
| 平畦遺跡B地点 | 駿東郡長泉町下長窪 | 第41図10 | 頁岩 | (3.50) | 1.30 | 0.50 | 2.91 | | 長泉町教委1994 |
| 平畦遺跡B地点 | 駿東郡長泉町下長窪 | 第41図11 | 安山岩 | 4.40 | 1.80 | 0.60 | 4.51 | | 長泉町教委1994 |
| 茶木畑遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪 | 第15図8 | 玄武岩 | (3.4) | 1.5 | 0.6 | 3.7 | | 静岡県埋文1985 |
| 茶木畑遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪 | 第15図9 | 頁岩 | (4.4) | 1.6 | 0.4 | 6.9 | | 静岡県埋文1985 |
| 茶木畑遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪 | 第15図10 | 玄武岩 | 7.5 | 1.8 | 0.7 | 3.2 | | 静岡県埋文1985 |
| 茶木畑遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪 | 第15図11 | 珪質頁岩 | 5.8 | 1.9 | 0.4 | 6.9 | | 静岡県埋文1985 |
| 茶木畑遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪 | 第15図12 | 玄武岩 | 6.0 | 1.4 | 0.5 | 7.9 | | 静岡県埋文1985 |
| 茶木畑遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪 | 第15図13 | 玄武岩 | (6.1) | 1.5 | 0.6 | 4.2 | | 静岡県埋文1985 |
| 茶木畑遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪 | 第15図14 | 玄武岩 | (4.7) | 1.5 | 0.6 | 0.6 | | 静岡県埋文1985 |
| 陣場上 | 駿東郡長泉町下長窪陣場 | 第26図4 | 頁岩 | 5.7 | 1.3 | 0.5 | 3.4 | | 長泉町教委1976 |
| 陣場上 | 駿東郡長泉町下長窪陣場 | 第26図5 | 安山岩系 | (4.8) | 1.1 | 0.7 | 4.40 | | 長泉町教委1976 |
| 陣場上B遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪陣場 | 第162図48 | 頁岩 | 9.60 | 1.40 | 0.60 | 7.93 | | 長泉町教委1994 |
| 陣場上B遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪陣場 | 第162図49 | 頁岩 | 7.25 | 1.85 | 0.75 | 9.93 | | 長泉町教委1994 |
| 陣場上B遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪陣場 | 第162図50 | 頁岩 | (4.10) | 1.60 | 0.45 | 3.63 | | 長泉町教委1994 |
| 陣場上B遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪陣場 | 第162図51 | 細粒凝灰岩 | 3.50 | 1.00 | 0.30 | 1.27 | | 長泉町教委1994 |
| 鉄平遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪鉄平 | 第39図84 | ガラス質黒色安山岩 | 3.51 | 1.82 | 0.61 | 2.9 | | 静岡県埋文2003a |
| 鉄平遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪鉄平 | 第39図85 | ガラス質黒色安山岩 | 3.75 | 2.00 | 0.60 | 2.5 | | 静岡県埋文2003a |
| 鉄平遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪鉄平 | 第40図86 | ホルンフェルス | (7.84) | 1.40 | 0.62 | 8.1 | | 静岡県埋文2003a |
| 鉄平遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪鉄平 | 第40図87 | ホルンフェルス | (5.00) | 1.75 | 0.75 | 6.9 | | 静岡県埋文2003a |
| 鉄平遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪鉄平 | 第40図88 | ホルンフェルス | (6.46) | 1.89 | 0.74 | 8.6 | | 静岡県埋文2003a |
| 鉄平遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪鉄平 | 第40図89 | ホルンフェルス | (5.74) | 1.65 | 0.71 | 7.5 | | 静岡県埋文2003a |
| 鉄平遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪鉄平 | 第40図90 | ホルンフェルス | 4.94 | 1.12 | 0.62 | 3.3 | | 静岡県埋文2003a |
| 鉄平遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪鉄平 | 第40図91 | ホルンフェルス | 4.12 | 1.35 | 0.62 | 2.9 | | 静岡県埋文2003a |
| 鉄平遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪鉄平 | 第40図92 | ホルンフェルス | (4.38) | 1.11 | 0.54 | 3.1 | | 静岡県埋文2003a |
| 鉄平遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪鉄平 | 第40図93 | ホルンフェルス | (6.42) | 1.73 | 0.48 | 3.3 | | 静岡県埋文2003a |
| 鉄平遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪鉄平 | 第40図94 | ホルンフェルス | (6.53) | 1.68 | 0.48 | 5.6 | | 静岡県埋文2003a |
| 鉄平遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪鉄平 | 第40図95 | ホルンフェルス | (5.45) | 1.40 | 0.68 | 5.8 | | 静岡県埋文2003a |
| 鉄平遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪鉄平 | 第40図96 | ホルンフェルス | (4.18) | 1.58 | 0.58 | 4.2 | | 静岡県埋文2003a |
| 鉄平遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪鉄平 | 第40図97 | ホルンフェルス | (2.35) | (1.20) | 0.38 | 0.9 | 基部欠 | 静岡県埋文2003a |
| 鉄平遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪鉄平 | 第40図98 | ガラス質黒色安山岩 | (3.40) | 1.80 | 0.60 | 3.3 | | 静岡県埋文2003a |
| 鉄平遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪鉄平 | 第40図99 | ガラス質黒色安山岩 | (3.40) | 2.00 | 0.65 | 3.8 | | 静岡県埋文2003a |
| 鉄平遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪鉄平 | 第40図100 | ホルンフェルス | (3.14) | 1.64 | 0.45 | 2.9 | | 静岡県埋文2003a |
| 中見代遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第25図81 | 細粒凝灰岩 | 6.10 | 1.90 | 0.55 | 5.68 | | 長泉町教委2001 |
| 中見代遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第65図75 | 安山岩 | (7.70) | 2.30 | 0.75 | 12.72 | | 長泉町教委2001 |
| 中見代遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第65図76 | 安山岩 | (2.60) | 1.05 | 3.05 | 1.05 | | 長泉町教委2001 |
| 中見代遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第65図77 | 安山岩 | (6.30) | 1.50 | 0.70 | 6.12 | | 長泉町教委2001 |
| 中見代遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第65図78 | 頁岩 | (4.80) | 1.50 | 0.70 | 5.00 | | 長泉町教委2001 |
| 中見代遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第65図79 | 頁岩 | (5.10) | 1.40 | 0.70 | 5.03 | | 長泉町教委2001 |
| 中見代遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第65図80 | 頁岩 | (4.00) | 1.50 | 0.50 | 2.87 | | 長泉町教委2001 |
| 中見代遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第65図81 | 安山岩 | (6.70) | 2.10 | 0.50 | 6.37 | | 長泉町教委2001 |
| 中見代遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第65図82 | 頁岩 | (8.00) | 1.80 | 0.55 | 9.03 | | 長泉町教委2001 |
| 中見代遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第65図83 | 頁岩 | (5.70) | 1.90 | 0.80 | 6.63 | | 長泉町教委2001 |
| 中見代遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第65図84 | 頁岩 | (4.10) | 1.15 | 0.30 | 1.79 | | 長泉町教委2001 |
| 中見代遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第65図85 | 頁岩 | (4.00) | 1.40 | 0.40 | 2.75 | | 長泉町教委2001 |
| 中見代遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第65図86 | 頁岩 | (4.00) | 1.40 | 0.50 | 3.23 | | 長泉町教委2001 |
| 中見代遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第65図87 | 頁岩 | (3.50) | 1.30 | 0.50 | 3.33 | | 長泉町教委2001 |
| 中見代遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第65図88 | 頁岩 | (2.40) | 1.20 | 0.50 | 1.75 | | 長泉町教委2001 |
| 中見代遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第65図89 | 黒曜石 | (2.95) | 1.20 | 0.40 | 1.16 | | 長泉町教委2001 |
| 中見代遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第65図90 | 安山岩 | (4.15) | (1.75) | 4.50 | 3.91 | | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第126図285 | 頁岩 | 5.40 | 2.00 | 0.50 | 6.20 | | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第178図148 | 安山岩 | (3.90) | 1.90 | 0.68 | 4.81 | | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第178図149 | 安山岩 | (6.50) | 2.30 | 0.67 | 7.63 | | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第179図150 | 安山岩 | (8.40) | 2.00 | 0.66 | 11.76 | | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第179図151 | 安山岩 | (5.50) | 1.70 | 0.56 | 6.60 | | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第179図152 | その他 | (5.70) | 1.70 | 0.25 | 5.59 | | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第179図153 | 頁岩 | (4.50) | 1.30 | 0.44 | 4.06 | | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第179図154 | 安山岩 | (5.00) | 1.70 | 0.65 | 5.86 | | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第179図155 | 頁岩 | 6.60 | 1.85 | 0.80 | 9.48 | | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第179図156 | 頁岩 | 5.00 | 1.40 | 0.70 | 4.64 | | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第179図157 | 頁岩 | (3.20) | 1.20 | 0.39 | 1.58 | | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第179図158 | 頁岩 | (4.90) | 1.80 | 0.55 | 5.38 | | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第179図159 | 安山岩 | (4.40) | 2.10 | 0.43 | 5.16 | | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第179図160 | 安山岩 | (5.50) | 2.00 | 0.45 | 6.68 | | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第179図161 | 頁岩 | (3.00) | 1.80 | 0.55 | 4.21 | | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第180図162 | 安山岩 | 5.30 | 1.20 | 0.50 | 3.89 | | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第180図163 | 頁岩 | (3.50) | 1.30 | 0.41 | 2.69 | | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第180図164 | 頁岩 | (3.60) | 1.40 | 0.55 | 3.83 | | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第180図165 | 頁岩 | (5.20) | 1.50 | 0.70 | 7.48 | | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第180図166 | 頁岩 | (4.60) | 1.20 | 0.70 | 4.24 | | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第180図167 | 頁岩 | (4.20) | 1.30 | 0.63 | 4.44 | | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第180図168 | 頁岩 | (4.00) | (1.00) | 0.30 | 1.70 | | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第180図169 | 頁岩 | (3.40) | (1.60) | 0.44 | 2.99 | | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第180図170 | 安山岩 | (3.30) | (1.40) | 0.47 | 2.42 | | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第180図171 | 頁岩 | 5.80 | 1.30 | 0.65 | 6.37 | | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第180図172 | 頁岩 | (4.35) | 1.70 | 0.70 | 6.60 | 基部欠 | 長泉町教委2001 |

第2-4表 静岡県の有茎尖頭器集成

| 遺跡名 | 所在 | 遺物番号 | 石 材 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重さ | 備 考 | 文 献 |
|-------------|--------------|-----------|-------------|--------|--------|------|-------|--------------|------------|
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第180図173 | 黒曜石 | (3.30) | 1.40 | 0.64 | 3.48 | 無茎 | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第180図174 | 黒曜石 | (3.55) | 1.30 | 0.43 | 2.08 | 基部三角形 | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第180図175 | その他 | (3.65) | 1.40 | 0.35 | 2.04 | 無茎 | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第180図176 | 安山岩 | 10.60 | 3.50 | 1.40 | 42.97 | 無茎 | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第180図177 | 黒曜石 | 10.80 | 2.50 | 1.10 | 29.61 | 無茎 | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第180図178 | 黒曜石 | (2.20) | (1.40) | 0.49 | 1.44 | 無茎 | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第180図179 | 黒曜石 | (2.70) | (1.90) | 0.67 | 3.46 | 無茎 | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第180図180 | 黒曜石 | (3.10) | 2.00 | 0.50 | 3.00 | 無茎 | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第180図181 | 黒曜石 | (2.60) | (1.40) | 0.62 | 2.84 | 無茎 | 長泉町教委2001 |
| 東野II橋下遺跡 | 駿東郡長泉町下長窪八分平 | 第180図182 | 頁岩 | (8.00) | (5.10) | 1.40 | 8.39 | 無茎 | 長泉町教委2001 |
| 西山遺跡 | 駿東郡長泉町元長窪内出 | 第50図1 | ホルンフェルス | (3.2) | 2.2 | 0.5 | 4.1 | | 勸県埋文2006 |
| 西山遺跡 | 駿東郡長泉町元長窪内出 | 第50図2 | ホルンフェルス | (4.9) | 1.5 | 0.6 | 5.6 | 風化、尖頭器として報告 | 勸県埋文2006 |
| 中尾遺跡 | 駿東郡長泉町元長窪中尾 | 8図31 | 頁岩 | (3.70) | 1.80 | 0.60 | 3.70 | | 長泉町教委1986 |
| 野台遺跡 | 駿東郡長泉町元長窪野台 | 103図88 | 頁岩 | (5.25) | 1.50 | 0.60 | 4.90 | | 長泉町教委1986 |
| 野台遺跡 | 駿東郡長泉町元長窪野台 | 103図89 | 頁岩 | (4.95) | 1.30 | 0.55 | 3.90 | | 長泉町教委1986 |
| 中峯遺跡 | 駿東郡長泉町元長窪中峯 | 第137図1 | 珪質頁岩(灰色) | (4.75) | 1.6 | 0.55 | 4.4 | | 勸県埋文2003b |
| 中峯遺跡 | 駿東郡長泉町元長窪中峯 | 第137図2 | ホルンフェルス | 4.2 | 1.4 | 0.55 | 2.7 | | 勸県埋文2003b |
| 中峯遺跡 | 駿東郡長泉町元長窪中峯 | 第137図3 | ホルンフェルス | (10.0) | 1.45 | 0.65 | 10.9 | | 勸県埋文2003b |
| 中峰遺跡(第2次調査) | 駿東郡長泉町上長窪 | 第57図19 | 安山岩 | 5.3 | 1.4 | 0.5 | — | 表探 | 駿河考古学会1971 |
| 中峰遺跡(第2次調査) | 駿東郡長泉町上長窪 | 第57図20 | 黒曜石 | 5.4 | 1.5 | 0.3 | — | 表探 | 駿河考古学会1971 |
| 桜畑上遺跡(第二東名) | 駿東郡長泉町上長窪上野 | 第98図9 | ガラス質黒色安山岩 | 3.66 | 1.47 | 0.42 | 1.0 | | 勸県埋文2009c |
| 桜畑上遺跡(第二東名) | 駿東郡長泉町上長窪上野 | 第98図10 | ガラス質黒色安山岩 | (2.91) | 1.98 | 0.50 | 1.8 | | 勸県埋文2009c |
| 桜畑上遺跡(第二東名) | 駿東郡長泉町上長窪上野 | 第98図11 | ガラス質黒色安山岩 | (2.53) | 1.43 | 0.35 | 0.7 | | 勸県埋文2009c |
| 桜畑上遺跡(第二東名) | 駿東郡長泉町上長窪上野 | 第98図12 | 黒曜石(神津島恩馳島) | 3.21 | (1.70) | 0.51 | 1.8 | | 勸県埋文2009c |
| 桜畑上遺跡(第二東名) | 駿東郡長泉町上長窪上野 | 第98図13 | 珪礬 | (5.41) | 1.99 | 0.53 | 4.5 | | 勸県埋文2009c |
| 桜畑上遺跡(第二東名) | 駿東郡長泉町上長窪上野 | 第98図14 | ホルンフェルス | (5.65) | 1.53 | 0.50 | 3.5 | | 勸県埋文2009c |
| 桜畑上遺跡(第二東名) | 駿東郡長泉町上長窪上野 | 第98図15 | ホルンフェルス | (5.82) | 1.41 | 0.57 | 4.2 | | 勸県埋文2009c |
| 桜畑上遺跡(第二東名) | 駿東郡長泉町上長窪上野 | 第98図16 | ホルンフェルス | (4.35) | 1.72 | 0.68 | 6.9 | | 勸県埋文2009c |
| 桜畑上遺跡(第二東名) | 駿東郡長泉町上長窪上野 | 第98図17 | 珪質頁岩 | (3.85) | 1.61 | 0.47 | 3.5 | | 勸県埋文2009c |
| 桜畑上遺跡(第二東名) | 駿東郡長泉町上長窪上野 | 第98図18 | 珪質頁岩(黒色) | (3.69) | 1.21 | 0.45 | 1.6 | | 勸県埋文2009c |
| 桜畑上遺跡(第二東名) | 駿東郡長泉町上長窪上野 | 第98図19 | 珪質頁岩(暗灰色) | (2.12) | 1.00 | 0.31 | 0.6 | 基部欠 | 勸県埋文2009c |
| 桜畑上遺跡(第二東名) | 駿東郡長泉町上長窪上野 | 第98図20 | ガラス質黒色安山岩 | (2.50) | 1.11 | 0.50 | 1.0 | 尖頭器として報告、基部欠 | 勸県埋文2009c |
| 桜畑上遺跡(第二東名) | 駿東郡長泉町上長窪上野 | 第98図21 | ホルンフェルス | (3.31) | 1.29 | 0.45 | 1.6 | 基部欠 | 勸県埋文2009c |
| 桜畑上遺跡(東駿河湾) | 駿東郡長泉町上長窪上野 | 第148図344 | ガラス質黒色安山岩 | 5.01 | 2.14 | 0.62 | 5.0 | | 勸県埋文2010c |
| 桜畑上遺跡(東駿河湾) | 駿東郡長泉町上長窪上野 | 第148図345 | ガラス質黒色安山岩 | (5.35) | 2.18 | 0.89 | 7.5 | | 勸県埋文2010c |
| 桜畑上遺跡(東駿河湾) | 駿東郡長泉町上長窪上野 | 第148図346 | ガラス質黒色安山岩 | 4.89 | 1.59 | 0.59 | 4.3 | | 勸県埋文2010c |
| 桜畑上遺跡(東駿河湾) | 駿東郡長泉町上長窪上野 | 第148図347 | ガラス質黒色安山岩 | 5.29 | 1.88 | 0.61 | 4.3 | | 勸県埋文2010c |
| 桜畑上遺跡(東駿河湾) | 駿東郡長泉町上長窪上野 | 第148図348 | ガラス質黒色安山岩 | (4.54) | 1.59 | 0.50 | 2.4 | | 勸県埋文2010c |
| 桜畑上遺跡(東駿河湾) | 駿東郡長泉町上長窪上野 | 第148図349 | ガラス質黒色安山岩 | (3.61) | 1.29 | 0.43 | 1.9 | | 勸県埋文2010c |
| 桜畑上遺跡(東駿河湾) | 駿東郡長泉町上長窪上野 | 第148図350 | ガラス質黒色安山岩 | 3.58 | 1.42 | 0.38 | 1.6 | | 勸県埋文2010c |
| 桜畑上遺跡(東駿河湾) | 駿東郡長泉町上長窪上野 | 第148図351 | ガラス質黒色安山岩 | (1.71) | (1.12) | 0.30 | 0.4 | | 勸県埋文2010c |
| 桜畑上遺跡(東駿河湾) | 駿東郡長泉町上長窪上野 | 第148図352 | ガラス質黒色安山岩 | (2.52) | 1.04 | 0.40 | 0.7 | | 勸県埋文2010c |
| 桜畑上遺跡(東駿河湾) | 駿東郡長泉町上長窪上野 | 第148図353 | ガラス質黒色安山岩 | (2.44) | 1.56 | 0.34 | 0.9 | | 勸県埋文2010c |
| 桜畑上遺跡(東駿河湾) | 駿東郡長泉町上長窪上野 | 第148図354 | ホルンフェルス | 2.59 | 1.13 | 0.34 | 0.9 | | 勸県埋文2010c |
| 桜畑上遺跡(東駿河湾) | 駿東郡長泉町上長窪上野 | 第148図355 | ホルンフェルス | (3.32) | (0.81) | 0.24 | 0.9 | | 勸県埋文2010c |
| 桜畑上遺跡(東駿河湾) | 駿東郡長泉町上長窪上野 | 第148図356 | ホルンフェルス | (4.23) | 0.99 | 0.64 | 2.8 | | 勸県埋文2010c |
| 桜畑上遺跡(東駿河湾) | 駿東郡長泉町上長窪上野 | 第148図357 | ガラス質黒色安山岩 | (2.02) | 1.33 | 0.41 | 1.9 | | 勸県埋文2010c |
| 桜畑上遺跡(東駿河湾) | 駿東郡長泉町上長窪上野 | 第149図358 | ガラス質黒色安山岩 | (5.71) | 1.26 | 0.42 | 3.5 | | 勸県埋文2010c |
| 桜畑上遺跡(東駿河湾) | 駿東郡長泉町上長窪上野 | 第149図359 | ガラス質黒色安山岩 | (2.71) | 1.51 | 0.48 | 2.2 | | 勸県埋文2010c |
| 桜畑上遺跡(東駿河湾) | 駿東郡長泉町上長窪上野 | 第149図360 | 黒曜石(天城柏峠) | (1.64) | (1.66) | 0.35 | 0.3 | | 勸県埋文2010c |
| 桜畑上遺跡(東駿河湾) | 駿東郡長泉町上長窪上野 | 第149図361 | 頁岩 | (4.37) | 1.69 | 0.53 | 3.9 | | 勸県埋文2010c |
| 桜畑上遺跡(東駿河湾) | 駿東郡長泉町上長窪上野 | 第149図362 | ホルンフェルス | (4.74) | 1.47 | 0.56 | 4.3 | | 勸県埋文2010c |
| 桜畑上遺跡(東駿河湾) | 駿東郡長泉町上長窪上野 | 第149図363 | ホルンフェルス | (3.07) | 1.20 | 0.55 | 2.1 | | 勸県埋文2010c |
| 向田A遺跡 | 駿東郡長泉町上長窪西細尾 | 第29図1 | 硬質頁岩 | (4.31) | 1.84 | 0.41 | 3.3 | 基部欠 | 勸県埋文2007b |
| 向田A遺跡 | 駿東郡長泉町上長窪西細尾 | 第29図2 | ガラス質黒色安山岩 | 5.25 | 1.46 | 0.31 | 2.9 | | 勸県埋文2007b |
| 向田A遺跡 | 駿東郡長泉町上長窪西細尾 | 図なし | ホルンフェルス | 3.71 | 1.66 | 0.38 | 2.1 | 表探、遺物番号7791 | 勸県埋文2007b |
| 富士石遺跡 | 駿東郡長泉町東野 | 第27図2 | 珪質安山岩 | (5.0) | 1.9 | 0.8 | — | 厚さは実測図から計測 | 長泉町教委1981 |
| 富士石遺跡 | 駿東郡長泉町東野 | 第27図3 | 頁岩 | (5.4) | 1.4 | 0.5 | — | 厚さは実測図から計測 | 長泉町教委1981 |
| 富士石遺跡 | 駿東郡長泉町東野 | 第80図4 | — | (5.2) | 1.6 | 0.6 | — | 実測図より計測 | 秋本1976 |
| 梅ノ木沢遺跡 | 駿東郡長泉町東野 | 第184図1013 | 黒曜石(箱根黒岩橋) | 6.53 | 1.80 | 0.71 | 7.12 | | 勸県埋文2007g |
| 梅ノ木沢遺跡 | 駿東郡長泉町東野 | 第184図1015 | 輝石安山岩 | (4.88) | 1.72 | 0.78 | 6.99 | | 勸県埋文2007g |
| 梅ノ木沢遺跡 | 駿東郡長泉町東野 | 第184図1016 | ホルンフェルス | (5.12) | 1.45 | 0.69 | 4.33 | | 勸県埋文2007g |
| 梅ノ木沢遺跡 | 駿東郡長泉町東野 | 第184図1017 | ガラス質黒色安山岩 | (2.59) | 1.08 | 0.38 | 0.97 | | 勸県埋文2007g |
| 梅ノ木沢遺跡 | 駿東郡長泉町東野 | 第184図1018 | ガラス質黒色安山岩 | 2.41 | 1.22 | 0.22 | 0.50 | | 勸県埋文2007g |
| 梅ノ木沢遺跡 | 駿東郡長泉町東野 | 第184図1019 | ホルンフェルス | (2.54) | 1.70 | 0.76 | 4.05 | | 勸県埋文2007g |
| 上山地遺跡 | 駿東郡長泉町南一色 | 図なし | 玄武岩 | — | — | — | — | 写真右端 | 長泉町1971 |
| 上山地遺跡 | 駿東郡長泉町南一色 | 図なし | 玄武岩 | 5.4 | — | — | — | 写真右から2番目 | 長泉町1971 |
| 上山地遺跡 | 駿東郡長泉町南一色 | 図なし | 粘板岩 | 3.9 | — | — | — | 写真右から3番目 | 長泉町1971 |
| 上山地遺跡 | 駿東郡長泉町南一色 | 146図40 | 頁岩 | 4.8 | 1.7 | 0.7 | — | | 長泉町教委1990 |
| 長井崎遺跡 | 沼津市内浦長井崎 | Fig-24-8 | 珪質安山岩 | (5.6) | 1.5 | 2.5 | — | 厚さは実測図から計測 | 沼津市教委1980 |
| 西大曲遺跡 | 沼津市宮本元野 | 図37 | ホルンフェルス | — | — | — | — | 写真のみ | 沼津市教委1980 |
| 大谷津遺跡 | 沼津市阿一色大谷津 | 第41図6 | 頁岩 | (3.39) | 1.81 | 0.74 | 3.41 | | 沼津市教委1994 |
| 大谷津遺跡 | 沼津市阿一色大谷津 | 第41図8 | 黒色安山岩 | (4.02) | 1.57 | 0.57 | 2.8 | | 沼津市教委1994 |
| 鳥谷アラク遺跡 | 沼津市東原大アラク | 第17図39 | 頁岩 | (4.75) | (1.45) | 0.54 | 3.70 | | 沼津市教委2000 |
| 上松沢平遺跡 | 沼津市岡宮 | 第116図422 | ガラス質黒色安山岩 | 4.91 | 1.71 | 0.65 | 4.3 | | 勸県埋文2004 |
| 上松沢平遺跡 | 沼津市岡宮 | 第116図423 | ガラス質黒色安山岩 | (3.32) | 1.22 | 0.61 | 2.1 | 基部欠 | 勸県埋文2004 |
| 上松沢平遺跡 | 沼津市岡宮 | 第116図424 | ガラス質黒色安山岩 | (3.16) | 1.55 | 0.54 | 3.2 | 基部欠 | 勸県埋文2004 |
| 清水柳北遺跡中央尾根 | 沼津市足高尾上 | 第778図88 | 安山岩 | (4.1) | 1.3 | 0.7 | 3.0 | 基部欠 | 沼津市教委1990a |
| 清水柳北遺跡中央尾根 | 沼津市足高尾上 | 第779図89 | 頁岩 | (5.3) | 1.5 | 0.6 | 4.9 | | 沼津市教委1990a |
| 清水柳北遺跡中央尾根 | 沼津市足高尾上 | 第779図90 | 頁岩 | (6.7) | 1.4 | 0.8 | 9.4 | | 沼津市教委1990a |
| 清水柳北遺跡東尾根 | 沼津市足高尾上 | 第449図20 | 頁岩 | 6.5 | 1.8 | 0.6 | 7.2 | | 沼津市教委1990a |
| 清水柳北遺跡東尾根 | 沼津市足高尾上 | 第449図21 | 頁岩 | 5.1 | 1.9 | 0.7 | 5.4 | | 沼津市教委1990a |
| 清水柳北遺跡東尾根 | 沼津市足高尾上 | 第449図22 | 頁岩 | (4.6) | 1.3 | 0.7 | 4.4 | | 沼津市教委1990a |
| 清水柳北遺跡東尾根 | 沼津市足高尾上 | 第449図23 | 頁岩 | (2.3) | 1.4 | 0.7 | 5.6 | 基部欠 | 沼津市教委1990a |
| 清水柳北遺跡東尾根 | 沼津市足高尾上 | 第449図24 | 黒曜石 | (1.4) | 1.5 | 0.7 | 1.1 | | 沼津市教委1990a |
| 清水柳北遺跡東尾根 | 沼津市足高尾上 | 第449図25 | チャート | 2.3 | 1.9 | 0.4 | 1.0 | | 沼津市教委1990a |
| 清水柳北遺跡東尾根 | 沼津市足高尾上 | 第449図26 | 黒曜石 | 3.2 | 2.0 | 0.6 | 3.5 | | 沼津市教委1990a |

第 2 - 5 表 静岡県の有茎尖頭器集成

| 遺 跡 名 | 所 在 | 遺物番号 | 石 材 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重さ | 備 考 | 文 献 |
|------------|-------------|--------------|-------------|--------|--------|-------|------|-------------------|------------|
| 清水柳北遺跡東尾根 | 沼津市足高尾上 | 第449図27 | 頁岩 | 4.3 | 1.6 | 0.6 | 3.0 | | 沼津市教委1990a |
| 清水柳北遺跡東尾根 | 沼津市足高尾上 | 第449図28 | 黒曜石 | 2.8 | 1.6 | 0.7 | 2.3 | | 沼津市教委1990a |
| 清水柳北遺跡東尾根 | 沼津市足高尾上 | 第449図29 | 黒曜石 | 3.4 | 2.0 | 0.6 | 3.2 | | 沼津市教委1990a |
| 尾上イラウネ北遺跡 | 沼津市足高尾上 | 第220図379 | 安山岩 | (2.8) | 0.8 | 0.3 | 0.7 | 基部欠 | 沼津市教委1992 |
| 尾上イラウネ北遺跡 | 沼津市足高尾上 | 第221図381 | 油脂頁岩 | 6.9 | 1.6 | 0.5 | 4.9 | | 沼津市教委1992 |
| 尾上イラウネ北遺跡 | 沼津市足高尾上 | 第221図382 | 油脂頁岩 | 7.8 | 1.3 | 0.6 | 7.7 | | 沼津市教委1992 |
| 尾上イラウネ北遺跡 | 沼津市足高尾上 | 第221図383 | チャート | (2.4) | 1.7 | 0.4 | 1.9 | | 沼津市教委1992 |
| イタドリA遺跡 | 沼津市足高尾上 | 第48図 5 | ホルンフェルス | 3.196 | 1.508 | 0.488 | 2.28 | 基部欠 | 静岡県埋文2009e |
| イタドリA遺跡 | 沼津市足高尾上 | 第48図 6 | ホルンフェルス | 3.176 | 1.655 | 0.533 | 3.32 | | 静岡県埋文2009e |
| 植出遺跡 | 沼津市足高尾上 | 第83図 1 | 粘板岩? | (7.0) | 1.4 | 0.7 | 7.6 | | 沼津市教委2005 |
| 植出遺跡 | 沼津市足高尾上 | 第83図 2 | 頁岩 | (6.7) | 1.3 | 0.7 | 5.8 | | 沼津市教委2005 |
| 植出遺跡 | 沼津市足高尾上 | 第 4 図 4 | 頁岩 | (5.40) | 1.20 | 0.40 | 2.40 | | 静岡県埋文1997b |
| 植出遺跡 | 沼津市足高尾上 | 第 4 図 5 | ガラス質黒色安山岩 | (7.90) | 2.00 | 0.80 | 9.60 | | 静岡県埋文1997b |
| 清水柳遺跡 | 沼津市足高尾上 | 図-26・4 | チャート | (7.0) | 1.7 | 0.7 | - | | 笹津他1976 |
| 清水柳遺跡 | 沼津市足高尾上 | 図-26・7 | 珪質頁岩 | (6.5) | 1.3 | 0.5 | - | 基部欠 | 笹津他1976 |
| 丸尾北遺跡 | 沼津市足高 | 第114図 1 | 黒曜石(神津島恩馳島) | 5.35 | 1.28 | 0.59 | 3.2 | | 静岡県埋文2009d |
| 丸尾北遺跡 | 沼津市足高 | 第114図 2 | ホルンフェルス | 6.24 | 1.59 | 0.56 | 4.2 | | 静岡県埋文2009d |
| 丸尾北遺跡 | 沼津市足高 | 第114図 3 | ホルンフェルス | (3.38) | 1.55 | 0.46 | 3.0 | | 静岡県埋文2009d |
| 丸尾北遺跡 | 沼津市足高 | 第114図 4 | ホルンフェルス | (2.42) | 1.28 | 0.43 | 1.8 | | 静岡県埋文2009d |
| 丸尾北遺跡 | 沼津市足高 | 第114図 5 | ホルンフェルス | (2.75) | 0.95 | 0.65 | 1.3 | | 静岡県埋文2009d |
| 丸尾北遺跡 | 沼津市足高 | 第114図 6 | 黒曜石(深浦八森山) | (3.72) | 2.04 | 0.61 | 4.3 | 尖頭器として報告、基部欠 | 静岡県埋文2009d |
| 丸尾北遺跡 | 沼津市足高 | 第114図 7 | 珪質頁岩 | (2.11) | (1.49) | 0.47 | 1.5 | 尖頭器として報告、基部欠 | 静岡県埋文2009d |
| 子ノ神遺跡 | 沼津市大岡北小林子ノ神 | 第44図 1 | 安山岩 | 7.9 | 2.0 | 0.7 | 8.2 | | 沼津市教委1982 |
| 子ノ神遺跡 | 沼津市大岡北小林子ノ神 | 第44図 2 | 安山岩 | (5.5) | 1.5 | 0.6 | 3.8 | | 沼津市教委1982 |
| 子ノ神遺跡 | 沼津市大岡北小林子ノ神 | 第44図 4 | 頁岩 | 4.5 | 1.1 | 0.5 | 2.1 | | 沼津市教委1982 |
| 柏葉尾遺跡 | 沼津市大岡柏葉尾 | 第31図14 | ホルンフェルス | (4.0) | 1.5 | 0.4 | 2.2 | 長さは実測図から計測 | 沼津市教委1996b |
| 中見代第Ⅱ遺跡 | 沼津市足高尾上 | 第42図 1 | 凝灰岩 | 6.4 | 2.1 | 0.8 | - | 実測より計測 | 沼津市教委1988 |
| 中見代第Ⅱ遺跡 | 沼津市足高尾上 | 第42図 2 | 頁岩 | (4.26) | 1.60 | 0.49 | 3.4 | | 沼津市教委1988 |
| 中見代第Ⅱ遺跡 | 沼津市足高尾上 | 第42図 3 | 頁岩 | (2.95) | 1.39 | 0.43 | 2.1 | | 沼津市教委1988 |
| 中見代第Ⅱ遺跡 | 沼津市足高尾上 | 第42図 4 | 硬質安山岩 | (5.32) | 1.48 | 0.37 | 3.2 | | 沼津市教委1988 |
| 中見代第Ⅱ遺跡 | 沼津市足高尾上 | 第42図 5 | 黒曜石 | (3.69) | 1.22 | 0.50 | 3.0 | | 沼津市教委1988 |
| 中見代第Ⅱ遺跡 | 沼津市足高尾上 | 第42図 6 | 黒曜石 | (1.08) | 0.64 | 0.26 | 0.1 | 「5の先端部と思われる」資料。 | 沼津市教委1988 |
| 中見代第Ⅲ遺跡 | 沼津市足高尾上 | 第135図 4 | 頁岩 | (5.89) | 1.36 | 0.40 | 4.1 | | 沼津市教委1988 |
| 広合遺跡a区 | 沼津市足高尾上 | 第99図14 | 黒曜石 | 4.0 | 1.7 | 0.7 | - | | 沼津市教委1987 |
| 広合遺跡a区 | 沼津市足高尾上 | 第100図22 | 珪質頁岩 | 4.62 | 1.89 | 0.65 | 4.7 | 計測表では石材は硬砂岩 | 沼津市教委1987 |
| 広合遺跡a区 | 沼津市足高尾上 | 第100図23 | 珪質頁岩 | 3.22 | 2.05 | 0.75 | 3.1 | | 沼津市教委1987 |
| 広合遺跡a区 | 沼津市足高尾上 | 第100図24 | 頁岩 | (3.76) | 2.35 | 0.48 | 4.5 | | 沼津市教委1987 |
| 広合遺跡b・c・d区 | 沼津市足高尾上 | 第31図42 | 黒曜石 | 3.2 | 1.8 | 0.4 | 1.1 | | 沼津市教委1990b |
| 広合遺跡b・c・d区 | 沼津市足高尾上 | 第31図43 | 黒曜石 | (3.14) | (1.71) | 0.38 | 1.2 | | 沼津市教委1990b |
| 二ツ洞遺跡a区 | 沼津市足高尾上 | 第127図 1 | 頁岩 | (5.0) | 1.6 | 0.7 | 5.8 | | 沼津市教委1991 |
| 二ツ洞遺跡a区 | 沼津市足高尾上 | 第127図 2 | 頁岩 | 6.9 | 1.4 | 0.4 | 4.5 | | 沼津市教委1991 |
| 二ツ洞遺跡a区 | 沼津市足高尾上 | 第127図 3 | 安山岩 | (7.3) | 1.8 | 0.6 | 9.0 | | 沼津市教委1991 |
| 二ツ洞遺跡a区 | 沼津市足高尾上 | 第127図 4 | 安山岩 | 4.7 | 2.0 | 0.5 | 4.4 | | 沼津市教委1991 |
| 二ツ洞遺跡a区 | 沼津市足高尾上 | 第194図 6 | 安山岩 | (2.2) | 1.5 | 0.4 | 0.9 | | 沼津市教委1991 |
| 二ツ洞遺跡b・c区 | 沼津市足高尾上 | 第92図41 | 珪質頁岩 | (4.0) | 1.4 | 0.5 | 2.4 | 基部欠 | 沼津市教委1993 |
| 二ツ洞遺跡b・c区 | 沼津市足高尾上 | 第92図42 | 黒色緻密安山岩 | (3.2) | 1.0 | 0.4 | 1.3 | | 沼津市教委1993 |
| 二ツ洞遺跡b・c区 | 沼津市足高尾上 | 第92図43 | グリーンタフ | (5.7) | 1.4 | 0.4 | 4.2 | 基部欠 | 沼津市教委1993 |
| 土手上遺跡b・c区 | 沼津市足高尾上 | 第186図52 | ホルンフェルス | (2.4) | 1.0 | 0.6 | 1.9 | | 沼津市教委1995 |
| 土手上遺跡b・c区 | 沼津市足高尾上 | 第186図53 | ホルンフェルス | (3.1) | 1.2 | 0.3 | 1.4 | | 沼津市教委1995 |
| 土手上遺跡b・c区 | 沼津市足高尾上 | 第186図54 | ホルンフェルス | (3.1) | 1.4 | 0.8 | 4.6 | | 沼津市教委1995 |
| 土手上遺跡b・c区 | 沼津市足高尾上 | 第186図55 | ホルンフェルス | (4.5) | 1.6 | 0.4 | 3.6 | | 沼津市教委1995 |
| 土手上遺跡b・c区 | 沼津市足高尾上 | 第186図56 | ホルンフェルス | 4.3 | 1.3 | 0.8 | 5.2 | | 沼津市教委1995 |
| 土手上遺跡b・c区 | 沼津市足高尾上 | 第186図57 | ホルンフェルス | (3.4) | 1.7 | 0.5 | 3.6 | | 沼津市教委1995 |
| 土手上遺跡b・c区 | 沼津市足高尾上 | 第187図58 | ホルンフェルス | (5.6) | 1.4 | 0.4 | 4.3 | | 沼津市教委1995 |
| 土手上遺跡b・c区 | 沼津市足高尾上 | 第187図59 | 安山岩 | (3.7) | 1.4 | 0.5 | 3.0 | | 沼津市教委1995 |
| 土手上遺跡b・c区 | 沼津市足高尾上 | 第187図60 | ホルンフェルス | (7.1) | 1.6 | 0.5 | 5.0 | | 沼津市教委1995 |
| 土手上遺跡b・c区 | 沼津市足高尾上 | 第192図85 | 珪質頁岩 | (3.0) | 1.3 | 0.2 | 1.2 | | 沼津市教委1995 |
| 西洞遺跡a区 | 沼津市足高尾上 | 第86図349 | 頁岩 | (5.9) | 1.2 | 0.5 | 5.6 | | 沼津市教委1996a |
| 西洞遺跡b区 | 沼津市足高尾上 | 第184図350・351 | 頁岩 | (4.4) | 1.9 | 0.93 | 6.5 | 接合長・幅は実測図より計測、基部欠 | 沼津市教委1999 |
| 西洞遺跡b区 | 沼津市足高尾上 | 第184図556 | 頁岩 | 5.46 | 1.42 | 0.75 | 5.95 | | 沼津市教委1999 |
| 西洞遺跡b区 | 沼津市足高尾上 | 第184図1608 | 頁岩 | (6.89) | 1.5 | 0.5 | 5.7 | | 沼津市教委1999 |
| 西洞遺跡b区 | 沼津市足高尾上 | 第184図4519 | 頁岩 | 3.8 | 1.5 | 0.4 | 1.7 | | 沼津市教委1999 |
| 西洞遺跡b区 | 沼津市足高尾上 | 第184図4683 | 頁岩 | (3.9) | 1.8 | 0.7 | 4.5 | | 沼津市教委1999 |
| 西洞遺跡b区 | 沼津市足高尾上 | 第184図4985 | ガラス質黒色安山岩 | (2.3) | 1.8 | 0.4 | 2.06 | 基部欠 | 沼津市教委1999 |
| 西洞遺跡b区 | 沼津市足高尾上 | 第184図4994 | ガラス質黒色安山岩 | (3.15) | 1.16 | 0.37 | 1.3 | 基部欠 | 沼津市教委1999 |
| 西洞遺跡c・d区 | 沼津市足高尾上 | 第57図 6 | ホルンフェルス | (5.2) | 1.1 | 0.7 | 4.8 | | 沼津市教委2002 |
| 西洞遺跡c・d区 | 沼津市足高尾上 | 第58図 1 | ガラス質黒色安山岩 | (3.7) | 1.8 | 0.6 | 3.0 | | 沼津市教委2002 |
| 西洞遺跡c・d区 | 沼津市足高尾上 | 第58図 2 | 黒曜石 | (2.5) | 1.4 | 0.5 | 0.8 | | 沼津市教委2002 |
| 西洞遺跡c・d区 | 沼津市足高尾上 | 第58図 3 | 黒曜石 | (2.0) | 1.4 | 0.4 | 0.7 | | 沼津市教委2002 |
| 葛原沢第Ⅳ遺跡 | 沼津市足高尾上 | 第67図 4 | ガラス質黒色安山岩 | 5.8 | 2.0 | 0.6 | 5.7 | | 沼津市教委2001 |
| 葛原沢第Ⅳ遺跡 | 沼津市足高尾上 | 第67図 5 | ガラス質黒色安山岩 | (3.9) | 1.3 | 0.5 | 2.4 | | 沼津市教委2001 |
| 葛原沢第Ⅳ遺跡 | 沼津市足高尾上 | 第67図 6 | ガラス質黒色安山岩 | (7.7) | 1.9 | 0.7 | 9.1 | | 沼津市教委2001 |
| 葛原沢第Ⅳ遺跡 | 沼津市足高尾上 | 第67図 7 | ガラス質黒色安山岩 | (3.3) | 1.8 | 0.5 | 3.2 | | 沼津市教委2001 |
| 葛原沢第Ⅳ遺跡 | 沼津市足高尾上 | 第67図 8 | ガラス質黒色安山岩 | (4.6) | 2.1 | 0.8 | 7.0 | | 沼津市教委2001 |
| 葛原沢第Ⅳ遺跡 | 沼津市足高尾上 | 第67図 9 | 頁岩 | 5.1 | 1.3 | 0.5 | 3.1 | | 沼津市教委2001 |
| 秋葉林遺跡 | 沼津市青野秋葉 | 第323図737 | ホルンフェルス | (2.89) | 1.36 | 0.48 | 2.6 | | 静岡県埋文2009b |
| 秋葉林遺跡 | 沼津市青野秋葉 | 第323図738 | ホルンフェルス | (3.10) | 1.77 | 0.64 | 3.9 | | 静岡県埋文2009b |
| 秋葉林遺跡 | 沼津市青野秋葉 | 第323図739 | ホルンフェルス | 4.06 | 1.62 | 0.68 | 5.5 | | 静岡県埋文2009b |
| 秋葉林遺跡 | 沼津市青野秋葉 | 第323図740 | ホルンフェルス | 4.46 | 1.51 | 0.51 | 3.8 | | 静岡県埋文2009b |
| 秋葉林遺跡 | 沼津市青野秋葉 | 第323図741 | ホルンフェルス | 4.91 | 1.44 | 0.72 | 5.7 | | 静岡県埋文2009b |
| 秋葉林遺跡 | 沼津市青野秋葉 | 第323図742 | ホルンフェルス | 5.67 | 1.91 | 0.53 | 5.4 | | 静岡県埋文2009b |
| 秋葉林遺跡 | 沼津市青野秋葉 | 第323図743 | ホルンフェルス | 6.21 | 1.19 | 0.42 | 3.9 | | 静岡県埋文2009b |
| 秋葉林遺跡 | 沼津市青野秋葉 | 第323図744 | ホルンフェルス | 7.21 | 1.62 | 0.72 | 8.1 | | 静岡県埋文2009b |
| 秋葉林遺跡 | 沼津市青野秋葉 | 第323図745 | ホルンフェルス | 7.65 | 1.89 | 0.55 | 9.0 | | 静岡県埋文2009b |
| 秋葉林遺跡 | 沼津市青野秋葉 | 第323図746 | ホルンフェルス | 7.17 | 1.99 | 0.67 | 10.0 | | 静岡県埋文2009b |

第2-6表 静岡県の有茎尖頭器集成

| 遺 跡 名 | 所 在 | 遺物番号 | 石 材 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重さ | 備 考 | 文 献 |
|-------------|----------------|-----------|-------------|---------|-------|-------|--------|-----------------------------------|------------|
| 秋葉林遺跡 | 沼津市青野秋葉 | 第323図747 | 黒曜石(推定不可) | 6.3 | 2.85 | 0.90 | 13.5 | 長さは実測図より計測。左右非対称の有肩尖頭器。 | 勸県埋文2009b |
| 秋葉林遺跡 | 沼津市青野秋葉 | 第323図748 | 黒曜石(神津島恩馳島) | 5.70 | 2.16 | 0.60 | 5.5 | | 勸県埋文2009b |
| 秋葉林遺跡 | 沼津市青野秋葉 | 第324図749 | ガラス質黒色安山岩 | 7.55 | 1.50 | 0.63 | 6.1 | | 勸県埋文2009b |
| 秋葉林遺跡 | 沼津市青野秋葉 | 第324図750 | ガラス質黒色安山岩 | 6.07 | 1.88 | 0.62 | 6.1 | | 勸県埋文2009b |
| 秋葉林遺跡 | 沼津市青野秋葉 | 第324図751 | ガラス質黒色安山岩 | 6.12 | 1.78 | 0.67 | 7.8 | | 勸県埋文2009b |
| 秋葉林遺跡 | 沼津市青野秋葉 | 第324図752 | ガラス質黒色安山岩 | 5.17 | 1.68 | 0.55 | 6.1 | | 勸県埋文2009b |
| 秋葉林遺跡 | 沼津市青野秋葉 | 第324図753 | ガラス質黒色安山岩 | (5.07) | 1.92 | 0.55 | 4.7 | | 勸県埋文2009b |
| 秋葉林遺跡 | 沼津市青野秋葉 | 第324図754 | 細粒安山岩 | 4.20 | 1.17 | 3.50 | 2.3 | | 勸県埋文2009b |
| 秋葉林遺跡 | 沼津市青野秋葉 | 第324図755 | ホルンフェルス | 13.63 | 3.21 | 1.18 | 48.6 | 側縁の突出が微小で、無茎とされること多い形態。 | 勸県埋文2009b |
| 秋葉林遺跡 | 沼津市青野秋葉 | 第324図756 | 珪質頁岩 | 12.90 | 3.71 | 0.93 | 36.3 | 同上 | 勸県埋文2009b |
| 秋葉林遺跡 | 沼津市青野秋葉 | 第325図762 | チャート | 3.00 | 1.42 | 0.41 | 1.2 | | 勸県埋文2009b |
| 秋葉林遺跡 | 沼津市青野秋葉 | 第325図763 | 珪質頁岩 | 3.73 | 1.76 | 0.61 | 2.8 | | 勸県埋文2009b |
| 秋葉林遺跡 | 沼津市青野秋葉 | 第325図764 | 珪質頁岩 | 4.05 | 1.75 | 0.49 | 2.8 | | 勸県埋文2009b |
| 秋葉林遺跡 | 沼津市青野秋葉 | 第325図765 | ガラス質黒色安山岩 | 4.16 | 1.59 | 0.51 | 3.0 | | 勸県埋文2009b |
| の場遺跡 | 沼津市根小屋 | 第179図1 | 黒曜石 | 3.7 | 1.8 | 0.4 | 1.8 | | 勸県埋文2010d |
| の場遺跡 | 沼津市根小屋 | 第179図2 | ホルンフェルス | 4.17 | 1.97 | 0.63 | 4.1 | | 勸県埋文2010d |
| の場遺跡 | 沼津市根小屋 | 第179図3 | 黒曜石 | 2.25 | 1.35 | 0.46 | 1 | | 勸県埋文2010d |
| の場遺跡 | 沼津市根小屋 | 第179図4 | ホルンフェルス | 3.98 | 1.7 | 0.53 | 4.7 | | 勸県埋文2010d |
| の場遺跡 | 沼津市根小屋 | 第179図5 | ホルンフェルス | 6.23 | 2.14 | 0.57 | 8.4 | | 勸県埋文2010d |
| の場遺跡 | 沼津市根小屋 | 第179図6 | ホルンフェルス | 6.84 | 0.82 | 0.56 | 3.7 | | 勸県埋文2010d |
| の場遺跡 | 沼津市根小屋 | 第179図7 | ホルンフェルス | 5.44 | 1.82 | 0.48 | 4.6 | | 勸県埋文2010d |
| の場遺跡 | 沼津市根小屋 | 第179図8 | ホルンフェルス | 3.06 | 1.59 | 0.52 | 2.4 | | 勸県埋文2010d |
| の場遺跡 | 沼津市根小屋 | 第179図9 | ホルンフェルス | 3.05 | 0.8 | 0.35 | 0.8 | | 勸県埋文2010d |
| の場遺跡 | 沼津市根小屋 | 第179図10 | ホルンフェルス | 2.53 | 1.24 | 0.38 | 1.5 | | 勸県埋文2010d |
| の場遺跡 | 沼津市根小屋 | 第179図11 | 凝灰岩 | 3.2 | 1.09 | 0.4 | 1.3 | | 勸県埋文2010d |
| の場遺跡 | 沼津市根小屋 | 第179図12 | ホルンフェルス | 2.78 | 1.2 | 0.46 | 2 | | 勸県埋文2010d |
| の場遺跡 | 沼津市根小屋 | 第179図13 | ホルンフェルス | 3.24 | 1.46 | 0.38 | 2.1 | | 勸県埋文2010d |
| の場遺跡 | 沼津市根小屋 | 第179図14 | ホルンフェルス | 5.06 | 1.2 | 0.36 | 3.2 | | 勸県埋文2010d |
| の場遺跡 | 沼津市根小屋 | 第179図15 | ホルンフェルス | 4.87 | 1.1 | 0.37 | 2.3 | | 勸県埋文2010d |
| の場遺跡 | 沼津市根小屋 | 第179図16 | ホルンフェルス | 4.43 | 1.36 | 0.4 | 2.8 | | 勸県埋文2010d |
| の場遺跡 | 沼津市根小屋 | 第179図17 | ガラス質黒色安山岩 | 5.76 | 1.2 | 0.51 | 4.1 | | 勸県埋文2010d |
| の場遺跡 | 沼津市根小屋 | 第179図18 | ホルンフェルス | 5.28 | 2.18 | 0.56 | 7 | | 勸県埋文2010d |
| の場遺跡 | 沼津市根小屋 | 第179図19 | ガラス質黒色安山岩 | 3.83 | 2.05 | 0.51 | 4 | | 勸県埋文2010d |
| の場遺跡 | 沼津市根小屋 | 第180図1 | ホルンフェルス | 2.44 | 1.06 | 0.4 | 1 | | 勸県埋文2010d |
| の場遺跡 | 沼津市根小屋 | 第180図2 | 珪質頁岩 | 6.46 | 1.62 | 0.73 | 7.3 | | 勸県埋文2010d |
| の場遺跡 | 沼津市根小屋 | 第180図3 | ホルンフェルス | 3.73 | 1.33 | 0.57 | 3.1 | | 勸県埋文2010d |
| の場遺跡 | 沼津市根小屋 | 第180図4 | シルト岩 | 4.38 | 1.4 | 0.43 | 3.2 | | 勸県埋文2010d |
| の場遺跡 | 沼津市根小屋 | 第180図5 | ホルンフェルス | 4.88 | 1.21 | 0.55 | 3.6 | | 勸県埋文2010d |
| の場遺跡 | 沼津市根小屋 | 第180図6 | ホルンフェルス | 8.6 | 1.44 | 0.56 | 8.9 | | 勸県埋文2010d |
| の場遺跡 | 沼津市根小屋 | 第180図7 | ホルンフェルス | 10.1 | 1.44 | 0.73 | 14.5 | | 勸県埋文2010d |
| の場遺跡 | 沼津市根小屋 | 第180図8 | ホルンフェルス | 8.67 | 1.4 | 0.97 | 12.2 | | 勸県埋文2010d |
| の場遺跡 | 沼津市根小屋 | 第180図12 | 安山岩 | (3.0) | 2.03 | 0.43 | 3.3 | | 勸県埋文2010d |
| 藤ボサ遺跡b区 | 沼津市井出藤ボサ | 第92図10 | ホルンフェルス | 3.19 | 1.61 | 0.52 | 2.30 | | 勸県埋文2010b |
| 元野遺跡 | 沼津市宮本元野 | 第204図112 | ガラス質黒色安山岩 | (2.9) | (4.2) | 1.8 | 0.5 | | 勸県埋文2008a |
| 矢川上C遺跡 | 富士市船津矢川上 | 第166図1 | ホルンフェルス | 4.68 | 1.84 | 0.53 | 5.30 | | 勸県埋文2009a |
| 矢川上C遺跡 | 富士市船津矢川上 | 第166図2 | ガラス質黒色安山岩 | (8.81) | 1.48 | 0.45 | 7.40 | 先端部欠 | 勸県埋文2009a |
| 天ヶ沢東遺跡 | 富士市神谷天ヶ沢 | 第28図132 | ホルンフェルス | (4.11) | 1.46 | 0.51 | 2.34 | 先端部欠、実物より計測 | 勸県埋文2010e |
| 天ヶ沢東遺跡 | 富士市神谷天ヶ沢 | 第28図134 | ホルンフェルス | 2.49 | 1.37 | 0.27 | 0.58 | 実物より計測 | 勸県埋文2010e |
| 天ヶ沢東遺跡 | 富士市神谷天ヶ沢 | 第28図135 | ホルンフェルス | 3.06 | 1.44 | 0.35 | 1.43 | 実物より計測 | 勸県埋文2010e |
| 天ヶ沢東遺跡 | 富士市神谷天ヶ沢 | 第28図136 | 珪質頁岩 | 5.25 | 2.11 | 0.61 | 6.4 | | 勸県埋文2010e |
| 天ヶ沢東遺跡 | 富士市神谷天ヶ沢 | 第28図137 | 黒曜石(神津島恩馳島) | 5.19 | 1.70 | 0.53 | 3.8 | | 勸県埋文2010e |
| 古木戸A遺跡 | 富士市増川古木戸 | 第68図115 | ホルンフェルス | (4.84) | 1.6 | 0.49 | (3.18) | 先端部欠 | 勸県埋文2010e |
| 古木戸B遺跡 | 富士市増川古木戸 | 第118図102 | ガラス質黒色安山岩 | 4.72 | 1.58 | 0.51 | 2.1 | | 勸県埋文2010e |
| 下高原遺跡 | 富士市山本下高原 | 第III-43図5 | ホルンフェルス | (1.89) | 1.68 | 0.57 | 1.6 | 先端部欠 | 勸県埋文2010f |
| 下高原遺跡 | 富士市山本下高原 | 第III-43図6 | 珪質頁岩 | 3.02 | 1.40 | 0.43 | 1.0 | | 勸県埋文2010f |
| 上石敷遺跡 | 富士宮市小泉石敷 | 第32図1 | 頁岩 | 7.0 | 3.7 | 0.5 | - | 実測図より計測 | 富士宮市教委1985 |
| 上石敷遺跡 | 富士宮市小泉石敷 | 第32図3 | - | (2.3) | 1.5 | 0.4 | - | 先端部・基部欠、実測図より計測 | 富士宮市教委1985 |
| 若宮遺跡 | 富士宮市小泉 | 第9図1 | 頁岩 | (6.530) | 1.670 | 0.880 | (8.10) | 基部欠 | 富士宮市教委1983 |
| 若宮遺跡 | 富士宮市小泉 | 第9図2 | 頁岩 | 5.820 | 1.620 | 0.700 | 5.40 | | 富士宮市教委1983 |
| 若宮遺跡 | 富士宮市小泉 | 第9図3 | 頁岩 | 5.010 | 1.300 | 0.665 | 0.34 | | 富士宮市教委1983 |
| 若宮遺跡 | 富士宮市小泉 | 第9図4 | 頁岩 | 4.190 | 1.355 | 0.825 | 3.00 | | 富士宮市教委1983 |
| 若宮遺跡 | 富士宮市小泉 | 第9図5 | 黒曜石 | 2.100 | 1.630 | 0.540 | 0.85 | | 富士宮市教委1983 |
| 月の輪平遺跡 | 富士宮市星山 | 第80図1 | - | 5.5 | 1.4 | 0.5 | 4.6 | | 富士宮市教委1981 |
| 滝戸遺跡 | 富士宮市野中 | 図54-02 | 硬砂岩 | (4.1) | 1.9 | 0.5 | 4.0 | 先端部欠 | 富士宮市教委1997 |
| 大鹿窪遺跡 | 富士宮市(旧芝川町)大鹿窪 | 図23-4-01 | 黒曜石(天城柏峠) | (2.65) | 1.8 | 0.4 | 1.1 | 先端部欠 | 芝川町教委2006 |
| 大鹿窪遺跡 | 富士宮市(旧芝川町)大鹿窪 | 図23-4-02 | 黒曜石 | 2.3 | 1.8 | 0.5 | 1.0 | | 芝川町教委2006 |
| 大鹿窪遺跡 | 富士宮市(旧芝川町)大鹿窪 | 図23-4-03 | 黒曜石 | 2.1 | 1.6 | 0.4 | 0.9 | | 芝川町教委2006 |
| 大鹿窪遺跡 | 富士宮市(旧芝川町)大鹿窪 | 図23-4-04 | 黒曜石 | 2.1 | 1.8 | 0.5 | 1.4 | | 芝川町教委2006 |
| 大鹿窪遺跡 | 富士宮市(旧芝川町)大鹿窪 | 図23-4-05 | 黒曜石 | (2.0) | 2.0 | 0.5 | 1.4 | 先端部欠 | 芝川町教委2006 |
| 小森遺跡 | 富士宮市(旧芝川町)西山小森 | - | 黒曜石 | 4.5 | 1.5 | 0.5 | - | 実測図より計測 | 秋本1972 |
| 小塚遺跡(第3次調査) | 富士宮市(旧芝川町)西山小塚 | 第59図1 | 頁岩 | 2.2 | 1.9 | 0.3 | - | | 芝川町教委1995 |
| 小塚遺跡(第3次調査) | 富士宮市(旧芝川町)西山小塚 | 第59図2 | 頁岩 | 3.8 | 1.9 | 0.6 | - | | 芝川町教委1995 |
| 小塚遺跡(第3次調査) | 富士宮市(旧芝川町)西山小塚 | 第59図3 | 頁岩 | (5.0) | 1.8 | 0.5 | - | 基部欠 | 芝川町教委1995 |
| 旗指遺跡第2地点 | 島田市旗指 | T16 | チャート | (4.2) | 2.1 | - | - | 先端部欠 | 島田市教委1976 |
| 堂山遺跡 | 掛川市原里 | 144-3 | - | 5.2 | 2.1 | 0.6 | - | 掛川市史1997に計測値・写真 | 瀬川1992 |
| 長者屋敷北遺跡 | 磐田市寺谷 | 第349図1 | シルト岩 | (3.95) | 2.10 | 0.51 | 2.5 | 先端部欠 | 磐田市教委2009 |
| 次郎太夫前遺跡 | 浜松市中区花川町東新田 | 144-1 | - | (6.8) | (2.0) | 0.7 | - | 先端部・基部欠、実測図より計測 県史では「浜松市吉野町」所と記載。 | 瀬川1992 |
| 東平遺跡 | 浜松市西区神ヶ谷町東平 | 144-2 | チャート | (5.1) | 1.8 | 0.7 | - | 先端部・基部欠、実測図より計測 | 瀬川1992 |

※～市史＝～市史編纂委員会、加藤学園考古研＝加藤学園考古学研究所、勸県埋文＝財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所、～教委＝～教育委員会
長さ・幅・厚さはセンチメートルを、重さはグラムを単位とする。

Use of the Tanged Points in Shizuoka

Ryohei SHIBATA Motoki MIYOSHI Yuuki NAKAMURA

Summary: The tanged point is one of characteristics of the Incipient Jomon period. In Shizuoka prefecture, recent excavations accompanied with large-scale constructions provide an increasing number of data on the tanged points, which counts 511 examples. Most of them were excavated in the eastern part of the prefecture but were rarely found in the Iwatahara plateau which has contained a mass of features belonging to the Paleolithic. They were mainly found respectively, not in group. The tanged points excavated in the east of Shizuoka are mainly (80%) made of hornfels and andesite, the region's local products. On the other hand, some of the other 20% are made of materials from distant place, such as the obsidian from Aomori prefecture. Our results provide some subjects to be considered when studying local social relation in the Incipient Jomon period.

Key words: Tanged point, Incipient Jomon period, Jomon pottery decorated with slender clay ridges

東海地方の鉄器の出現

杉山和徳

要旨 弥生時代における東海地方の鉄器化の実態に迫るため、出土鉄器の集成をおこない、各器種の様相を把握した。東海地方における鉄器の出現は弥生時代中期にまで遡るが、多岐に渡る器種が一定量認められ始めるのは、弥生時代後期からとなる。愛知県豊田市の南山畑遺跡で検出された鍛冶遺構の存在や、従来「不明鉄器」とされてきたものの用途を積極的に評価することで、弥生時代終末期には、鉄板鋳切りによる小型鉄器の製作や、鉄器の再加工による転用といった簡易な鉄器製作・鉄加工は既におこなわれ始めていた可能性を考えた。

キーワード：弥生時代、東海地方、鉄器、鍛冶遺構、鉄器製作、再加工、転用

はじめに

弥生時代の変革の一つとして捉えられる石器から鉄器への利器の転換に関する研究は、日本列島規模（松井1982・下條編1998など）で、あるいは中九州（村上1992）・近畿（山田1988）・南関東（安藤1997）といった地域単位で検討がなされてきた。弥生時代の鉄器化は、単なる材質の置換に留まらず、地域間の情報や物資の伝達といった相互交流によってもたらされた結果と考えられる。東海地方（註1）は西日本と東日本の狭間、東西交流の結節点に位置し、弥生時代のヒト・モノの動きを考えるうえで、欠かすことのできない地域である。しかし、東海地方は他地域と比べ、弥生時代鉄器の出土数が少なく、石器から鉄器への転換に関する検討も十分になされてきたとは言い難い。

近年は新たな発見に伴い、東海地方における弥生時代の鉄器資料数は以前よりも着実に増加している。また、鉄器の出現のみならず、終焉を迎える石器の側の視点からも、利器の鉄器化に関する検討を加える余地は十分にある。本稿では、弥生鉄器希薄・空白地帯として不明確であった東海地方における石器から鉄器への移行の実態に迫るための基礎的な作業として、東海地方出土の弥生時代鉄器を概観するとともに、若干の検討を加える。

1 東海地方における弥生時代鉄器研究の現状

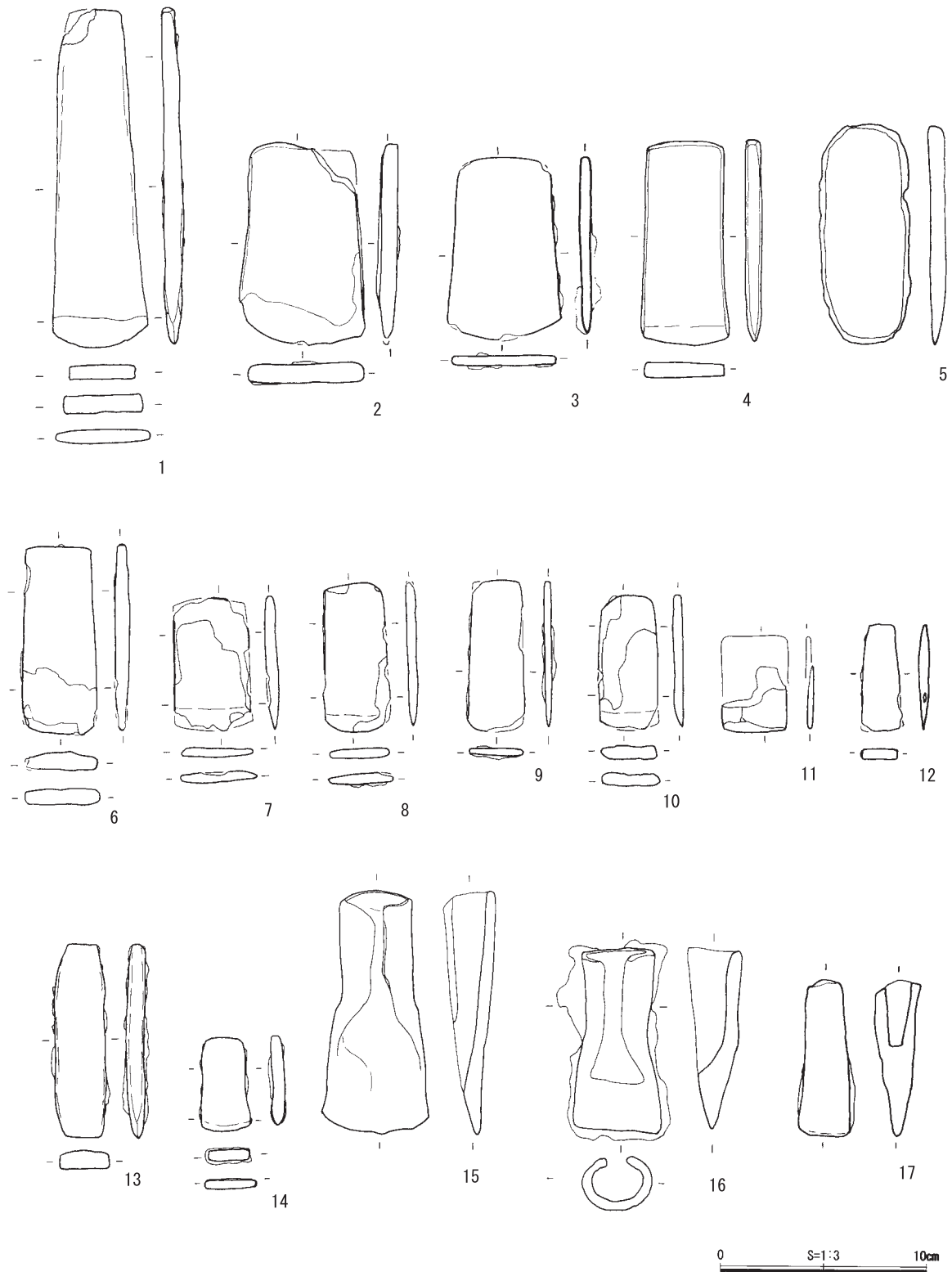
先述した通り、出土数の少なさから東海地方の弥生時代鉄器に関する研究は、資料集成や個別資料が紹介される程

度で、積極的に進められているとは言い難い。

資料集成は、鉄器出土資料数が東海地方の中でも比較的多い静岡県内で、平野吾郎（平野1987）や中嶋郁夫（中嶋1992）らによっておこなわれた。また、松井一明は静岡県内出土資料の収集を中心として、東海地方における鉄器の普及を、石器の終末と関係付けながらまとめた（松井1997）。松井は弥生時代中期末から後期初頭に鉄器普及の画期を認め、石製農具の欠落から弥生時代中期段階にも、ある程度の鉄器化が進んでいた可能性を指摘している。

個別資料の紹介としては、佐藤達雄が静岡県静岡市清水区の長崎遺跡出土板状鉄斧について、類例を提示し製作技術についても言及した（佐藤1995）。長崎遺跡出土例は、村上恭通も瀬戸内海地域以東では珍しい舶載鉄製農耕具として取り上げている（村上1998など）。弥生時代鍛冶炉の東限として注目された愛知県豊田市の南山畑遺跡の鍛冶遺構では、多くの微小鉄片や鉄滓等が出土した。南山畑遺跡の鍛冶炉は、ほとんど掘り方がなく、僅かなカーボンペッドをもつⅢ類鍛冶炉に分類された（村上1998・2007）。

個々の研究の論考の中で、東海地方出土鉄器が一例として取り上げられることはあっても、東海地方の鉄器全体を取り上げた論考はほとんど認められない。近年の出土事例の増加ともあいまって、現在、東海地方ではどのような鉄器がどの程度出土しているのかも、判然としない状況と言える。そのため本稿では、集成した東海地方弥生時代鉄器出土事例を整理し、その全容を提示することによって、東



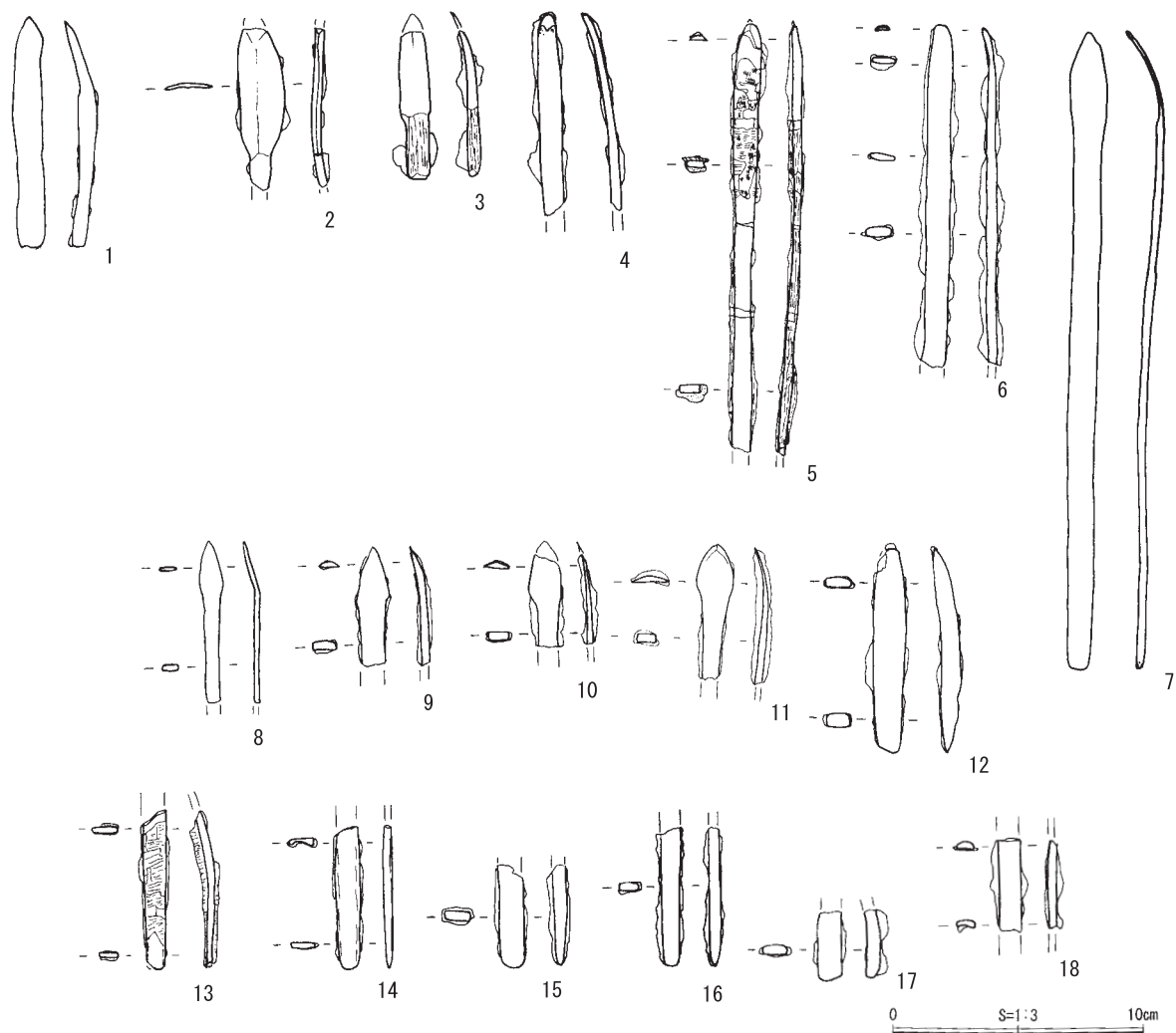
第1図 東海地方出土鉄斧の諸例

1. 長崎 2・3・6~11. 川合 4. 郷中 5. 石川 12. 稲ヶ谷
13. 愛野向山II 14. 山奥 15. 小黒 16. 大城3号 17. 下之庄東方

海地方の鉄器化に関する検討を進めるための準備をおこな
いたい。

2 東海地方出土鉄器の集成

管見に触れる限り、東海地方の弥生時代鉄器を集成した
結果、表に示した通り55遺跡より1548点が認められた(註



第2図 東海地方出土鉄鉞の諸例

1. 矢崎 2. 田ノ谷 3. 倉見原3号 4. 竹之内原1号 5. 新豊院山3号 6. 神明
7. 則武向 8~11・15・16. 山奥 12. 城ノ谷 13. 西通北 14. 川合 17. 金塚 18. 菖蒲ヶ谷

2)。ただし、この中には愛知県豊田市の南山畑遺跡で検出された鍛冶関連遺構（SB01・04・08）より出土した鉄器製作時の鍛造薄片等の微小鉄片や鉄滓等1378点も含まれている。そのため、製品としての鉄器の数は、総点数からこの鍛冶関連遺物1378点を除いた170点となる。

ほぼ弥生時代後期から終末期にかけての資料であるが、弥生時代中期にまで遡り得るものが僅かながら存在する。

静岡県沼津市の西通北遺跡出土鉄鉞は弥生時代中期中葉以前に掘削されたと考えられる環濠の第3層より出土した。第3層からは弥生時代中期後葉の有東式段階の弥生土器がまとまって出土しており、鉄鉞の帰属時期も弥生時代中期後葉となる可能性が高い（杉山2010）。愛知県名古屋市西区・清洲市の朝日遺跡61E SD02出土刀子は貝田町式

後半期（V-1期）の弥生土器とともに出土しており、弥生時代中期中葉頃に帰属するものと考えられている（石黒ほか編1994）。

器種の内訳は、工具として鉄斧が19点、鉄鉞が19点、鉄鑿が3点、鉄刀子が12点、農具として鉄鎌が9点、漁撈具として鉄釣針が5点、武器として鉄剣が17点、鉄鏃が53点、装身具として鉄釧が2点出土している。

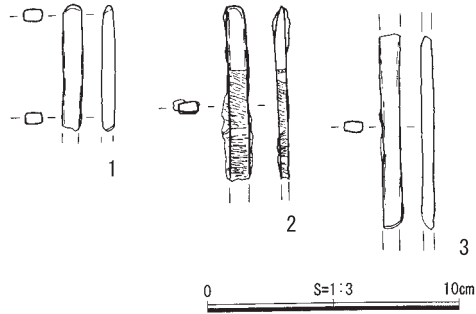
出土した鉄器は住居址などの居住域や包含層からの出土が多い。一方、墳墓や方形周溝墓といった墓域からの出土は28点に止まり、全体から見れば決して多いとは言えない。鉄剣や鉄鏃といった武器は墓域からの出土が多い傾向にある。

3 東海地方出土鉄器の概略

集成した鉄器は、工具・農具・漁撈具・武器・装身具と用途も性格も多岐に渡る。これらを各器種別に概観する。

①鉄斧（第1図）

1～14が板状鉄斧、15～17が袋状鉄斧である。川越哲志の分類（川越1993）では、板状鉄斧の内、1～4の4点がA1型にあたり、伐採用両刃の斧と考えられる。先述



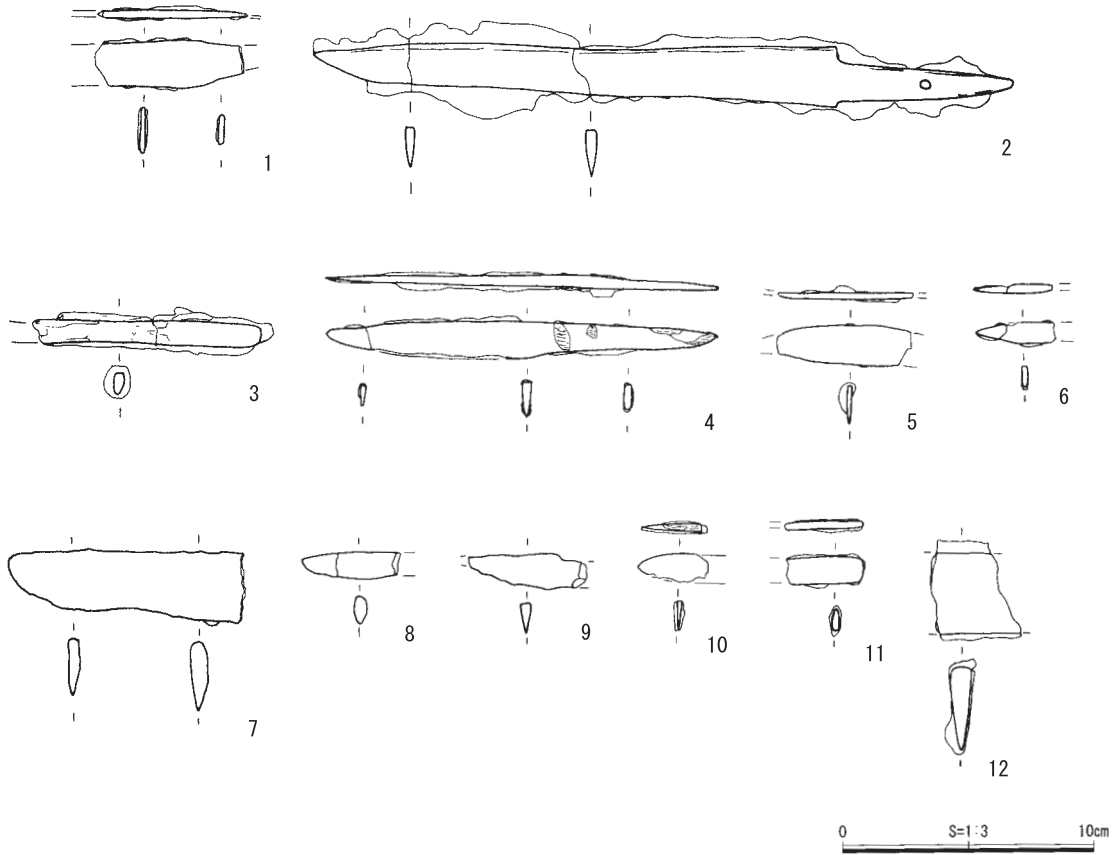
第3図 東海地方出土鉄鑿の諸例
1. 菖蒲ヶ谷 2. 梵天 3. 山奥

した通り、長崎遺跡出土例である1は、特に大型で重厚な作りから、瀬戸内海地域以東では稀有な舶載品と評価されている（村上1998など）。5～14の10点はC型にあたり、加工用片刃の鉞と考えられる。鉄斧の出土は散発的なことが多いのに対し、川合遺跡では斧と鉞を織り交ぜて合計9点の板状鉄斧が1遺跡から出土している。

袋状鉄斧の3点は川越分類ではいずれもIIa型にあたるが、斧か鉞かは定かではない。弥生時代を通じて大型の袋状鉄斧は類例が少なく、斧に対して鉞が多い傾向にあるようだが、15は全長10cmを超えており、斧としての使用にも耐え得る資料だと考えられる。

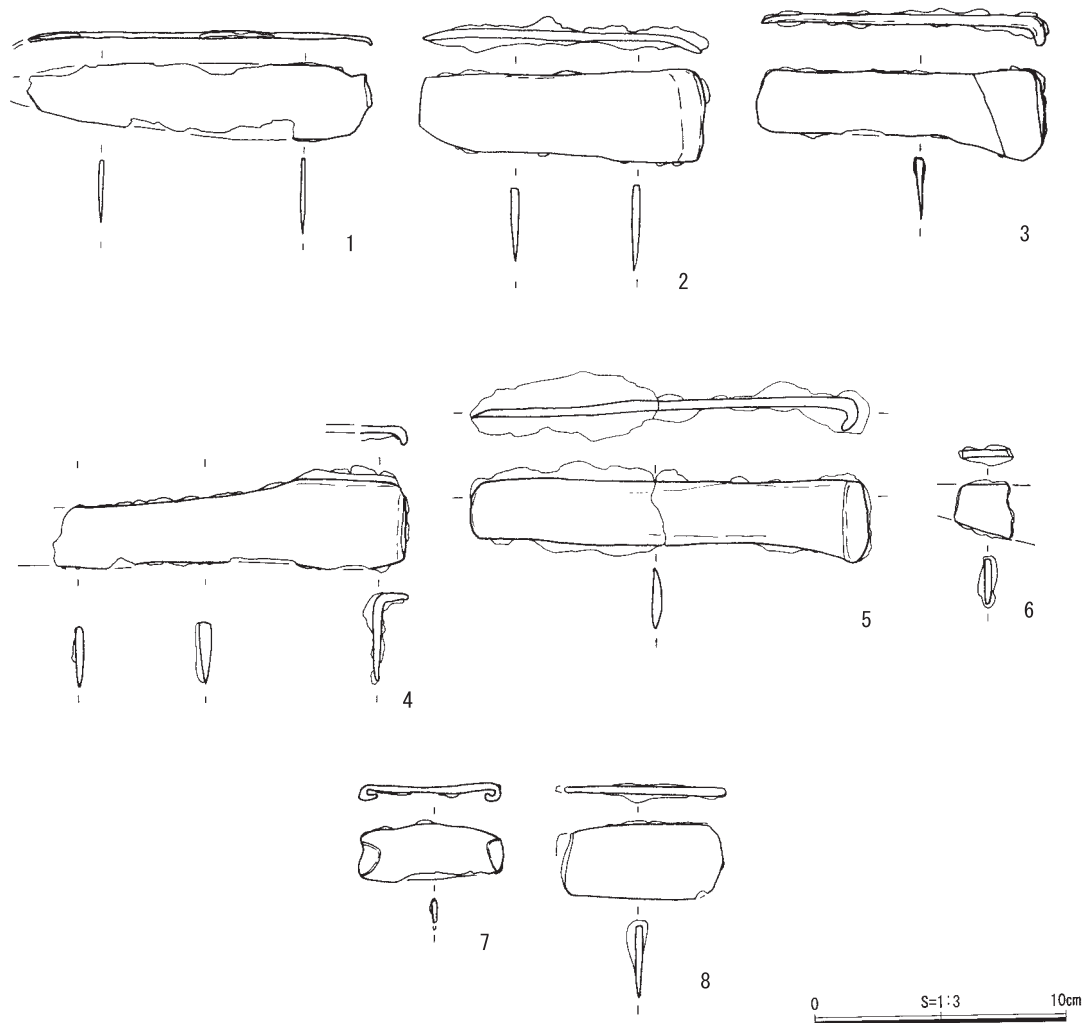
②鉄鉞（第2図）

1～12が完形あるいは刃部が残存しているもの、13～17は茎部が残存しているもの、18が刃部から茎部にかけての破片である。遺存状態が悪く、分類などの検討に耐えられる資料が少ない。平面形態は2・3・5・7・8・9・10・11のように、茎部が板状で刃部が鋸状を呈する

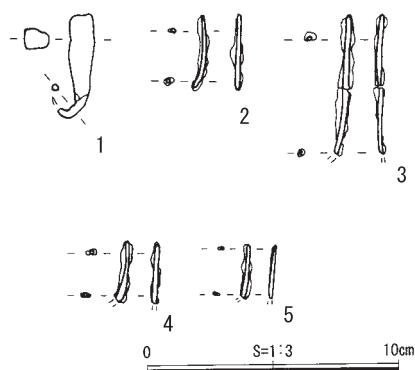


第4図 東海地方出土鉄刀子の諸例

- 1・6. 椿野 2. 欠山 3. 高松 4・10. 山奥 5. 祝田
7・8. 朝日 9. 蘇原東山1号 11. 菖蒲ヶ谷 12. 上箕田



第5図 東海地方出土鉄鎌の諸例
1. 川合 2. 愛野向山II 3. 梵天 4. 峯山 5. 欠山 6. 山奥 7・8. 祝田



第6図 東海地方出土鉄釣針の諸例
1. 雌鹿塚 2~5. 白浜

ものが多い。刃部の反りに着目した田中謙の分類（田中2008）では、8がやや直線的な刃部をもつC1類になりそうだが、他は概ねB類にあたる。日本列島における出現期の鉋は、刃部が反らないA類で、刃部と茎部の平面・断

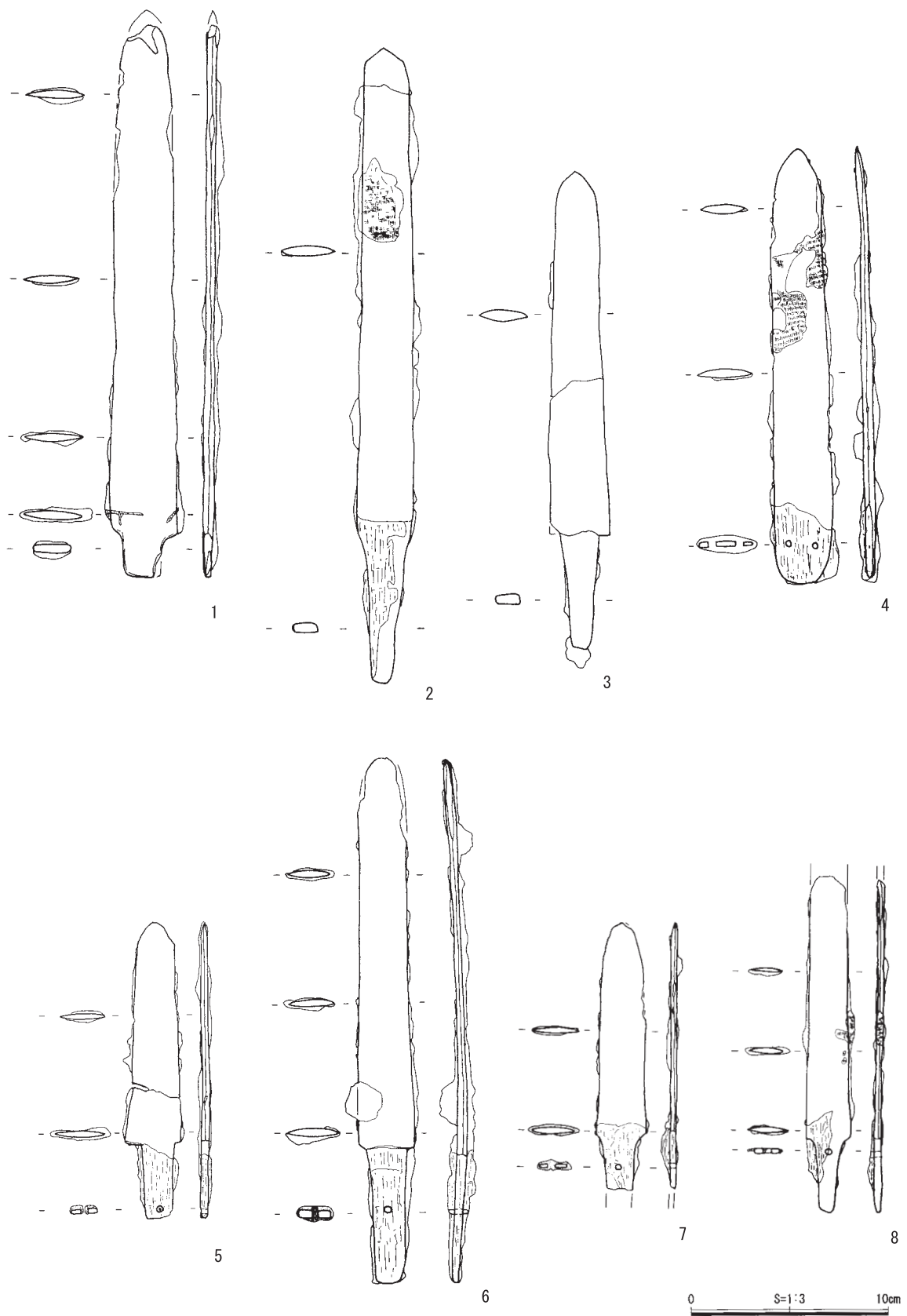
面形態が同一で刃部から茎部までが一体のものが多いが、東海地方では認められない。

③鉄鑿（第3図）

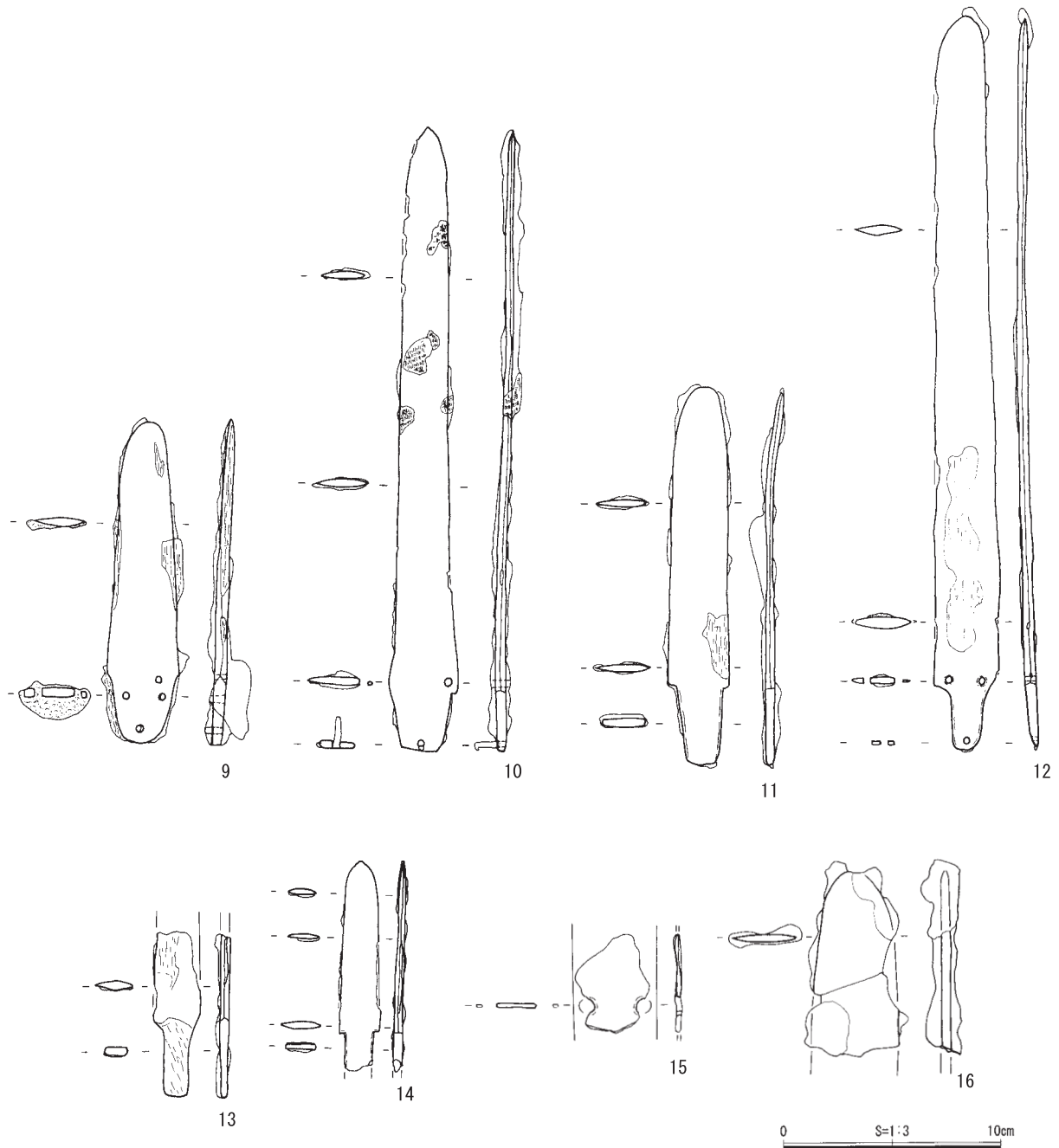
3点出土しているが、いずれも細身で厚さは0.5cm前後である。幅も1cm前後で細長く、鉄鉋などと同様に木工細工用のものと思われる。2は木柄の痕跡が良好に遺存しており、刃部の長さが2.6cm程であったことが分かる。

④鉄刀子（第4図）

1~4が身部から茎部にかけての形態が分かるもの、1~10が鋒のみ、11が茎部のみ、12が身部の破片である。7・12は身部幅が3cm前後あり、鉄刀の一部である可能性も考えられる。1・3・4は無関だが、2は両関かつ直角に近い関部形態を呈し、茎部に目釘孔が認められる。4は茎部に木質付着が認められ、木製把が装着されていた可能性がある。



第7図 東海地方出土鉄剣の諸例①
 1. 中島西原田 2・3. 倉見原3号 4. 原新田 5. 竹之内原1号 6. 新豊院山3号 7・8. 梵天



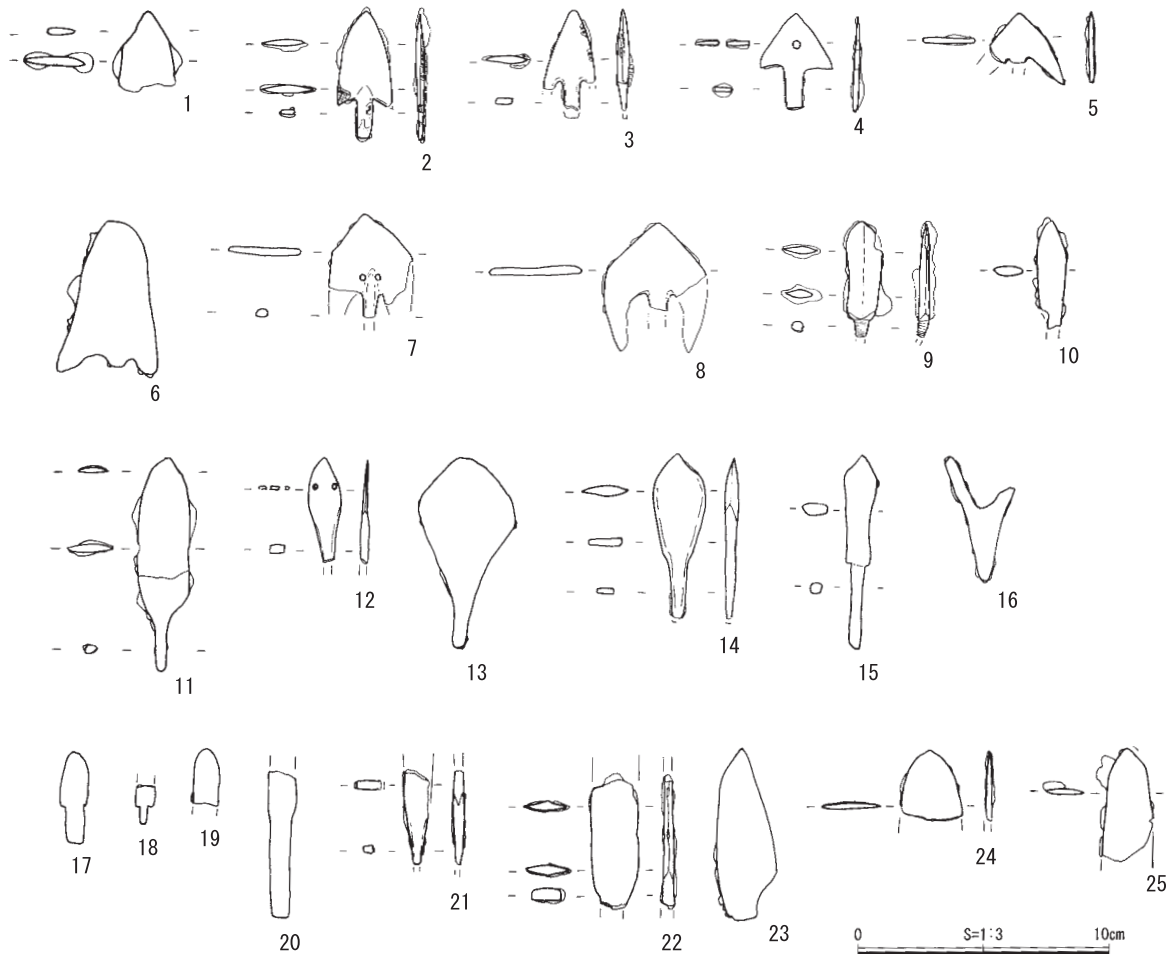
第8図 東海地方出土鉄剣の諸例②
9～11. 文殊堂 12. 伊瀬粟地 13. 稲ヶ谷 14. 矢畑 15・16. 白浜

⑤鉄鎌 (第5図)

1～6が穂首刈りあるいは根刈り用の刈鎌、7・8が穂摘み用の摘鎌である。6は刈鎌の刃部破片と思われる。1～5の刈鎌はいずれも刃部長15cm前後の小型品で、刃部がやや不明瞭な1以外全て直刃鎌である。着柄のための基部の形態は、刃部を下にして刃先部を左側に、基部を右側に見た場合、基部が手前側に折り返される点で全事例共通している。寺家前遺跡出土例は、実際に木柄が着柄された

状態で出土した稀有な事例であり、着柄された鎌の姿が分かる貴重な資料である。寺家前遺跡例も基部の作りは1～5と同様であり、木柄に差し込まれた刃部は、基部の折り返しによって脱落しないよう固定されていたようである。刃部の形態は使い減りによる影響を受けているため、判然としない部分もあるが、曲刃に近い。

弥生時代の刈鎌の基本的な変遷過程は、大型鎌が小型鎌に、曲刃鎌が直刃鎌に先行する(松井1993)。寺家前遺跡



第9図 東海地方出土鉄鎌の諸例

1.ニタ子 2・9.新豊院山3号 3.文殊堂 4・5・22.南山畑 6・23.瑞穂 7・8.南谷
10.平沢 11・24.三王山 12・25.山奥 13.小黒 14.矢畑 15・17~20.矢崎 16.山木 21.菖蒲ヶ谷

例を含め、刈鎌は全て弥生時代後期以降の所産と考えられ、形態は小型直刃鎌とされるものがほとんどである。ただし、弥生時代中期後葉には既に東海地方に鉄鎌が伝わっていた証拠を示す資料として、静岡県静岡市駿河区の有東遺跡出土木製刈鎌の存在があげられる（平野編1983）。木製刈鎌は、柄と刃部全てが木で作られており、柄と刃部を組み合わせて、刃部上方に楔を差し込んで固定する構造となっている。木柄に装着された鉄刈鎌を精巧に再現したものと思われる。木製刈鎌の刃部長は30cmを超える大型直刃であり、小型直刃鎌の鉄刈鎌に先行して、弥生時代中期段階には大型直刃鎌が東海地方に伝えられていた可能性が示唆される。

穂摘み具としての摘鎌は、石庖丁同様の使用が想定され、法量と折り返しの有無などによって分類がなされている（川越1977）。7は左右両端を折り返すが、8には折り

返し跡が認められない。木柄への装着方法が異なっていた可能性がある。

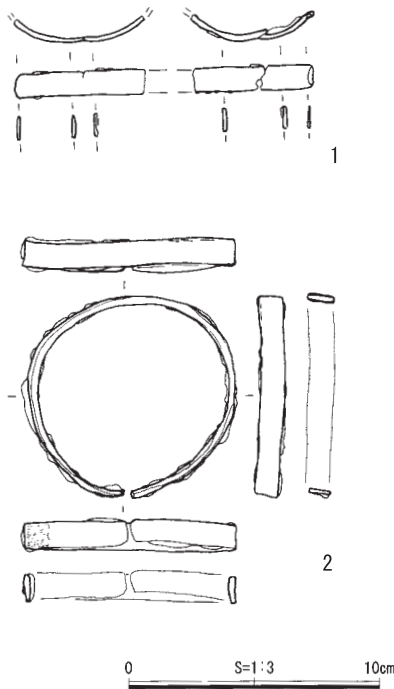
⑥鉄釣針（第6図）

5点出土しており、先端付近の厚さはいずれも0.2cm程度と、非常に細く作られる。ヤス・銚・アワビオコシといった他の漁撈具の鉄器化が認められない点は、漁撈活動の中で釣り魚の比重が大きかったことと、少量の鉄素材によって製作が可能であったためと考えられている。

⑦鉄剣（第7・8図）

17点出土しているが、確認できたものの中で身部長35cmを超えるような長剣は認められず、いずれも短剣である。2・3・6などの数例を除き、ほとんどが茎部長6cm未満の短茎剣であり、全体の中で短茎短剣の占める割合が高いと言える。

茎部に木製把の痕跡をもつもの（2・4・5・6・7・



第10図 東海地方出土鉄釧の諸例
1. 鷹ノ道 2. 峯山

8)と鹿角製把の痕跡をもつもの(9)が認められる。4・9・10・12は刃関双孔鉄剣である。13・14はミニチュア鉄剣である(杉山2009a)。15は刃関双孔鉄剣の関部の一部、16は鋒の一部と思われる。

⑧鉄鏃(第9図)

53点出土しているが、確認できたもののほとんどが有茎式である。以下、大村直の分類(大村1983)をもとに概観する。1は確認できたものの中では唯一の無茎式で、無茎三角形式のいずれかに該当すると思われる。2～8は有茎腸扶三角形式にあたる。4は身部中心に単孔が穿たれる。7は双孔が穿たれるが、これは矢柄を根挟みで固定するためのものと思われる。9～12は柳葉式にあたり、12は先端付近に双孔が穿たれる。13・14は圭頭斧箭式にあたる。15は定角式に、16は雁又式に似た平面形態をしているが、詳細は不明である。17～25は破片または正確な形状が分からないため形式不明としたものであるが、いずれも柳葉式あるいは圭頭斧箭式に該当する可能性が高いと思われる。全体として有茎腸扶三角形式と柳葉式の出土が目立つ。

⑨鉄釧(第10図)

2点とも単環状鉄釧である。単環状鉄釧に関しては、土屋了介によって研究が進められている(土屋2009)。1と

2は、断面長方形である点や環体幅の広さなどで共通点をもつものの、端部折り返しの有無や長さ、縦断面の形状などでは差異が認められる。形態が整っている1は端部にも折り返しが認められる。対して、2は形態に歪みが認められ、端部も処理が施されていない。こうした差異は、製作技術の水準や製作工程の違いによるものと推定される。

⑩その他(第11図)

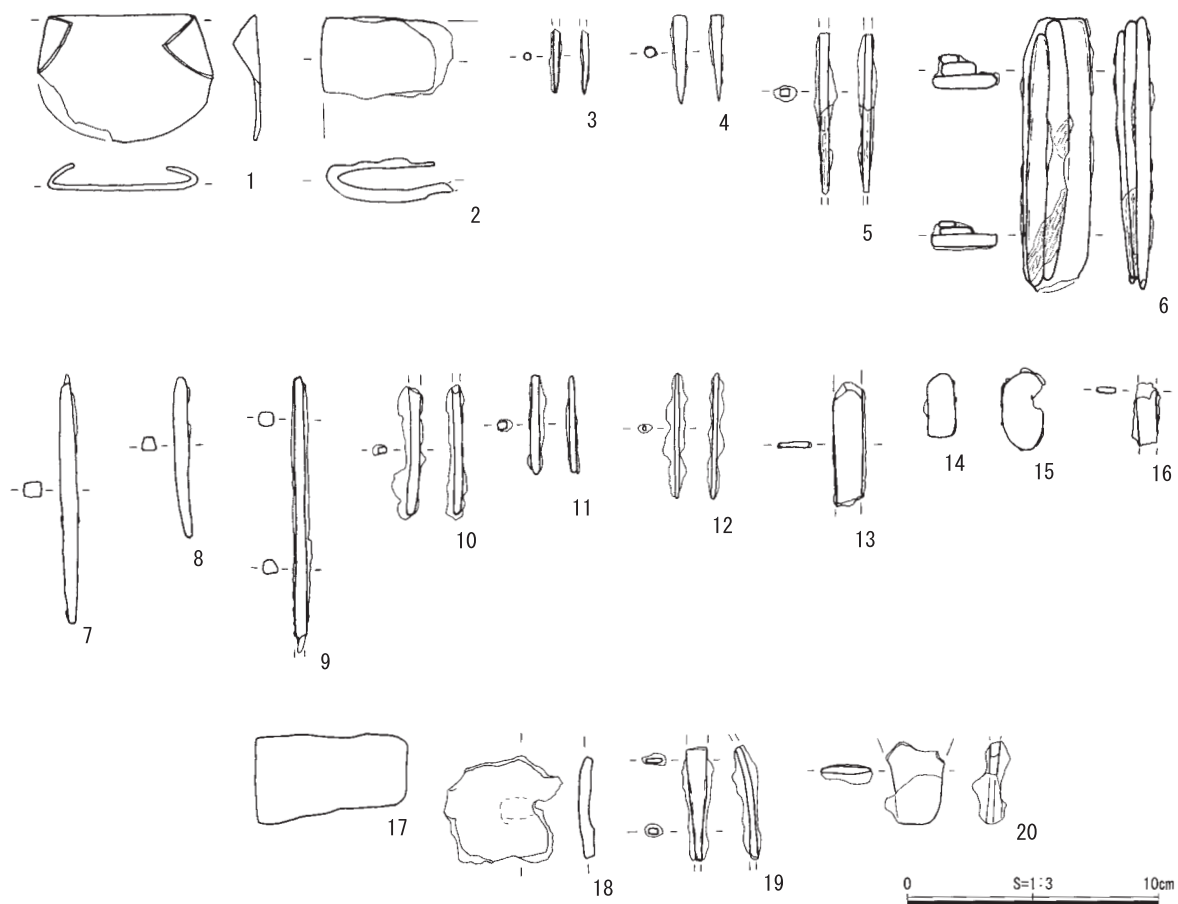
従来、いわゆる「不明鉄器」「棒状鉄器」「鉄片」とされてきた一群である。1・2は折り返し部の形状から、農具としての鉄鋤鋤先の可能性が考えられるものである。

村上恭通は従来認知されていなかった器種として、鉄錐・袋状鑿・耳かき状鉄器・船底状鉄器といった小型加工具を新たに見出した(村上2007)。3～5も穿孔具としての鉄錐と考えられるものである。鉄錐は玉作用の特殊な工具として認識される場合が多いが、住居址や鍛冶遺構の埋土からの出土も認められるという。鉄錐は鉄鏃製作などの鑿切りの際に生成される副産物が転用されたものと考えられているが、今のところ東海地方では鉄鑿の出土は認められていない。

6は3点の鉄器が鏽着して出土したものである。3点ともほぼ完形であり、1点の板状鉄斧と2点の鉄鑿がくっついたものではないかと思われる。7～12は用途不明の棒状鉄器であるが、10～12の白浜遺跡出土例は、付近から鉄釣針が4点出土していることや、その細長い形状から、鉄釣針の未製品の可能性も考えられる。13～20はいずれも用途不明の鉄片で、何らかの製品の一部かもしれない。

4 東海地方出土鉄器の特徴

東海地方の鉄器の出現は、西通北遺跡出土例や朝日遺跡出土例、そして有東遺跡出土の木製刈鎌の存在を評価するのであれば、弥生時代中期中葉～後葉頃に工具と農具から受容されたことになる。ただし、この段階での鉄器の出土は2点に限られ、東海地方における鉄器受容開始を示唆させる程度である。一定量の鉄器の出土が認められ始めるのは、弥生時代後期以降のことであり、鉄器の器種も農具に限定されず、多様な形態のものが認められ始める。特に、中期では1点も出土していなかった武器の出土が目立つようになる。弥生時代終末期には南山畑遺跡で鍛冶遺構が認められており、小規模ながら東海地方で鍛冶による鉄器製作がおこなわれ始めていたことが窺える。



第11図 東海地方出土不明鉄器の諸例

1. 東原 2. 元屋敷 3. 菖蒲ヶ谷 4・6. 祝田 5. 山奥 7・8. 山木
9・13. 雌鹿塚 10~12・19・20. 白浜 14・15. 登呂 16. 南山畑 17. 則武向 18. 金塚

東海地方において鉄器が多器種かつ一定量出土し始めるのは、弥生時代後期段階からである。しかし、隣接する南関東地方では、器種としては農工具が主体であるものの武器を含む鉄器が、弥生時代中期後葉の宮ノ台式期には一定量出土している（安藤1997）。東海地方の鉄器の受容とその後の普及が、南関東地方よりもやや遅れる点については、周辺地域の動向も踏まえて、今後検討が必要となるだろう。

おわりに

本稿では、集成した鉄器を不明鉄器も含め、可能な限り形状や用途を類推し、積極的に評価した。今回、実見することによって器種が判明した不明鉄器も存在した。用途・性格不明の鉄片の中には、鉄器の未製品や鉄器製作時に生み出される鉄素材の裁断片などが含まれている可能性もあり、軽んじることはできない。そういう意味でも、今後は

性格不明の鉄器片にも注意を払っていく必要があるのではないかと思う。

本稿は、東海地方における鉄器化を考える準備作業として、弥生鉄器の集成と概観に終始した。今後は弥生石器の消長も踏まえ、検討を進めていくことを課題としたい。

本稿執筆のための資料の実見・実測に際しては、下記の方々・機関に便宜をはかって頂いた。末筆ながら記して感謝申し上げたい。

（敬称略、順不同）

岩崎しのぶ、清水政宏、杉浦裕幸、高橋健太郎、平賀大蔵、藤川俊、丸杉俊一郎、森泰通。

静岡県教育委員会、豊田市教育委員会、美濃加茂市民ミュージアム、四日市市教育委員会、海の博物館。

註

1 本稿における「東海地方」とは、日本列島本州中央部の内、太平洋側の地方を指し、現在の行政区分での愛知・岐阜・三重・静岡の4県域にあたる。

2 愛知県名古屋市熱田区の高蔵遺跡から弥生時代前期に帰属される鉄製刀子が出土したと概要報告書中で報告されている(名古屋市教育委員会1982)が、本報告では明確な弥生時代前期の金属製品は出土していないと報告されている(山田ほか編2003)。本報告に則り、本稿では高蔵遺跡出土資料は検討の対象に含めていない。

引用・参考文献

- 天石夏実 2000 「鷹ノ道遺跡(第6次)」『ふちゅ〜る』No. 8 静岡市教育委員会
- 浅野毅 1988 「小黒遺跡」『静岡・清水平野の弥生時代—新出土品にみる農耕生活—』静岡市立登呂博物館
- 安藤広道 1997 「南関東地方石器—鉄器移行期に関する一考察」『横浜市歴史博物館研究紀要』第2号 横浜市歴史博物館
- 梅島満 1978 「駿河湾を中心とする土師器の研究」『駿河』第31号 駿河郷土史研究会
- 大村直 1983 「弥生時代における鉄鍬の変遷とその評価」『考古学研究』第30巻第3号 考古学研究会
- 小栗鐵次郎 1932 「銅鍬鐵鍬を共存した名古屋市瑞穂町東牧の彌生式遺蹟」『愛知縣史蹟名勝天然紀念物調査報告』第十 愛知縣
- 小栗鐵次郎 1933 「名古屋市西區則武町向貝塚」『愛知縣史蹟名勝天然紀念物調査報告』第十一 愛知縣
- 小野真一 1957 『静岡県東部古代文化総覧』 蘭契社書店
- 小野真一 1971 「駿河矢崎遺跡調査略報」『駿豆の遺跡研究』(1) 沼津女子高等学校郷土研究部
- 川越哲志 1977 「弥生時代の鉄製収穫具について」『考古論集—慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集—』松崎寿和先生退官記念事業会
- 川越哲志 1993 「弥生時代の鉄斧と鉄鉞」『考古論集—潮見浩先生退官記念論文集—』潮見浩先生退官記念事業会
- 佐藤達雄 1995 「運ばれてきた鉄斧—清水市長崎遺跡出土鉄斧の考古学的検討—」『設立10周年記念論文集』(助)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 下條信行編 1998 『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』愛媛大学
- 澄田正一編 1967 『新編 一宮市史』資料編二 一宮市
- 杉山和徳 2009a 「ミニチュア鉄剣に関する一考察」『研究紀要』第15号 (助)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 杉山和徳 2009b 「東駿河の弥生時代の始まり」『平成21年度遺跡調査報告会 静岡の原像を探る』(助)静岡県埋蔵文化財調査研究所・静岡県教育委員会
- 杉山和徳 2010 「西通北遺跡—弥生時代中期中葉の環濠の調査—」『月刊考古学ジャーナル』No.600 ニューサイエンス社
- 田中謙 2008 「弥生時代における鈍の機能分化とその意義」『地域・文化の考古学—下條信行先生退任記念論文集—』下條信行先生退任記念事業会
- 土屋了介 2009 「弥生時代単環状鉄鉞の型式学的研究—断

面長方形・断面二等辺三角形にみる系譜の違い—」『東海史学』第43号 東海大学史学会

中嶋郁夫 1992 「弥生時代鉄製品一覧」『静岡県史』資料編3 考古三 静岡県

平野吾郎 1987 「川合遺跡出土の鉄斧・鉄鎌ならびに鋤先の出土状態について」『研究紀要』II (助)静岡県埋蔵文化財調査研究所

松井一明 1997 「東海地方における鉄器の普及と展開」『第4回鉄器文化研究集会 東日本における鉄器文化の受容と展開』鉄器文化研究集会

松井和幸 1982 「大陸系磨製石器類の消滅とその鉄器化をめぐって」『考古学雑誌』第68巻第2号 日本考古学会

松井和幸 1993 「鉄鎌について」『考古論集—潮見浩先生退官記念論文集—』潮見浩先生退官記念事業会

村山恭通 1992 「中九州における弥生時代鉄器の地域性」『考古学雑誌』第77巻第3号 日本考古学会

村上恭通 1998 『倭人と鉄の考古学』青木書店

村上恭通 2007 『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店

山田鉦一 1980 「瑞穂遺跡—1951・52・54年度発掘調査報告—」『人類学博物館紀要』第2号 南山大学人類学博物館

山田隆一 1988 「近畿弥生社会における鉄器化の実態について」『網干善教先生華甲記念考古学論集』網干善教先生華甲記念会

報告書

足立順司ほか編 1995 『長崎遺跡』IV (助)静岡県埋蔵文化財調査研究所

天野博之編 1999 『南山畑遺跡』豊田市教育委員会

石川治夫編 1990 『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書』II 沼津市教育委員会

石黒立人ほか編 1994 『朝日遺跡』V (助)愛知県埋蔵文化財センター

伊藤美鈴 1996 「峯山台状墓・崇信寺古墳群」『静岡県森町飯田の遺跡』森町教育委員会

岩野見司ほか編 1965 『川路萩平(C地点)遺跡・大宮八剣遺跡』新城市教育委員会

小野真一編 1970 『目黒身—弥生・古墳時代集落址の調査—』沼津考古学研究所

小野真一ほか編 1968 『東名高速道路(静岡県内工事)関係埋蔵文化財調査報告書』静岡県教育委員会・日本道路公団

金子智子編 2004 『城ノ谷遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター

川崎志乃ほか編 2009 『上箕田遺跡(第3次)・上箕田城跡、上原遺跡、尾野山城跡、打越城発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター

木村弘之編 1992 『竹之内1号墓遺跡発掘調査報告書』磐田市教育委員会

蔵本俊明編 2001 『菖蒲ヶ谷遺跡・山ノ口古墳群』(助)静岡県埋蔵文化財調査研究所

齊藤基生・可児光生・磯谷祐子編 1994 『伊瀬粟地遺跡発掘調査報告書』美濃加茂市教育委員会

佐口節司編 2003 『県道浜松袋井線緊急地方道道改築工

事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 磐田市教育委員会
佐口節司ほか編 2006 『新豊院山遺跡発掘調査報告書』Ⅲ
磐田市教育委員会
柴田睦編 1993 『椿野遺跡』(財)静岡県埋蔵文化財調査研
究所
渋谷昌彦・坂巻隆一・足立順司編 1985 『田ノ谷遺跡発掘
調査報告書』 島田市教育委員会
清水政宏編 2003・2004 『山奥遺跡』Ⅰ・Ⅱ 四日市市教
育委員会
鈴木光一編 1994 『祝田遺跡』(財)静岡県埋蔵文化財調査
研究所
田中秀和編 1998 『大城遺跡発掘調査報告書』 安濃町教
育委員会・安濃町遺跡調査会
谷本鋭次編 1970 『高松弥生墳墓発掘調査報告』 津市教
育委員会
田村隆太郎編 2006 『森町円田丘陵の遺跡』(財)静岡県埋
蔵文化財調査研究所
中野宥編 1989 『登呂遺跡出土資料目録』写真編 登呂遺
跡基礎資料4 静岡市立登呂博物館
中村文哉編 1994 『欠山遺跡』 小坂井町教育委員会
萩本勝ほか編 1990 『白浜遺跡発掘調査報告』 本浦遺跡
群調査委員会
橋本敬之編 1994 『御殿川流域遺跡群』Ⅱ (財)静岡県埋蔵
文化財調査研究所
平野和男編 1971 『ひらさわ 平沢遺跡発掘調査報告書』
佐久間町教育委員会
平野吾郎編 1983 『有東遺跡』Ⅰ下 静岡県教育委員会
平野吾郎・山田成洋・伊藤律子編 1991・1992 『川合遺跡
遺物編』2 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
穂積裕昌・小菅文裕編 1995 『一般国道23号中勢道路(6
工区)建設事業に伴う南谷遺跡・稲生遺跡発掘調査報告』
三重県埋蔵文化財センター
前田清彦ほか編 1989 『郷中・雨谷』 豊川市教育委員会
松井一明編 1983 『浜北市東原遺跡B地点』(Ⅰ) 浜北市
教育委員会
松井一明ほか編 2004 『愛野向山Ⅱ遺跡』 袋井市教育委
員会
丸杉俊一郎・平塚智久・大谷宏治編 2008 『矢畑遺跡』
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
水野裕之ほか編 1999 『三王山遺跡(第1～5次)』 名古
屋市教育委員会
宮腰健司編 1992 『朝日遺跡』Ⅲ (財)愛知県埋蔵文化財セ
ンター
森泰通ほか編 2001 『神明遺跡』Ⅱ 豊田市教育委員会
森川幸雄ほか編 2002 『近畿自動車道名古屋神戸線(第二
名神)愛知県境～四日市JCT建設事業に伴う金塚遺跡・
金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』 三重県埋蔵文化
財センター
八木勝行・磯部武男編 1980 『日本住宅公団藤枝地区埋蔵
文化財発掘調査報告書』Ⅰ 藤枝市土地開発公社・藤枝

市教育委員会
八幡一郎ほか編 1969 『山木遺跡—第二次調査概報—』
菫山町教育委員会
山田鉦一ほか編 2003 『高蔵遺跡(第1次)』 名古屋市教
育委員会
渡辺博人編 1999 『蘇原東原遺跡群発掘調査報告書』 各
務原市埋蔵文化財調査センター
名古屋市教育委員会 1982 『高蔵遺跡発掘調査概要報告
書』

図版出典

表 筆者が作成した。

第1図 1～3・6～11は遺物の保管機関において撮影し
た写真と遺跡の報告書図面をもとに筆者が作成した。4・
5・12・13・15～17は遺跡の報告書図面のレイアウトを
一部改変して再トレースした。14は遺物の保管機関にお
いて筆者が作成した。

第2図 1～7・12・17は遺跡の報告書図面のレイアウト
を一部改変して再トレースした。8～11・15・16は遺物
の保管機関において撮影した写真と遺跡の報告書図面を
もとに筆者が作成した。13・14・18は遺物の保管機関に
おいて筆者が作成した。

第3図 1・3は遺物の保管機関において筆者が作成した。
2は遺跡の報告書図面のレイアウトを一部改変して再ト
レースした。

第4図 1・4～6・10・11は遺物の保管機関において筆
者が作成した。2・3・7～9・12は遺跡の報告書図面
のレイアウトを一部改変して再トレースした。

第5図 1・6～8は遺物の保管機関において筆者が作成
した。2～5は遺跡の報告書図面のレイアウトを一部改
変して再トレースした。

第6図 1は遺跡の報告書図面のレイアウトを一部改変し
て再トレースした。2～5は遺物の保管機関において筆
者が作成した。

第7図 1・5～8は遺物の保管機関において筆者が作成
した。2～4は遺跡の報告書図面のレイアウトを一部改
変して再トレースした。

第8図 9～11・13～16は遺物の保管機関において筆者が
作成した。12は遺物の保管機関において撮影した写真と
遺跡の報告書図面をもとに筆者が作成した。

第9図 1・2・6～11・13・15～20・24・25は遺跡の報
告書図面のレイアウトを一部改変して再トレースした。
3～5・12・14・21～23は遺物の保管機関において筆者
が作成した。

第10図 土屋2009aのレイアウトを一部改変して再トレース
した。

第11図 1・2・7～9・13・14・16～19は遺跡の報告書
図面のレイアウトを一部改変して再トレースした。3～
6・10～12・15・20は遺物の保管機関において筆者が作
成した。

Emergence of Iron Implements in Tokai Region

Kazunori SUGIYAMA

Summary: In this paper I examine the history of iron use in Tokai region by compiling excavated iron materials. We can trace back the first appearance of iron implements of Tokai region to the mid- Yayoi period, still its variety and quantity were not yet sufficient before the later Yayoi period. By adopting data of features excavated in Aichi prefecture and giving a positive estimate to the iron objects having classified into “unknown”, I recognize the possibility that producing of iron implements with a chisel cutter and processing for reuse of iron products can be started in the final Yayoi period.

Key words: Yayoi period, Tokai region, iron implements, blacksmith features, making of iron implements, re-processing, diversion

遠江・駿河の頸部を呑み込む矢柄をもつ鉄鏃の意義

—無茎式・短茎式鉄鏃との比較を通じて—

大谷 宏 治

要旨 古墳時代後期以降、西日本では弥生時代から継続的に用いられた無頸式鉄鏃（無茎式・短茎式を総称）が衰退し、鉄鏃組成から減少・欠落する。一方で、遠江・信濃以東の東日本では古墳時代後期以降も継続的に用いられるとともに、無頸式鉄鏃を模倣したと考えられる頸部を呑み込む矢柄をもつ鉄鏃（『頸部被覆鉄鏃』）が存在する。この「頸部被覆鉄鏃」は無頸式との副葬数、副葬状況などの比較から無頸式と同様の機能を有していたと考えた。このことから、東日本では無茎式の代用として、頸部被覆鉄鏃を無茎式として機能させていたと想定した。さらに、頸部被覆式鉄鏃の創出は消費者（使用者）側が古墳時代後期・終末期における無頸式鉄鏃の生産・流通数の減少を補うため、外見上工夫し、平根式鉄鏃を無頸式鉄鏃に見立てることで伝統的な祭祀に必要であった「無頸式鉄鏃」を意図的に創出したと考えた。

キーワード：頸部を呑み込む矢柄をもつ鉄鏃（「頸部被覆鉄鏃」）、無頸式鉄鏃（無茎式・短茎式）、古墳祭祀、鉄鏃の機能

1. はじめに

古墳時代後期になると、弥生時代以来伝統的に用いられていた無茎式・短茎式鉄鏃（以下、両者を合わせて「無頸式」とする）の副葬が東日本を除いて衰退するなか（杉山1988, 水野1995）で、無頸式と類似する矢柄の装着方法を採用する鉄鏃が存在する。それは頸部を呑み込む（根挟み手法を用いた）矢柄が装着される矢鏃（以下、「頸部被覆鉄鏃」と仮称する）である。この頸部を意図的に矢柄で覆い、あたかも無頸式鉄鏃のように取扱う方式は、それとの関連が想定できる。このような頸部被覆鉄鏃について遠江・駿河地域の事例を収集するとともに、無頸式鉄鏃との比較を通じて、その意義について考えたい（註1・2）。

2. 遠江・駿河における「頸部被覆鉄鏃」の事例

まず、遠江・駿河の事例について集成方法などについて記載する。報告書において頸部に木質や樹皮巻、糸巻の痕跡の残るものを収集した（第1表）。その際、報文あるいは実見で頸部被覆鉄鏃であることが明らかなものについては表中の「確」（確実度）に「◎」で記した。報文で頸部に残る木質が矢柄かどうか確認できないものについては同じく▲で表記した。

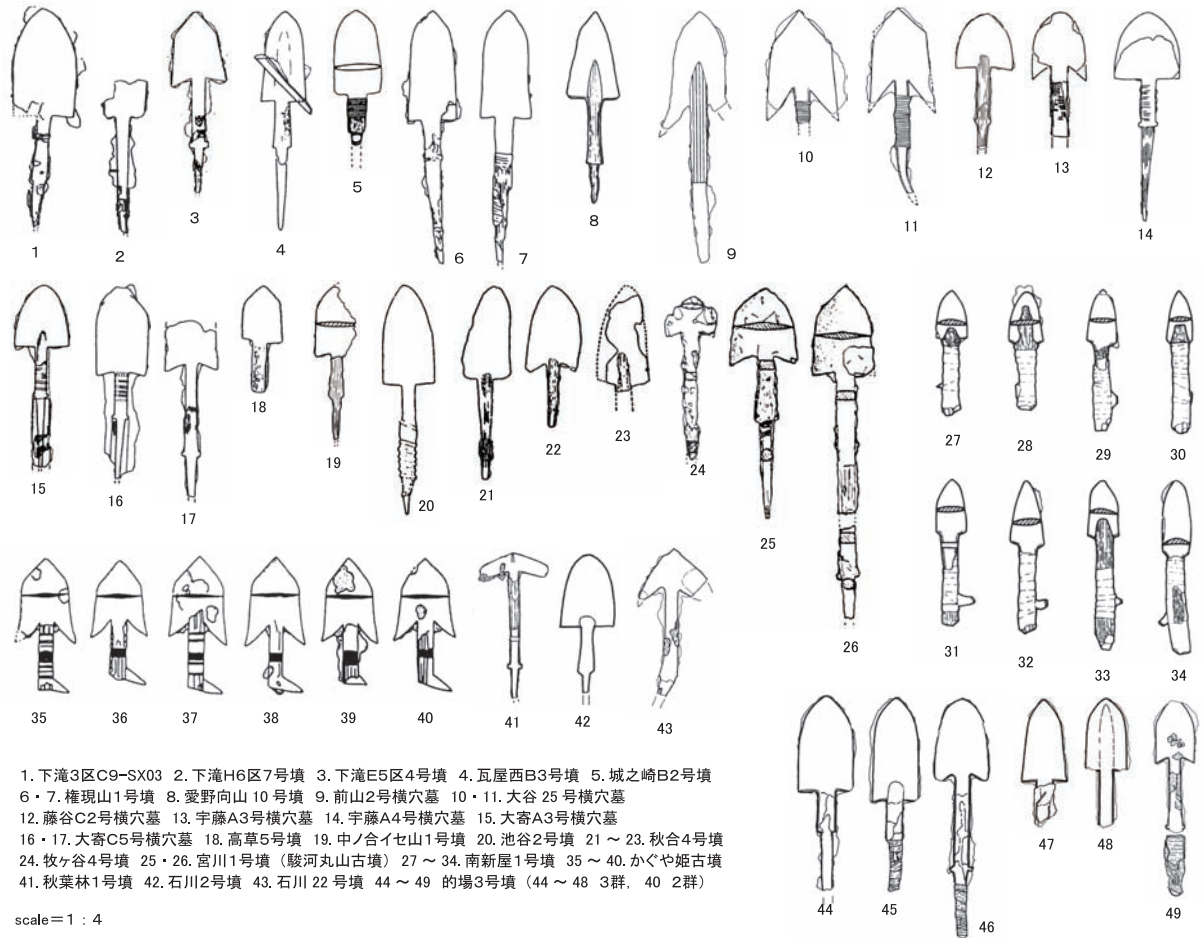
また、出土（副葬）状況について、竪穴系埋葬施設では盗掘等がない場合は副葬時の原位置を保持しているものとする。横穴系埋葬施設については、追葬時のかたづけ行為や盗掘などによる移動が行われている可能性があるが、鉄鏃複数個体が近接して重なり合う状態で出土した場合、鏃身の向きが同じ場合は、同一の束（鏃群）とする。近接するものでも重なりがみられない場合や鏃身の向きが逆の場合は単独で用いられたと判断した。

3. 遠江・駿河における「頸部被覆鉄鏃」の特徴

(1) 「頸部被覆鉄鏃」の特徴

上記で集成した資料（第1図）を基礎に分析を進めたい。

頸部被覆が行われた鉄鏃形式 筆者が確認できたものは、頸部被覆鉄鏃である可能性のあるものを含め26古墳（横穴墓含む）から約50例出土している。このうち藤枝市南新屋1号墳（第1図27～34, 註3）を除く、25古墳が平根式鉄鏃である。頸部被覆が採用された鉄鏃形式は平根式では腸扶柳葉式（第1図9）、長三角形式（同1・4～7・8など）、腸扶長三角形式（同16・17・22・46）、腸扶五角形式（10・11・35～40など）、三角形式（12・15・42など）、腸扶三角形式（13・49）、鏃身が短い腸扶三角



1. 下滝3区C9-SX03 2. 下滝H6区7号墳 3. 下滝E5区4号墳 4. 瓦屋西B3号墳 5. 城之崎B2号墳
 6・7. 権現山1号墳 8. 愛野向山10号墳 9. 前山2号横穴墓 10・11. 大谷25号横穴墓
 12. 藤谷C2号横穴墓 13. 宇藤A3号横穴墓 14. 宇藤A4号横穴墓 15. 大寄A3号横穴墓
 16・17. 大寄C5号横穴墓 18. 高草5号墳 19. 中ノ合イセ山1号墳 20. 池谷2号墳 21～23. 秋合4号墳
 24. 牧ヶ谷4号墳 25・26. 宮川1号墳(駿河丸山古墳) 27～34. 南新屋1号墳 35～40. かくや姫古墳
 41. 秋葉林1号墳 42. 石川2号墳 43. 石川22号墳 44～49. 的場3号墳(44～48. 3群, 40. 2群)

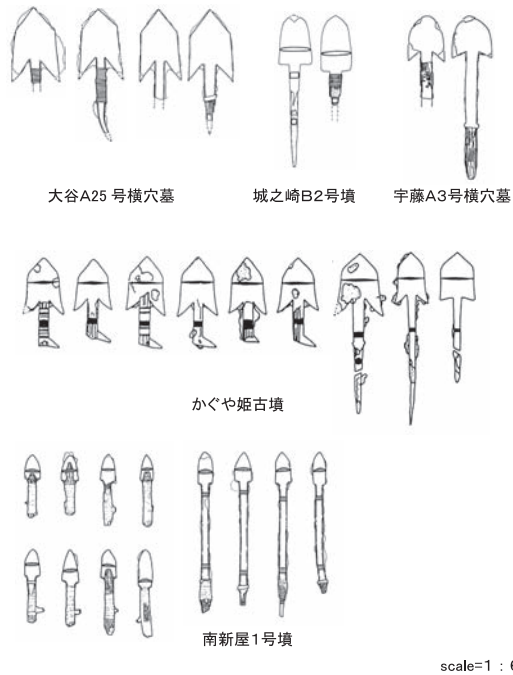
scale=1:4

第1図 遠江・駿河の頸部被覆鉄鍬

第1表 遠江・駿河の頸部被覆鉄鍬出土古墳一覧表

| 古墳名 | 所在地 | 墳形 | 規模 | 埋葬 | 規模 | 確 | 頸部被覆鉄鍬形式 | 数量 | 無頸 | 尖根 | 矢柄 | 出土 | 鏡 | 馬 | 飾 | その他副葬品 | 時期 | 文献 |
|---------------------|-----|----|------|-----|-----|---|-------------------|----|----|----|----|-----|---|---|---|--------|--------|-----|
| 1 下滝5区4号墳 | 浜松 | 円 | — | 横石 | 3.6 | ▲ | 腸扶五角1点 | 1 | × | × | b? | 不明 | × | × | × | 特になし | 飛鳥I | 文1 |
| 2 下滝3区C9 SX03 | 浜松 | 不明 | — | 木直 | 2.8 | ▲ | 長三角1点 | 1 | × | × | b? | 不明 | × | × | × | 特になし | TK10? | 文1 |
| 3 下滝6区7号墳 | 浜松 | 円 | 10 | 横石 | 5.1 | ▲ | 平根式1点 | 1 | × | ◎ | b? | 不明 | × | × | × | 特になし | 飛鳥I | 文1 |
| 4 瓦屋西B3号墳 | 浜松 | 後門 | 28.1 | 木室 | 3.2 | ▲ | 長三角2点 | 2? | × | × | b? | 不明 | × | × | × | 特になし | TK10 | 文2 |
| 5 城之崎B2号墳 | 磐田 | 円 | 13 | 横石 | 4.5 | ◎ | 長三角1点 | 1 | × | ◎ | b | Z2 | × | × | × | 特になし | TK209? | 文3 |
| 6 権現山1号墳 | 磐田 | 後門 | 18 | 木室 | 4.3 | ▲ | 長三角3点 | 3? | × | ◎ | b? | Y | × | ○ | × | 特になし | TK43 | 文4 |
| 7 愛野向山10号墳 第2主体部 | 袋井 | 円 | 8 | 木直 | 3.0 | ◎ | 長三角1点 | 1 | × | ◎ | a | Z1 | × | × | × | 特になし | TK10 | 文5 |
| 8 前山2号横穴墓 | 掛川 | — | — | 横穴墓 | 2.2 | ◎ | 腸扶柳葉1点 | 1 | × | × | a | X | × | × | × | 特になし | TK43? | 文6 |
| 9 大谷A25号横穴墓 | 掛川 | — | — | 横穴墓 | 4.7 | ◎ | 五角2点 | 2 | × | ◎ | b | X | × | ○ | × | 特になし | 飛鳥I | 文7 |
| 10 藤谷C2号横穴墓 | 菊川 | — | — | 横穴墓 | 3.7 | ◎ | 三角1点 | 1 | × | ? | a | X | × | × | × | 特になし | 飛鳥I | 文8 |
| 11 宇藤A3号横穴墓 | 菊川 | — | — | 横穴墓 | 3.9 | ◎ | 腸扶三角?1点 | 1 | × | ◎ | b | X | × | × | × | 特になし | TK43 | 文9 |
| 12 宇藤A4号横穴墓 | 菊川 | — | — | 横穴墓 | 3.4 | ◎ | 三角1点 | 1 | × | ◎ | b | X | × | × | × | 特になし | TK209 | 文9 |
| 13 大寄A3号横穴墓 | 牧之原 | — | — | 横穴墓 | 2.9 | ◎ | 三角1点・三角1? | 2? | × | × | a | X | × | × | × | 特になし | TK209 | 文10 |
| 14 大寄C9号横穴墓 | 牧之原 | — | — | 横穴墓 | 6.3 | ◎ | 腸扶長三角2点 | 2 | × | ◎ | b | X | × | × | × | 特になし | TK209 | 文10 |
| 15 秋合4号墳 | 藤枝 | 円 | 11 | 横石 | 5.0 | ◎ | 長三角2点、 腸扶長三角1点 | 3 | × | ◎ | a | X | × | × | × | 特になし | TK43 | 文11 |
| 16 南新屋1号墳 第2主体部 | 藤枝 | 円 | 20 | 木直 | 4.0 | ◎ | 尖根三角7点 尖根柳葉1点 | 8 | × | ◎ | a | Z1 | ○ | × | × | 特になし | TK10 | 文12 |
| 17 高草5号墳 | 藤枝 | 円 | 10.8 | 横石 | 7.3 | ▲ | 五角1点 | 1 | × | × | b? | X | × | × | × | 特になし | 飛鳥I | 文13 |
| 18 中ノ合イセ山1号墳 | 藤枝 | 円 | — | 横石 | — | ◎ | 腸扶三角1点 | 1 | × | ? | b | X | × | × | × | 特になし | 飛鳥I | 文14 |
| 19 池谷2号墳 | 藤枝 | 古墳 | — | 横石 | 6.2 | ▲ | 長三角1点 | 1 | × | ◎ | b? | Z1? | × | × | × | 特になし | TK43 | 文15 |
| 20 宮川1号墳(駿河丸山) | 静岡 | 方 | 21 | 横石 | 9.7 | ▲ | 五角1点 | 1 | × | ◎ | b? | 不明 | × | ○ | × | 豊富な副葬品 | TK209～ | 文16 |
| 21 牧ヶ谷4号墳 | 静岡 | 古墳 | — | 横石 | 4.9 | ▲ | 腸扶三角1点 | 2+ | ◎ | × | b? | X | × | × | × | 特になし | 飛鳥II? | 文17 |
| 22 かくや姫古墳 | 富士 | 円? | 15 | 横石 | 9.3 | ◎ | 腸扶五角7点 | 7 | × | ◎ | a | 不明 | × | × | × | 特になし | 飛鳥I～ | 文18 |
| 23 石川2号墳 | 沼津 | 円 | 9 | 横石 | 5.2 | ◎ | 三角 | 1 | × | ◎ | a | X | × | ○ | × | 特になし | 飛鳥I～ | 文19 |
| 24 石川22号墳 | 沼津 | 円 | 5 | 横石 | 2.7 | ◎ | 腸扶三角 | 1 | × | × | b? | Y | × | × | × | 特になし | 飛鳥I～ | 文19 |
| 25 的場3号墳 | 沼津 | 古墳 | — | 横石 | 6.3 | ◎ | 長三角等6点以上 | 6+ | ◎ | ◎ | b? | X | × | × | × | 鉄鐔 | TK209～ | 文20 |
| 26 秋葉林1号墳 | 沼津 | 円 | 9.5 | 横石 | 6.3 | ◎ | 飛燕式1点 | 1 | ◎ | ◎ | b | Y | × | × | × | 特になし | TK209～ | 文21 |

※見出し 埋葬=埋葬施設 無頸=無頸式鉄鍬の有無 尖根=尖根式の有無 馬=馬具 飾=裝飾付大刀 鏡・飾・馬=それぞれの有無
 ※見出し 確=頸部被覆鉄鍬であることの確実度 ◎=確実 ▲=可能性が高い ※略号 五角=五角形式 三角=三角形式 柳葉=柳葉式
 ※略号 円=円墳 方=方墳 後門=前方後門墳 造門=造出付円墳 堅石=堅穴式石室 木直=木棺直葬 横石=横穴式石室 木室=横穴式木室(第2・3表も同じ)
 ※頸部被覆鉄鍬形式の項目 南新屋1号墳を除いてすべて平根式のため、南新屋1号墳のみ尖根を表記し、それ以外は平根を省いている。
 ※表中の二重線より上が、遠江、下が駿河(伊豆を含む)の古墳・横穴墓



第2図 同一古墳における頸部被覆の採用と非採用

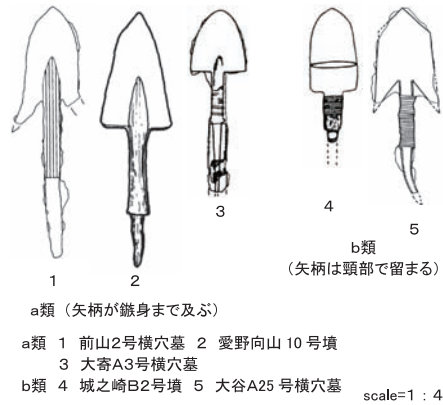
形式(24・43, 註4)、飛燕式(41)であり、中でも長三角形式、五角形式が多い。現状では遠江・駿河では出土数が少ない方頭式・圭頭式には確認できない。

一方、唯一尖根式で採用されるのは、三角形式(第1図27~33)と柳葉式(同34)である。

頸部被覆鉄鏃の形式からみると、各地域で一般的に用いられる鏃形式(大谷2004, 静岡埋文研2003など)が頸部被覆鉄鏃に採用されるとともに、五角形式や腸扶五角形式のように古墳時代後期後半以降創出された鉄鏃(杉山1988, 水野1995)についても頸部被覆鉄鏃に採用されている。

また、沼津市秋葉林1号墳では、最新の鉄鏃形式である飛燕式が「頸部被覆鉄鏃」として利用されており、新形式の採用時の取り扱いについて注目できる(大谷2010)。新形式の採用に当たって伝統的な手法を取り入れることで取り込みを図った可能性を想定している(大谷2010)。

頸部被覆の採用 大谷A25号横穴墓、城之崎B2号墳、宇藤A3号横穴墓、南新屋1号墳、かがや姫古墳のように同形式の鉄鏃が複数存在するが、すべてに頸部被覆が行われているわけではない(第2図)。これらの古墳では同一形式の中から数本選択して採用している。つまり、平根式あるいは同一形式すべてを頸部被覆鉄鏃としているわけではなく、必要な本数のみを頸部被覆鉄鏃として扱ったと推測でき、特定の鉄鏃の頸部を矢柄で覆い隠すことに重点が



第3図 頸部被覆鉄鏃の矢柄の装着方法

置かれたと考えるべきであろう。

また、南新屋1号墳やかがや姫古墳の事例をみると頸部被覆が採用されない鏃よりも頸部や茎が短いため、頸部被覆を容易にするため変形させられた可能性もある。

出土数 1~3本の少数が多いが、南新屋1号墳やかがや姫古墳、的場3号墳のように5本以上が採用されている場合もある(第1表)。

矢柄の装着方法 遠江・駿河では、頸部被覆鉄鏃の矢柄の装着方法に少なくとも2種類が確認できる(第3図)。

a類 無頸式鉄鏃のように根挟み式に矢柄が頸部を完全に覆い、矢柄の先端が鏃身に及ぶもの。大寄A3号横穴墓、藤谷C2号横穴墓例など

b類 矢柄が頸部のみを覆い鏃身まで及ばないもの(頸部で留まるもの)。大谷A25号横穴墓、宇藤A7号横穴墓例など

副葬時の扱われ方 頸部被覆鉄鏃は横穴式石室をはじめとする横穴系埋葬施設を中心として出土しているため、追葬時の移動や盗掘・攪乱により出土状況が不明確なものが多いが、次のような配置の特徴が確認できる(第4図)。

配置X 単独で出土する場合(頸部被覆鉄鏃のみが複数出土する場合も含む) 大谷A25号横穴墓、的場3号墳など多数

配置Y 無頸式・平根式鉄鏃のみと共伴する場合 秋葉林1号墳、石川22号墳

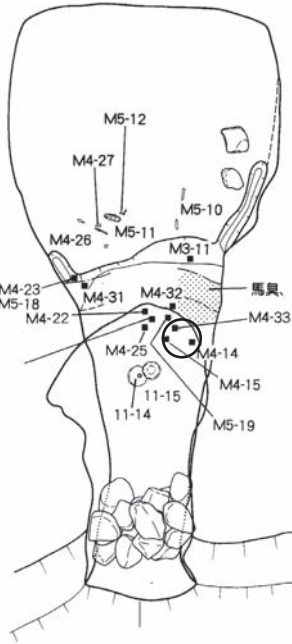
配置Z 尖根式鉄鏃と共伴する場合

Z1 尖根式のみと共伴する場合

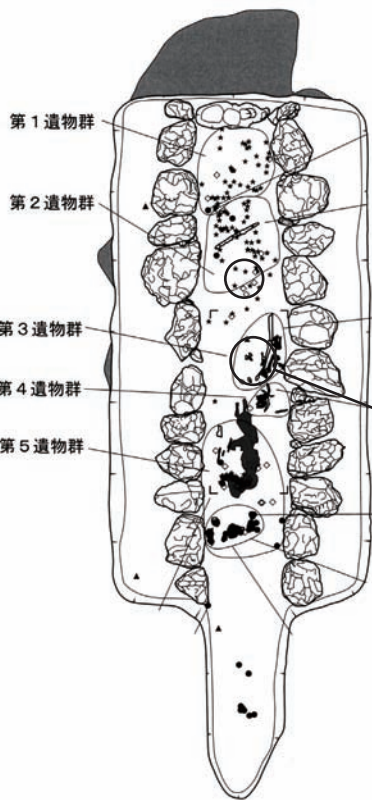
愛野向山10号墳、南新屋1号墳

Z2 尖根式と無頸式・平根式と共伴する場合

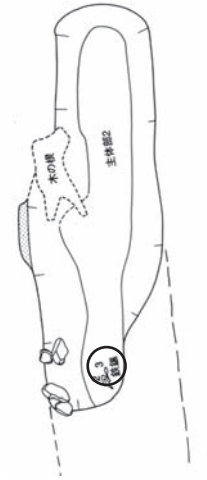
城之崎B2号墳



配置X
掛川市大谷A25号横穴墓
頭部被覆鉄鍬2点それぞれが単独
で出土。



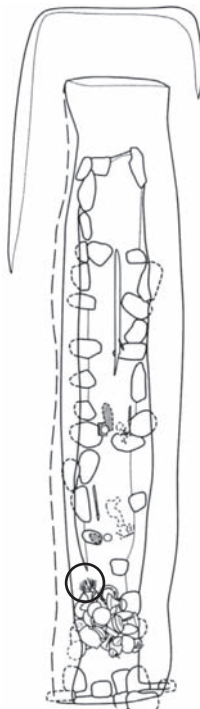
配置X
沼津市の場3号墳
第3遺物群では頭部被覆鉄鍬・
無頭式鉄鍬それぞれが単独で出
土（本来は無頭式と頭部被覆平
根式鉄鍬の束で副葬か）。
第2遺物群では頭部被覆鉄鍬が
単独で出土。



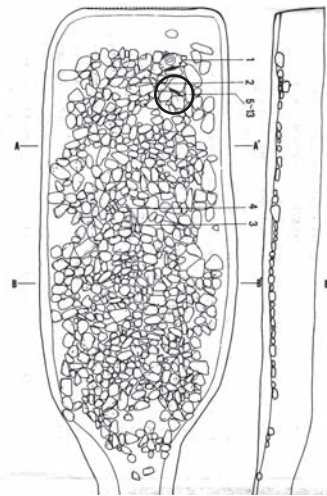
配置Z1
袋井市愛野向山10号墳
頭部被覆鉄鍬と尖根式鉄鍬
が共伴。



配置Y
沼津市秋葉林1号墳
頭部被覆鉄鍬と無頭式鉄鍬が共伴。



配置Z1
藤枝市南新屋1号墳
頭部被覆鉄鍬と尖根式鉄鍬が束で出土
（尖根式と頭部被覆鉄鍬は同形式）。



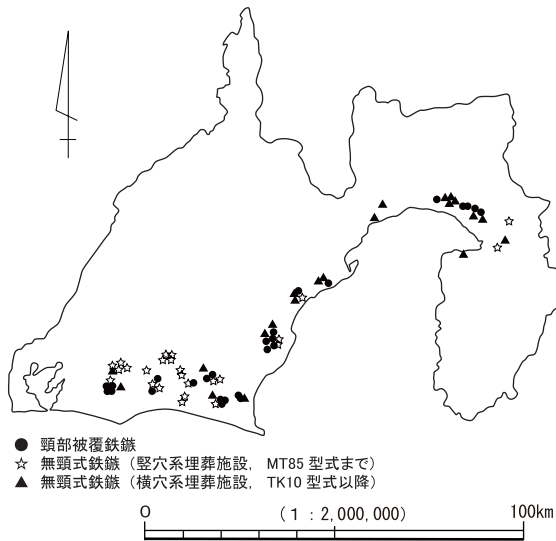
配置Z2
磐田市城之崎B2号墳
平根式・尖根式鉄鍬と束で出土。



配置X
牧之原市大寄A3号横穴墓
頭部被覆鉄鍬2点のみが共伴。

大寄・的場以外 scale=1:60
大寄・的場全体 scale=1:100
的場3細部 scale=1:40
大寄A3細部 scale=1:60

第4図 頭部被覆鉄鍬の配置状況



第5図 頸部被覆鉄鍔出土古墳の分布

(2) 分布と時期について

分布 上述したように遠江・駿河では26古墳出土しているが遠江に14古墳、駿河に12古墳が存在する(第5図, 註5)。遠江・駿河ともに地域的な偏在は確認できないが、西遠江では浜松市下滝古墳群や近在する瓦屋西古墳群、東遠江では近接する菊川市宇藤横穴墓群、藤谷横穴墓群で出土している点が注目できる。

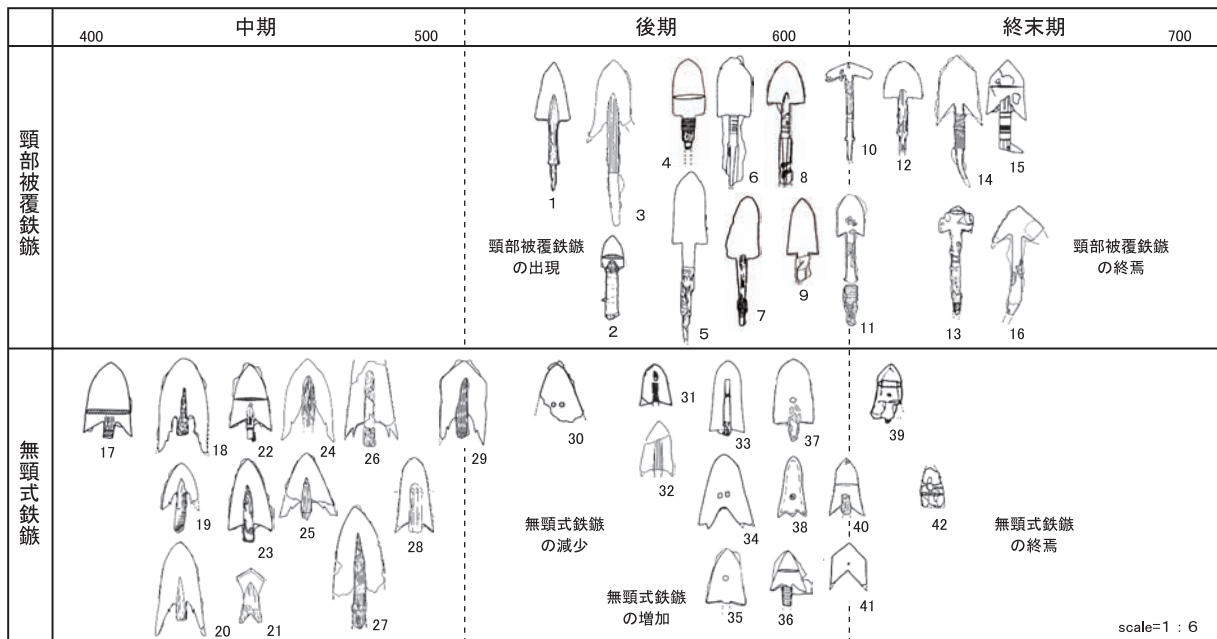
埋葬施設についても、木棺直葬、横穴式石室、横穴式木

室、横穴墓と遠江・駿河で確認される埋葬施設で出土しており、埋葬施設による偏在は確認できない。

出現時期と変遷 頸部被覆鉄鍔で最も古い事例は愛野向山10号墳、辺田平12号墳、南新屋1号墳がTK10(遠江Ⅲ期前葉)～MT85型式期(遠江Ⅲ期中葉)に位置づけられ、TK43型式期(遠江Ⅲ期中葉)以降、秋合4号墳、前山2号横穴墓などが確認でき、古墳数の増加とともに頸部被覆鉄鍔も増加する。TK43～TK209型式(遠江Ⅲ期後葉)に位置づけられる古墳が多いが、飛鳥Ⅰ期(遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前半)以降もほぼ同数存在する。牧ヶ谷4号墳のように飛鳥Ⅰ期(古墳時代終末期前半)で終焉を迎える(第6図)。

時期別の埋葬施設における配置状況 埋葬施設における配置状況をみると、出現期の愛野向山10号墳(Z1)や、尖根式の鍔群で出土した南新屋1号墳(Z1)では尖根式と組み合わせられ、TK43型式期までは城之崎B2号墳(Z2)や池谷2号墳(Z1か)のように尖根式と組み合わせられることもあるが、基本的には、頸部被覆鉄鍔が単独あるいはその組み合わせ、あるいは平根式鉄鍔と組み合わせられることが多いことが確認できる。

時期が降るにつれ、単独(配置X)で用いられる傾向にある。



1. 愛野向山10号墳 2. 南新屋1号墳 3. 前山2号横穴墓 4. 城之崎B2号墳 5. 権現山1号墳 6. 大寄C9号横穴墓 7. 秋合4号墳 8. 大寄A3号横穴墓 9-11・37. 的場3号墳 10・40. 秋葉林1号墳 12. 藤谷C2号横穴墓 13. 牧ヶ谷4号墳 14. 大谷A25号横穴墓 15. かぐや姫古墳 16. 石川22号墳 17. 各和金塚古墳 18・19. 堂山古墳 20・21. 長池4号墳 22. 五ヶ山B2号墳 23. 千人塚古墳 24. 五ヶ山B1号墳 25. 大手内A3号墳 26. 文殊堂 11号墳第1主体部 27. 明ヶ島5号墳 28. 林2号墳 29. 上石野1号墳 30. 太田坊6号墳 31. 辺田平12号墳 32. 向山2号横穴墓 33. 宇洞ヶ谷横穴墓 34. 中里K98号墳 35・36. 谷津原6号墳 38. 中里K95号墳 39. 千代A1号墳 41. 船津L209号墳 42. 牧ヶ谷4号墳

第6図 頸部被覆鉄鍔の編年的位置

〔3〕「頸部被覆鉄鍬」鉄鍬保有古墳の特徴

頸部被覆鉄鍬を採用した古墳や横穴墓をみると、前方後円墳は頸部被覆鉄鍬の可能性が高い鉄鍬が出土した権現山1号墳と瓦屋西B3号墳の2基であるが、30m以下の小規模な前方後円墳である。副葬品も多くはなく、地域の中核的な古墳ではなく、群集墳中の盟主的存在といえる。

これ以外は頸部被覆鉄鍬の可能性のある鉄鍬が出土した宮川1号墳（駿河丸山古墳）が方墳であるほかは20m以下の円墳あるいは横穴墓である。

埋葬施設の規模も宮川1号墳、かぐや姫古墳が約9mと大型であるが、それ以外は6m以下の古墳が多い。5mを超える古墳や横穴墓には馬具や装飾付大刀、特殊な遺物（鉄鐸や鉄製紡錘車）などが副葬されている。

頸部被覆鉄鍬を副葬した古墳は規模や副葬品からみると地域の中核的な古墳ではなく、群集墳中の中心的な古墳や、その中の1古墳から出土しているといえる。

4. 無頸式鉄鍬について

(1) 無頸式鉄鍬の特徴

ここでは頸部被覆鉄鍬との関連性が想定できる無頸式鉄鍬の特徴についてみておきたい。

副葬数 無頸式鉄鍬は5点以下の古墳が多い。中期段階に多数が副葬されることが多く、堂山古墳で22点、五ヶ山B2号墳で11点など10本を超えて副葬される古墳があり、古墳規模が大きく、副葬品が豊富な古墳に副葬本数が多い傾向にある。

後期段階では基本的に1点の副葬が多く、2点以下である。これ以外では、東遠江の中核的な横穴墓である宇洞ヶ谷横穴墓が22点、特異な五角形式が出土した船津L209号墳が4点である。宇洞ヶ谷横穴墓の様相は中期古墳の様相と合致するが、船津L209号墳例は鉄鍬の生産（大谷2004）と関係していると考えられる。

副葬時の扱われ方 第7図に中期古墳あるいは後期前半

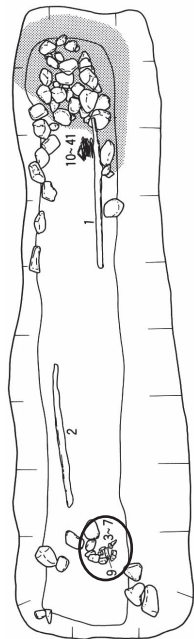
第2表 遠江・駿河の無頸式鉄鍬出土古墳（竪穴系埋葬施設）一覧表

Table with 13 columns: No, 古墳名, 所在地, 墳形, 規模, 埋葬, 規模, 配置, 無頸, 尖根, 確, 鏡, 飾, 馬, その他の副葬品, 時期, 文献. Rows 1-24.

第3表 遠江・駿河の無頸式鉄鍬出土古墳（横穴系埋葬施設）一覧表

Table with 13 columns: No, 古墳名, 所在地, 墳形, 規模, 埋葬, 規模, 配置, 無頸, 尖根, 確, 鏡, 飾, 馬, その他の副葬品, 時期, 文献. Rows 25-47.

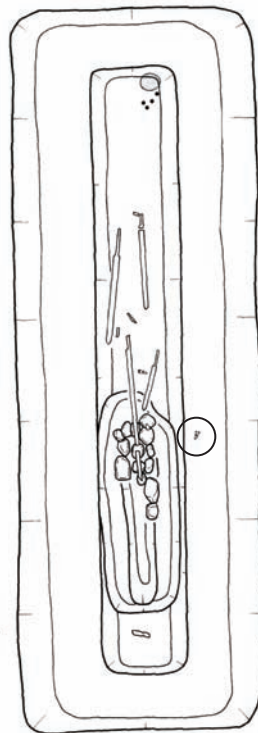
※船津L-第62号墳については富士市教育委員会にて確認。
※このほか森町菖蒲ヶ谷2号墳、静岡市牧ヶ谷2号墳が無頸式の可能性あり。
※宇藤A1号横穴墓例は、鍬身に穿孔がないことから、頸部被覆鉄鍬の可能性がある。



配置X
袋井市上石野1号墳
無頭式鉄鏃5点が鉄剣とともにと
もに出土（足元か）。



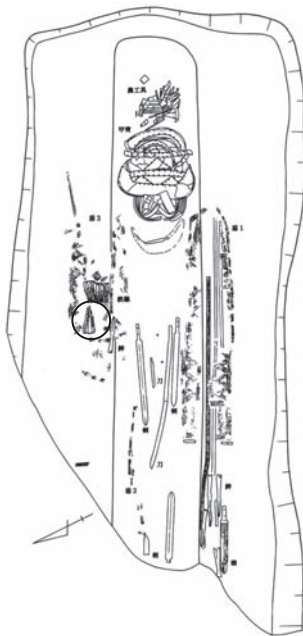
配置X
森町文殊堂 11号墳第1主体部
棺外から無頭式鉄鏃1点が単独で出
土。近隣に平根重快柳葉式鉄鏃2点。



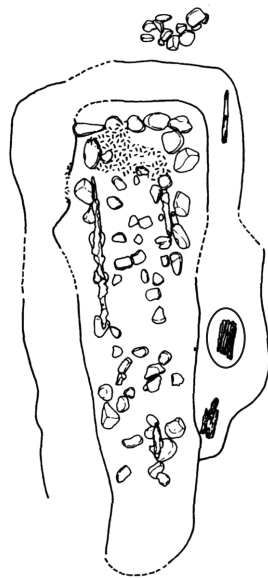
配置X
森町林2号墳第2主体部
棺外から無頭式鉄鏃1点が単独で
出土。



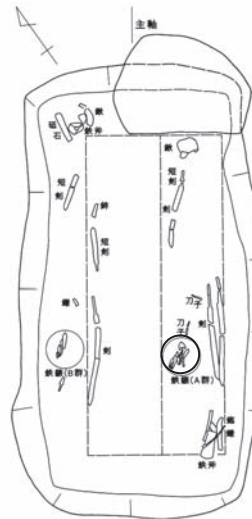
配置Y
大手内A3号墳第3主体部
無頭式鉄鏃1点と平根柳葉式が共
伴。



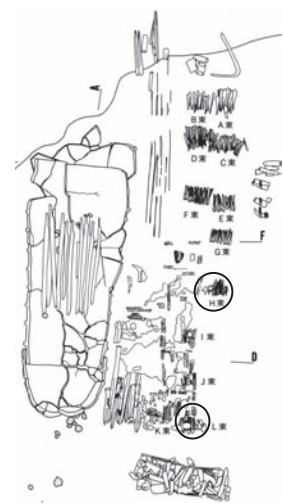
配置Y
袋井市五ヶ山B2号墳
棺外に副葬された鉄鏃群から平根
式鉄鏃とともに鏃東で出土。



配置Z1
磐田市明ヶ島5号墳第3主体部
棺外から尖根式鉄鏃とともに東で出
土。



配置Z2
菊川市長池4号墳
棺内から尖根式・平根式鉄鏃と東
で出土（A群、足元か）



配置Z1かZ2
磐田市堂山古墳1号埴輪棺
1号埴輪棺棺外に副葬された鉄鏃群
H・L群から尖根式鉄鏃とともに出土

scale = 1 : 50

第7図 無頭式鉄鏃の配置状況（竪穴系埋葬施設）

の竪穴系埋葬施設、第8図に横穴系埋葬施設の副葬状況を示した。頸部被覆鉄鍔と同様、配置X・Y・Z1・Z2が確認できる（頸部被覆鉄鍔の配置のところを無頸式鉄鍔に読み替える）。

配置X 文殊堂11号墳、林2号墳、的場3号墳など

配置Y 五ヶ山B1号墳、秋葉林1号墳など

配置Z1 明ヶ島5号墳、千代A1号墳

配置Z2 長池4号墳

配置Z1 or Z2 堂山古墳

中期では堂山古墳、五ヶ山B1・2号墳のように規模が大きく、副葬品も豊富な古墳に平根式や尖根式と組み合わせられて用いられるものが多い一方で、20m以下の小規模墳では無頸式鉄鍔が単独で用いられることが多い。

したがって、他形式と組み合わせられる方が、階層的に上位の被葬者が採用した方法といえる。

一方、後期～終末期では、尖根式が副葬されているにもかかわらず尖根式と組み合わせられることはなく、単独で用いられるものが大部分となる。2点以上が出土している谷津原6号墳や船津L209号墳でも1点ずつ別々に副葬されている。これらからみると無頸式鉄鍔は古墳時代後期以降単独で扱うことを基本としていた可能性が高い。

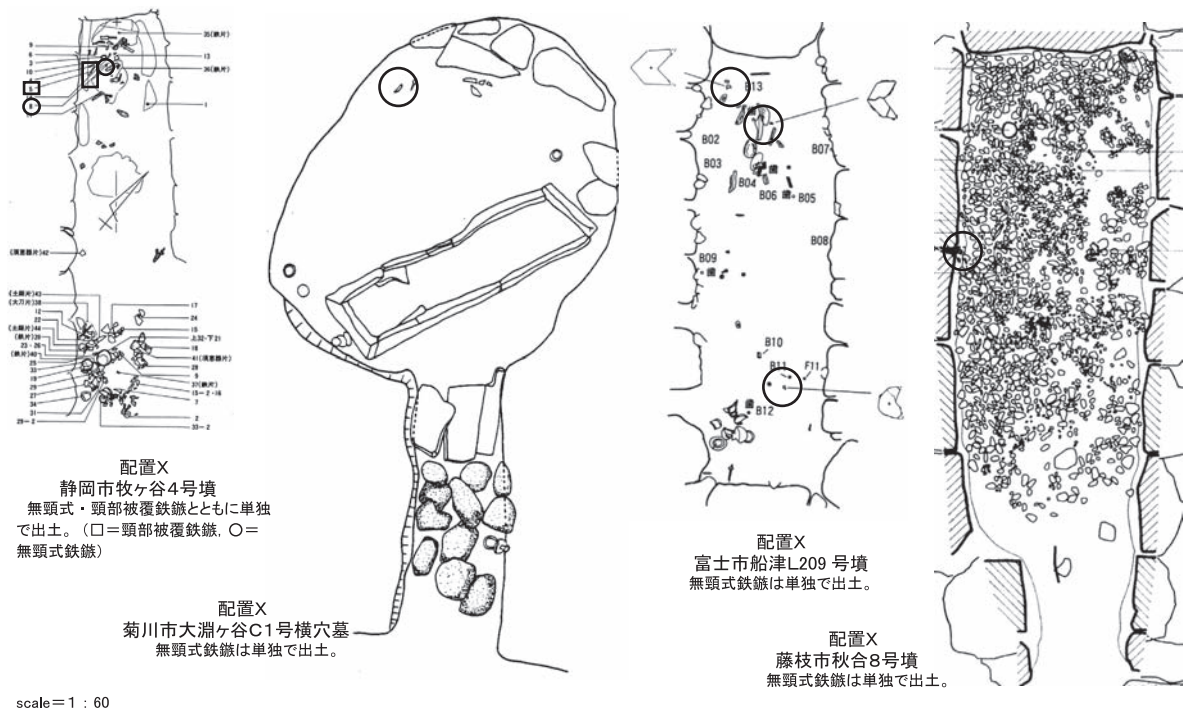
平根式と組み合わせられる配置Yを採用する秋葉林1号墳（やの場3号墳）では頸部被覆鉄鍔とともに副葬されており、頸部被覆鉄鍔と無頸式鉄鍔の取り扱いが同一に行われていた可能性が高いことが判明する。つまり、後期に尖根式とは異なる扱いを受けていた可能性が高い。

(2) 無頸式鉄鍔の分布と時期

無頸式鉄鍔の分布 中期段階では古墳の調査数にも左右されるが、調査が行われている遠江で多く、駿河に少ない現状である（第2・3表、第5図）。現状では竪穴系埋葬施設では遠江で18古墳、駿河で4古墳、1洞穴墓、横穴系埋葬施設では遠江で7古墳、駿河で16古墳である。

地域的に偏在する地域は確認できないが、古墳時代後期後半以降東駿河に多い傾向にある。

無頸式鉄鍔の副葬時期 遠江においては中期前葉の各和金塚古墳で確認され、駿河においては前期まで遡る可能性のある中期前半の釣瓶落4・14号墳で出土し、中期中葉以降増加する。堂山古墳、五ヶ山B2号墳、千人塚古墳、長池4号墳、明ヶ島5号墳、石ノ形古墳などTK73～TK47型式期まで副葬されるが、古墳時代後期前半には古墳の減少とも相俟って、太田坊6号墳、辺田平12号墳で確認できるだけとなり、一時的に古墳数が減少する。後期



第8図 無頸式鉄鍔の配置状況（横穴系埋葬施設）

後半以降、無頸式鉄鍬は西日本の一部の地域を除いて東日本に特徴的に分布する鉄鍬形式となるが、TK43型式以降再び副葬古墳数が増加する。一方、終末期まで降るものは非常に少ない。遠江では終末期まで降るものは確認できず、駿河では一部が終末期に下る可能性がある（第6図）。

無頸式鉄鍬保有古墳の特徴 中期段階では古墳の規模や副葬品の質量や鉄鍬の扱い方（配置）において、複数形式が組み合わされる古墳が階層上位であることが多く、無頸式を単独で用いる古墳は階層的には下位の古墳にあたる可能性が高い。

一方、後期から終末期では、宇洞ヶ谷横穴墓の副葬状況が不明確であるが、22本が出土し、且つ錆着するものが確認できることから少なくとも束で副葬した可能性が高いことから、無頸式を束で用いる古墳は階層的に上位にあたる点は中期の様相と合致している。

それ以外では、10m以下の墳丘規模で、6m以下の埋葬施設の古墳が多く、副葬品も裝飾付大刀や鉄製馬具を有する古墳が確認できる程度であり、群集墳中の中心的な古墳やその中の1古墳から出土しているといえる。

5. 頸部被覆鉄鍬の意義～無頸式との比較から～

(1) 頸部被覆鉄鍬は無頸式と同様に扱われたか

配置の比較 無頸式鉄鍬は頸部被覆鉄鍬が出現する後期中葉以降、基本的に単独で用いられるか、一部平根式と組み合わせられて副葬される。一方、頸部被覆鉄鍬も後期中葉～後葉の段階で城之崎B2号墳や愛野向山10号墳で尖根式と組み合わせられることがあるが、基本的には平根式鉄鍬と組み合わせられて副葬されるか、あるいは単独で用いられることが多い。

頸部被覆ではない通常の平根式鉄鍬は長泉町原分古墳（静岡埋文研2008）や衣原11号墳（静岡埋文研2010）のように長頸鍬と用いられる古墳も多く、多くの征矢（長頸尖根式）に対する野矢（上差し矢）として機能させていた可能性が高い（田村2003）。

一方で、頸部被覆鉄鍬はそうのように扱われたのは頸部被覆鉄鍬の中では比較的古い段階である。後期前半段階の無頸式鉄鍬の副葬数が少なく、攪乱等の影響により取扱い方法も不明確であるが、古い段階までは長頸尖根鍬とともに用いられた可能性がある。

後期後半以降、頸部被覆鉄鍬単独、あるいは単独で用い

られることが多く、一部に平根式鉄鍬と組み合わせられて用いられる点は、無頸式と同様である。

副葬古墳の特徴 無頸式鉄鍬を多数副葬する古墳に地域の中核的な古墳があるが、基本的には無頸式鉄鍬保有古墳と頸部被覆鉄鍬保有古墳の階層的な差はないと考える。

頸部被覆鉄鍬の位置 平根式鉄鍬が後期後半以降も尖根式と組み合わせられて副葬されるものがある一方で、頸部被覆式はそれが少なく、単独あるいは平根式鉄鍬と組み合わせられる点は無頸式鉄鍬と合致している。出土古墳の階層的な位置づけも同様であり、無頸式鉄鍬と近い関係にあったと考えられる。この点は秋葉林1号墳や的場3号墳で頸部被覆鉄鍬と無頸式鉄鍬が組み合わせられて副葬された（可能性が高い）ことも裏付けとなろう。

つまり、最初の問いである頸部被覆鉄鍬は無頸式鉄鍬と同様に扱われたかについては、頸部被覆鉄鍬は無頸式として扱われたと結論づけたい。

(2) 頸部被覆鉄鍬の出現と衰退の契機

頸部被覆鉄鍬の出現 頸部被覆鉄鍬の出現は、遠江・駿河だけではなく日本列島で無頸式鉄鍬が急激に衰退する古墳時代後期中葉（TK10～MT85型式期）にあたり、全国的に無頸式鉄鍬の供給が減少した段階である。一方で、地方での鉄鍬生産は後期後半を俟たなければならない（尾上1993、杉山1988など）。

この時期でも古墳祭祀に伝統的に用いられてきた無頸式鉄鍬を副葬する必要があり、この無頸式鉄鍬の不足を補うために頸部を覆い隠す根挟み手法を採用することで疑似的（外見的）に無頸式鉄鍬を創出したと考える。

また、出現当初に選択された長三角形式や腸扶柳葉式は根挟み手法を用いれば外見的にも無頸式鉄鍬に類似することもそれらが選択された理由の一つといえる。この意味では、圭頭式、方頭式鉄鍬に頸部被覆鉄鍬が確認されないことは、元々出土数量が少ないこともあるが、無頸式鉄鍬に採用されない形式であったことも大きな要因と考える。

頸部被覆鉄鍬の衰退 頸部被覆鉄鍬は無頸式鉄鍬とともに終末期前半をもって副葬が終了する。前稿（大谷2003）では、終末期前半に無頸式鉄鍬、平根柳葉式、平根長三角形式、平根撫関三角形式など古墳時代中期あるいは後期前半以来盛行していた鉄鍬形式が衰退することを指摘し、この段階に古墳時代的な鉄鍬様式から律令的な鉄鍬

様式への移行が行われた可能性を想定した。

弥生時代以来の伝統形式であった無頸式鉄鏃は他の古くから用いられた鉄鏃形式とともに古墳祭祀においては必要であったが、遠江・駿河においても律令的な祭祀には不可欠のものではなくなり衰退したと想定する。無頸式鉄鏃と同様に扱われた頸部被覆鉄鏃も無頸式に似せる必要が失われ、無頸式とともに姿を消すのである。

(3) 頸部被覆鉄鏃の生産

頸部被覆鉄鏃は上述したように、同一古墳から同形式の平根式鉄鏃が副葬されながら、そのすべてが頸部被覆を採用するわけではない。副葬される鉄鏃の中から選択的に頸部被覆が行われた可能性が高い。

生産する側では、頸部を造作し、茎関で矢柄を留めるのが古墳時代には一般的であった。もし生産段階で無頸式が必要であれば無頸式鉄鏃を生産し、それを根挟み手法を用いて矢柄を嵌めこめばよかった。この点では矢（鉄鏃）生産者が頸部被覆鉄鏃を創出する可能性は低いと考えられる。

一方で、頸部被覆鉄鏃は無頸式鉄鏃の機能を表出させるために創出された可能性が高いことから、使用する側（消費者）が通常の茎関留の矢柄をもつ矢を入手し、その一部を頸部被覆鉄鏃として作り変え、無頸式鉄鏃としての機能を表現した可能性が高いと考える。

(4) 頸部被覆鉄鏃の意義

頸部被覆鉄鏃の意義 製造段階では通常の平根式鉄鏃として生産されながら、使用する段階で頸部の機能を無視し、頸部を呑み込む根挟み手法を取り入れた頸部被覆鉄鏃は、その外見や古墳内での取り扱い方を比較した場合、弥生時代以来祭祀において重視された無茎式鉄鏃・短茎式鉄鏃を模倣したといえる。つまり、わざわざ頸部を埋め殺すことは頸部の機能よりも頸部を呑み込んだその矢鏃全体の外見が重視された可能性が高いといえよう。無頸式鉄鏃の流通が減少する中、無頸式の機能を再生産するため、鉄鏃使用段階での遠江や駿河の古墳時代人による工夫が行われたのだろう。

また、秋葉林1号墳の飛燕式鉄鏃に頸部被覆が採用された点は、古墳祭祀に用いられた伝統的な無頸式鉄鏃に疑似させることで最新形態の鉄鏃を受容したと考えられる（大

谷2010）。このように新形式の鉄鏃を取り入れる際の受容者側の対応を示す点でも、頸部被覆鉄鏃は重要である。

頸部被覆式からみた無頸式鉄鏃の意義 上述したように平根式鉄鏃のうち一部を選択して頸部被覆鉄鏃として利用している点を考慮すれば、同じように野矢（上差し矢）として用いられた無頸式と平根式でありながら、無頸式と平根式では古墳祭祀における機能・用途が異なっていた可能性が高いことがわかる。

前稿（大谷2004）で無頸式鉄鏃の意義が古墳時代後期以降も失われていなかったと考えたが、頸部被覆鉄鏃の分析からも遠江・駿河においては終末期前半までその機能は失われていなかったと考えたい。

6. さいごに

小論では、頸部を呑み込む矢柄をもつ鉄鏃（頸部被覆鉄鏃）を取り扱った。頸部に矢柄は装着されないとの固定観念が先行し、こうした事例があることを見逃し、正当な評価を行っていなかった点をまず反省したい。鉄鏃の形態だけではなく機能面を重視した見方（松木1991）を改めて行う必要があることを痛感するとともに、無頸式鉄鏃が衰退する古墳時代後期以降も、機能としては「無頸式鉄鏃」として扱われた可能性がある鉄鏃が存在することを認識し、古墳時代における鉄鏃の意味を考えていきたい。今後は他地域の事例（註6・7）を集成しながら無頸式鉄鏃の各地でのあり方と比較し、鉄鏃の意味について考えていきたい。

本稿の執筆にあたり、下記の個人・機関にお世話になった。銘記して深謝します。

蔵本俊明 佐藤祐樹 杉井尊器 富樫孝志 藤村 翔
菊川市教育委員会 富士市教育委員会

註

- 1 筆者は、掛川市大谷横穴墓群の報告書に関わった際、平根五角形式鉄鏃に頸部まで糸巻きが及ぶものが存在することを確認していた（文7）。しかし、当時はこのように頸部にまで糸巻きが行われた類例を知らず、偶然に存在するものと考えていた。
- 2 筆者は沼津市秋葉林1号墳（文21）の報告書作成にあたり、頸部を呑み込む矢柄を有する飛燕式鉄鏃について、無頸式と共伴して出土したことから古墳祭祀において無頸式と同様に扱われていたことを想定した（大谷2010）が他古墳での使用方法などについて検討していなかったため根拠が明白ではなかった。小論はその想定に対する

根拠を示すものでもある。

- 3 頸部被覆鉄鏃および無頸式鉄鏃で第1～3表に掲載した古墳等については、引用・参考文献を本文中に示さない。表の文献を参照願いたい。
- 4 この24や43については飛燕式に分類されることもある。
- 5 今回は遠江・駿河を中心に頸部被覆鉄鏃を集成したが前稿(大谷2004)を執筆するにあたり集成した東海地方の後期古墳出土鉄鏃で頸部被覆を採用するのは、愛知県豊川市(旧一宮町)城山6号墳(平根腸扶長三角形式、2266, 平根重腸扶長三角形式、船木山古墳群発掘調査団1999)、同各務原市半ノ木洞古墳(平根腸扶柳葉式、各務原市教委1987)などがあり、遠江・駿河ほどではないにしても東海各地で数例ずつ存在している。
- 6 東海地方以外の東日本で頸部被覆鉄鏃出土例は、神奈川県伊勢原市三ノ宮・下谷戸7号墳(平根長三角形式、かながわ考古学財団2000)、長野県須坂市本郷大塚古墳(平根五角形式、須坂市教委1992)などを挙げることができる。無頸式が多い関東・東北地方で多く確認されることが予想できる。
- 7 無頸式が衰退する西日本でも奈良県葛城市寺口千塚14号墳(T32, 平根隅欠三角形式)、同17号墳(T1, 平根三角形式、榎考研1991)、兵庫県丹波市火山7号墳(腸扶柳葉式4点、兵庫県教委2005)で頸部を呑み込む矢柄が装着された可能性がある鉄鏃が出土している。

参考文献

第1～3表の参考文献については別途示す。

【論文】

- 大谷宏治 2003 「遠江・駿河・伊豆における古墳時代後期の鉄鏃の変遷とその意義」『研究紀要』10号 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大谷宏治 2004 「東と西の狭間」『静岡県埋蔵文化財調査研究所設立20周年記念論集』静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大谷宏治 2010 「出土遺物から見た秋葉林1号墳の被葬者像」『秋葉林遺跡Ⅱ』静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 尾上元規 1993 「古墳時代鉄鏃の地域性」『考古学研究』40巻1号 考古学研究会
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2003 『研究紀要』10号
- 末永雅雄 1969 「日本鉄鏃形式分類図」『古代学』16巻2・3・4号 古代学協会
- 杉山秀宏 1988 「古墳時代の鉄鏃について」『榎原考古学研究所論集』第8号 吉川弘文館
- 鈴木一有 2000 「交易される鉄鏃」『表象としての鉄器副葬』鉄器文化研究会
- 鈴木一有 2003 「後期古墳に副葬される特殊鉄鏃の系譜」『研究紀要』10号 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 関 義則 1986 「古墳時代後期鉄鏃の分類と編年」『日本古代文化研究』3号 古墳文化研究会
- 田村隆太郎 2003 「副葬鉄鏃への指向」『研究紀要』10号 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 戸田 智 1976 「古墳時代の鉄鏃と弓の機能的分析」『古代学研究』79号 古代学研究会
- 松木武彦 1991 「前期古墳副葬鉄鏃の成立と展開」『考古学研究』37巻4号
- 水野敏典 1995 「東日本における古墳時代鉄鏃の地域性」『古代探叢』IV 早稲田大学出版部

【報告書】

- 一宮町教育委員会 1995 『城山』(愛知県)
- 各務原市教育委員会 1987 『半ノ木洞古墳発掘調査報告書』
- 榎原考古学研究所 1991 『寺口千塚古墳群』

- かながわ考古学財団 2000 『三ノ宮・下谷戸遺跡(No.14)Ⅱ』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008 『原分古墳』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010 『衣原古墳群 衣原遺跡 衣原古窯群』
- 須坂市教育委員会 1992 『本郷大塚古墳』
- 兵庫県教育委員会 2005 『火山古墳群・火山城跡・火山遺跡』
- 船木山古墳群発掘調査団 1999 『船木山古墳群』(岐阜県)

【第1～3表文献】

- 略号 教委=教育委員会 静岡埋文研=静岡県埋蔵文化財調査研究所 博=博物館 編さん委=編さん委員会
- (文1) 浜松市博1997『下滝遺跡群』／(文2) 浜松市教委1990『瓦屋西古墳群』／(文3) 磐田市教委1978『城之崎遺跡発掘調査報告書』／(文4) 静岡県教委2001『静岡県の前方後円墳』／(文5) 袋井市教委2006『愛野向山遺跡Ⅱ』／(文6) 掛川市教委2003『掛川市長谷土地区画整理用地内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』／(文7) 静岡埋文研2000『大谷横穴群』／(文8) 菊川町教委 1999『藤谷横穴群C群発掘調査報告書』／(文9) 菊川町教委 1996『宇藤遺跡群』／(文10) 相良町教委2000『大寄横穴群・山下遺跡』／(文11) 藤枝市教委1980『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』／(文12) 藤枝市史編さん委2006『藤枝市史』資料編1 考古 藤枝市／(文13) 藤枝市教委1981『原古墳群谷稲葉支群高草地区』／(文14) 静岡埋文研2010『中ノ合イセ山遺跡・中ノ合イセ山古墳群・中ノ合遺跡』／(文15) 静岡県教委1975『静岡県埋蔵文化財調査報告』13集／(文16) 望月董弘・手島四郎編1984『駿河丸山古墳』静岡考古館／(文17) 静岡市教委1983『駿河牧ヶ谷古墳群』／(文18) 静岡県教委1976『東名高速道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書』／(文19) 沼津市教委2006『石川古墳群』／(文20) 静岡埋文研2010『的場古墳群・的場遺跡』／(文21) 静岡埋文研2010『秋葉林遺跡Ⅱ』／(文22) 浜北市教委2000『内野古墳群』／(文23) 浜松市教委1998『千人塚古墳, 千人塚平・宇藤坂古墳群』／(文24) 豊岡村教委2000『大手内古墳群』／(文25) 磐田市教委2003『東部土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』／(文26) 磐田市教委1995『遠江堂山古墳』／(文27) 浅羽町教委1993『五ヶ山B-1号墳』／(文28) 浅羽町教委1999『五ヶ山B2号墳』／(文29) 袋井市教委1999『石ノ形古墳』／(文30) 静岡埋文研1997『小笠山総合運動公園内遺跡群』／(文31) 袋井市教委1990『若作遺跡・若作古墳群』／(文32) 静岡埋文研2008『森町円田丘陵の古墳群』／(文33) 鈴木敏則1998「まとめ」『千人塚古墳, 千人塚平・宇藤坂古墳群』／(文34) 菊川町教委2004『長池古墳群4号墳発掘調査報告書』／(文35) 静岡市教委1977『駿河千代遺跡』／(文36) 大仁町教委1973『大仁町の古墳文化』／(文37) 浜松市博物館1991『有玉西土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』浜松市文化協会／(文38) 静岡県教委1972『掛川市宇洞ヶ谷横穴墳発掘調査報告書』／(文39) 菊川町教委1983『大淵ヶ谷・篠ヶ谷・西宮浦』／(文40) 岡部町教委1981『横添古墳群板沢支群発掘調査報告書』／(文41) 英和女学院1968『駿河池田山古墳』／(文42) 望月董弘1967『駿河堀ノ内山古墳群』静岡考古館／(文43) 由比町教委1985『室ヶ谷遺跡群』／(文44) 静岡埋文研2000『富士川S A関連発掘調査報告書』／(文45) 富士市教委1991『船津L-第62号墳発掘調査概報』／(文46) 富士市教委1999『船津古墳群』／(文47) 富士市教委1975『中里大久保(K95)古墳』／(文48) 富士市教委1988『富士市の文化財(古墳編)』／(文49) 加藤学園沼津考古学研究所1970『本宿上ノ段古墳』・滝沢誠1999『平沢古墳群出土の胡籙』沼津市史研究 9 沼津市教委／(文50) 韮山町教委1978『韮山町多田・妹ヶ窪遺蹟』

Meanings of Covered Tang Iron Arrowhead Used in Totoumi and Suruga

—Comparing with Stemless Iron Arrowhead—

Hiroshi OOYA

Summary: Stemless iron arrowheads, which had been used in western Japan since the late Yayoi Period, decreased in number after the late Kofun period and disappeared from the iron arrowhead formation. On the other hand, to the east of Totoumi/Shinano, they were used continuously even after the late Kofun period and also there exist covered tang iron arrowheads which can be modeled after the stemless iron arrowheads. Comparing with the stemless iron arrowheads in number and in buried situation, the covered tang iron arrowheads can be taken to have the same function as the stemless iron arrowheads do. The covered tang iron arrowheads must have been used as the stemless iron arrowhead in the eastern part of Japan. Furthermore, the covered tang iron arrowheads can be supposed to be made with the thin broad iron arrowhead in order to compensate for shortage (in the late/final Kofun period) of stemless iron arrowheads which were ritually necessary.

Key words: Covered tang iron arrowhead, stemless iron arrowhead, tombs cult, function of iron arrowhead

神力坊と三卷上人の経筒

—西日本の廻国経筒2—

足立 順 司

要旨 今回は九州地方の廻国聖と経筒を取り上げる。その一人は薩摩の修験井尻神力坊で、戦国時代の廻国聖では、もっとも履歴のわかる人物である。この人物にかかわる弘治元年銘の経筒が茨城県と鹿児島県から出土している。この経筒と出土地の分析を行い、さらに同時代史料から、神力坊が単なる廻国納経の修験者ではなく、戦国大名島津氏の使者として大友氏に島津氏の口上を伝えるなど、大きな役割を担っていたことを指摘した。

人吉市南町からは、骨塔と呼ばれる石造物から、六角宝幢式経筒が発見された。骨塔は、人吉藩主相良長毎の供養のために、犬童玄俊なる人物が造立したものであった。玄俊はそれ以前に相良長毎の供養のために、廻国納経の旅をつづけ、遠く奥州松島の地にも供養碑を建てている。南町から出土した廻国経筒には、駿河三卷上人銘が彫られていたが、この上人号についても、勅許による僧号ではないかと考えた。この経筒は、人の歯を納めるために再利用した例でもあった。

ほかに九州地方の廻国聖についてもふれ、彦山や黒髪山などの修験者が、少なからずみられたことも指摘した。

キーワード：廻国経筒、薩摩神力坊、島津日新公、駿河三卷上人、犬童玄俊の廻国、相良長毎の供養碑

1 井尻神力坊の経筒

16世紀の六十六部廻国聖の中に、唯一といってよいほど履歴のわかる人物がいる。これが小論に登場する薩摩島津氏の家臣、井尻神力坊という修験者である。この神力坊については、その名前を刻んだ廻国経筒が、茨城県行方市（旧玉造町）泉字原新田と鹿児島県南さつま市（旧加世田市）武田下字鼻ノ上の遠く離れた2ヶ所で、それぞれ1口計2口が発見されていることも、注目されている。

1口目の経筒が出土した行方市（旧玉造町）泉字原新田は、霞ヶ浦東岸の台地上にある集落である。経筒の発見経緯については、つぎのように『水府志料』にあるが（茨城県1968）、今日、その出土地の詳細はわかってない。

「宝永4（1707）年の春、原新田玉造村内の百姓大島氏或云大場氏治部左衛門なる者、其家側にありし桜樹の風に倒れし下よりほり出す。内に経巻の朽腐せしものと見え、砂のごとく、灰のごとく物有りしとぞ。今は築地村妙光寺の什物となれり。

十羅刹女 薩州住神力坊
梵字 奉納大乘妙典一国六十六部聖

三十番神 弘治元年今月今日

経筒は現在、潮来市築地妙光寺にあるが、円筒形の筒身のみで蓋は認められない。筒身の高さは9.6cm、直径4.3cm、底径4.8～4.6cm、筒身の厚さ0.5mmを測る。筒身の銅版を3ヶ所舌止めし、底部は筒身の下部に突起2個を作って舌止にするものである。鍍金が銘の部分を中心にわずかに残っている。銘文は細い線刻であり、奉納の書式にあわせて釈読するとつぎの通りで、『水府志料』にはわずかに脱字と誤読があったことがわかる。

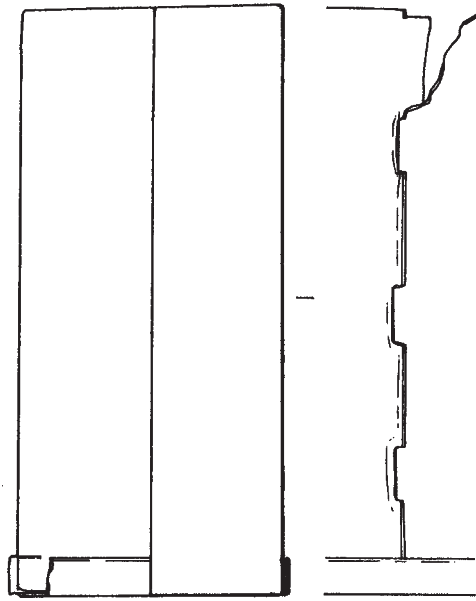
バク 奉納大乘妙典一国六十六部聖

十羅刹女 薩州之神力坊

三十番神 弘治元年今月吉日

この原新田を含む霞ヶ浦東岸では、廻国経筒が数多く発見されている地域である。詳しくは後に述べるが、この地域は全国の廻国聖が寄留する場であって、そこには常陸を本貫（住国）とする廻国聖の坊舎もあったものと推定している。

2口目の経筒が発見された南さつま市（旧加世田市）武田下字鼻ノ上は、薩摩半島南部に位置し、吹上浜の海岸線

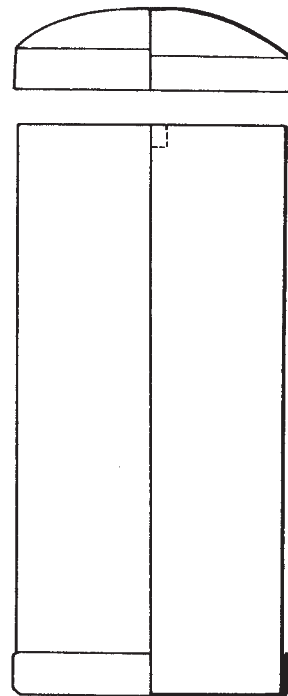


1 原新田経筒実測図

十羅刹女 陸奥之住神力坊
 大乗妙典二國十六部聖
 二十卷神 弘治七年今月吉日

0 2cm

2 神力坊の銘文



3 武田下経筒実測図



4 原新田経筒



5 神力坊の銘文



6 武田下経筒



7 武田下経筒の経典

| 番号 | 経塚名 | 県名 | 年紀 | 西暦 | 聖住国 | 聖名 | 經典名 |
|----|-------|-----|------|------|-----|---------|------|
| 1 | 杉浦丘園蔵 | 不明 | 享禄2 | 1529 | 越後 | 賢心 小聖道順 | 大乘妙典 |
| 2 | 坂本館山 | 宮城 | 享禄2 | 1529 | 陸奥 | 祐弥 | 法華 |
| 3 | 愛宕山 | 宮城 | 享禄4 | 1531 | 越前 | 善宥 | 大乘妙典 |
| 4 | 杉浦丘園蔵 | 不明 | 天文19 | 1550 | 紀伊 | 海心 | 大乘妙典 |
| 5 | 木越 | 新潟 | 天文年 | 1555 | 山城 | 真光 | 大乘妙典 |
| 6 | 武田下 | 鹿児島 | 弘治元 | 1555 | 薩摩 | 神力坊 | 大乘妙典 |
| 7 | 七ツ壇 | 福島 | 弘治4 | 1558 | 陸奥 | 宗叶 | 大乘妙典 |
| 8 | 大島新 | 富山 | 永禄6 | 1563 | 常陸 | 祐円 | 大乘妙典 |
| 9 | 愛宕山 | 島根 | 当年 | 1600 | 出雲 | 華重房 | 経王 |
| 10 | 愛宕山 | 宮城 | 当年 | 1600 | 信濃 | 玄成坊 | 大乘妙典 |
| 11 | 姫塚 | 新潟 | 当年 | 1600 | 伊勢 | 道順 | 大乘妙典 |
| 12 | 姫塚 | 新潟 | 当年 | 1600 | 美濃 | 道巴 | 大乘妙典 |
| 13 | 松田光氏蔵 | 不明 | 当年 | 1600 | 常陸 | 養源坊 | 大乘妙典 |

表1 牡丹唐草文蓋経筒一覧



8 武田下経筒蓋

第1図 神力坊の経筒

から5km程内陸に入った志原段丘上にある。経筒が出土した地点は、全長約12～10m、高さ約2mを測る前方後円形塚もしくは円形で造りだし部をもつ塚で、現在は井尻神力坊経塚として説明板が建てられている。

経筒の発見については、昭和29（1954）年2月、塚頂部に自然石が立てられている場所を土地所有者が掘ったところ、経巻の入った経筒や鏡、元豊通宝1枚が発見されたという経緯である。現地に残る自然石は大きく、経塚の標識として立てられたと考えられる。

出土品のうち経筒は、円筒形で蓋には牡丹唐草紋が彫られている。筒身の高さ9.4cm、直径4.4～4.3cm、底径4.6cm、筒身の厚さ0.5mmを測り、蓋は高さ1.43cm、直径4.6cmを測る。筒身の高さは原新田経筒に比べ、2mm程低い。ただし原新田経筒は破損箇所を底部を後世に直しているので、ほぼ同じ寸法であった可能性が高い。筒身の銅版を3ヶ所舌止めし、底部は筒身の下部に突起2個を作って舌止にするものである。鍍金が銘の部分に中心に明瞭に残っている。南さつま市竹田神社に奉納され、保管されている経筒の銘文はつぎの通りである。

バク 奉納大乘妙典一国六十六部聖

十羅刹女 薩州之神力坊

三十番神 弘治元年今月吉日

銘文は細い線刻であり、原新田経筒と比較すると、同じ文字を異体字として使用し、さらに第1図-2のように特徴的な文字の運筆で、払いや止めなど一致しているので、同じ人物の手による下文字によって、彫られたと解釈できる。つまり同じ工房で同時に製造された可能性が極めて高い。

蓋の紋様の牡丹唐草紋は表1のように東国に多い蓋紋様であって、神力坊銘の経筒は東国で造られた可能性が指摘される。

出土した鏡は直径12.5cm、厚さ0.91cm、半球形の摘みは径2.79cmを測る。18世紀頃の重圈文鏡とする意見もあるが（関秀夫1999）、黄銅質で明の「弦紋鏡」である（国立歴史博物館1996）。弦紋鏡は唐代からあるが、実用本位の紋様と銅質から、明代と考えられる。摘み部分に鉄錆が付着しているが、取り上げた出土品には該当例はないので、取り上げなかった何らかの鉄製品が鏡付近に埋納されていたと推定される。

出土した篆書体の元豊通宝は直径2.27cm、厚さ1.12mm

を測る。輪も不成形で薄いので、模鑄銭ではないだろうか。すると鏡も元豊通宝も江戸時代の埋納品ではなく、弘治元年という経筒の年代をむしろ裏付けるものと考えることができる。したがって弘治元年以降の、井尻神力坊の薩摩帰国後、廻国業の満願を記念して武田下の地に経塚を築造し、東国で製造された経筒を鏡や銭貨などとともに埋納したと理解したい。弘治元年という年は何らかの祈念の年月であろうが、それ以上は理解しえない。

2 井尻神力坊について

鹿児島県南さつま市竹田神社には、寛政11（1799）年に描かれた山伏姿の井尻神力坊の肖像が残されている。この肖像画は天正3（1575）年の神力坊の死後、二百年余り経って描かれたものであるが、頭に頭巾をつけ、菊綴を綴じ込んだ結袈裟を着、数珠を手に掛けて合掌している姿である。描かれた神力坊は鼻も高く鋭い眼光で、精悍な姿になって、後世、神力坊とはこのような人物として、想像されていたこととなろう。なお結袈裟が当山派の磨紫金袈裟ではないので、神力坊は本山派修験であった。

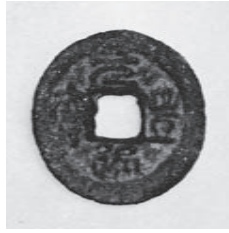
また肖像画の上部には神力坊の徳をたたえる讃が記されているが、その姓は井尻、名は宗憲、神力坊という坊名を自称し、その人格を「為人剛強以義勇乎」と記し、描写された肖像の印象と一致する。

「日新菩薩記」とは、島津家中興の祖とされる島津忠良の功績を伝えるために著されたものである。この書の題となった日新とは島津忠良の号、「日新齋」にちなむもので、忠良の死後、その菩提寺を日新寺（曹洞宗）と改めたほどである。明治維新の神仏分離によって、この日新寺は竹田神社となった。つまり竹田神社の祭神は、島津日新齋忠良である。

この「日新菩薩記」には「家国繁興長久の為に、一箇国に於いて法華経六十六部御奉納の御誓願、乃ち井尻神力をして回国せしむ。然るに彼の皆道に出る則は、同行百人百余人薩摩神力と額を打ち、諸国に誉声を貽し、二十二年に至りて四千三百五十六部の妙経を拝納成就して、本国此の地に帰りぬ。斯の功を勲賞して、日州真幸院内に大明神一所を宛行れり。」とある（北川鐵三校注1966）。つまり井尻神力坊は、島津忠良の命を受け同行百人百余人とともに全国に法華経六十六部を奉納し満願成就したのち、帰国したという。その後、島津氏はその功に報い、井尻神力坊に



1 武田下経塚出土弦紋鏡



2 元豊通宝



3 神力坊肖像



4 神力坊の墓（竹田神社）



5 竹田神社



7 位置図（武田下経塚● 竹田神社○）



6 武田下経塚



8 経塚上の自然石

第2図 神力坊と武田下経塚

は「日向飯野城下にあった諏訪大明神（えびの市大明司）大宮司」をあて、大明司古壘を守らせたとされている（宮崎県1998）。

神力坊が与えられた所領の真幸院は南九州四カ国の接点に位置し、政争の舞台となった地域で、国人領主北原氏の所領であったが、永禄6（1563）から7年に島津氏が勢力下に治めた地域である。

他方、天保14（1843）年編集の『三国名勝図絵』『日新寺』の項には、神力坊について、以下のような別の末路を伝えている。神力坊は廻国業満願により薩摩に帰国したが、すでに島津日新公が死去していたため、出家の身であったので切腹できず、木の上から飛び降り、天正3年12月27日に殉死したと記している。

栗林文夫「井尻神力坊について」（栗林文夫2004）は、神力坊に関する文献・考古資料などを整理した業績であるが、この点についてもふれ、他の資料からも『三国名勝図絵』の創作ではないかとした。この栗林氏の神力坊に関する論考は、史料を集成し新知見を提出していることから、この論考を継承し、以下、私流の神力坊像を描いてみたい。

井尻神力坊の苗字の地について、栗林氏は日置市（旧吹上町）大字永吉に井尻の小字があることから、苗字の地の有力候補とした。天保13（1842）年編集の『本藩人物誌』に基づいたと考えられる『加世田市誌 下巻』によると、神力坊は、父を島津氏の兵具方奉行井尻佐渡祐元、宇多次郎左衛門貞次の娘を母とし、その二男として田布施の地に生まれたという。田布施とは南さつま市（旧金峰町）であり、その地の利から神力坊は、金峰山修験であった可能性が高い。同市史によると、神力坊の母は、島津本家に入った島津忠良の長子貴久（島津家十五代）の乳母であったという。『本藩人物誌』によれば別の井尻佐渡守祐宗という人物の母のこととするが、井尻佐渡守祐宗という人物は、神力坊の本名宗憲に共通する「宗」の字を使っていること、神力坊の父親と同じ佐渡守の受領名をもつことから、神力坊の兄弟と思われる。

神力坊の墓は宮崎県えびの市坂元霊園と南さつま市竹田神社内にあるが、坂元霊園の墓は神力坊の大明司時代の子孫達によって造営されたもので、その墓石には「権大僧都宗憲 天正十壬午十二月二十七日」とあり、先の天正3年死亡と異なっているという（栗林文夫2004）。猶子も含め

神力坊の子孫達は何流も分家し、今日まで続いている。

先の栗林氏の史料集成によって、神力坊と同じ時代の文書史料から、以下の神力坊の動向を知ることができる。

島津氏の使者として、島津氏の口上や文書や贈答品を携え相手に伝達した。永禄7（1564）年、日向伊東氏が島津所領の真幸院を押領した。これに対する島津の対伊東氏との反撃には、大友氏との和議が前提であって、その際の使者として神力坊は、島津義久から豊後大友家の一門である戸次紹花のもとへ、さらに島津の重臣から大友氏の重臣への使者となっている。

島津氏の領域支配は、城下とその近郷、南西諸島とそれを除いた外城（とじょう）にわかれていた。外城はさらに家臣の「一所地」と、島津氏の直轄地の「地頭所」に分かれていた。地頭所はその責任者の地頭とその指揮下に在郷家臣の外城衆（衆中ともいう）が地域支配を担っていた。島津氏の軍事編成も地頭・衆中制に基づいていた（桑波田興1958、福島金治1988）。

神力坊への書状の差出人は、川上忠智や新納忠元ら地頭であり、その指揮下に神力坊はあったこととなろう。川上忠智は永禄7（1564）年に新幸院飯野の地頭であり、直接その指揮下にあったとしてよい。新納忠元については、天正2（1574）年には薩摩大口や牛山の地頭であり、その指揮下にはない。栗林氏が推定するように、書状の内容は永禄11（1568）年の大明司古壘守備に伴う合力を伝える内容であろう。

「同行百人百余人薩摩神力と額を打ち」廻国に出た神力坊とは、一人一人が薩摩修験の神力坊であり、その集団を束ねていた人物が、井尻宗憲であったと考えている。これら集団は複数に分かれ、東は東の集団、西は西の集団として、全国を回っていたと理解できる。ちなみに神力坊には豊前坊と常陸坊という猶子がいた。彼の地から薩摩につれて育てていたという（栗林文夫2003）。このことから常陸に神力坊もしくはその集団の一人が寄留し、猶子を見出したと考えられる。そして常陸坊のふるさとはどこであったかといえば、霞ヶ浦の東岸地域であり、1口目の経筒が発見された原新田周辺が、最有力候補であろう。

神力坊は「二十二年に至りて四千三百五十六部の妙経を拝納成就して、本国此の地に帰りぬ。」（北川鐵三校注1966）とあるが、その間薩摩に帰国しなかったのであろうか。このような同時代史料からみえる神力坊の姿からす

れば、島津氏の使者とともに情報収集の役割が考えられる。江戸時代の六十六部廻国聖には所定めずそれを生業としたり、ある一定の国に寄留し、故郷に帰らない場合もあるが、あくまでも神力坊の目的は、島津日新公の思いを成就し、帰国することである。

また江戸時代の廻国では年の一定期間に廻国し帰国、翌年からつぎの廻国地域を巡るというケースや、ほぼ9年から5年で終え帰国している（藤田定興2003）。島津氏における修験の役割は、戦陣の組み立て・戦術・政策の選択にかかわって、御籤による決定に深く関与するほど大きい（永松敦1993）。このことからおそらく神力坊宗憲の役割は、22年も薩摩国を空けるほど小さくないと考えられる。よって「二十二年」という長い年月をそのまま神力坊一人の廻国業の期間と考えず、集団としての神力坊が満願成就した歳月と解すべきではないだろうか。

3 霞ヶ浦東岸

茨城県内からは伝世例も含め、20口の廻国経筒が認められているが、そのうち表2の6口が、現在の行政区の小美玉市、行方市の霞ヶ浦東岸から発見されている。中世国府のあった霞ヶ浦北側の石岡市および周辺から出土した例は、大永2年銘の北谷経筒、大永7年銘の染谷経筒（いずれも石岡市内から出土）、かすみがうら市（旧千代田町）の3例があり、それも含めると、この地域は全国的にも廻国経筒の集中地域である。紀年銘の年代は、大永から天文・弘治年間である。

これらの経筒の銘文から知ることのできる廻国聖の本籍地（〇〇国住とある）は、神力坊の薩摩、伊勢、山城、越前と地元常陸であるが、常陸の例は国衙周辺と武蔵原（鶴見貞雄1995）である。地元常陸ばかりではなく、他国の廻国聖も経典埋納の作善を行っていた地域となろう。

廻国聖の活動はこれにとどまらず、つぎのようなケースもある（石岡市教育委員会1996）。

釈迦 普賢菩薩 文殊菩薩 阿弥陀如来 の種子
奉行常行三昧本願一國六十六部上人源弘
旦那富田出雲守子/掃部丞
妙悦/外記助國久
永禄十一天戌辰十一月十七日
師亮範

この碑は石岡市東大橋三井寺跡にあり、自然石の板石に

刻まれているが、ここに刻まれた常行三昧とは90日間歩きながら阿弥陀仏の名号を唱え、心に阿弥陀仏を念ずるきわめて困難な業である。これを上人号の勅許をえた、六十六部の源弘がなしたことを顕彰する内容である。なお常行三昧業であるから天台系聖であろう。

経典埋納や常行三昧業および石碑の建立には多くの助力者が必要であり、廻国聖の寄留地として活発な活動をうかがい知ることができ、この地域に神力坊の経筒が埋納されたことも首肯できよう。

4 駿河三卷上人の経筒

昭和49年6月19日、熊本県人吉市南町を流れる球磨川の支流胸川の改修工事中、石灯籠形の石造物が発見された。この石造物と収納された遺物については、調査者の桑原憲彰氏によって『熊本県文化財調査報告書 第22集』の中に報告されている。以下については、報告書と桑原氏の教示によるところが大きく、あらためてその学恩に感謝したい。なお、私見の釈文の一部は、報告者の釈文と異なること、小論の釈文の（異）とは、その文字が異体字であることを付け加えておく。

発見された灯籠形の石造物は、塔身につぎの銘が刻まれ、相良人吉藩主相良長每（さがらながつね）の供養塔であることが判明した。銘文は、以下のように「骨塔」と刻まれていたことから、発見された石塔は、相良長每の供養のため造立された供養塔で、骨塔と呼ばれたことが判明した（桑原憲彰1977）。

正面 骨塔 逆（異）修（異）玄俊庵主 生年六十五歳
2面 □□氏藏人者相良氏代々之家也 年先為
3面 瑞祥院殿天叟玄高 大居士御菩提移步
4面 於六十余州遊心於十方刹土荷擔法華
5面 妙典獻納者一回一部矣 尽好□（栗原氏は干カとする）勲功者専上報君恩
6面 下世家門者也 于時延宝二（1674）甲寅四月廿九日

銘文から65才の玄俊は、瑞祥院殿天叟玄高大居士（藩主相良長每）の菩提供養のため、六十余州を法華経一回一部の納経を行っていたことや玄俊の勲功を子孫に伝える趣旨が明記されている（第4図 骨塔移設地）。

この塔は硬質凝灰岩製で、六角形の塔身には直径9cm、深さ12cmの穴が穿たれ、その中に六角宝幢式経筒1口が



1 経塚位置図



2 泉地区近景

| 番号 | 経塚名 | 市町 | 形式 | 年紀 | 西暦 | 住国 | 聖名 |
|----|-------|---------|----|------|------|----|-------|
| 1 | 原新田 | 行方市 | 円筒 | 弘治元 | 1555 | 薩摩 | 神力坊 |
| 2 | 蔵村 | 行方市 | 不明 | 天文19 | 1550 | 山城 | 長泉 |
| 3 | 芹沢村 | 行方市 | 不明 | | | 常陸 | |
| 4 | 南 | 行方市 | 八角 | 天文11 | 1542 | 伊勢 | 良伝 |
| 5 | 武蔵野原 | 小美玉市 | 円筒 | 当年 | 1600 | 常陸 | □□ |
| 6 | 山野犬塚前 | 小美玉市 | 円筒 | 当年 | 1600 | 越前 | 善長 |
| 7 | 染谷 | 石岡市 | 円筒 | 大永7 | 1527 | 常陸 | 祐口 |
| 8 | 北谷 | 石岡市 | 円筒 | 大永2 | 1522 | 常陸 | 宥永 宥誉 |
| 9 | 清水並木 | かすみがうら市 | 円筒 | | | | |

表2 霞ヶ浦東岸・周辺出土経筒 当年は1600年と表記 7は吉澤悟氏教示による。

第3図 霞ヶ浦東岸の経塚

納められていた。さらにこの経筒内には、経筒の瓔珞と火葬された歯6本と火を受けていない歯22本、青く染めた布状の塊が発見された。おそらく歯は2人以上の歯であり、布状の塊に包まれていたと推定された。経筒はつぎの図像一尊と銘が刻まれている（桑原憲彰1977）。

尊像 一國三部・・・正面

十羅刹女 駿州（異）三卷（異）上人・・・右

三十番神 當年今月吉日・・・左

従来、正面の一國一部の一國は「蔵」と読まれていたが、蔵とは三蔵の経・律・論のことであり、廻国経筒の銘文にはなじまない。運筆から蔵の一文字の草冠ではなく、書き始めから横方向に一と刻まれているので、蔵ではなく一國の二文字と理解でき、文意から廻国経筒の銘文にふさわしい。一國三部の銘文は、名古屋市笠覆寺出土経筒の銘に「奉納経王一國三部聖」とあり、永禄二年銘をもつ旧杉浦丘園コレクション（杉浦丘園1933）、松田光氏蔵の「薩州之住秀養坊」銘経筒にも「奉納経王一國三部聖」銘の経筒（松田光2009および吉澤悟氏の配慮により実見）ほかがある。いずれも六角宝幢式経筒である。

また尊像をはさむ十羅刹女と三十番神は法華経の守護神であり、奉納された経典が法華経であったことが判明す

る。右の三卷上人は、従来、三養上人と読まれていたが、養の下文字の食偏が己であり、卷の異体字と釈読した。

銘文の三卷上人という廻国聖の「上人」号についてである。この廻国聖の「上人」号はあまり注目されていなかったが、同じ頃の補陀落渡海上人の例では、公卿万里小路家の伝送による勅許をえた僧号であったことから（根井淨2001）、同様に勅許による僧号と考えられる。つまり廻国納経にかかわって、僧号をえた廻国者も存在したといえよう。ただし廻国聖の伝送者は史料上、明確ではないが、渡海上人同様に公卿万里小路家の伝送にかかわった可能性は高い。

ちなみに六角宝幢式経筒の上人号は、本例以外につきの通りである。

- 1 兵庫県加古川市一色経塚経筒 永禄元（1558）年 阿春上人 筒身に図像（三宅敏之1983b）
- 2 東京都大悲願寺伝世経筒 天正13（1585）年 月尊上人 筒身に三尊 経王（三宅敏之1983b）
- 3 松田光氏蔵経筒 当年 宮雪上人 筒身に三尊 経王（松田光2009）
- 4 三重県仙宮神社伝世経筒 当年 快養上人 筒身に一尊 経王（三宅敏之1983a）

5 埼玉県草加市柿木経塚経筒 当年
快円上人 筒身に一尊 経王 (小沢国平1965)

6 千葉県成田市天王船塚経筒 当年
快賢上人 筒身に一尊 経王 (千葉県企業庁1975)

このことから、共通項として上人号を刻む廻国経筒には尊像が描かれ、法華経の異名である経王(法華経は經典の中の王という意味)を用いていることが指摘できる。円筒形経筒のうち上人号の経筒は、福島県喜多方市湯殿神社経筒2の海口上人の例(足立順司2004)、秋田県男鹿市大倉経塚経筒2の扶経上人の例(足立順司2000)の2口があるが、やはり法華経の異名である経王と刻んでいる。通常、廻国経筒では円筒形経筒が圧倒的に多く、上人号の経筒には本例も含め7口が六角宝幢式経筒、2口が円筒形経筒とする結果をえた。このことから、上人号の経筒には六角宝幢式経筒が選ばれることが多く、廻国聖のうち、ある特定の門流の特徴が現れていると推定したい。法華経を異名である経王とする経筒は、円筒形経筒が28口、六角宝幢式経筒が24口であるが、どのような廻国聖が法華経の異名である経王を用いたのかは、今後の課題である。

三卷上人の経筒に刻まれた一尊の尊像は、蓮華座に跏趺する僧形の像としてみられていたが、僧の上部に3個の弧線による山頂部がみられ、光の表現とは異なる。これを螺旋髪と肉髻(につけい)とすれば、尊像は如来形の釈迦像と考えられる。肉髻とは頭の頂の肉が盛り上がっていることで、釈迦の身体的特徴(三十二相)のひとつである。すると六角宝幢式経筒の一尊像としては、釈迦像は通常の尊像であり、特異な例ではない。

しかしながら六角宝幢式経筒のうち、他の一尊像の光背は弧線や列点で丁寧に表示されているが、これは円光や火焰光、輪光の表現とされる。本例の場合、光背外周に放射光の表現があるのみで、光の表現は外周のみであり、細部の表現では他の例と異なり、省略されている。

経筒は宝珠と露盤はない。最初に経筒が発見された昭和25(1950)年頃の談話が報告書に記述されているが、「納骨容器(経筒のこと)の蓋には鈕もあったが」とされているので、それまでは宝珠と露盤があったのではないだろうか。筒身には瓔珞も入れられていたので、蓋に瓔珞の飾りが残っていたと考えられる。

経筒身部の接合法は、厚さ1.1mmの銅板の一方に3カ所の切り込みを入れ、他方に3カ所の舌を作り出して、舌を

切り込みに差し込む舌止め接合である。さらに身部頂部の縦方向の1カ所を内側から外側へ舌を折り曲げ固定している。身部と底部は4カ所を舌止めしている。

5 奥州松島の供養碑

人吉市南町の骨塔を造立した人物玄俊庵主は、2面に刻まれた□□氏藏人と同一人物であることは、銘文から読み取れた。しかしながら、この人物について色々推定案があったが、いずれも資料的裏付けがなく、それ以上わからなかった。

ところが意外にも渋谷敦氏や堀野宗俊氏によって、遠く離れた宮城県松島でその手がかりが発見された(堀野宗俊1993)。その重要な手がかりである相良長毎供養碑は、つぎの銘文が刻まれていた(渋谷敦1993)。

前住花園現在松島雲居叟希膺述書
九州肥後国求麻郡 瑞祥院殿前武衛天叟
玄高大居士 世系藤原氏相良 其名長
每生年十八而豊国大明神 征三韓水
軍陸戦□大功 二十七歳属東照大権現
之令 於大垣誅三将致大忠 以故到當
明三代將軍清治之日 恩遇超群僚官位到
四品 家臣犬童善四郎長廷(任) 遁世捨身
修大居士菩提 納経於松嶋日磨碑 請銘
於余乃銘云

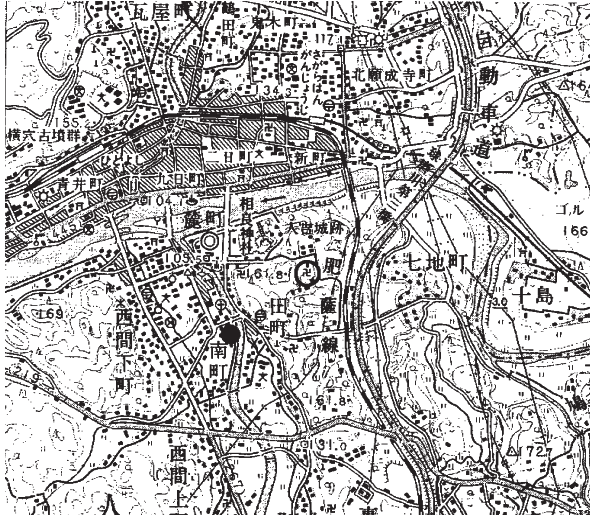
濁世鳥曇忠義臣癸心修道弔亡人
何知西海遠方伯陸奥東辺現仏身
寛永十四(1637)年六月十三日
犬童善四郎入道玄俊建焉

同行安心宗園□□

高琢磨之□

渋谷敦氏や堀野宗俊氏が指摘するように、南町の骨塔を建立した人物玄俊庵主は、俗名犬童善四郎長廷(任)といい、相良長毎の家臣であった。石碑の内容からこの人物が、同行の安心宗園とともに奥州の霊場松嶋に足を止め、主君相良長毎の一周忌にあたり、その供養文を瑞巖寺の名僧雲居希膺に依頼し、供養碑を建立した、というものであった。おそらく犬童善四郎は主君相良長毎の死去に伴い、玄俊庵主として出家遁世し、廻国納経の旅の途中にあったのであろう。

さらに付け加えると犬童長廷(任)の「長」とは、相良



1 人吉市南町石塔出土地位置図 (●出土地)



2 出土地近景



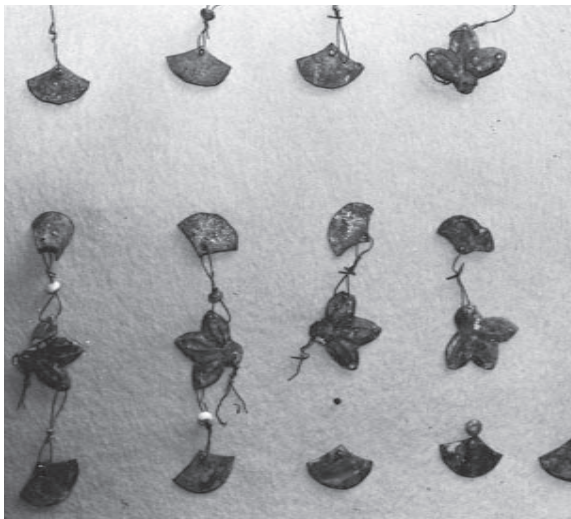
3 三卷上人の経筒



4 銘文と図像



5 玄俊銘の石塔



6 経筒の瓔珞



7 経筒から出土した歯

第4図 経筒と石塔

長毎の本名の一文字を賜名されたと考えられ、特に重要視された家臣であったと推定される。南町の骨塔にある玄俊の年齢は65歳というから慶長14年前後の生まれとなり、松嶋の供養碑を建てた寛永14年には28歳前後と若い年齢である。若い時期の遁世と廻国納経は、主君長毎への深い思いであったのであろう。南町の骨塔は、犬童玄俊による相良長毎の追善供養の廻国納経や家臣として犬童氏の勲功を伝える性格である。内部に納めた三卷上人の経筒は、犬童善四郎が玄俊として廻国納経の際、入手した可能性が高いが、三卷上人の廻国満願を果たした、いわば法華経の功德のつまった容器として考えられたので、再利用したのであろう。

では歯をなぜ経筒に納めたのであろうか。松嶋にも骨塔があるが、高野山奥の院への高野聖の作善にみられるように、分髪・分骨し、死者の供養と来世への極楽往生を願うためであったのであろう。二人の歯の一人分は相良長毎の歯と推定したくなるが、確かめるすべを持たない。ではもう一人の歯はだれのものか。それは、すでに老境に到った犬童玄俊の自然に抜け落ちた歯ではないかとしたいが、これも確かめるすべを持たない。

従来、廻国経筒については、16世紀後半の天正年中を境に認められなくなっていた。しかしながら、今回、17世紀前葉の廻国納経の例を知りえたし、その際に廻国経筒の転用された例を知り、その背景にもふれることができた。

6 九州の廻国経筒と廻国聖

神力坊と三卷上人銘経筒以外に、九州の廻国経筒では、佐賀県嬉野市（旧嬉野町）から出土したと伝えられるつぎの六角宝幢式経筒が知られているが（三宅敏之1983b）、個人の所蔵品なので詳細は不明である。

- | | | | |
|----|------|----------|------------|
| 1面 | 釈迦座像 | 奉納経王六十六部 | |
| 2面 | 文殊座像 | 十羅刹女 | 雲州之慶順 宝相華文 |
| 3面 | 普賢座像 | 三十番神 | 当年今日日 宝相華文 |
| 4面 | | | 宝相華文 |
| 5面 | | | 宝相華文 |
| 6面 | | | 宝相華文 |

このように筒身の下半分を宝相華文で飾る例は、山形県飛行壇経筒や佐渡市長安寺経筒に類例があるが、六角宝幢式経筒の中では少数例である。

これ以外、戦前の経塚地名表には、永正から永禄年間の経筒の記録があるが、江戸時代の地誌を誤読した例や経碑を誤認した例がある。佐賀県旧岩船村とされている経筒は、小城市（旧小城町）岩蔵の本覚院にあった例である。当時本覚院は岩松村にあり、岩船村ではない。大正13（1924）年の『國分日本金石年表』の段階から岩船村と誤記されているため、その後の経塚地名表（小田富士雄1989）にはそのまま岩船村となっている。もっともその後、経筒は亡失したらしく、取り上げられることはない。

ところで本覚院は岩蔵にある修験の寺で、現在は真言宗醍醐派に属すが、天台宗岩蔵寺の子坊であった。岩蔵寺は如法経供養で著名である。経筒は永禄元年と永禄四年の銘があったという（佐野英山1924）。如法経作善にかかわった経筒の可能性もあるが、確かめるすべを持たない。

つぎに廻国経筒にみられた九州出身の廻国聖の動向についてふれてみたい。別表のように、太田南八幡宮の納札（表面を鍍金されている）を加えると21例、うち経筒は20口であり、奉納先を見ると約半数の11口が太田南八幡宮から発見されている。出土地・奉納先は伝世場所不明の松田コレクション2口（松田光2009）、旧杉浦丘園コレクション1口（杉浦丘園1933）を除くと、茨城行方市神力坊銘経筒、下野宇都宮市牛塚南方経筒と山梨県塔の越経塚2口のうち六角宝幢式経筒1口（三宅敏之1983b）が東国である。京都伏見稲荷経筒（景山春樹1969）、愛媛高鴨神社経筒（足立順司2008）は奉納例で、かつ廻国経筒としても古い点を重視したい。つまり九州の廻国聖の経筒を携えた納経は全国的にも古く、おもに太田南八幡宮（近藤正1965）を初めとし、四国、畿内の霊場に奉納していたといえよう。塚を造って埋納した例は、本論の南さつま市神力坊の例と鳥根県経ヶ崎経塚（近藤正1967）と少なく、天文4（1535）年と奉納例より新しい。

廻国聖の本貫については、大田南身八幡宮経筒136号経筒の築州榎津は筑前ではなく、筑後であるので、豊後を除く8ヶ国で確認できる。そのうち大田南身八幡宮経筒139号経筒の口州彦山蓮佳坊とは、豊前彦山の修験者である。大田南八幡宮経筒143号経筒を携えた聖の日向縞戸山とは、鶴戸山と判読でき、鶴戸神宮の別当寺鶴戸山仁王護国寺かその坊宇の廻国聖と推定される。この鶴戸山は修験道の一大道場であり、この廻国聖も修験者と考えられる。

大田南八幡宮経筒140号経筒は以下の銘があり、廻国経

| 番号 | 経塚名 | 出土・伝世県 | 形式 | 年紀 | 西暦 | 聖名 | 住国 | 関連地名 | 経筒の文様 | 経典名 |
|----|--------|--------|----|------|------|---------|----|------|-------|------|
| 1 | 大田南136 | 島根 | 円筒 | 大永5 | 1525 | 真識 小聖祐戈 | 筑後 | 榎津 | なし | 法華 |
| 2 | 大田南137 | 島根 | 円筒 | 天文2 | 1533 | 昌道 昌貞 | 筑前 | なし | 蓮華 | 大乘妙典 |
| 3 | 大田南138 | 島根 | 円筒 | 当年 | 1600 | 圓覚坊 | 筑前 | なし | なし | 大乘妙典 |
| 4 | 大田南139 | 島根 | 円筒 | 永正17 | 1520 | 蓮佳坊 | 豊前 | 彦山 | なし | 大乘妙典 |
| 5 | 大田南140 | 島根 | 円筒 | 永正13 | 1516 | 阿讚 | 肥前 | 黒髪山 | 蓮華 | 法花妙典 |
| 6 | 大田南141 | 島根 | 円筒 | 永正18 | 1521 | 慈京 小聖 | 肥前 | 有馬 | なし | 大乘妙典 |
| 7 | 塔の越 | 山梨 | 六角 | 当年 | 1600 | 照白 | 肥前 | なし | 一尊 | 大乘妙典 |
| 8 | 高鴨神社 | 愛媛 | 円筒 | 永正11 | 1514 | 道安 | 肥後 | 上村 | なし | なし |
| 9 | 伏見稲荷 | 京都 | 円筒 | 永正18 | 1521 | 祐玉 | 肥後 | 野原荘 | 蓮華 | 法華妙典 |
| 10 | 大田南142 | 島根 | 円筒 | 永正18 | 1521 | 暁海 | 肥後 | 八代 | なし | 大乘妙典 |
| 11 | 大田南143 | 島根 | 円筒 | 永正12 | 1515 | 祥祐 | 日向 | 鶴戸山 | なし | 大乘妙典 |
| 12 | 大田南144 | 島根 | 円筒 | 永正18 | 1521 | 宝泉 | 日向 | なし | 蓮華 | 大乘妙典 |
| 13 | 経ヶ崎 | 島根 | 円筒 | 天文4 | 1543 | 一心坊 | 日向 | なし | 柏 | 経王 |
| 14 | 杉浦丘園蔵 | | 円筒 | 天文12 | 1516 | 道順 | 日向 | なし | ぼたん | 大乘妙典 |
| 15 | 大田南145 | 島根 | 円筒 | 永喜2 | 1527 | 梁道 | 大隅 | なし | | 欠 |
| 16 | 牛塚南方 | 栃木 | 円筒 | 天文7 | 1538 | 宗偏 | 大隅 | | 不明 | 大乘妙典 |
| 17 | 松田光蔵 | | 六角 | 当年 | 1600 | 快鏡坊 | 大隅 | なし | 一尊 | 経王 |
| 18 | 武田下 | 鹿児島 | 円筒 | 弘治元 | 1555 | 神力坊 | 薩摩 | なし | ぼたん | 大乘妙典 |
| 19 | 原新田 | 茨城 | 円筒 | 弘治元 | 1555 | 神力坊 | 薩摩 | なし | | 大乘妙典 |
| 20 | 大田南 | 島根 | 納札 | 当年 | 1600 | 日善上人 | 薩摩 | なし | | 大乘妙典 |
| 21 | 松田光蔵 | | 六角 | 当年 | 1600 | 秀養坊 | 薩摩 | なし | なし | 大乘妙典 |

表3 九州住廻国聖の経筒・納札（一尊は身に釈迦を刻む）

筒では永正十三（1516）年と古い。

バク 奉納法花妙典六十六部内一部（異）

十羅刹女肥前黒髪山寶積寺

三十番神本願権少僧都阿讚

旦那同国吉松土佐守盛次

永正十三丙子（1516年）十二月吉日敬白

付記すればこの経筒は、筒身のみで12cmと高く、筒身は銅板を3カ所細い銅板帯を差し込んで折り返す止め方をし、底部と筒身を4カ所で止めるなど古い接合方法を採用している。「経巻一本を糸で巻き、更にそれを紙で巻いたものを筒に納入」（近藤正1965）という点でも、他の納め方と異なっている。

銘文の黒髪山とは、佐賀県武雄市（旧山内町）にある古来より九州を代表する修験の山であった。ここには黒髪神社とともに、真言宗大覚寺派黒髪山大智院（もとは地蔵院と称していたが、正保2年大覚寺の末寺となった）があり、これを一山組織とし修験の子坊をいくつか持っていた。140号経筒の黒髪山寶積寺とは、その坊の一つで、現在は伊万里市東山代町にある（山内町1977）。このことから江戸時代以前は、修験寺と考えられる。また本願権少僧都阿讚とは寶積寺の住職であり、廻国納経の本願たる人物であろう。

旦那となった同国吉松土佐守盛次とは、史料には認められない人物ではあるが、年次不明（天正4（1576）年前後と推定される）の後藤貴明宛の「小むれしゅう連署契状」（佐賀県1962）中に「吉松太郎左衛門尉」とある。吉松土佐守盛次と直接結びつく史料はないものの、同じ吉松の苗字からすれば、同族もしくは子孫と考えられる。小む

れ衆はにしノ衆、中山衆、東ノ衆にわかれ、吉松太郎左衛門尉は東ノ衆であったことから、吉松土佐守盛次は、肥前の国人後藤氏被官の地侍と考えられる。この小むれ衆とはどの範囲の地侍によって構成されていたのかは不明であるが、別に黒髪山周辺には山内衆があるので、後藤氏の拠点武雄市武内町ではないだろうか。この地には小むれ衆の苗字に共通する字「柿田代」、「井手の上」、「馬場」、「松尾」があることから、小むれ衆とは武雄市武内町の地侍集団と理解できる。すると大田南八幡宮経筒140号経筒は武雄市北域の地侍吉松土佐守盛次を旦那し、黒髪山寶積寺の権少僧都阿讚を本願として納経するための経筒と理解できよう。

まとめ

神力坊や三卷上人の経筒、最後は肥前黒髪山銘の経筒にこだわってきた。最後に九州の廻国経筒を全体的傾向についてふれ、まとめたい。

九州の廻国経筒を携え、廻国納経する聖は、薩摩神力坊以外にも、修験者が少なからずいたことがわかった。そして神力坊はたんなる修験の廻国聖ではなく、政治・軍事にかかわる島津氏の重要な被官であった。

三卷上人にみられるように、上人号の聖には勅許による僧号が出され、補陀落渡海僧とも関係が推定された。玉名市の補陀落渡海碑には、下野の渡海上人の同船者に駿河、遠江の僧が確認される（根井浄2001）。同じ、廻国の果ての補陀落渡海であったと推定される。

霞ヶ浦東岸を踏査したのは1998年、人吉や旧加世田市を踏査したのは、2000年のことであった。そして資料と

地図を広げ、頭の中の廻国業に10年余りを費やした。当時の廻国業に9から5年かかったというから、執筆満願成就に同じ時間をかけたことも、決して無駄ではあるまいと思ひ、筆を置く。

補記

文末ではあるが、小論を執筆するにあたって、下記の機関や人々にお世話になった。厚くお礼を申し上げたい。

佐賀県立図書館、旧加世田市教育委員会、人吉市教育委員会、旧山内町教育委員会、竹田神社、妙光寺、大田南八幡宮、栗林文夫、吉澤 悟、桑原憲彰（敬称略）

引用・参考文献

佐野英山 1924 『國分日本金石年表』
杉浦丘園 1933 『雲泉莊山誌之四』
桑波田 興 1958 「戦国大名島津氏の軍事組織」『九州史学 第10号』（『島津氏の研究』に採録）
近藤正 1965 「大田市南八幡宮の鉄塔と経筒について」『島根県文化財調査報告書 第1集』
佐賀県 1962 『佐賀史料集成 第6巻』
小沢国平 1965 「草加市柿木経塚」『埼玉考古3』
北川鐵三校注 1966 『島津史料集』
近藤正 1967 「島根県下の経筒について」『島根県文化財調査報告書 第3集』
茨城県 1968 『茨城県史料近世地誌編』
景山春樹 1969 「六部さんの法華経」『朱第6号』
千葉県企業庁 1975 『公津原』
桑原憲彰 1977 「相良長毎の骨塔」『熊本県文化財調査報告書 第22集』
山内町 1977 『山内町史上・下巻』

三宅敏之 1983 「三重・仙宮神社の経筒」『経塚論攷』（『ミュージアム183』1966初出）
三宅敏之 1983 「六角宝幢式経筒について」『経塚論攷』（『東京国立博物館紀要 第4号』1968初出）
三宅敏之 1983 「山梨・塔の越経塚」『経塚論攷』（『甲斐考古5・2』1968初出）
加世田市 1986 『加世田市史 下巻』
福島金治 1988 『戦国大名島津氏の領国形成』
小田富士雄 1989 「九州古代経塚考」『考古学雑誌』第74巻-第4号
渋谷敦 1993 「犬童善四郎とは…①～⑤」『人吉新聞』（堀野宗俊1994に再録）
永松 敦 1993 『狩猟民俗と修験道』
堀野宗俊 1994 「瑞巖寺境内に建つ肥後国人吉藩主相良長毎供養碑から」『瑞巖寺博物館年報第19号』
鶴見貞雄 1995 「武蔵野経塚の経筒と二、三の問題」『茨城考古学協会 第7号』
石岡市教育委員会 1996 『石岡の石仏』
国立歴史博物館編 1996 『歴代銅鏡』（中文）
宮崎県 1998 『宮崎県史 通史編 中世』
関秀夫 1999 「平安時代の埋経のその後」『平安時代の埋経と写経』
足立順司 2000 「北の廻国経筒」『静岡県考古学研究 32』
根井浄 2001 『補陀落渡海史』
藤田定興 2003 「六十六部聖・行者の廻国目的とおこない」『巡礼論集2』
栗林文夫 2004 「井尻神力坊について」『黎明館調査研究報告 第17集』
足立順司 2004 「廻国聖の道」『静岡県埋蔵文化財調査研究所設立20周年記念論文集』
足立順司 2008 「西日本の廻国経筒1」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要第14号』
松田光 2009 「六角宝幢形経筒の釈迦像」『小さな蕾 NO.489』2009年4月号

Jinrikibo and Container for Sutra Scrolls of Sankan Shonin of Suruga

—Carried Container for Sutra Scrolls in West Japan 2—

Junji ADACHI

Summary: In this study I explore the pilgrimage of Kyusyu region and tube-shaped containers for sutra scroll.

First, I examine roles of a monk, one of the pilgrims of Kyusyu, called Jinrikibo IJIRI of Satsuma who is the only one we can identify in the Sengoku Period. Basing on the containers with his name on them excavated in Ibaraki and in Kagoshima, analyzing the situation of regions at the same time, I found that he was not a simple pilgrim monk who traveled to dedicate sutras, but at the same time, a messenger from the Shimazus to the Otomos, feudal lords of Sengoku period.

Second, I examine a hexagonal Hoban style container unburied in Minamimachi, Hitoyoshi city in a stone monument called Kotsuto (literally “a stone tower”). This monument was constructed by a man called Genshun INDO in order to comfort the soul of Nagatsune SAGARA, the lord of Hitoyoshi. Before constructing the monument there, Genshun built such a kind of monument in faraway city Oshu Matsushima, on the way of his travel for comforting the soul of Nagatsune. On the container excavated in Minamimachi, we can see a signature written as Sankan Shonin of Suruga, which is possibly a name which represents his assigned status. This container, containing teeth, is supposed to be an example of diversion of a container for sutra scroll.

Third, I point out that there were some monks practiced in Mt.Hikosan and Mt.Kurokamiyama, as well as some monks traveling around Kyushu region.

Key words: carried container for sutra scrolls, Jinrikibo of Satsuma, Shimazu Nisshinko, Sankan Shonin of Suruga, travel of Indo Genshun , stele for Sagara Nagatsune’s soul

三島ヶ嶽経塚小考

—富士山本宮浅間大社所蔵写真資料から—

勝 又 直 人

要旨 三島ヶ嶽経塚は昭和5年(1930)に富士山頂で発見された。出土遺物として経巻が納入された経筒や経軸・水瓶・土器等、また埋納施設として木槨が発見されている。その規模や文献等から久安5年(1149)の末代による一切経埋納の遺物や、末代以降の埋納と考えられている。平成20年度に実施された富士山世界文化遺産登録推進事業にかかり、富士宮市教育委員会が富士山本宮浅間大社において昭和5～6年の三島ヶ嶽経塚に関する報告で使用された写真の一部や未発表写真を確認した。名称不詳経典の写真について観察した結果、『大慈恩寺三蔵法師傳』・『大方等大集経』の一部であると推定された。また既に確認されていた『佛本行集経』・『南海歸寄内法傳』の存在も勘案すれば、当該経典群は末代の埋納した一切経である可能性を補強する。今後、出土遺物や写真の所在確認・検討により三島ヶ嶽経塚の再評価がなされるものと期待される。

キーワード：三島ヶ嶽経塚 富士山、水瓶、経軸、木槨、経塚、末代、一切経、富士山本宮浅間大社、大慈恩寺三蔵法師傳、大方等大集経、佛本行集経、南海歸寄内法傳

1 はじめに

三島ヶ嶽経塚は富士山山頂でも噴火口(大内院)の周囲に位置する峰のうちのひとつである三島ヶ嶽の麓に位置する。所在地としては静岡県富士宮市粟倉にあたるが、この富士山火口付近は静岡県・山梨県との県境が未だに確定していない。富士山は古来より崇敬の対象であり、富士山を御神体とする浅間神社等が各地に点在する。山頂には明治初期の廃仏毀釈まで、多くの仏堂・仏像が存在していたようであるが今は見る影も無く、破壊された仏像等が三島ヶ嶽付近に集積している。現在富士山八合目より頂上までは富士山本宮浅間大社の所有となっており、頂上すなわち富士宮口登山道、富士吉田口登山道の終点には浅間大社の奥宮が存在する。江戸期まで富士宮口登山道側の奥宮は、隆盛を極めた村山興法寺(村山修験)の支配する大日堂が前身である一方、富士吉田口側の奥宮(久須志社)は浅間社の支配下にあり薬師堂であった。また江戸期には富士講が隆盛を極め、富士山という単体の存在に対して、様々なベクトルの信仰が集積していたのである。

この富士山にかかる考古学的調査の嚆矢として、昭和5年(1930)に三島ヶ嶽経塚の発見であり、件の遺物分析にかかる佐野武勇氏(佐野1930)や足立鋤太郎氏(足立1930・1931)による報告がまずあげられる。その後、件

の三島ヶ嶽経塚について三宅敏之氏により検討(三宅1961・1980)がなされた。また富士山の信仰世界を研究した堀内真氏により出土遺物も併せて検討(堀内1989)され、平成14年には富士吉田市歴史民俗博物館において企画展「富士山の信仰遺跡」が開催されたのも記憶に新しい(富士吉田市2002)。最近では富士山世界文化遺産登録の動きも相俟って、静岡県・山梨県で富士山の調査がなされているのは周知のことである。

当該文は平成20年度に静岡県が行った富士山世界文化遺産推進事業に伴う調査を当財団が受託した際、調査協力頂いた富士宮市教育委員会が富士山本宮浅間大社で保存されていたのを確認した、三島ヶ嶽経塚にかかる記録写真の検討である。本来ならば出土遺物そのものを検討せねばならぬものであるが、出土遺物の所在は未確認で、本文は写真で理解される点を中心に検討したものである。よって今後、遺物・写真の再確認によりこれらの所見も大きく変化することであることをあらかじめ述べておく。

2 経塚の立地

三島ヶ嶽経塚は富士山の山頂に位置する(第1図)。山頂には火口が形成されているが、その火口は第1～3火口縁と第1・2火口棚で構成される(津谷1971)。火口外縁



第1図 三島ヶ嶽経塚の位置 (1/25000)

である第1火口縁は海拔3776mを測る剣ヶ峰を含む八葉であり、その八葉のうちの一つに三島ヶ嶽(三島岳・三島ヶ岳)がある。三島ヶ嶽は富士山最高所剣ヶ峰から南東へ約280mの位置にあり、標高3734mを測る。当該経塚は三島ヶ嶽の北東裾部に位置するが、雪解け水がたまるこのしろが池(鰯池)に面し、経塚付近の標高は3713mを測る。このしろが池が位置する平坦面は第1火口棚に該当し、富士宮口登山道の終点である奥宮に近接する。この奥宮から駒ヶ岳にかけては火口から溢れた富士山頂上層溶岩流を基盤とし、三島ヶ嶽はそれより以前の新富士火山中期溶岩に由来する紫蘇輝石玄武岩で構成される。しかし三島ヶ岳東側や剣ヶ峰崖下等、部分的に溶岩の薄層を挟む火山砂礫層を基盤となす箇所が見受けられ、経塚はこの火山砂礫層が主体となす一帯に設けられたものである。砂礫が広がる三島ヶ嶽周辺においては、経塚造営にあたって玄武岩の硬い岩盤を掘り貫く必要が少ないため、塚構築に容易い面があったかもしれない。

3 経塚の造営

三島ヶ嶽経塚は末代が中心になって造営されたとされるが、末代以前にも富士山への登頂者は存在し、宗教的な足跡を遺した可能性(西岡2004・註)は十分に考えられる。末代による経塚造営への動態は1150~1159年頃に成立した史書『本朝世紀』に明らかで、『本朝文集』所収の鳥羽法皇の發願文ともあわせて三宅敏之氏によりまとめられている(三宅1961)。久安4年(1149)5月16日時点で、鳥羽法皇の命により大般若經の書写に多くの貴人・僧侶が参加、これを富士上人末代の活動に由来するものとする。末代は富士山に数百回登攀し、山頂に大日寺を建立し、関東

の人々に勧進し、比叡山の慈覚大師の作法に倣い一切經書写を進めていたとする。その活動の中で料紙600巻分が残り、上人は上洛。鳥羽法皇と結縁し、法皇は『大般若經』の写經を命じている。また末代が白山開基の日泰上人の転生と信じられている旨を記述している。5月2日に鳥羽法皇が仏頂堂にて富士上人がとりそろえた料紙に『般若心經』と『尊勝陀羅尼』を写經する。また『大般若經書寫人名帳』も院宣により作成された。5月13日に書写がされた『大般若經』が十種供養等を経て、駿河国富士山へ埋納のため富士上人末代に渡されている。末代の埋納經典の大半は、結縁した東海道・東山道の人々の力により整えられた大乘・小乘經典(『大般若經』600巻、鳥羽法皇宸筆の『般若心經』と『尊勝陀羅尼』を除く)、論、律の三藏やそれ以外の典籍を含めて4696巻である。

4 昭和5~6年時の報告と確認された写真

経塚発見の契機となったのは、火山砂礫を利用するために、昭和5年の奥宮参籠所建設の際、砂礫採取を行った人夫により発見されたものである。写真1・3~11は当該経塚が発見後、佐野氏・足立氏の報文に掲載された写真で、浅間大社が所蔵している写真である。ただし足立氏の報告に掲載されていた写真のうち、数枚は未確認である。

(1) 写真1

三島ヶ嶽を北東の方向から撮影したものである。三島ヶ嶽裾部に上方から転落したらしい大石が2個あり、件の石仏群も大石脇にある。経塚遺物は写真1にある×印の位置から出土したとされ、遺物は数箇所から出土したことが理解される。この写真は佐野氏の文に見られるものであるが、足立氏による県報告の写真と×印の位置が微妙に異なる。佐野氏の報文に基づいて埋経施設を概観すると、①「四五寸厚さの灰、炭などの層の下になって木槨があらはれた」②「二寸厚さ位の板五尺四方位の箱様の腐朽せる中に經卷の軸と覺しきもの、腐朽したるもの數百本埋藏してあつた。此の木槨の外層に破片ながら土器が竝列してあり、同じ場所に、注口を有する銅器の水瓶様のものが伴出した。」③「經筒は此の大石の下に壓し潰されて發掘せられた」「經筒三箇、土器、刀子らしき鐵器及び其の鞘らしき木片を發見した。」とある。さらに①について佐野氏は「経塚となして後、何代かの間修験者の修場となつて居つたのではないかと推定する。

写真1には×印が3箇所認められるが、①・②がどの位置であるかは判然としないが、③は経筒が「大石の下」で発見された点から右端の×印の位置の可能性がある。この富士山頂一帯は噴出せられた溶岩・火山灰等に由来する堆積物で構成されるため、下界の経塚のように所謂「土」を掘り抜き、最終的に「土」で多い被せ、「土」で構成される塚状の施設は存在できない。山頂の激しい風雨や氷雪に耐え得る埋経施設を想起せられるならば、埋経施設が大量の礫で構築されていたものと推定される。なお足立氏は「三島嶽南鯨池邊に於て経塚を発見」と報告し、氏報告の位置図(足立1931)も三島ヶ嶽の南側に経塚の位置が記されている。しかし昭和5年の三島ヶ嶽経塚発見時の写真(写真1)と近年の経塚出土地点周辺の地形(写真2)を比較して理解できるように、富士山火口南側、三島ヶ嶽側に経塚が位置しているのが理解できよう。

(2) 写真3～4

佐野氏によれば、経塚から経筒・経典・経軸・土器・水瓶・刀子等が出土したとされる。経筒は銅製で3点出土とする。そのうち2点は破片資料であるが、もう1点は写真3及び写真4のように経筒底部だけは完存し、報告で佐野氏は①「朱書の経巻がギッシリ充填してあり、地層の變動によつて此の二つの大石塊のために経筒は押し折られ、経巻は其の儘石の下に壓迫された形で発見せられた。」②「経筒には外筒はなかりしが如し、直接砂礫の中に埋没せられたるため轉石のために破碎せられたるものならん」とある。経筒は底部と胴部下端部以外は粉碎された状態で、佐野氏は経筒は「直徑九寸七分弱」と報告する。発見時に現地にいる神官の証言から佐野氏は経筒内には八寸程度の経巻を2段積みして納入していたものと勘案し、「経筒の高さは一尺七八寸」(約51.5～54.5cm)を有していたものと推定している。また破片の状況から「圓筒は接合せる痕跡なきより思ふに鑄銅製のものなるべきか」「蓋と筒との接合する部分には特に被蓋式の銅帯を装して蓋と筒とは鉸留めになしたるが如し」としている。

一方、足立氏は「底板の徑は二八・二糶、厚は一・五糶、胴部は「厚一糶」と報告している。佐野氏の報告も勘案すれば、経筒の径は概ね28cm台なのである。さらに足立氏は経筒内面には「経巻の渦文壓痕」外面に墨書で「外周に幾つもかさね書きした間から承久の文字痕あるを発見」したとする。

写真4には経筒の残骸が見られるが、筒部と思われる部分が鉸留されているようにも観察される。しかし現物が所在不明のため断定しえない。経筒底について佐野氏によれば「筒の内側に輪走の堤状隆起ありて入れ蓋、入れ底の形式」としている。なお足立氏の報文には「承久」という墨書が確認された経筒底部外面の写真が掲載されている。残念ながら氏の写真では「承久」の文字は確認できない。この写真については、平成20年度の調査で未確認である。足立氏は「承久」を年号と考えている。

さて三島ヶ嶽経塚から出土したこの経筒は東日本で出土した銅製経筒でも最も大きい経筒となる(村木2003)。多くの銅製経筒は9～12cmが多く、大型でも15cm台である。三島ヶ嶽経塚出土銅製経筒に匹敵するのは氏の指摘通り神奈川県鎌倉市の永福寺経塚出土経筒(径24cm)であろうか。この三島ヶ嶽経塚出土の経筒は大量の経巻を収納することを意図したものであるのは明らかである。また通常、経筒は外容器内に収納されていることが多いが、佐野氏の報告のように当該経筒は外容器に納められていた痕跡が認められない。

(3) 写真5～6

写真5は経軸と水瓶である。撮影時は経軸を背後の壁に立て掛け、床上に水瓶破片が置かれている。水瓶を詳細に観察すると、3つの破片が認められる。左側は水瓶の肩部と考えられる。肩部には突帯が巡らされている。頸部は下位まで残存し、頸部中位から口縁部にかけては失われている。その隣は注口部と考えられる。胴部上位付近に取り付けられたものであろう。この注口部は湾曲し、法隆寺伝世資料に代表される「仙蓋形水瓶」に見られる添水口のような形状ではない。菊花座を設えた鳥首形のようなものか。右端の破片は胴部下位と考えられる。台脚は直線的に立ち上がり、底部外縁に接続する。底部板は写真には写っておらず、亡失したようである。嵌底であったのであろう。水瓶の口縁部が欠損しているため、尖台の有無等が判然としないが、全体的な残存状態と其の形状から勘案して「布薩形水瓶」の可能性があろう。

経塚遺跡において仏具としての水瓶を副納した例は極めて少なく、経塚において水瓶は副納する必要性が限定された特殊なものと考えられる。水瓶出土経塚として京都府鞍馬寺経塚(奈良国立博物館1977)が知られ、仙蓋形水瓶が出土している。また和歌山県那智経塚付近で布薩形水瓶

第1表 浅間大社所蔵佐野氏・足立氏報告写真

| 写真№ | 掲載文献・掲載時写真タイトル |
|------|---|
| 写真7 | 足立嶽太郎1930「富士山頂三島嶽南経塚遺物中の経筒と経巻につきて」『考古学雑誌』第二十卷第十二号 第三圖 富士経塚発見紙本墨書大集經四十三 |
| 写真9 | 足立嶽太郎1930「富士山頂三島嶽南経塚遺物中の経筒と経巻につきて」『考古学雑誌』第二十卷第十二号 第四圖 富士経塚発見紙本紅殼書南海寄歸内法傳 |
| 写真11 | 佐野武勇1930「富士山頂三島ヶ嶽の経塚」『考古学雑誌』第二十卷第十号 第六圖 朱書経巻の一部 |

が出土しているが、経塚の副納品や否や不明（東京国立博物館1985）である。よって管見に入る範囲内で布薩形水瓶を副納した経塚は三島ヶ嶽経塚のみである。

写真5・6に写る経軸の材質は「多く杉か樅の細き木片」とし、佐野氏は報告で経軸を「軸木」とし、「A、両端に黒漆塗りとなしたるもの。直径五分。長さ折損して不明。」「B、白木にして塗料を施さざるもの。直径二分五厘。長さ八寸八分。」「C、丸き杉箸様の軸を二ッ割となしたるもの、直径一分八厘位長さ八寸。中に杉箸様のものの代わりに竹箸様のもの即竹を二ッ割となしたるもの交れり。」と3タイプに分類している。即ち直径約15mmのAタイプ、Bタイプは直径約7.5mmで長さ約26.6cm、Cタイプは直径約5.4mm、長さ約24.2cmを測ることになる。写真5では右側7本がAタイプに該当し、残りがBタイプと考えられる。ほぼ中央部に大きく湾曲した経軸が認められるが、何故湾曲するに至ったのか、本当に経軸なのか判然としない。Aタイプ及びBタイプは木柵内からの発見とし、佐野氏は経軸を残して経典は消失し、わずかに残片が残っていたとする。写真6で経典が巻かれていたのは全てC類で、経筒からの出土品である。佐野氏は「此の紙を此の軸に巻くに單に二ッ割の軸を合わせて一本の軸の如くにして巻き決して この二ッ割りの割れ目に紙の端を夾んで巻き初める様な事はしていない」とある。また「經文の書き初めが中に巻き込まれて書き終りが表面に來手居の様である。」と観察している。足立氏に経軸については所見を述べられていない。

写真6は経筒内から出土したとされる経骸を2つの箱に積み上げて撮影されたものである。経骸の表面には砂が一面に付着する。佐野氏によれば経筒内に「朱書の経巻がギッシリ充填」してあったと云い、足立氏によれば件の「承久」と書かれた経筒内から経骸50巻を確認したとする。そのうち3巻が紙本墨書経で、残りは紙本朱書経であったという。

第2表 富士山出土経典

| 出土地 | 経典名 | 備考 |
|--------|---|---|
| 三島ヶ嶽経塚 | 『大方等大集経』 日藏分送使品第九 日藏分念佛三昧品第十 『佛本行集経』 浄飯王夢品十七 道見病人品十八 道逢屍品十九 耶輸陀羅夢品二十上 『南海寄歸内法傳』 卷第一 『大唐大慈恩寺三藏法師傳』 卷第二 『廣弘明集』？ 辯惑篇第二之四 辯惑篇第二之五 | 経筒内より出土と報告。 現在所在不明。 |
| 山頂出土？ | 『無量義経』 徳行品第一 説法品第二 『妙法蓮華経』 薬草喻品第五 授記品第六 化城喻品第七 五百弟子授記品第八 授學無學人記品第九 法師品第十 觀世音菩薩普門品第二十五 | 富士山本宮浅間大社所蔵。 三島ヶ嶽経塚出土品？ |
| 経ヶ岳経塚 | 『觀普賢菩薩行法経』 | 富士吉田口五合五勺。 大正13年(1924)出土。 経骸10巻のうちの1巻 |

(4) 写真7～9・11～12

経塚発見以降、50点の経骸について分析が進められ、昭和5・6年に足立氏は経典名を公表している。昭和5年に発見されたとする経骸の所在は現時点では未確認であるが、浅間大社では紙本朱書経を10巻分所蔵しており、そのうち5巻が開かれている（富士吉田市2002）。その内容は『無量義経』（徳行品第一・説法品第二）、『妙法蓮華経』（薬草喻品第五・授記品第六・化城喻品第七・五百弟子授記品第八・授學無學人記品第九・法師品第十・觀世音菩薩普門品第二十五）と判明している。この10巻分が三島ヶ嶽経塚からの出土品であるかどうかは詳らかではないが、山頂出土の経典として理解されている。また佐野氏や足立氏が昭和5～6年時点で確認した経典は『大方等大集経』（日藏分送使品第九・日藏分念佛三昧品第十）、『南海寄歸内法傳』（卷第一）、『佛本行集経』（卷十五のうち、浄飯王夢品十七・道見病人品十八・道逢屍品十九・耶輸陀羅夢品二十上）である。

今回浅間大社において所蔵を確認した佐野氏・足立氏報告分三島ヶ嶽経塚出土経典の写真は第1表に示す。写真7～9・11～12は経典の写真で、写真12については足立氏の昭和6年の報文から参考資料として転載したものである。

写真7は『大方等大集経』である。日藏分送使品第九から日藏分念佛三昧品第十にかけての部分で写真の中央部に

は「□□□大集経日□□□佛三昧品第十」とあるのを見ることができる。足立氏により報告された写真である。3巻分出土した墨書経のうちのひとつである。

写真8については、佐野氏・足立氏ともに未報告の写真である。解読の結果、写真7と同じ『大方等大集経』日像分送使品第九であることが今回判明した。現在経典の所在は不明となっているが、写真から出土経典は撮影時には装丁・修復されていたものと判断される。写真7同様墨書経と考えられる。

写真9は義浄撰の『南海寄歸内法傳』巻一である。冒頭に「□□□□□傳卷第一 三藏沙門義浄撰」とあるのを見ることができる。写真7同様、足立氏により報告された写真で、朱書経である。

写真11は佐野氏の報告で「朱書経典」として紹介され、遺存状態が悪かった為か足立氏も解読できず触れられることが無かったと思われる経典である。今回解読を行った結果、唐の慧立が編集した『大慈恩寺三藏法師傳』巻第二の残片と推定される。写真には2つの経骸が写っている。右側の経骸で確認される「…寒冷春」と左側の経骸「…所須事公給彼僧稱法師者…」との間には1行約17字として約58行分の文字が存在しているものと考えられる。また釈文と『大正新脩大藏経』所収『大慈恩寺三藏法師傳』抜粋と比較して、左側の経骸は誤写している可能性があるが、今後他の古写経との比較作業が必要である。

写真12は足立氏による昭和6年(1931)報告を転載したものである。昭和5年(1930)報告文には「第七圖 富士経塚発見道経と認めらるゝ二巻の一部」、昭和6年報告文では「圖版十九 紙本血書道藏二種」と紹介された経典である。平成20年度の調査では浅間大社所藏品の中に該当する写真は確認できなかった。この掲載された写真を観察すると足立氏の指摘通り、列子『天瑞』第一の引用部や、「服丹金色二十八」と道教関係の用語も散見される。一般的に「一切経」の中には仏教と道教の比較を行い、優劣を説く書物の存在がある。検討の結果、唐の道宣が著した『廣弘明集』辯惑篇第二之四や第二之五に酷似する。ただし足立氏の写真が不鮮明であるため、これ以上の推定に躊躇する。

足立氏の昭和5・6年の報告にはそれぞれ「経巻奥書」の写真を掲載している。しかし「十七日書了 末代聖人 □亮(覺亮か?)」と解読された紙片が摘出されたのが、

いずれの経骸かは不明と報告されている。これまで触れてきた富士山内出土の経典は第2表のように整頓できる。

ここで出土経典の性格について整理しておく。足立氏は「…末代上人と尊稱するのは必ず其流を所業であつて、承久は久安より七十年後の事故時に於て相應すると考へられる…」とし、出土経典の写真を黒板文學博士(黒板勝美氏か。)に送付し、鑑定の結果、「立派なる鎌倉前期の筆迹」という回答から、出土経典は承久年間のものとして推定されている。

しかし三宅敏之氏は出土遺物や出土経典について小山富士夫氏や堀江知彦氏から助言を得た上で、①「これらの遺物を久安年間とするのにさして不都合は感じられない」としている(三宅1961・1983)。また三宅氏は②「…経筒の底部に「幾つもかさね書きした」ということは、従来発見の経筒にはあり得ない」とし、また③「その承久という文字が果して年号をあらわしたものであるという確証もない…」としている。また「末代聖人」と記載された経典断片については④「…勸進者その人を記したものと考えるほうが当時の書き方としては妥当」と考えられた。他に⑤「報文に全く記されていない血書の無量義経と法華経が富士山頂出土品として現在浅間神社に保管されているのも不思議なこと」と述べている。三宅氏は①～⑤の点から①「木槨に収めて埋納されたものは末代勸進による一切経」②「その後この地が一種の霊地として埋納供養の中心となり、例えば紀州那智山や、大和金峯山のように追納されたのが経筒であり、現在浅間神社に見られる経典類はこの追納分」③「報告書に一切経の一部として経筒内発見と記された経典類は、実は木槨内から発見されたものを混同、誤認」と推定されている。

現時点において埋納経典が判明した経塚は少ない。奈良県金峯山経塚では寛弘4年(1007)の藤原道長による埋経では『妙法蓮華経』・『無量義経』・『観普賢菩薩行法経』・『阿弥陀経』・『観弥勒菩薩上生兜率天経』・『弥勒下生経』・『弥勒菩薩下生成仏経』・『般若心経』が埋納された。三重県朝熊山経塚では『妙法蓮華経』・『般若心経』・『一切如来心中真言』・『随求陀羅尼』・『仏頂尊勝陀羅尼』の埋納が知られている。興味深い例では高野山奥之院経塚の比丘尼法薬の埋経では『妙法蓮華経』・『無量義経』・『観普賢菩薩行法経』・『般若心経』・『阿弥陀経』等の経典の他に『比丘尼法薬願文』・『比丘尼法薬供養作善目録』、そして『金剛界

種子曼荼羅』・『胎藏界種子曼荼羅』・『法華種子曼荼羅』が埋納された。現在の一般的な見解として埋納経典で主体を占めるのは『法華経』である。静岡県内では勝栗山経塚（浜松市北区：旧浜北市）で出土したとされる外容器（陶製五輪塔）には「妙法蓮華経」、白山神社経塚（島田市：旧金谷町）では経筒と共伴した鏡に「法華如寶経」と書かれた2例が知られ、他に埋納経典名が明らかな例は三島ヶ嶽経塚のみである。

ここで三島ヶ嶽経塚の出土経典を再考する。写真9の『南海寄歸内法傳』は唐代に入竺求法僧の義浄がインドの仏教事情を記録した書籍であり、写真11の『大慈恩寺三藏法師傳』は義浄よりも約30年前にインドに赴いた玄奘の伝記である。これら『南海寄歸内法傳』・『大慈恩寺三藏法師傳』に加えて仏教・道教の優劣を説く『廣弘明集』？は所謂「経」・「論」・「律」に属さず、これら三藏に中国の高僧の書籍等を付け加えて成立した大藏経（一切経）の内容に相応しい典籍である。従ってこれらは通常の経塚に埋納するために用意された経典ではなく、三宅氏の指摘通り末代勸進の一切経の一部と考えた方が合理的である。さらに足立氏の報文通り経典が「承久」経筒から出土したとするならば「承久」年間における仏頂尾流を代表とする埋経各派の所作等の差が経典に現れたと考えるより、私見ではあるが⑦「末代の埋経後、数十年後の「承久」年間に残存していた末代の埋経を整理・再埋納した」④「末代勸進の一切経の内、木槨に収めきれなかった経典が経筒という形で埋納、墨書は後代の追記」とも2つの推論が考えられる。「承久」経筒が外容器の無いまま埋納された理由も⑦に係る可能性がある。さらに三島ヶ嶽経塚の「承久」と書かれた経筒に収納されていたとされる『大方等大集経』・『佛本行集経』・『南海寄歸内法傳』・『大慈恩寺三藏法師傳』・『廣弘明集』？また可能性として『妙法蓮華経』・『無量義経』等大量の経典をすべて揃えて、この経筒に収納することが可能であったのだろうか。墨書経3巻の中で確認された『大方等大集経』も本来は大部の経典であり、墨書経が3巻分のみ発見ならば『大方等大集経』は不完全な形で経筒に納められていた蓋然性が高い。なお第2表にあるように富士吉田口登山道五合五勺の経ヶ岳でも埋経が確認され、周知の通り富士山内各所に埋経された可能性を追求する。

(5) 写真10

写真10は出土した土器である。写真には左に完形に近い壺、写真中央部に破片2点ほど見られ、右側にはある程度形が残存した土器が撮影されている。左側の壺は底部から僅かに内湾するものの、ほぼ直線的に体部を立ち上げている。胴部中位に一条、下位に一条、横位の沈線が描かれている。肩部と体部との境界は明瞭で、この付近の前後から窯体内での焼成時の降灰に由来する釉が見られる。頸部はやや外反気味に立ち上げている。口縁部は大きく外折させ、口唇部は上方に折り曲げている。佐野氏は報告の中で「…土質は須惠器に近似せる灰白色に暗緑色を混じへた様な然し須惠器程緻密でない。第七圖左方の壺は、高さ八寸、肩の直径六寸、口径三寸五分、底径三寸であってその中に何物も容れてなかつた。」すなわち器高約26.6cm、体部最大幅約20cm、口径約11.7cm、底径約10cmを測る資料である。用途として外容器と使用されたのであろうか。この左側の壺は古瀬戸壺にも形態的に類似するが、口唇部の形状の断面の形状がN字状である。また古瀬戸四耳壺が胴部と高台との境界が明瞭なのに比べ、写真の土器は不明瞭であり、該期の古瀬戸四耳壺とは異なる。そのため渥美産の壺の可能性も指摘されているが、写真での観察には限界がある。右端の土器は頸部より上位を欠損し、体部上位付近のみの資料である。佐野氏は昭和5年に土器片の拓本を報告、その拓本に関して赤星直忠氏はその土器片は鎌倉時代の所産と推定（赤星1931）している。写真の土器資料についても現在、所在が不明のため、これ以上の推論に躊躇する。なお東京国立博物館には12世紀代の渥美産と考えられる壺口縁部と鉢の破片資料、常滑産陶器と思しき破片資料が保管（東京国立博物館1988）され、転用された外容器と推定されている。東博の資料写真では山茶碗の細片も見られることから、前述の鉢の破片も併せて外容器の蓋に転用されたものであろう。件の「承久」の経筒は既に述べたように外容器が伴わない状態で出土しているが、径が約30cmを測る経筒を納める外容器として専用の外容器もしくは常滑産の甕等が想起され、外容器を伴わない状態で発見される大型経筒の存在について一考を要する。

5 まとめ

前章まで古写真を中心に私見を加えて述べてみた。写真のみを扱うのは本来的に問題でもあるが、今後の当該経塚



写真1 三島ヶ嶽経塚発見時（昭和5年） 富士山本宮浅間大社所蔵写真



写真2 近年の三島ヶ嶽経塚跡付近（平成20年）



写真3 経筒出土状況
富士山本宮浅間大社所蔵写真



写真4 出土経筒

富士山本宮浅間大社所蔵写真



写真5 出土経軸・水瓶

富士山本宮浅間大社所蔵写真



写真6 出土経骸

富士山本宮浅間大社所蔵写真



写真7 出土經典（大方等大集經日藏分送使品第九～日藏分念佛三昧品第十）

富士山本宮淺間大社所藏写真



写真8 出土經典（大方等大集經日藏分送使品第九）

富士山本宮淺間大社所藏写真

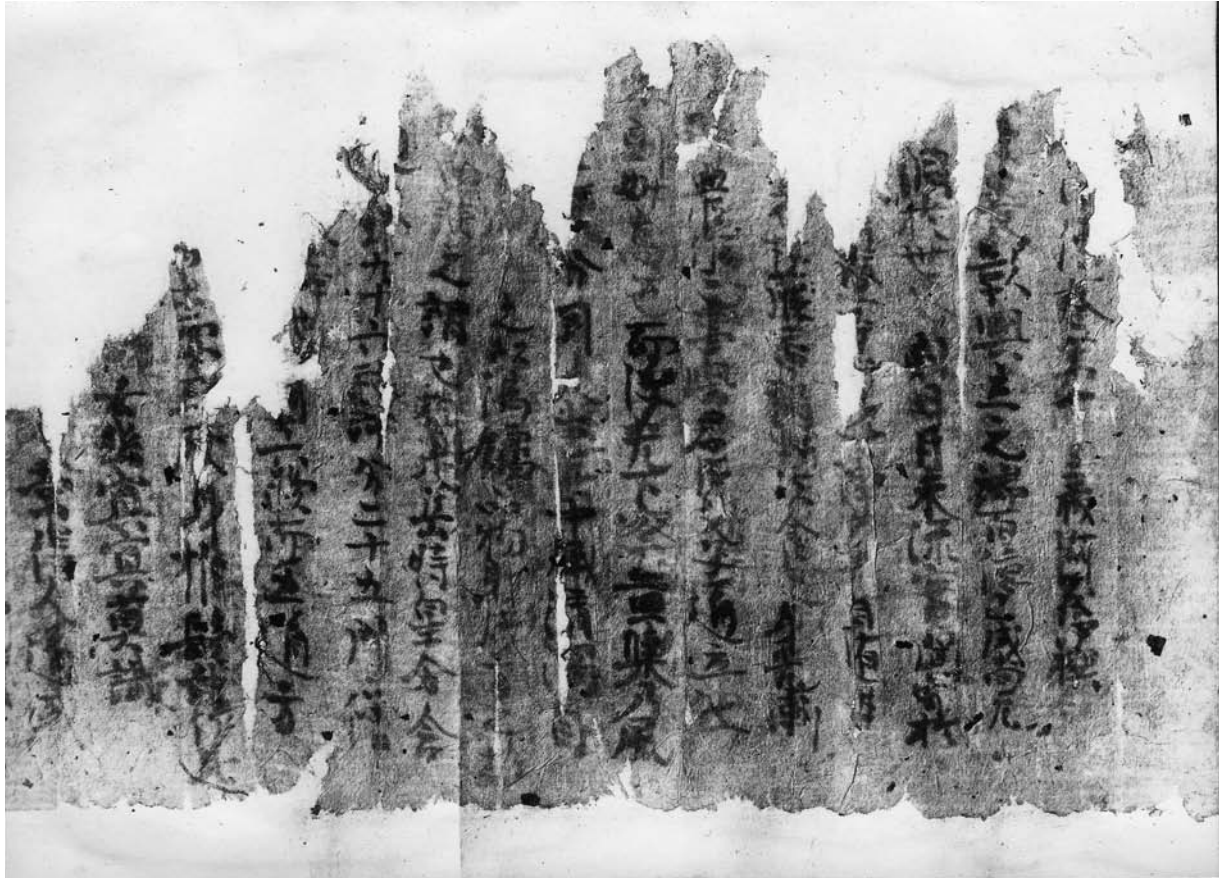


写真9 出土經典（南海寄歸內法傳第一）

富士山本宮淺間大社所蔵写真



写真10 出土土器

富士山本宮淺間大社所蔵写真

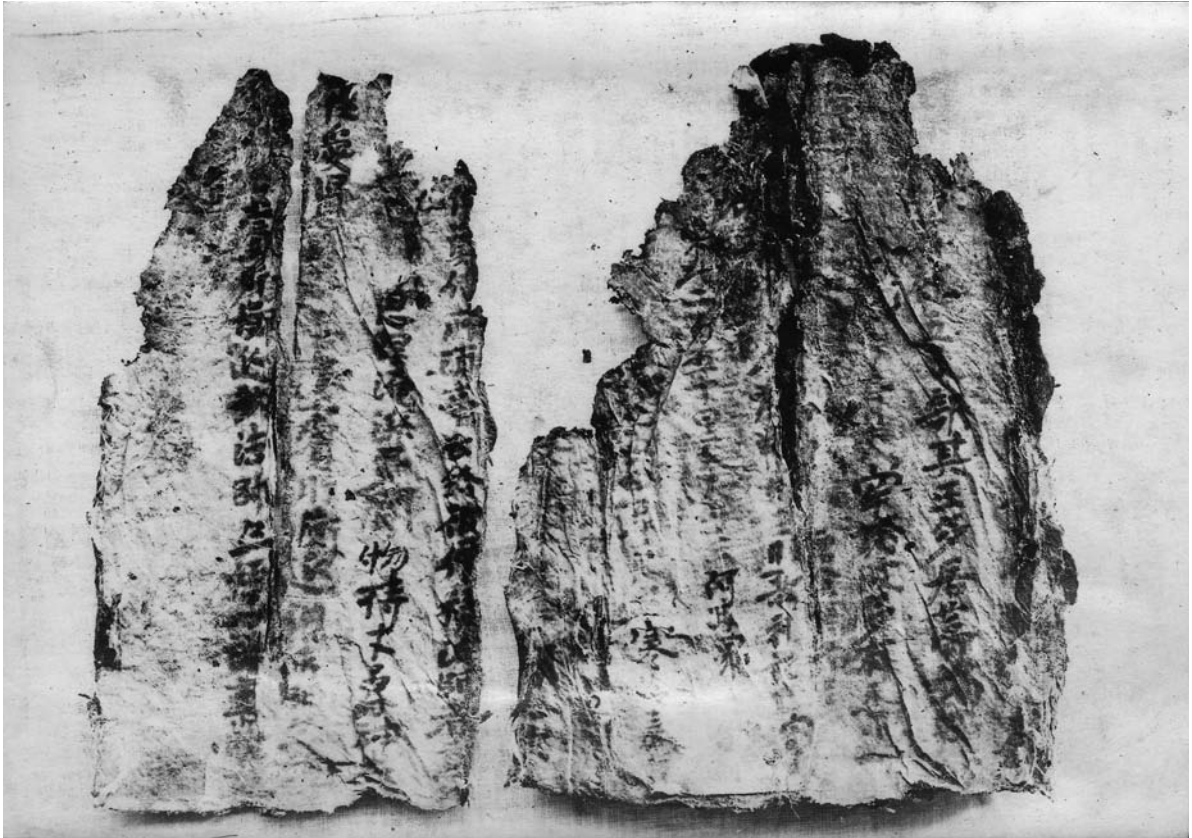


写真11 出土經典（大慈恩寺三藏法師傳） 富士山本宮淺間大社所蔵写真



圖版十九

紙本血書道藏二種と左上經奥書

写真12 出土經典（廣弘明集？）：足立1931より

写真11 釈文

□□□□□□□□□□五□□□部其王多居曹□□

□□□□□□□□□□□□□□窠堵波多有□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

に於ける分析を惹起せしめれば幸いである。
当該文章は平成20年度の調査にかかり富士山本宮淺間大社宮司の渡辺新氏・中村徳彦氏、権祢宜の宮崎佳彦氏・福井宏和氏、富士宮市教育委員会の渡井一信氏・馬飼野行雄氏・伊藤昌光氏・渡井英蒼氏・梶山沙織氏・佐野恵里氏等にお世話になった成果の一部で、写真、データ利用にも御快諾頂いた。そして共に調査事業にあたった矢島一氏（現静岡県立中央図書館）・遠藤圭一氏（現静岡県立富士宮北高等学校）に対しては改めて御礼を申し上げたい。また足立順司氏・溝口彰啓氏（以上当研究所）、河合修氏（現静岡県教育委員会）には出土土器への所見を頂いた。感謝申し上げたい。

註
西岡氏が分析した『淺間大菩薩縁起』では、天喜5年(1057)6月18日に日代が「…竹筒の中に、金泥小字法花経を籠め奉る…」とし、末代は天承2年(1132)に初登頂とする。その後、末代は長承2年(1133)4月5日に「峯に登りて、如法経一部十巻を埋み奉る」としている。これらが史実や否やについては今後の課題である。

主要参考文献
【経塚・富士山他】
佐野武勇 1930 「富士山頂上三島ヶ嶽の経塚」『考古學雜誌』第二十卷第十號 考古學會
足立鋏太郎 1930 「富士山頂三島嶽南経塚遺物中の経筒と経卷とにつきて」『考古學雜誌』第二十卷第十二號 考古學會
赤星直忠 1931 「富士山頂経塚出土甕片について」『考古學雜誌』第二十一卷第五號 考古學會
足立鋏太郎 1931 「富士山頂の埋経につきて」『静岡縣史蹟名勝天然紀念物調査報告』第七集 静岡縣
三宅敏之 1961 「富士山頂における一切経埋納供養につい

て」『歴史考古』5号 歴史考古学研究会
（「富士上人末代の埋経」で三宅敏之1983『経塚論攷』に再録）
津谷弘達 1971 「富士山の地形・地質」『富士山～富士山総合学術調査報告書～』富士急行株式会社
奈良国立博物館 1977 『経塚遺寶』
三宅敏之 1980 「富士曼荼羅と經典埋納」『修験道の美術・芸能・文学（I）』名著出版
東京国立博物館 1985 『那智経塚遺寶』
東京国立博物館 1988 『経塚一関東とその周辺』
堀内真 1989 「富士山内の信仰世界—吉田口登山道を中心として—」『甲斐の成立と地方的展開』角川書店
富士吉田市歴史民俗博物館 2002 『富士の信仰遺跡』
村木二郎 2003 「東日本の経塚の地域性」『国立歴史民俗博物館研究報告』第108集 国立歴史民俗博物館
西岡芳文 2004 「新出『淺間大菩薩縁起』にみる初期富士修験の様相」『史學』第73巻第1号 三田史学会
時枝務 2007 「山頂遺跡と修行窟—考古学からみた山岳宗教—」『富士学研究』第5巻第1号 富士学会
【經典】
那連提耶舎譯『大方等大集經』
（大正新脩大藏經刊行会1988『大正新脩大藏經』第十三卷所収）
慧立本『大慈恩寺三藏法師傳』
（大正新脩大藏經刊行会1990『大正新脩大藏經』第五十卷所収）
道宣撰『廣弘明集』
（大正新脩大藏經刊行会1990『大正新脩大藏經』第五十二卷所収）
義浄撰『南海寄歸内法傳』
（大正新脩大藏經刊行会1991『大正新脩大藏經』第五十四卷所収）
闍那崛多譯『佛本行集經』
（大正新脩大藏經刊行会1988『大正新脩大藏經』第三卷所収）
※いずれの經典も大藏經テキストデータベース研究会（東京大学大学院人文社会系研究科次世代人文学開発センター）のデータを併用した。

Mishimagadake Sutra Mound

—Examination of Photographs Owned by Fujisan Hongu Sengen Taisha—

Naoto KATSUMATA

Summary: The Mishimagadake sutra mound was found on the summit of Mt.Fuji in 1930 including sutra scrolls in containers, axes of sutra scroll, ritual water vessels and potteries, as well as wooden burial chambers. Judging from its scale and written documents, it can be established in 1149 by Matsudai and his followers.

Accompanying the promotional project for an entry of Mt.Fuji into the World Cultural Heritage, I examine the photographs of the Mishimagadake sutra mound conserved by Fujisan hongu Sengen taisha, which were mostly used for the reportage made by the board of education of Fuji city in 1930-1931. Investigating photos of sutras whose names unknown; I estimate them to be parts of “the Daijionji sanzohoshi den” and “the Daihododaijitsu Sutra”. This estimation and the existence of “the Buppongyosyu Sutra” and “the Nankaikikinai hoden” reinforce the possibility of that the said sutras can be “the Isai Sutra” which Matsudai dedicated.

The Mishimagadake sutra mound is required to be reassessed by identifying excavated objects and photographs.

Key words: Mishimagadake sutra mound, Mt.Fuji, Pitcher, Rollers of sutra scrolls, wooden burial chamber, sutra mound, Matsudai, the Issai Sutra, Fujisan hongu sengen taisha, the Daijionji sanzohoshi den, the Daihododaijitsu Sutra, the Buppongyosyu Sutra, the Nankaikikinai hoden

静岡県下における19世紀鑄造錢貨の遺失経過について

岩 名 建太郎

要旨 特定地域の貨幣の流通状況を通史的に追跡するために、比較的出土量に恵まれていて、流通が短期間に限定される特長な貨幣種の事例を集成・分類し、一つの基準、モデルをつくり、他の貨幣種と比較する方法が考えられる。

日本列島のほぼ中部に位置する静岡県（旧遠江・駿河・伊豆3国）内において、近世錢貨の中で最も年代的に新しく、流通期間も比較的短い、19世紀に鑄造された錢貨である天保通寶と文久永寶の出土事例を集成し、特にそれら錢貨埋没時の性格を深く反映させる遺失経過を分析検討し、その外見的特長を把握すると共に、類型設定を試みる。

キーワード：天保通寶、文久永寶、出土事例集成、遺失経過、類型設定

はじめに

過去、日本列島内において流通した錢貨について、古くから、好古家、古泉家の手によって、何百何千という分類がなされ、数多の錢譜が編まれてきた。

出土錢貨資料に対する援用は、個々の遺跡発掘調査報告書の中で、報告者の判断で錢譜より引かれた分類名称が用いられることが間々あるが、鑄造量が多大で、長期に渡る発行・流通がなされ、錢銘のヴァリエーションが最も豊富である近世錢貨の代表ともいべき寛永通寶といえども、複数の遺跡間で共有できる分類数は、決して多くなく（ある程度の表面劣化でも識別出来る錢銘の特長、材質差から、古寛永錢、寛文錢、新寛永錢、鉄錢、四文錢の5分類に集約され、利用されることが多い）、潜在的に利用可能な網と実際に使われている網の目の差は、大きいと言える。

また、出土した錢貨に関わる古人の活動や検出遺構の年代決定は、そのまとまりの中にある初鑄年最新錢によってその上限が設定されるが、長期流通している錢貨の厚い堆積の中に新しい錢貨が浸透し、特定の年代相を形成していく経過について、都市部では、副葬錢（六道錢）組成研究の関連で一定成果を上げているものの、地方において、資料数が少ない（絶対的な埋蔵数量というよりも、発掘調査の起因となる工事数差によるものと考えられる）等の理由で、十分な把握がされていない。

これを解消するための一策として、その地域で、一定出土量のある、特定錢貨の流通（市場浸透）、遺失・回収の経過を追い、他の年代の錢貨の出土状況と比較する作業が考えられる。

本稿では、比較的抽出が容易で、分類のヴァリエーションが整い、また、錢貨の中で年代的に最も新しく、実質流通期間の短い19世紀に鑄造された錢貨の静岡県下の出土状況を概観し、それらの流通・遺失モデルをつくることを目的とする。

1 対象となる錢貨の概要

今回分析対象とする19世紀鑄造錢貨は、天保通寶と文久永寶である。

天保通寶は、天保6（1835）年より明治3（1870）年まで断続的に鑄造・発行された、小判形状（長径4.87cm、幅3.22cm）した大型錢貨である。

当百文の錢（金1両の交換相場を錢4000文として、100/4000両=25/1000両相当）として定められたが、錢相場の変動や大量の密造錢によって、流通価値は、低下し、旧1両を1円とする明治の新貨幣制度導入の際、補助貨幣として、その使用の継続が認められた時には、8厘（8/1000円）と定められた。

江戸幕府が鑄造した天保通寶は、約4億8500万枚であるが、明治時代、新貨幣と交換された天保錢は、5億

8700万枚に及んだ。

文久永寶は、文久3（1863）年明治2（1869）年まで断続的に鑄造・発行された小型錢貨で、鑄造量は、8億9000万枚と記録されている。

当四文の錢（金1両錢4000文の相場で1/1000両相当）とされ、背面には、明和6（1769）年以降鑄造発行された寛永通寶当四文錢と同様、十一波文様が付されている。

明治新貨幣制度下では、1厘半（1.5/1000円）と定められた。

古泉界では、錢銘の書体の差異によって、「文」の字が楷書体の通称「真文」、草書体の通称「草文」、「寶」が「宝」となっている通称「玉宝」または、「略宝」の3種に大きく分けられる。

法律上、天保通寶は、明治24（1891）年、文久永寶は、昭和28（1953）年まで、使用可能であったが、補助貨幣として、一時に使用出来る制限（1円分まで）があった。また、年代を経て物価上昇があり、現実的に近世錢貨の使用の場は、小規模な売買取引での小額決済に限定されたとみられる。

2 静岡県下の錢種別出土分布傾向

(1) 天保通寶

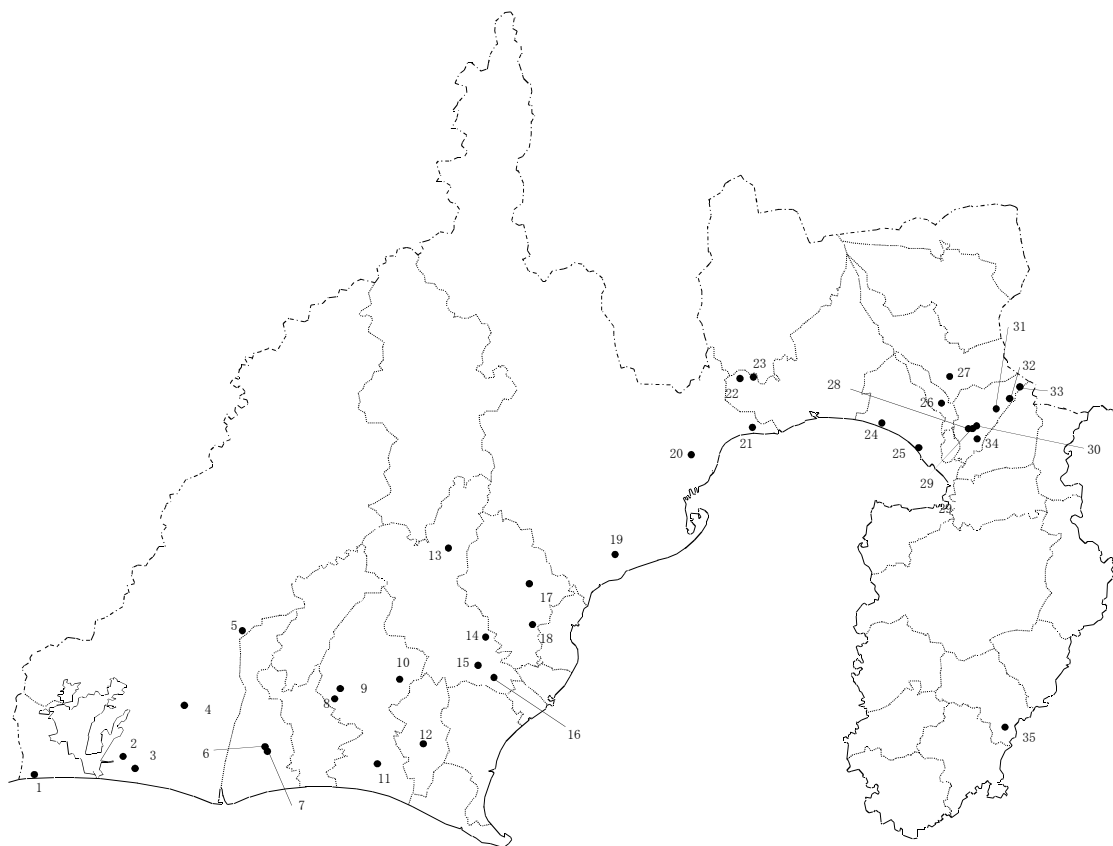
静岡県下における天保通寶の出土報告例は、管見のところ、7遺跡7点で、1箇所での複数出土例は、確認されない。資料数が少ないが、地域的偏在の無い出土分布傾向を示している。

(2) 文久永寶

文久永寶の出土報告例は、31遺跡89点ある。

錢銘の内容は、真文28点、草文30点、玉宝11点、不特定20点となっており、全体的には、真文と草文の枚数が拮抗している。

大河川を境界とした小地域毎の状況は、天竜川以西では、真文、玉宝は、出土例が無く草文優位（5点）、天竜川・大井川間では、真文7点、草文6点と拮抗状態、大井川・安倍川間では、真文8点、草文3点と真文優位、安倍川・富士川間では、真文3点、草文7点と逆に草文優位、富士川以東では、真文10点に対し、草文9点と拮抗状態と、各々異なっている。



静岡県 19世紀鑄造錢貨出土遺跡分布図

静岡県内 19世紀鑄造銭貨出土状況一覧表

| | 遺跡名 | 所在地 | 調査区・グリッド | 遺構・層位 | 天保通寶 | 文久永寶 | | | |
|---------------|----------------|--------------------|------------------|---------------|------|------|----|----|----|
| | | | | | | 真文 | 草文 | 玉宝 | |
| 1 | 長谷元屋敷遺跡 | 湖西市白須賀 | B-5区 | 第2層 | | | | 1 | |
| 2 | 中平遺跡 | 浜松市中区西鴨江町1182番地他 | I11グリッド | 表土層 | 1 | | | | |
| 3 | 城山遺跡 | 浜松市南区若林町514番地 | | | | 1 | | | |
| 4 | 下滝遺跡群 | 浜松市東区半田町3738番地の9他 | 4・5-1区B8b8グリッド | 遺構面上 | | 1 | | | |
| | | | 7区E8b3グリッド | 遺構面上 | | 1 | | | |
| | | | 6-2区南D4f1,f2グリッド | SK44(土坑墓) | | 2 | | | |
| 5 | 三蔵塚古墳群 | 浜松市天竜区二俣町阿蔵304-1 | 東区 | | 1 | | | | |
| 6 | 一の谷中世墳墓群遺跡 | 磐田市見付字一の谷および水堀 | 3E区 | | | 1 | | | |
| | | | 13B区 | | | 1 | | | |
| 7 | 野口・マカダ近世墳墓群遺跡 | 磐田市西貝塚1769-1他 | G1グリッド | SK25(土坑墓) | 1 | | | | |
| | | | | | | | 3 | | 2 |
| 8 | 原川遺跡 | 掛川市領家字原川 | 1区 | 表面採集 | 1 | | | | |
| | | | 9区西側 | ①層 | | 1 | | | |
| 9 | 打越遺跡 | 掛川市家代 | 東から南斜面中腹より裾 | | 1 | | | | |
| 10 | 清水遺跡 | 掛川市日坂 | 2-2区C-9グリッド | SX125(遺物集中箇所) | 1 | | | | |
| 11 | 高天神城跡 | 掛川市上土方嶺向翁山3138-2 | 二の丸K-18グリッド | | | 2 | | | |
| 12 | 御領所遺跡 | 菊川市西横地 | | SR01(旧河川) | 1 | | | | |
| 13 | 馬場平経塚 | 島田市川根町笹間下字馬場下 | | 川原石石列周辺 | | 1 | | | |
| 14 | 東光寺五輪塔遺跡 | 島田市東光寺屋敷654番地 | | 1号集石墓 | | 1 | | | |
| | | | | 表面採集 | | | | 1 | |
| 15 | 御陣屋遺跡 | 島田市大津道上中溝南1999番地地先 | 第2トレンチ | | 1 | 1 | | 2 | |
| | | | 第8トレンチ | | | | | 2 | |
| | | | 第16トレンチ | | 1 | | | | |
| | | | 御陣屋稲荷本殿跡 | | 4 | 4 | 13 | | |
| 16 | 高根森遺跡 | 島田市阪本地先 | 1区 | 2層 | 1 | | | | |
| | | | | | | | | | |
| 17 | 入野東古墳群・入野高岸古窯群 | 藤枝市岡部町入野 | | | 1 | | | | |
| 18 | 田中城下屋敷遺跡 | 藤枝市田中3丁目15-1他 | 11T旧六間川 | | 1 | | | | |
| 19 | 駿府城跡 | 静岡市葵区駿府公園1番1号 | 本丸堀I区 | 埋土 | | 1 | | | |
| | | | 本丸28Tr | 攪乱土層 | | | 1 | | |
| | | | 米蔵跡A地区 | 包含層 | 2 | 2 | | | |
| | | | 東御門・渡櫓 | 遺構検出面 | | 1 | | | |
| | | | 二ノ丸水路跡 | 排土中 | | 1 | | | |
| 静岡市葵区追手町229-3 | 三ノ丸堀 2トレンチ | 覆土上層暗灰色粘土層 | | 1 | | | | | |
| 20 | 小島陣屋跡 | 静岡市清水区小島本町字構内 | 17区 | 盛土 | | 1 | | | |
| 21 | 蒲原城跡 | 静岡市清水区蒲原 | E-4区 | | | | 1 | | |
| 22 | 送り神遺跡 | 富士市北松野 | E-11区 | | 1 | | | | |
| 23 | 中野遺跡 | 富士市中野台 | 中野B地区 | | 1 | | | | |
| 24 | 雄鹿塚遺跡 | 沼津市一本松ミサゴ塚 | | 表面採集 | | | 2 | | |
| 25 | 千本遺跡 | 沼津市本字千本1910-206 | A4-1グリッド | | | 1 | | | |
| 26 | 長久保城跡 | 駿東郡長泉町下長窪 | 八幡曲輪・上野南地区 | 表土または攪乱層 | | 1 | | | |
| 27 | 大畑遺跡 | 裾野市大畑 | 中屋敷地区 C-2グリッド | 第I層 | 1 | | | | |
| | | | 中屋敷地区 C-3グリッド | 第I層 | | | 1 | | |
| 28 | 三島御殿遺跡 | 三島市本町1792-2番地 | 第1地点 | | 1 | | | | |
| 29 | 三島代官所 | 三島市北田町1443-5番地 | | 表面採集 | 1 | | | 1 | |
| 30 | 三嶋大社境内遺跡 | 三島市大宮町2丁目1番5号 | 第1地点 | 1号土坑 | | 1 | | | |
| 31 | 奥山遺跡 | 三島市三ツ谷新田 | | | 1 | | | | |
| 32 | 山中城跡 | 三島市山中新田 | 西ノ丸土橋 | | 1 | | | | |
| | | | 三ノ丸第1地点 | 表土 | | | 1 | | |
| | | | | 5P | | | | 1 | |
| | | | | 43号土坑 | | | | 1 | |
| 45号土坑 | 1 | | | | | | | | |
| 33 | 接待茶屋遺跡 | 三島市施行平4736-18他 | | 第4層 | 1 | 2 | | | |
| | | | | 第5層 | | 1 | 1 | | |
| 34 | 茶白山遺跡 | 三島市谷田字茶白山862-1-2番地 | | | 1 | 1 | | | |
| 35 | 河津城跡 | 賀茂郡河津町笹原379-1外 | 2郭から4郭 | 表土 | 2 | | | | |
| 静岡県内合計 | | | | | 7 | 28 | 30 | 11 | 20 |

3 遺構・遺物集中箇所出土例

ほとんどの出土19世紀鑄造銭貨は、表面採集または、表土・包含層中からの検出であるが、土坑遺構や遺物集中箇所から検出された例がいくつか存在する。

(1) 下滝遺跡群土坑墓SK44

平成元（1989）年より浜松市半田町で実施された下滝遺跡群（下滝遺跡・矢海道遺跡・下滝A～I古墳群・半田山G古墳群）発掘調査では、近世に比定される墓・焼壁土壙が合計40基検出されている。

その内の土坑墓1基、長径1.04m、短径0.8m、深さ0.28mで、平面形略円形を呈するSK44より文久永寶2点（共に草文）が出土している。

(2) 野口・マカダ近世墳墓群遺跡土坑墓SK25

平成9（1997）年、磐田市西貝塚で実施された野口・マカダ近世墳墓群遺跡発掘調査では、中世から近現代に比定される119基の土坑墓、2基の塚墓、4基の火葬墓が検出されている。

その内の土坑墓1基、長径1.13m、短径0.71m、深さ0.67mで、平面形長方形を呈するSK25の底面直上より文久永寶6点（真文1点、草文3点、玉宝1点）が出土している。同時に出土した人骨は、底面より10cm程度浮き、銭貨と比高差が認められることから、座葬の棺外に副葬されたものと報告されている。

(3) 清水遺跡遺物集中箇所SX125

平成4（1992）年7月から同6（1994）年3月に掛川市日坂で実施された清水遺跡発掘調査では、近世宿町である日坂宿の町屋跡が検出された。

その中の調査区2-2区内の小谷に北側宅地からの投棄とみられる遺物集中箇所SX125が認められ、この中に天保通寶1点が出土している。

SX125を構成する遺物の内容は、18世紀前半から19世紀中ごろの陶磁器を主体とし、ほかに鎌、小刀、煙管、渡金金属片が含まれ、銭貨も天保通寶以外に寛永通寶14点（古寛永1点、新寛永12点、寛永四文銭1点）が出土している。

嘉永5（1852）年に日坂宿で大火があり、その際の被災物が廃棄されたものと推定されており、文久永寶が含まれていないことから年代的矛盾は、無い。

(4) 東光寺五輪塔遺跡1号集石墓

平成16（2004）年10月から同17（2005）年3月に島田

市東光寺屋敷で実施された東光寺五輪塔遺跡発掘調査で、6個体分の五輪塔が起立していた下位より1号集石墓が検出された。

古瀬戸前期様式IV期の四耳壺、在地産甕、常滑6a型式壺の合計3個の蔵骨器のほか、13世紀後半に比定される山茶椀・小皿、常滑産壺・甕片が出土し、14世紀代の築造と推定されたが、同時に文久永寶1点（草文）、寛永通寶7点（いずれも新寛永）、19世紀前半の肥前系磁器の染付丸碗、18世紀末から19世紀のかわらけが出土しており、近世末に簡単な供献祭祀が行われた形跡があった。

(5) 三嶋大社境内遺跡1号土坑

昭和62（1987）年に三島市大宮町で実施された三嶋大社境内遺跡発掘調査で検出された南北径3.28m、深さ0.75mで、平面形不整形円形を呈する第1号土坑より、文久永寶1点（真文）が出土している。

他の出土遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、陶磁器、かわらけ、瓦器、瓦、釘等、古墳時代より江戸時代に至る。以降の帰属時期は、大多数を占めるかわらけより、13～14世紀中心とする年代と報告されている。文久永寶については、遺構との平面上の重複の可能性が高い。

(6) 山中城跡三ノ丸43・45号土坑

平成元（1989）年に三島市山中新田で実施された山中城跡三ノ丸第1地点発掘調査で近世山中宿の一部とみられる井戸、土坑群が検出された。

検出された土坑の内、長径1.3m、短径1.2m、深さ0.14mで、平面形楕円形、底面は、鍋底形を呈する43号土坑と長径1.55m、短径1.25m、深さ0.68mで、同じく平面形楕円形、底面鍋底形を呈し、厚い焼土層がある45号土坑で各々1点ずつ文久永寶が出土（43号土坑は、玉宝、45号土坑は、真文）している。

両者は、平面上、一部重複して切り合い関係にあり、45号土坑のほうが新しい。

いずれも陶磁器、土器類が埋まっており、各々から出土した丸碗片の接合が確認されるなど、限定された範囲でゴミ穴の掘削・埋め立てが繰り返行われたことが分かる。

45号土坑は、ほかにもう1点、銭貨（新寛永）が出土している。

4 周辺より多数の近世銭貨、近代貨幣が出土する事例

(1) 御陣屋遺跡

平成4（1992）年より同8（1996）年の間に島田市大津通で4次に渡り実施された御陣屋遺跡発掘調査で、調査対象区内にある稲荷神社本殿及びその周辺で多量の銭貨、小額近代貨幣が出土している。

内容は、稲荷神社本殿跡で、中世渡来銭1点（政和通寶真書）、寛永通寶47点、文久永寶21点、近代小額貨幣71点の出土。本殿北側に設定されたトレンチ（第1トレンチ）より、寛永通寶3点出土。西側に設定されたトレンチ（第2・16トレンチ）より、中世渡来銭1点（永樂通寶）、寛永通寶9点、天保通寶1点、文久永寶4点、近代小額貨幣2点出土している。

神社賽銭の一部と考えられる資料である。

(2) 接待茶屋遺跡

平成6（1994）年に三島市施行平で実施された接待茶屋遺跡発掘調査で、3層の遺物包含層で銭貨が出土した。このときの調査の実掘面積は、1350㎡であり、江戸末期及び明治時代に再興された東海道を往来する人馬の接待所関連の遺構が検出されている。

銭貨が出土した包含層上層の4層からは、寛永通寶20点、文久永寶3点、不明銭貨2点、近代小額貨幣2点が出土。中層の5層からは、寛永通寶5点、文久永寶2点が出土。下層の6層からは、文久永寶は、出土せず、寛永通寶が37点出土している。内36点は、まとめり、ある程度、錆着した状態で検出された。

これらの銭貨・貨幣は、接待茶屋営業に関わる金銭であろうが、6層の36点のまとめりを除き、複数が錆着している例は、4層に1セット2枚錆着しているものを数えるのみである。多くは、頻繁な金銭の遣り取りの場での落物である可能性が高い。

5 遺失経過の類型化

貨幣が製作・発行、流通ののち、市場からその姿が消える理由としては、①経済政策上の要請による回収活動、素材金属転用のための回収活動。②回収不可能、または、貨幣を媒介とした経済活動を行わない相手への贈与・支払。③忘失・紛失。④廃棄が挙げられる。

この内、①は、実物そのものが消失しているため、考古

学的アプローチで、その内容を追及することは、難しい。

②の「相手」として念頭される者は、神仏や死者であり、これに関わる貨幣は、宗教・祭祀的意味合いを帯びている。

③は、貨幣の市場流通の場からの所有者の意図していなかった逸脱である。

④は、貨幣の経済交換財としての価値、金属素材的価値から、合理的説明がつきにくく、一部②と内容が重複する可能性もあるが、発掘調査結果として、この項目に該当する事例があることも事実である。

前項2・3・4において、静岡県下の19世紀鑄造銭貨の出土状況を概観したが、銭貨の遺失経過に注目し、類型化を進めることとする。

神仏に供献される銭貨資料の代表例として、神社賽銭とみられる島田市御陣屋遺跡の事例が挙げられる。

注意すべきは、賽銭となった銭貨が全て遺失銭として、その場の残されたものではないと考えられることであるが、神社本殿という祭祀場周辺のやや広がった範囲で、後々の市場利用を目的とした回収のために用意・指定された収容具（賽銭箱）から外れた貨幣が散在して（元々は、表出して）いて、永年に渡って、回収を試みられた形跡が認められないのである。宗教・祭祀を司る者の意識の問題として注目されよう。

島田市（旧川根町）馬場平経塚（近世末の礫石経塚）の石列周辺出土文久永寶も、神仏に供献された銭貨の一つであろう。

文久永寶のほかにも比較的通用価値が高い天保通寶が単独ながら含まれているが、単数の貨幣を供えるという形式を外している訳でない。出土している多量の近代小額貨幣に雑じって、明治時代の竜20銭銀貨が存在していることと同様に、供献者が奮発した例として捉えられる。

死者に供えられる銭貨について、文久永寶を伴う事例では、その形態は、二つに分けられる。

一つは、死者と共に墓内に副葬されるケースで、浜松市下滝遺跡群、磐田市野口・マカダ近世墳墓群遺跡にみられる。資料の増加により、副葬された位置、銭貨の枚数等をもとにした、墓制の小分類が設定出来る可能性がある。

もう一つは、墓外で行われる追供養に類するもので、島田市東光寺五輪塔遺跡例のように「墓前に供え」られた銭貨である。これらも、表出しているが回収されることな

く、置かれ続ける。

墓域と設定された範囲での表面採集品、表土・包含層出土品の中に、こうした墓外供献銭が含まれている可能性は、高い。ただし、その供献年代と埋葬者の没年に隔たりがあってもおかしくないことに注意しなければならない。

また、元々、墓内副葬銭が、後年の墓穴造営により掘り返され、表出し、これが回収されなかった場合の想定も必要である。

銭貨の忘失・紛失を招きやすい現場は、前者であれば、収蔵場所、後者であれば、頻りに銭貨が行き交う市場店頭であろう。

三島市接待茶屋遺跡の上中位包含層出土銭貨の多くが、不注意、軽微な事故を原因とした商取引中・後の遺失であると考えられる。

比較的通用価値の高い貨幣の取り扱いについては、低いものよりも慎重・丁寧になることは、普通であろう。接待茶屋遺跡では、全体で71点の近世銭貨、近代小額貨幣が出土しているが、金・銀貨は、もちろん、天保通寶も残されていない。

19世紀鑄造銭貨を含んでいないが、接待茶屋遺跡下位包含層で複数（一定量）まとまって出土した銭貨については、収蔵場所から、持ち出されなかった忘失物と考えることが出来る。

富士市送り神遺跡E-11区、中野遺跡中野B地区では、各々、天保通寶が出土しているが、いずれも単独検出で、商取引に伴う収蔵忘失、紛失よりも、宗教・祭祀的供献物としての可能性が強いと指摘出来る。

天保通寶、文久永寶を含んだ収蔵忘失銭は、静岡県内だと、確認されていない。

廃棄銭貨（正しくは、廃棄物と伴する銭貨）の例は、掛川市清水遺跡、三島市山中城跡三ノ丸の例がある。

いずれも、廃棄物と分かる陶磁器・土器・金属器等が混合した中に銭貨が含まれるものである。

混入経緯・意図が不明であり、祭祀的行為の可能性があるが、定型的であると言ひ難い。

6 まとめ

以上、静岡県下の19世紀鑄造銭貨出土事例に対して、その遺失経過に注目し、類型化を試みてきた、最後に、単純な出土記録から判断する分類方法について補足する。

特定範囲に多量の銭貨が重なること無く、各々単独で検出される場合、元々表出していた祭祀的供献銭か、商取引場の紛失銭の可能性はある。

両者の見分け方について、絶対的であると言えないが、比較的通用価値の高い天保通寶が含まれている場合は、祭祀的供献銭が想定出来る。

いずれにしても、銭貨のみならず、その周辺の情報が重視されるのは、言うまでもない。

引用・参考文献

- 足立順司 大隈信好 1980 『三蔵塚古墳群発掘調査報告書』 天竜市教育委員会
- 足立順司 1991 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第26集『原川遺跡IV 本文編』 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 足立順司 1996 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第80集『水井遺跡・清水遺跡』 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 芦川忠利 辻真人 池谷初恵 1995 『三島代官所・市ヶ原廃寺関連遺跡I』 三島市教育委員会
- 芦澤玲子 2002 沼津市文化財調査報告書第79集『千本遺跡発掘調査報告書』 沼津市教育委員会
- 新井正樹 2005 「(13) 小島陣屋 (第4次調査)」『ふちゅ〜る No.13』 静岡市教育委員会
- 池田将夫 1991 『田中城下屋敷遺跡発掘調査報告書』 藤枝市教育委員会
- 稲垣甲子男 1975 台山・峰山文化財発掘調査概報第1輯『大平・送り神遺跡』 富士川町台山・峰山文化財発掘調査委員会 富士川町教育委員会
- 稲垣甲子男 1984 『中野遺跡第2・3次調査報告書』 富士川町教育委員会
- 井鍋誉之 2006 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第166集『宮浦II遺跡・高根森遺跡・高根森古墳群』 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大林元 2001 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第127集『御領所遺跡』 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 鬼沢勝人 夏目不比等 2004 『史跡 高天神城跡 二の丸ゾーン発掘調査報告書』 大東町教育委員会
- 川口安曇 室内美香 木村弘之 1998 『野口・マカダ近世墳墓群遺跡発掘調査報告書』 磐田市教育委員会
- 後藤建一 石川浩久 1987 『長谷元屋敷遺跡』 湖西市教育委員会
- 佐野一夫 齊藤香織 1997 『下滝遺跡群』 財団法人浜松市文化協会
- 坂巻隆一 1999 静岡県島田市埋蔵文化財報告第30集『御陣屋遺跡』 島田市教育委員会
- 櫻木晋一 2009 『貨幣考古学序説』 慶應義塾大学出版会
- 篠ヶ谷路人 坂下俊介 2006 静岡県島田市埋蔵文化財報告第38集『東光寺五輪塔遺跡』 島田市教育委員会
- 鈴木一守 鈴木敏則 1982 『西鴨江 中平遺跡』 浜松市

- 教育委員会
- 鈴木公雄 1999 『出土銭貨の研究』 東京大学出版会
- 鈴木重治 鈴木良孝 1988 『馬場平経塚発掘調査報告』
川根町教育委員会
- 鈴木敏中 1984 「第三章遺跡各説 第2節奥山遺跡」『一般国道1号線三ツ谷バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』
三島市教育委員会
- 鈴木敏中 1985 「第6章出土遺物 第7節その他の出土遺物」『史跡 山中城跡 第2分冊』 山中城発掘調査団
三島市教育委員会
- 鈴木敏中 岡本範之 池谷初恵 1990 『三嶋大社境内遺跡 I』 三島市教育委員会
- 鈴木敏中 1992 「3. 茶臼山遺跡」『三島市埋蔵文化財発掘調査報告 I』 三島市教育委員会
- 鈴木敏中 伊藤恒彦 池谷初恵 辻真人ほか 1995 『山中城跡三ノ丸第1地点』 三島市教育委員会
- 鈴木敏則 2000 『城山遺跡VII』 財団法人浜松市文化協会
- 鈴木裕篤 1989 沼津市文化財調査報告書第46集『雄鹿塚遺跡発掘調査報告書』 沼津市教育委員会
- 関野哲夫 栗木崇 岩名建太郎 1997 『蒲原城 平成8年度範囲確認調査報告書』 蒲原町教育委員会
- 瀧澤武雄 西脇康編 1999 『日本史小百科 貨幣』 株式会社東京堂出版
- 辻真人 1994 「1. 三島御殿遺跡 第1地点」『三島市埋蔵文化財発掘調査報告III』 三島市教育委員会
- 戸塚和美 大熊茂広 1992 『赤淵遺跡・中川原古墳発掘調査報告書』 掛川市教育委員会
- 中川律子 菊池吉修 平野吾郎 及川司ほか 2010 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第214集『衣原古墳群・衣原遺跡・衣原古窯群 第二東名No.82～83地点』 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 中野国雄 平川昭夫 袴田稔 三ツ石紀子ほか 1982 『長久保城跡(八幡曲輪・上野南・大水濠) 大平遺跡 一般国道246号線裾野バイパス埋蔵文化財発掘調査報告(III)』
長泉町
- 中野国雄 井上輝夫 袴田稔 渡瀬治ほか 1989 『富沢・千福馬場添・大畑・桃園入ノ洞 一般国道246号線裾野バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』 裾野市教育委員会
- 宮本達希 小野秀樹 1993 『河津城跡発掘調査報告書』
河津町教育委員会
- 山崎克巳 木村弘之 伊藤美鈴 加藤恵子 1993 『一の谷中世墳墓群遺跡』 磐田市教育委員会
- 山本宏司 1998 静岡市埋蔵文化財調査報告44『駿府城跡 I (遺物編1)』 静岡県教育委員会
- 山本宏司 2002 静岡市埋蔵文化財調査報告61『駿府城跡 II』 静岡県教育委員会
- 渡辺浩之 辻真人 1996 『接待茶屋遺跡』 三島市教育委員会

Process of Loss of the Coins Minted in 19th Century in Shizuoka

Kentaro IWANA

Summary: In order to trace money circulation in a certain area chronologically, it is effectual to collect examples of coins, which are rich in volume, whose term of circulation is limited short, and which have characteristics, and to classify them by setting up standards and establishing types, and then to compare them with other kinds of coins.

In this paper, firstly, I compile examples of coins: Tempo tsuho coins and Bunkyu eiho coins minted in 19th century which are the newest among modern coins and whose period of circulation was relatively short, excavated in Shizuoka (Totoumi, Suruga, Izu), a center of Japan. Second, I analyze and examine how the coins were disappeared, which reflects their character of their last moment. Third, I study to understand their external characteristics and establish a classification of types.

Key words: Tempo tsuho coin, Bunkyu eiho coin, compiling excavated cases, process of the lost, establishment of type

力石の考古学的検討

—函南町仁田館遺跡出土「力石」の紹介を兼ねて—

岩 本 貴

要旨 函南町仁田館遺跡の発掘調査では、力石を建物の基礎材に転用する事例が確認された。これは力石本来のあり方ではないものの興味深い事例のひとつであると言える。

筆者の調べによると、発掘調査等で確認された切付を持つ力石は4例あり、いずれも建物の基礎材に用いていることが確認できた。すなわち、建物の隅柱基礎材とするもの2例、階段親柱の据石とするもの1例、石垣に敷設された階段の基底部石組とするもの1例である。

力石を意図的に転用したかどうかについて積極的な議論ができる段階にないが、全国各地で確認されている力石を考えるにあたり、興味深い情報を含んでいることを提示した。

キーワード：力石、建物基礎材への転用、力石研究の別視点

1 はじめに

「力石（ちからいし）」は、近世～近代において、鍛練あるいは娯楽を兼ねた力試しに用いる石である。「盤持石（ばんもちいし）」、「さし石」などとも呼ばれ、日本各地で1万3千点以上が確認されているという（註1）。

楕円形の礫石材を用いるものが多く、重量は数十kgから数百kgに及ぶものがある。表面に重量、年号、氏名、地名、所以等を切付あるいは墨書するものがあり、神社に奉納したものがある一方、村の集会所といった人が集まる場所に保管されているものもある。

これまで民俗学あるいは体育史学の分野での研究が進められているが、考古学の分野では認知度が必ずしも高いとは言えない状況にあり、ひいては文化財としての力石の調査・活用も十分とは言えないように思われる。ここでは、力石の周知を兼ねて、仁田館遺跡出土力石の評価、意義について考古学的な検討を行うこととしたい。

2 力石について

力石の概要は前項のとおりであるが、先学の成果をもとにもう少し触れておく。力くらべ（力持ち）という単純な競技は古今東西を問わず行われたことは想像に難くない。

力石に話を限定すれば、「力持ち」の競技形態は、地方・時代により異なるようであるが、

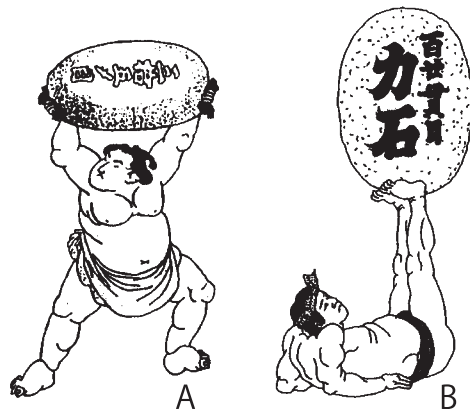
石ざし 力石を両手で抱えて腹にのせ、胸まであげて持ち替えてから両手で頭上にさし上げるもの。（第1図A）

石かつぎ 力石を両手で腹まであげ、持ち替えて胸まであげてどちらかの肩に担ぐもの。

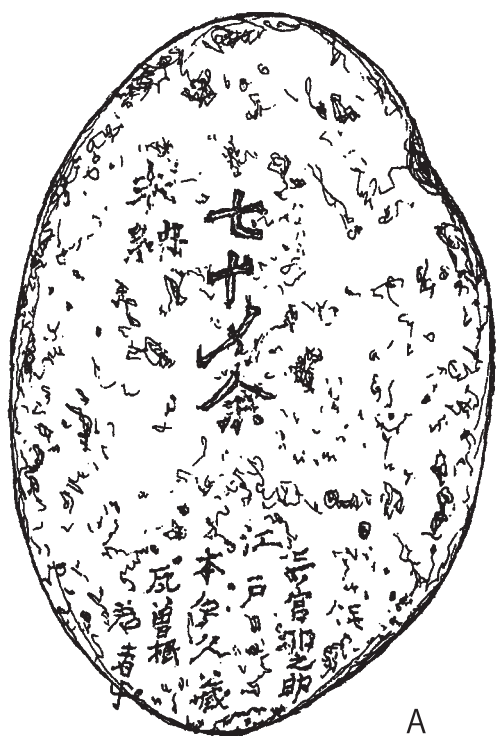
石まわし 石かつぎの状態から首の後ろをまわして、向こう側の肩へ移すもの。

石運び 力石を抱え持った状態で歩くもの

足ざし・足受け 仰臥して立てた両足の足の裏に、介添え人達が持ち上げた力石を乗せるもの。（第1図B）



第1図 石ざし・足ざしの図 / 沢田重隆画（新潮社 1980から引用）



A

次第不問御免



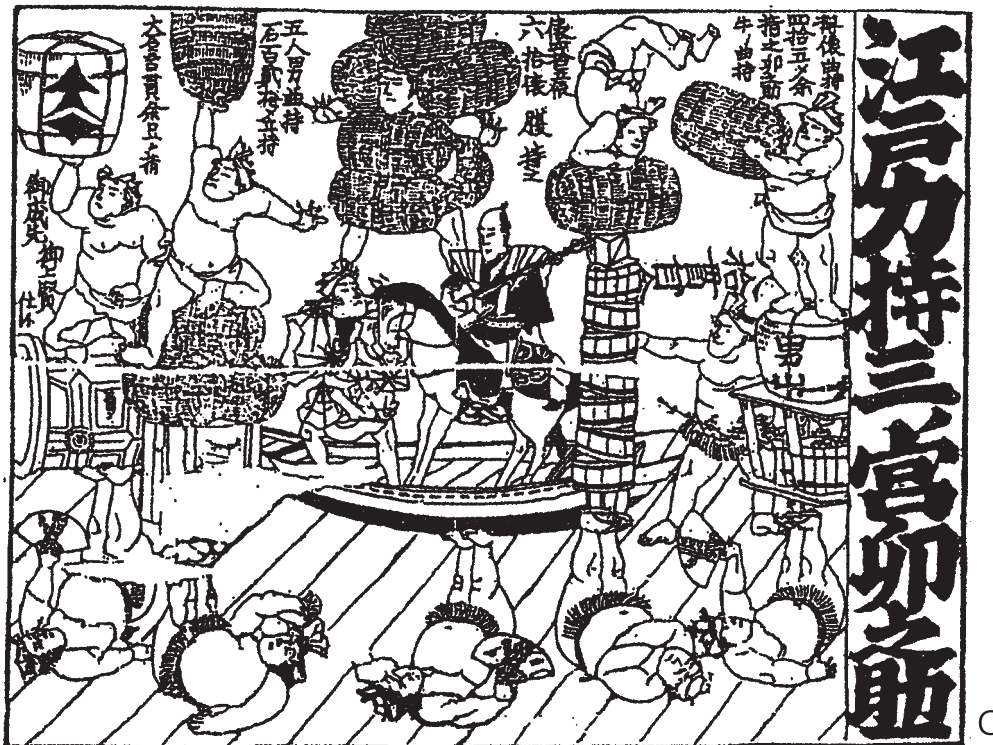
文久元年九月吉日

八百浦

二

世話人頭取

B



C

第2図 力持ち力士関連資料

A 三ノ宮卯之助の力石 B 文久元年(1861)の力持番付 C 三ノ宮卯之助の浮世絵
(高島1998・2004から引用)

等があり、担ぐことができた石の重量や歩いた距離を競うものであるという（高島他 1992）。

また、力石を用いた「力持ち」は、

- ① 神社等において神賑行事として行うもの（註2）
- ② 花相撲の余興、寺社の建築・補修等を目的とする勧進
- ③ 力持ちを職業化した集団による見世物興行
- ④ 農村・山村等において、「一人前の男」となるための通過儀礼（註3）や娯楽
- ⑤ 都市部の酒屋、醤油屋、材木屋、米屋、石屋など力仕事と密接な職層における日々の鍛錬

等様々であり、各々特色ある形態を持っている。

特に、③については、三ノ宮卯之助や神奈川権次郎、鬼熊といった四股名を持つ力持ち力士が有名で、彼ら力士の四股名を刻んだ力石（第2図A）は「力持番付」（第2図B）や「力持ち興行」の引札（興行広告）等（第2図C）と関連付けて検討することで、彼らの足跡を追う好材料となっている。特に、現在最多の力石を残す三ノ宮卯之助の力石は、力持ち興行のため江戸と大坂を行き来する途中で立ち寄ったとみられる街道筋を中心に多く分布しているという（高島 1996・2004）。

力石は、武勇誉れ高い某が巨石を動かした等の伝承を除外すれば、寛永九年（1632）の切付を持つ埼玉県久喜市樋の口の八幡神社の力石が年代を知りうる最古の資料（高島他 2002）であるという（註4）。

切付等により年代が明らかな資料を確認する限り、力石の盛行はおおむね18世紀から20世紀初頭（明治期）と考えられている。力石が衰退していった要因として、諸産業の機械化に伴う労働環境の変化があげられている。

これまで切付を持つ力石は石造物として注目度が高く、文化財としての価値付けが明確なものもあるが、一方で切付を持たない力石については、現在、人々の記憶、伝聞等が失われつつある段階にあり、遺物としての力石の調査とともに聞き取り調査等も急務となっている。

3 考古学的検討

力石は、考古学とりわけ埋蔵文化財調査では必ずしも認知度が高いとは言えない状況にあると思われる。これは、盛行時期が近世後半から近代であり、埋蔵文化財の調査対象となりにくいものが含まれること、切付がない限り自然礫との区別が困難であり、特徴的な出土状況を示さない限

り遺物あるいは遺構構築材としての認定が困難であることに起因していると考えられる。

他方、石造物としての文化財の認定が進まない要因として、原位置をとどめたものが少なく、切付等で得られる情報も限定的であるため、年代や使用状況等、文化財としての価値付けが困難なものが多いことが挙げられよう。

本節では発掘調査等により確認された力石を対象として、出土状況等の検討を行うこととする。

事例1) 函南町仁田館遺跡

（静岡県埋蔵文化財調査研究所 2005）

「二十四メ」の切付が確認でき、縦60.8cm、幅28.0cm、厚さ29.6cm、重量86kgの楕円形の礫である（第3図上）。若干の誤差はあるが、尺貫法換算のほぼ24貫に近い重量があり、切付が重量を示しているとみてほぼ間違いないこと、同種の切付はいわゆる力石以外に想定しにくいことから本資料は、力石と判断できる。

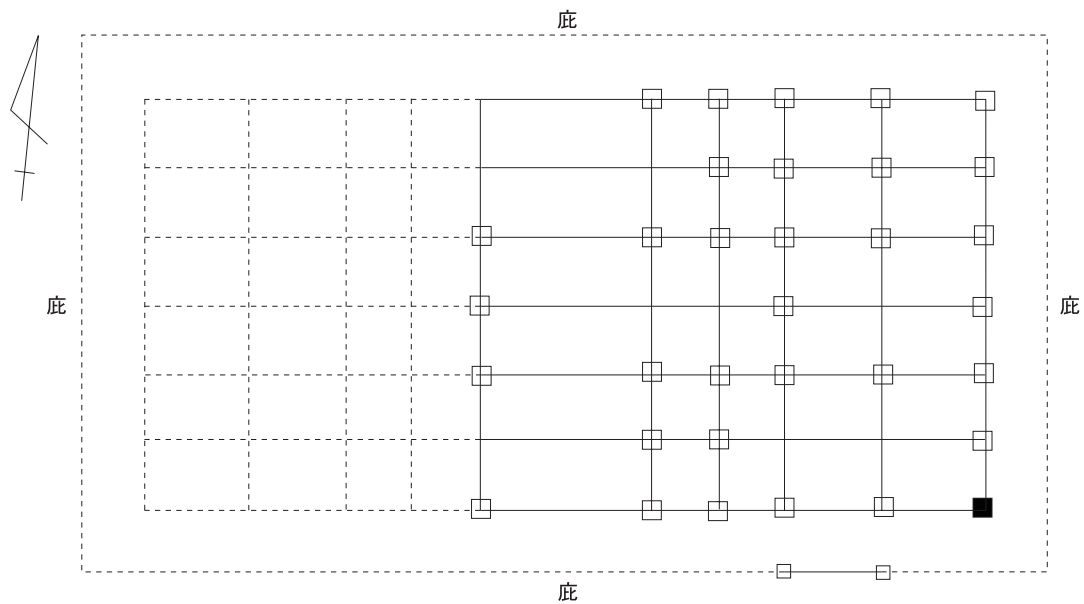
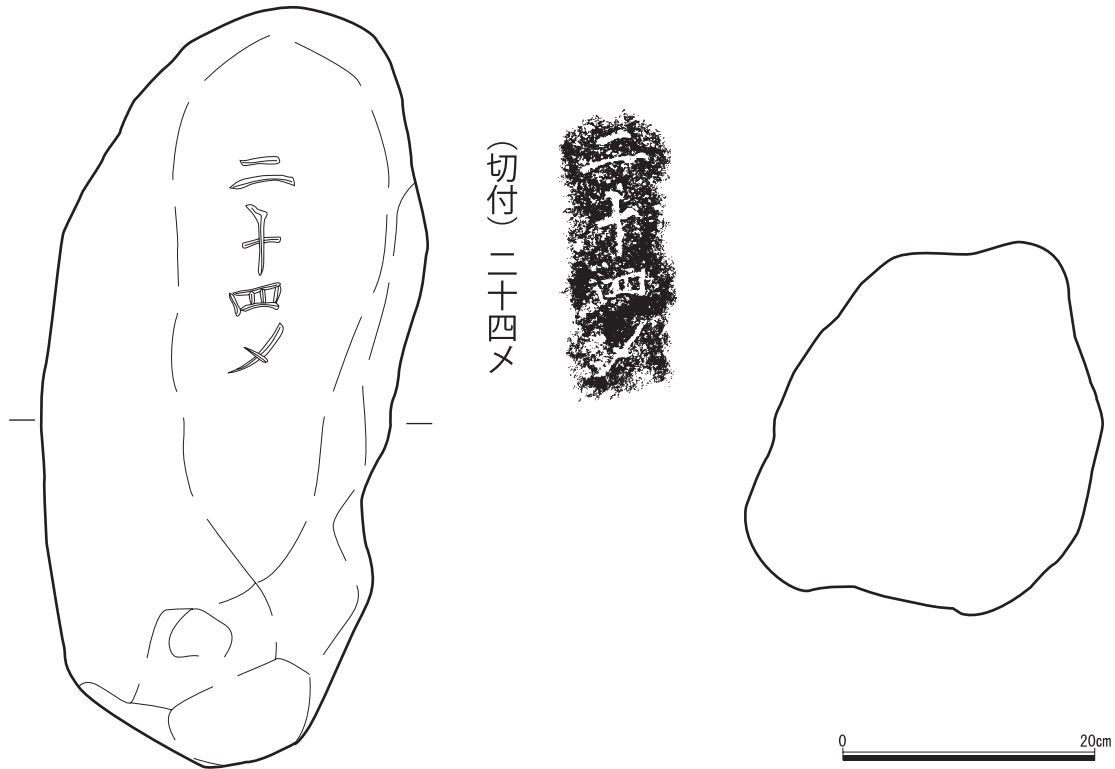
力石は、建物跡SH01の南東隅柱の基礎材に転用されていた（第3図下）。SH01は、南北6間、東西7間以上（西半は調査区外のため規模不明）の建物である。

力石が完全に原位置をとどめているかの検証は困難であるが、出土位置が隣接する柱間との関連から建物基礎材としてほぼ原位置をとどめていると判断される。なお、力石の検出レベルは同じSH01の柱基礎材（栗石）と同じかやや低いレベルで検出されていること、力石自体は不定形を呈しており礎石としては適当でないことから、礎石というよりはむしろ他の栗石と同様、礎石を据えるための地業に用いられた可能性が高いと考えられる。

共伴する陶磁器の年代が18世紀後半から19世紀前半にほぼ収まることから、建物跡及び力石の年代観もこれに近いものと推測される。

補足だが、SH01の位置、礎石の配置状況と嘉永六年（1854）七月三日の日付が記載された銅版画、及び明治前半に撮影されたと推定される写真は、多少の違いはあるものの、SH01は母屋と判断される。

各々の観察から母屋は天明・寛政年間から嘉永年間、明治年間にかけて四面に庇を持つ構造であったことは明らかである（研究所 2005）。仁田氏は近代に大八郎氏が地域産業の発展や学校の設立に奔走した地元名士である（函南町 1984）。



SH01 (推定母屋) 平面模式図 (破線は推定)

■ 力石使用

第3図 事例1・仁田館遺跡 (静岡県埋蔵文化財調査研究所 2005)

事例2) 東京都江東区大石家住宅

(江東区教育委員会 1994)

「さし石」の切付がある楕円形を呈する安山岩製の力石である (写真1・2)。建物北西隅の独立柱の基礎材に転用されていた (第4図) (註5)。

本住宅は、大正6年 (1917) 頃と昭和11年 (1936) の

2回、水害時の浸水を避けるため地盤を上げている。地盤嵩上げの際には嵩上げ前の建物礎石の上へろうそく石を積み重ねる、いわゆる「ろうそく地業」を行っていたことが解体調査で明らかにされている。ろうそく石は、30cm四方で長さが45~60cmの直方体であり、これを2度の嵩上げで計5~6本程度積み重ねており、最終的に当初地盤か



写真1 事例2 大石家住宅力石（切付）「さし石」
（写真提供 江東区教育委員会）



写真2 事例2 仙台堀川公園内ふれあいの森内に移築復元された大石家住宅
（写真提供 江東区教育委員会）

ら約2.5m嵩上げされているという。

以上の解体調査の成果によれば、力石は、当初建物の礎石として使用され、嵩上げに際して礎石の上にもうそく石を重ね、解体調査時の状況になったと考えることができる。

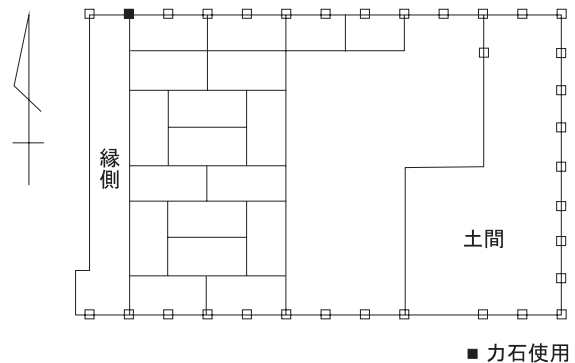
よって厳密に言えば力石の転用の下限は昭和11年となる（江東区 2001）が、地盤の嵩上げという性格上、大正6年の嵩上げの際、礎石の入れ替えをしない限り力石の転用は大正6年以前（江戸期か）とするのが妥当であろう（註6）。なお、建物の創建時期については、安政年間を少し遡る頃と推測されている（江東区教育委員会 1994）。

大石家は、荒川右岸の砂村（江東区）の前面に広がる干潟の海で海苔養殖を手がけていたとされ、当該期の民家遺構として、現在は仙台堀川公園内ふれあいの森内に移築復元されている。力石は江東区の有形民俗文化財に指定され（江東区 2001）移築建物の隣接地に展示されている。

事例3）和歌山県和歌山市和歌山城天守

（和歌山市 1978）

銘入りの据石として紹介されている石は、形状、切付からみて少なくとも重量を示す切付を持つ1点は力石として間違いのないであろう。天守から2点出土したことが伝えられている。1点は「矢田」、もう1点は「四十メ 大（立カ）亀」の切付が認められる（写真3・4）。



第4図 事例2・大石家住宅建物平面模式図
（筆者作成 資料提供 江東区教育委員会）

寸法は前者が長さ約67cm、幅約54cm、高さ約30.5cm、後者が長さ約80cm、幅約55.5cm、高さ約25cmである。重量は不明であるが、力石の事例から「四十メ」については石の重さを示したものとしてみ違いないであろう（註7）。

この石は、「いま天守閣基壇の内庭芝生サクラの木陰に置かれている。今次の城郭再建の際に発見されたもので、一階から二階に上るはしご階段の親柱の据石になっていたものである。（当時再建にあたった明楽清氏談）。それは弘化雷火で再建の際のものであるが、今次再建の際にもその文字は読み難く、みな苦勞したということである。石の上に刻まれた「四十メ」とは誰でも読める。また、立亀の亀の字もはっきり読める。しかし、太（立）の字は問題で、本来は大と大の下に一と書くべきを大地

を示す横棒を上にあげているのはどういう意味なのか。大は人を表わし、大地の上に人で「立」と読む。漢和辞典によると亀とは「せぼね」の意味があり、せぼねを立てる据石の意。これは和泉砂岩で二つとも大円礫。合わせて40貫の意味であろうか。「四十メ」と「立亀」は一つの石に刻まれており、他の一つには「矢田」と書かれている。」と説明されている（和歌山市 1978）。

天守は1846年（弘化3年）7月26日に落雷により全焼し、1850年（嘉永3年）に再建されている。1931年（昭和6年）に国の史跡に指定され、ついで1935年（昭和10年）には、天守など11棟が国宝に指定されたものの、

1945年（昭和20年）7月9日の和歌山大空襲により指定建造物11棟すべてが焼失した。戦後、1958年（昭和33年）に鉄筋コンクリートにより天守閣が再建された。その際に出土したとされる力石が2点、現在、御台所に展示されている。

和歌山公園の植生等の調査資料（和歌山市 1978）によれば、この石は、銘入りの据石として紹介されている。

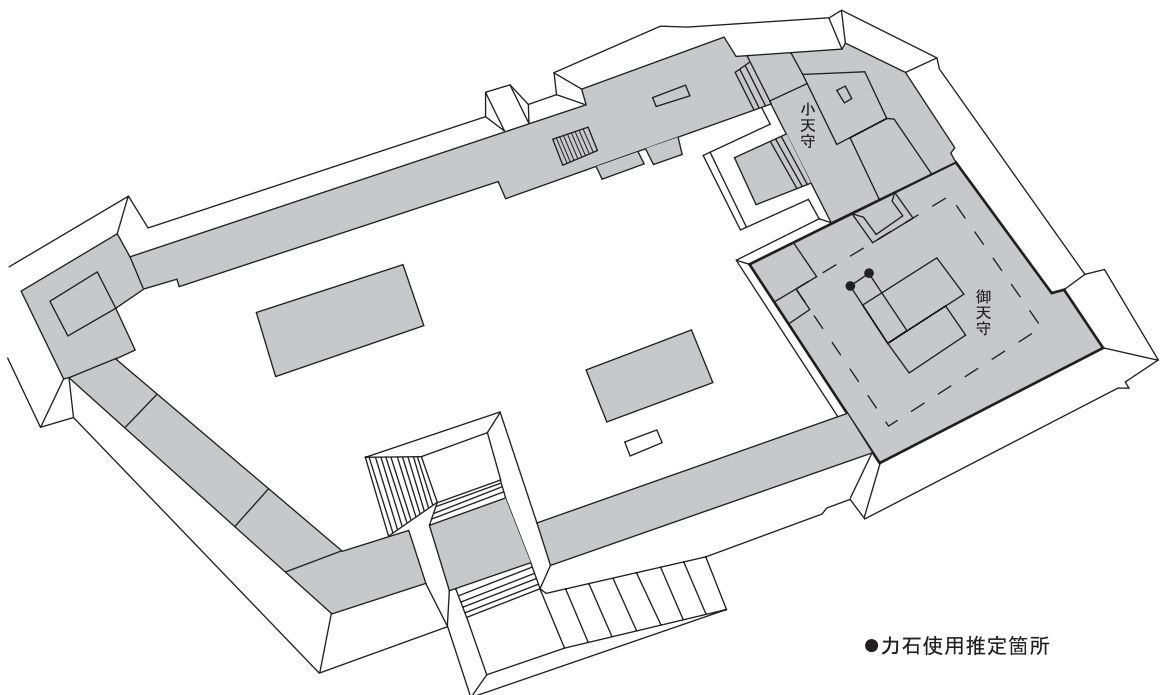
力石発見時の位置図等がなく、当時の関係者からの聞き取り記録（和歌山市 1978）が唯一の手がかりではあるが、関係者の証言どおり、一階から二階に上るはしご階段の親柱の据石（第5図）に使用されていたものとすれば興



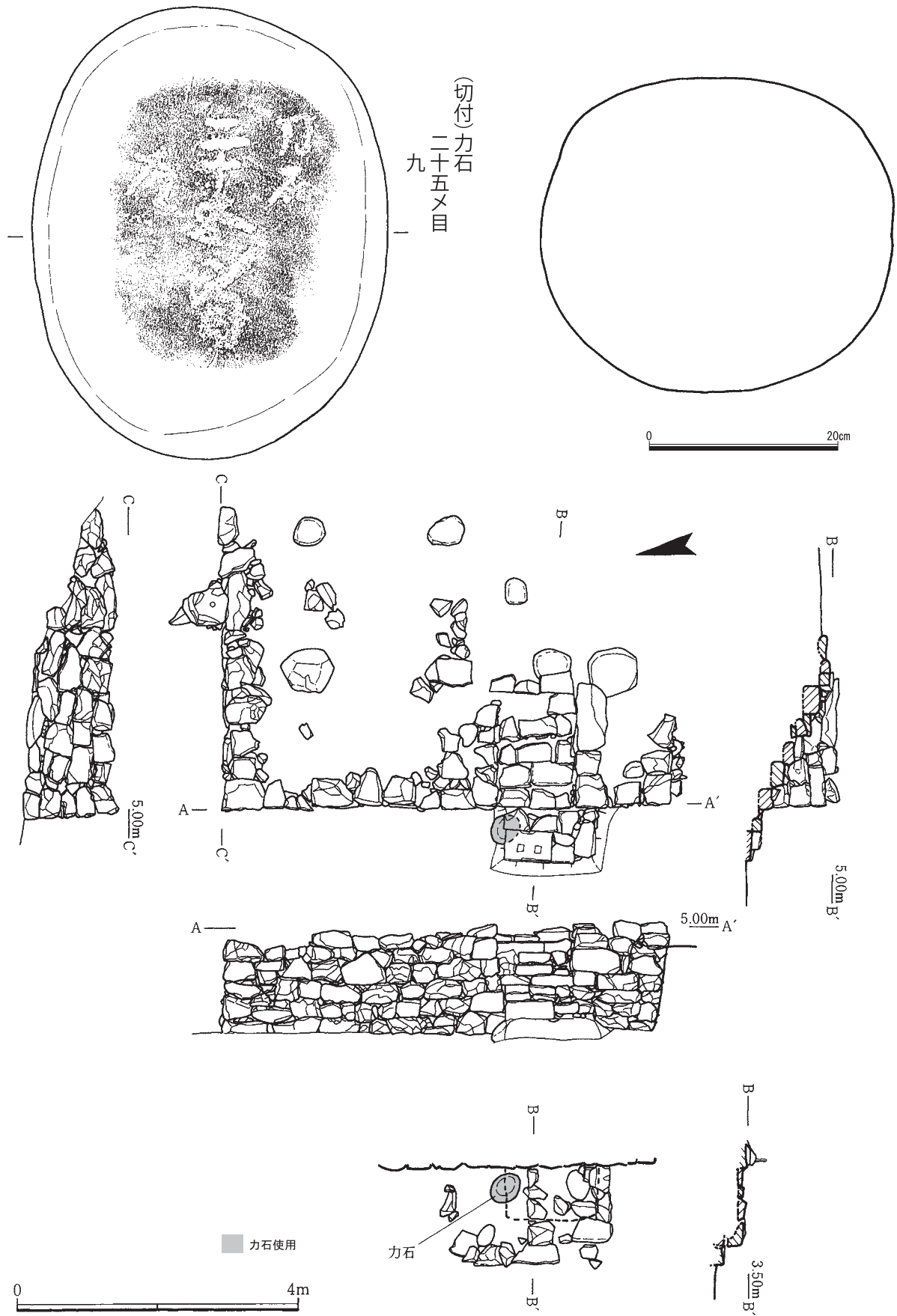
写真3 事例3・和歌山城天守力石（切付）「矢田」
（写真提供/和歌山城管理事務所）



写真4 事例3・和歌山城天守力石（切付）「四十メ 大亀」
（写提供/和歌山城管理事務所）



第5図 事例3・和歌山城天守部分模式図（和歌山御城内惣絵図〔和歌山県立図書館蔵〕をもとに作成）



第6図 事例4・萩城跡外堀地区（山口県埋蔵文化財センター 2004）

味深い資料である。

天守の再建記録を確認する限り、力石の下限年代は、落雷により焼失した天守が再建された1850年（嘉永3年）とすることができ、全国各地で確認されている力石の年代観とも齟齬はないと判断される（註8）。

事例4）山口県萩市萩城跡外堀地区

（山口県埋蔵文化財センター 2004）

「力石 二十五メ目 九」の切付がある力石である（第6図上）。長さ48cm、幅37cm、厚さ33cm、石材は花崗閃緑岩である。重量は不明であるが「二十五メ目」は重量、「九」は、人名の一部、屋号または重さの順番を示す番号を切付したものと考えられている。

萩城外堀に形成された町屋の建物のひとつで北面及び西面を囲うL字状の石垣が検出された。この石垣の西面南寄りに設けられた階段の基底部石組に転用されていた（第6図下）。同階段を解体すると、約50cm南側にずれた形で過去の階段の基底部石組が検出されていることから、力石を転用した階段は造り替えの際のものと考えられている。出土状況から19世紀初頭以降のものと考えられる（山口県埋蔵文化財センター 2004）。

4 まとめにかえて

筆者が確認する限り、江戸期にさかのぼる可能性があり、考古学的な出土状況の検討等が可能な力石の事例は、以上の4件あり（註9）、民家、地元名士宅の母屋、城郭天守、町屋石階段基礎というように、建物規模、身分階層に一貫性は認めたいのが現状である。

このうち、仁田館、大石家住宅では建物隅の柱の基礎材として、和歌山城天守、萩城外堀地区町屋では構造は違うものの階段基礎に転用されており、大きくは建物基礎材に転用するという共通点が認められた。

なお、これら建物等の考古学及び文献史学から得られる年代観と力石の年代観との開きは大きくないと推測されるため、転用者が力石を認識していた可能性は十分に考えられる。ただし、石造物の転用自体は近世城郭の石垣等に見られるように比較的一般的に行われており、その意図については積極的に議論する材料に乏しいことは否めないのが現状である。本来は、力石に限定せず、石材の転用がどの程度行われているのかといった中から検討すべきことは言

うまでもない。

力石の全国的な調査を実施している高島慎助氏のご教示によると、力石は建物建て替えの際に埋めたり、割って石垣に使用するなど粗末な扱いを受けているものも多く、力持ちから連想して力強く建物を支えるという意図は現在の聞き取り調査等では皆無であったという。

以上にみた力石の転用は、力石本来の使用方法ではないものの、建物の基礎材に使用された時点における力石の役割が明確である点において、また、その時点から位置が固定されていることが明らかである点において、1万3千点以上に及ぶとされる全国各地の力石の中でも興味深い情報を含んでいる。

これまで民俗学的見地からの検討が多かった力石の研究について、考古学・埋蔵文化財の発掘調査が提供する情報は力石の研究において、新たな視点を与えるものとして注意すべきであると考えられる。本稿が力石の周知と新たな視点を提供することができれば幸いである。

本稿の執筆にあたり、次の方々、機関に資料提供、ご指導、ご協力いただいた。記して感謝申し上げる（五十音順・敬称略）。足立順司 加藤理文 久保香子 栗原 修 金田匡史 高島慎助 松井一明 溝口彰啓 向山伸子 江東区教育委員会 江東区地域振興部文化観光課 洲本市教育委員会 和歌山市和歌山城管理事務所

引用・参考文献

- 函南町 1984 『函南町誌』中巻
江東区教育委員会 1994 『旧大石家住宅解体調査報告書』
江東区教育委員会 2001 『江東区登録文化財一覧（20）』
静岡県埋蔵文化財調査研究所 2005 『来光川遺跡群Ⅰ』
新潮社 1980 週刊新潮 昭和55年4月17日号
高島慎助 小野隆 頼住一昭 1992 「三重県津市の力石」
『四日市大学論集』第5巻 第1号 四日市大学
高島慎助 1994 「兵庫県姫路市広畑区、勝原区の「力石」」
『民具マンスリー』第27号第9号
高島慎助 1996 「三ノ宮卯之助の「力石」」『四日市大学
論集』第8巻 第2号 四日市大学
高島慎助 1998 『三重の力石』岩田書院
高島慎助 1998 「静岡県伊豆半島の力石」『四日市大学論
集』第10巻 第2号 四日市大学
高島慎助 今村桂三 江原隆子 大木清子 鈴木弘道 武井節子
塚田婦志子 中里厚子 2002 「埼玉県久喜市の力石」『四
日市大学論集』第15巻 第1号 四日市大学
高島慎助 2003 「静岡県の力石」『四日市大学論集』第
15巻 第2号 四日市大学
高島慎助 2004 「三ノ宮卯之助の力石（2）」『四日市大

学論集』第17巻 第1号 四日市大学
高島慎助 2006 『兵庫の力石』 岩田書院
高島慎助 2006 『山陽の力石』 岩田書院
砺波市史編纂委員会 1965 『砺波市史』
濱岡きみ子 1983 『淡路の力石』 神戸新聞出版センター
山口県埋蔵文化財センター 2004 『萩城跡(外堀地区)Ⅱ』
和歌山市 1978 『和歌山公園および岡公園の植生等調査資料』

註

1 力石の類例については四日市大学健康科学研究室教授高島慎助氏にご教示いただいた。記して感謝申し上げる。

2 現在でも同様な行事が兵庫県姫路市大津区の天満力石の力持ち(姫路市指定無形文化財)や石川県小松市浜田町の菟橋神社で継承されている。

天満力石の力持ちでは、毎年10月21日の魚吹八幡神社秋季例祭宵宮の日に、天満地区の屋台は村練りを行い、蛭子神社と神明神社に宮入した後、まわし姿の練り子が地区住民の前で、力士として七斗石(97.5kg)の力石で力持ちに挑むもので、享保年間(1716~1735)から続けられていると伝えられる。天満力石の力持ちは力石を肩に担ぎ上げる「石かつぎ」の形態である。

3 富山県砺波市などに伝わる農家の若者達の一人前の仕事の基準は、米俵であり、五斗俵を担ぐことが要求された。この担ぐ力の養成のため、力石が利用され、力石の重量も三斗俵、四斗俵、五斗俵と等しいものが用いられ、それら力石の呼び名も四斗俵石、五斗俵石、あるいは米一俵石、大豆一俵石などと呼ばれていた。

砺波では五斗俵石を担ぐことができた青年の親は「いっちょまい祝い」として若者達に酒食をふるまう習慣があった。そして、一人前と認められた青年は、酒も煙草ものめるようになり、祭りの行事にも参加を許された(砺波市1965)という。

4 文献等に登場する「力石」は、江戸時代の連歌に「わ

くら葉やいなりの鳥居現れて(其角)文治二年のちから石もつ(才丸)」とあることから、文治二年(1186)には、力石が存在していた可能性があること、天正元年(一五七三)あるいは二年に織田信長から上杉謙信に贈られた屏風に相当すると考えられている紙本金地著色洛中洛外図(国指定重要文化財)に力石(石銘弁慶石)が描かれていること、日葡辞書(慶長8年(1603))に「力石」を「力試しをする石」として記載されているものなどがあるという(高島1998ほか)。

5 大石家住宅に係る資料提供については江東区教育委員会及び地域振興部文化観光課文化財係栗原修氏、向山伸子氏にご配慮いただいた。記して感謝申し上げる。

6 住宅に残された150枚に及ぶ成田山新勝寺の御札から150年以上もの長期間建物として存続していたと推測されること、安政の大地震(安政2年 1855)でも倒壊しなかったという言い伝えから、力石の転用年代は江戸時代に遡る可能性は十分に考えられる。このことは、切付、形態の編年観から力石が江戸時代のものと考えられていること(江東区 2001)と矛盾しない。

7 力石の出土状況等の情報及び資料提供については和歌山市和歌山城管理事務所久保香子氏にご配慮いただいた。記して感謝申し上げる。

8 天守の創建年代と考えられる17世紀以前に力石が転用され、それが再建時にも再利用された可能性もあるが、18世紀以降に盛行する現在の力石の編年観からすると年代的に齟齬があると考えられる。本稿では再建時に用いた石材と判断しておきたい。なお、転用箇所の推定については磐田市立磐田第一中学校加藤理文氏にご教示いただいた。記して感謝申し上げる。

9 力石を建物基礎材に転用する事例として兵庫県洲本市千光寺(高島 2006、濱岡きみ子 1983)、三重県多気郡大台町菅合の元青年倶楽部(高島 1998)が報告されているが、いずれも切付は確認されておらず、時期的にも下るものと判断されるため本稿では検討から除外した。

The Chikaraishi Stone, from Archeological Point of View

—Presentation of Chikaraishi Stones Excavated at the Nittayakata Site in Kannami Cho—

Takashi IWAMOTO

Summary: The chikaraishi stones excavated at the Nittayakata site in Kannami were recognized to be another very interesting case of diversion to basement of a building.

As far as I know, there are four cases of diversion of chikaraishi stones: those which were used as basement of corner pillars (2 cases), as a pillar base stone for main pillar (1 case), and as basement of steps attached on the stone wall (1 case).

It is still too early to argue if diversion of chikaraishi stones was on purpose or not, but the work I present in this paper provides some interesting information for farther study on chikaraishi stones excavated throughout Japan.

Key words: Chikaraishi stone, diversion to basement of building, new viewpoint of study of chikaraishi stone

藤枝市寺家前遺跡から出土した柄付き鉄製鎌について

中川 律子

要旨 静岡県中部の藤枝市、志太平野の北東部に所在する寺家前遺跡では弥生時代後期の集落跡と水田跡が見ついている。山裾には竪穴住居があり、更に南側の低地部には水田跡が広がっている。水田は地形を上手く利用しながら、杭列・矢板を伴う大畔で区画され、更にその中には小さく区画された畔の跡が見ついている。その杭列を伴う畔のひとつSK-6の南側から、柄に装着された鉄製の鎌が出土した。共存する周辺の土器などから鎌は弥生時代後期のものである可能性が高まった。柄と刃が一体になって出土した弥生時代の鎌はこれまでに類例がなかった。新たな資料の発見により、鎌刃の装着方法や角度、鎌柄の構造などが徐々に解明されてくるであろう。

キーワード：柄付き鉄製鎌、鎌柄、鎌刃、杭列を伴う大畔畔、グミ属、建築部材、志太平野、樹種同定、水田跡、弥生時代後期の集落跡

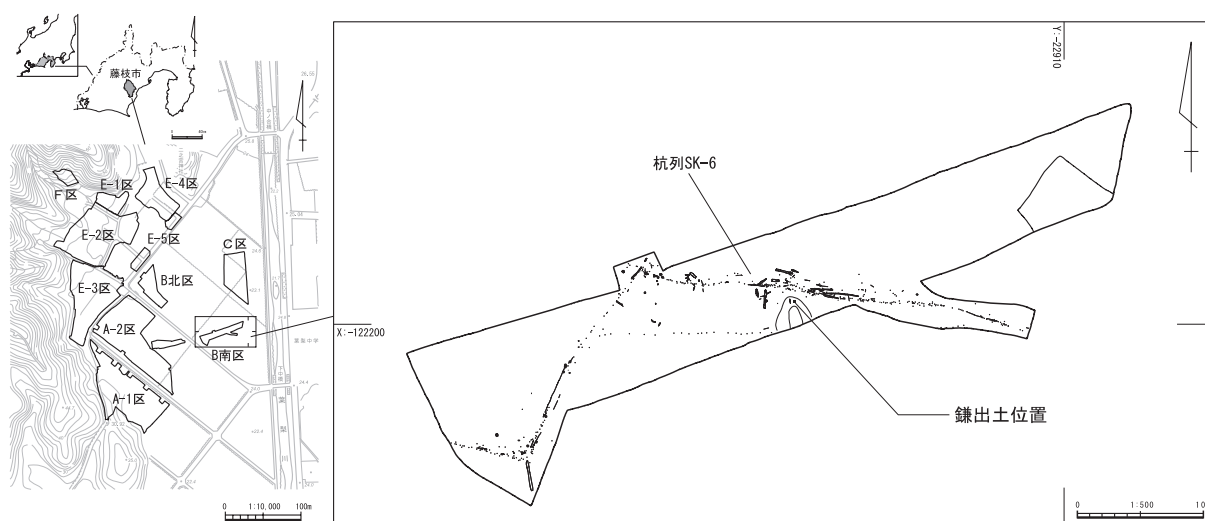
1 はじめに

藤枝市寺家前（じけまえ）遺跡は、当研究所が平成11年度から発掘調査を実施してきた集落・生産遺跡である。すでに平成18年度末に現地調査を終了し、現在は資料整理と報告書刊行に向けての作業を進めている。調査原因は、第二東名自動車道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として始まり、最終的には37630㎡という広大な面積の発掘調査を実施した。遺跡の年代は、弥生時代後期～近・現代までと幅広い遺構・遺物が見ついている。このうち弥生時代後期の集落と水田からは、夥しい数の木製品が出土した。特に注目されるのは、9～10層と呼ばれる包含

層から、高床式倉庫や住居等に使われた建築部材等がまとまって出土したことである。同層からは鍬・鋤とその未製品、田下駄、槽、背負板、臼、竪杵などの製品も見ついている。

本稿の目的は、こうした貴重な資料をいち早く公表することによって、研究資料として活用ができるようにすることである。また報告書刊行までの間、資料の十分な調査と検証を行う必要があると考えるからである。

今回は低湿地の水田跡から出土した柄付き鉄製鎌についての資料紹介をする。本資料は弥生時代後期に属すると思われる鎌で、木製の鎌柄に鉄製の鎌刃が装着した状態で見



第1図 藤枝市寺家前遺跡の位置と柄付き鉄製鎌の出土位置

つまっている。本資料の出土状況や形状の詳細と共に、樹種や類似例等にも触れて検証する。

2 遺跡の概要

寺家前遺跡は藤枝市域の北東部に所在する弥生時代～近世までの集落・生産遺跡である。遺跡の東側を流れる葉梨川は瀬戸川丘陵に端を発している。遺跡が所在する葉梨地区は、この葉梨川の中流域にあたる。遺跡調査前の当地は、葉梨川とその支流の半谷川に挟まれた丘陵の麓に集落と水田が広がっていた。発掘調査でも当時の土地利用は現代のそれとほぼ同じ範囲であったことが解っている。調査の結果、微高地には竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの集落遺構、南東側の低湿地には水田跡が見つかった。集落跡では、弥生時代後期の竪穴住居跡や倉庫跡などがある集落遺構面をはじめとして、掘立柱建物跡群があった古墳時代後期の集落面、12世紀後半～13世紀前半を主体とした中・近世集落面という、3つの遺構面を検出した。水田跡も弥生時代後期以降、断続的に稲作を行ってきた痕跡が見られ

た。水田跡では杭列を伴う大畦畔や小区画水田跡、溝跡などを検出した。出土遺物は、土器・石器・木製品・金属製品・種子等がある。調査区はA～C区、E区、F区に分かれており（第1図）、おおむねE区は集落域、A～C区は水田域となっている。

3 「柄付き鉄製鎌」について

(1) 出土状況

鉄製鎌は平成17年度の発掘調査で見つかった。低湿地の水田域にあるB-南区の調査で、南東壁にかかる遺構B610から出土した。B610は東西方向に並ぶ杭列（SK-6）の南側に位置する遺構で、杭列から南側へ落ち込む不定形な溝状を呈している。杭列（SK-6）は自然木の丸杭や割杭が並び、所々に矢板を打ち込んでいる。一部、杭列に平行した横木が残っていることから、大畦であった可能性がある。鎌はB610の底部に近いところで出土した（写真3・4）。鎌の後主面側が上面に向き、鎌刃が遺構の縁に近いほう、鎌柄の末端は南側に向いていた。B610からはこの



写真1 B-南区杭列（SK-6）検出状況



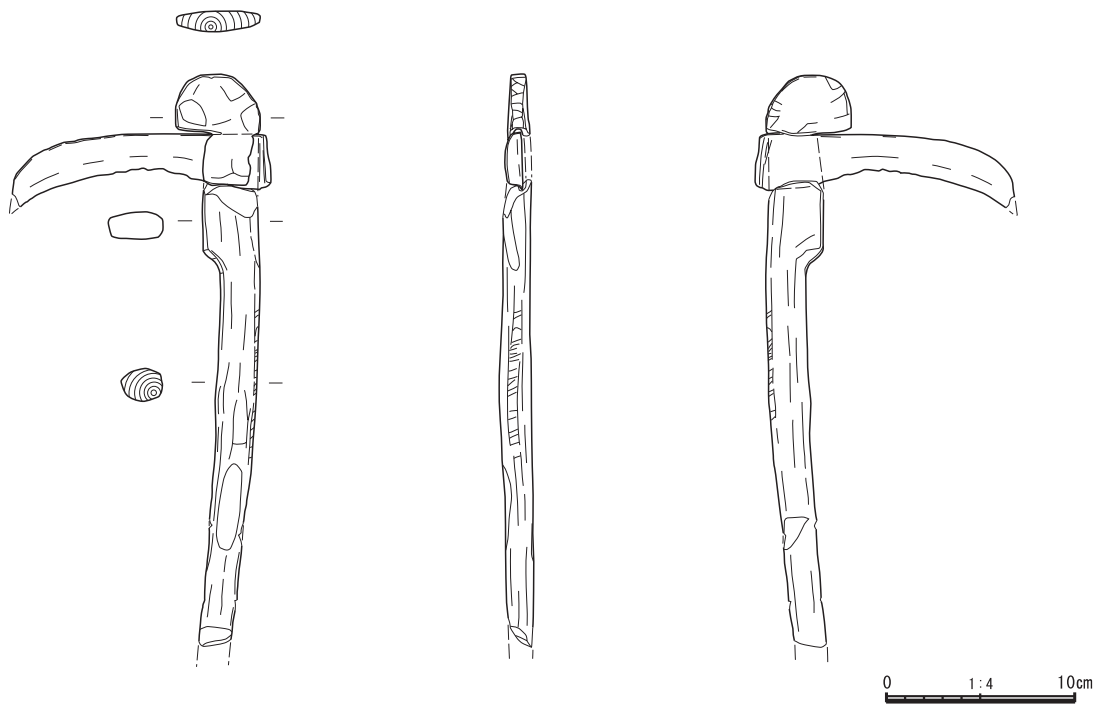
写真2 B-南区杭列（SK-6）の南側部分



写真3 B-南区B610完掘状況



写真4 柄付き鉄製鎌出土状況



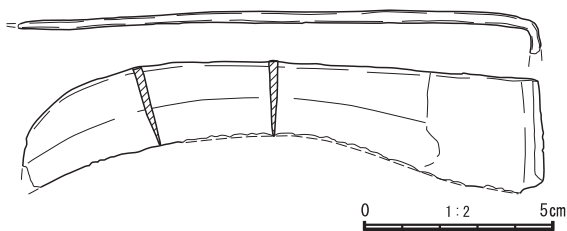
第2図 藤枝市寺家前遺跡出土の柄付き鉄製鎌



写真5 柄付き鉄製鎌（前主面）



写真6 柄付き鉄製鎌（後主面）



第3図 鉄製鎌刃



写真7 鉄製鎌刃

他に弥生土器の壺や土師器、楕円形の削り物や大型の槽、杭などが出土している。遺構図や出土状況写真、座標値などを見る限りでは、土師器や大型の槽はやや上層から出土しており、鎌と同じ標高で出土しているのは楕円形の削り物と弥生時代後期に属する土器である。この出土状況から勘案すると、鎌は弥生時代後期～古墳時代初頭に属するものと考えられる。

(2) 形状

鎌刃 全長13.7cm、身部の長さは10.5cm、幅は2.1cm、最大幅は3.1cmである。厚さは峰部で0.25cm、刃部は刃を研ぎ出している。装着部分はやや厚く0.28cmである。現存する鎌刃の重量は44gほどあり、非常に残存状態が良好である。鎌刃の平面形状は曲刃と言うよりは、直刃に近い形をしている。刃の先端は僅かに欠損し、刃先から5cmの所で折れている。右側に柄を装着する基部があり、右端部は0.1～0.2cm幅ほど手前に折り返してある。峰部側から見ると、鎌はゆるやかに湾曲している。刃部は使用頻度の高い中央部分に細かい刃欠けが多く見られる。新品ではなく、かなり使い込まれており、研ぎ直しにより刃部が減っているであろう。刃の形状は曲刃ではなく、刃部の曲線は使い減りによるものと見た方がいいであろう。

鎌柄 全長30.3cm、最大幅は頭部で4.5cm、軸部で1.7cmある。樹種はグミ属の芯持ち材が使われているが、素材となる木の樹幹は直径6cm以上あったと思われる。柄のグリップエンドにあたる末端は欠損している。また本来、刃の厚みほどの柄孔が切り込まれていたであろうが、後主面側は破損して無くなっている。

全体の形状については、頭部から9.5cmほど下方まで板状になっている。鎌刃の上は大きく半円形の頭部を作り出している。そのすぐ下に薄い鎌刃が入るよう、縦2.7cm、幅0.3cmの柄孔を切り込んでいる。装着部分には楔などの付属品は見られない。先端部より10cmほど下方から柄の断面形は円形状に変化する。軸部の直径は最大で1.7cmほどある。

(3) 樹種

鎌柄の樹種はグミ属との分析結果が出ている(註1)。しかし、木材資源としてグミ属を利用することは極めて稀なことである。グミ属の使用例は、県内では浜松市の恒武西宮・西浦遺跡で編錘14点(古墳時代中期)、旧福田町の元島遺跡で礎板(室町～戦国期)が製品として確認されている。この他には静岡市登呂遺跡や伊豆の国市山木遺跡、

菊川市中島遺跡では立株や自然木などに見られ、長泉町大平遺跡では炭化材(中世)に見られる程度である。県外では千葉県茂原市国府関遺跡で出土した鎌柄の未製品がグミ属と同定されている。そういう意味では、寺家前遺跡から出土した鎌柄は、かなり特殊な材を選択していると言える。グミ属はグミ科に属する落葉小高木で、ナツグミ、アキグミ、マメグミなど種類が数多くある。おそらく集落の周辺に自生していた手近な材を使って作られたものと思われる。

鎌柄に使われる樹種は全国的に見ると比較的多種多様で、特に決まった樹種を選択している様相は見られない。県内の弥生時代の鎌柄はヒノキ、クヌギ、イヌマキ、イヌガヤ、カシなどがある。一方、県外の例で多く見られるのは、やはりアカガシ亜属、クヌギ節などである。この他には、アオキ、カエデ属、クマノミズキ類、ヤマグワ、ケヤキなどの材がある。

(4) 類似例

鎌刃 静岡県内では弥生時代の鉄製の鎌が6点出土している(註2)。鉄製の鎌はいずれも鉄刃のみで鎌柄は伴っていない。唯一、菊川市下平川八幡ヶ谷古墳出土の鉄鎌には木質と思われる繊維が付着しているが、所属時期は古墳時代中期である。よって、弥生時代後期で鎌の刃と柄が装着した状態で発見されたのは、県内初めての出土例である。

鎌柄 一方、弥生時代の鎌柄は県内でも数例出土している(表1)。代表的なものは、静岡市に所在する有東遺跡で刃の部分も木製である完形の鎌が出土している。時期は弥生時代中期後半である。県西部の浜松市梶子遺跡では弥生時代中期の鎌柄が1点、同市入野にある角江遺跡でも弥生時代中期に属する鎌柄が4点、弥生時代後期の鎌柄が1点ある。このうち中期の2点は一木で作られた木鎌である。また浜松市(旧細江町)岡の平遺跡や同市伊場遺跡では弥生時代後期に属する鎌柄がそれぞれ1点ずつ出ている。樹種はヒノキ、クヌギ節、イヌマキ、イヌガヤ、カシ等の種類がある。

(5) 問題提起

静岡県内では弥生時代に属する鉄器は非常に少なく、鉄鎌は更に類似例が乏しい(1997 松井)。また類似例でも述べたように、木製の鎌柄もごく限られた数しか確認されていない。更に、着柄状態で出土した弥生時代の鎌は国内ではこれまのでところ類似例が見られない。

過去に、鎌柄や鎌刃は単体で出土していることが多く、

表1 静岡県内出土鎌柄・木鎌（弥生時代）

| 番号 | 遺跡名 | 市・町名 | 器種名 | 器種細分名 | 表面状態 | 樹種名 | 時代 | 備考 |
|----|-------|------|------|----------|------|------|-----------|---------|
| 1 | 岡の平遺跡 | 浜松市 | — | | | ヒノキ | 弥生後期後半 | |
| 2 | 伊場遺跡 | 浜松市 | 鉄製鎌柄 | | | ヒノキ? | 弥生後期 | D弥生 |
| 3 | 梶子遺跡 | 浜松市 | 木鎌 | 組合せ（柄） | | クヌギ | 弥生中期 | 拡張区-DD' |
| 4 | 角江遺跡 | 浜松市 | 木鎌 | 一木 | | クヌギ節 | 弥生中期 | |
| 5 | 角江遺跡 | 浜松市 | 木鎌 | 一木 | 炭化 | クヌギ節 | 弥生中期 | |
| 6 | 角江遺跡 | 浜松市 | 鉄製鎌柄 | | | イヌマキ | 弥生中期 | |
| 7 | 角江遺跡 | 浜松市 | 鉄製鎌柄 | | 炭化 | イヌマキ | 弥生中期 | |
| 8 | 角江遺跡 | 浜松市 | 鉄製鎌柄 | | | イヌガヤ | 弥生後期～古墳初頭 | |
| 9 | 寺家前遺跡 | 藤枝市 | 鉄製鎌柄 | | | グミ属 | 弥生後期 | |
| 10 | 有東遺跡 | 静岡市 | 木鎌 | 組合せ（柄・刃） | | カシ | 弥生中期 | |

装着状態や着柄角度等は推定の域を出なかった。今回の資料から幾つかの問題を提起することができよう。

① 鎌柄の形態と構造

弥生時代の鎌柄の形態は、其々に特徴がある。寺家前遺跡の鎌柄のように鶏頭状あるいは半月形とも呼べるような頭部を持つ柄は、弥生時代から古墳時代にかけて幾つか類似例がある。鎌柄の形態だけでは時期の特定は難しいが、少なくとも弥生時代にもこの形態の特徴を持つ鎌柄が存在したということが解った。

頭部の下には鎌刃を装着するための柄孔を切り込んでいる。柄穴の寸法は長さ2.7cm、幅は0.3cmで、対面まで貫通している。柄孔の幅は鉄刃を装着するため、非常に狭い。一方で柄孔幅が広く、かなり厚みのあるものを装着したかのような鎌柄もある。刃の材質が木製であるか、あるいは鉄製であるかの違いであろうか。

② 鎌刃の装着方法

本資料は、鎌刃を柄孔に差し込み、やや鋭角に保った状態で左端部を手前に折り曲げ、鎌刃が抜けないように固定してある。楔等の付属物は発見されなかった。柄と刃が接着している部分は2.9cm幅であるが、本体もその部分は厚みを持ち鎌柄の柄孔と寸法が丁度合っている。使い減ったら刃のみ交換するのではなく、鎌刃と柄は一体と考えたほうがよいだろうか。

③ 鎌刃の装着角度

鎌刃の先端を欠き、鎌柄の下端部が欠損していることから、正確な角度は測れないが、鎌柄と鎌刃の装着角度は、およそ84～85度である。90度に近いが、やや鋭角気味である。他の鎌柄から推察する角度は必ずしも鋭角ではなく、鈍角のものもある。装着角度の違いは何を意味するのか。

④ 柄付き鉄製鎌の出土場所

今回見つかった柄付き鉄製鎌は水田部の遺構からほぼ完

形に近い状態で出土している。当時は貴重品であろう鉄製鎌が水田部にあったのは、何か別の意味を持つものであった可能性がある。

4 おわりに

弥生時代後期の鉄製鎌の類例は、まだまだ数少ないのが現状である。その中で今回紹介した鎌が着柄状態で見つかったことに、この資料の重要性がある。問題提起は今後の課題でもある。本資料は平成25年度末までに刊行される寺家前遺跡の発掘調査報告書に掲載する予定である。こうした資料の公表や問題提起が、今後の研究に活かされれば幸いである。

本稿執筆にあたり、東北大学名誉教授鈴木三男氏、首都大学東京教授山田昌久氏、当研究所の杉山和徳氏、西尾太加二氏に有益な指導・助言、協力をいただいた。また図版作成については福島志野氏の協力を得た。末尾ながら記して感謝申し上げる。

註

- 1 東北大学名誉教授 鈴木三男氏による樹種同定結果が得られている。
- 2 鎌刃の資料収集にあたっては当研究所調査研究員の杉山和徳氏から貴重な収集情報を得た。

引用・参考文献

- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所他 1994 『古代における農具の変遷—稲作技術史を農具から見る—』 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所・東日本埋蔵文化財研究会・東海考古学フォーラム
- 松井一明 1997 「東海地方における鉄器の普及と展開」 『第4回鉄器文化研究会 東日本における鉄器文化の受容と展開 発表要旨集』鉄器文化研究会・朝霧市教育委員会

Wooden Handled Iron Sickle Excavated at Jikemae Site in Fujieda City

Ritsuko NAKAGAWA

Summary: At the Jikemae site locating in the north-east of Shida plain of Fujieda city, mid-Shizuoka, a settlement and a rice field were uncovered; both are estimated to be of the late Yayoi period. The features of pit dwelling are found at the skirts of a mountain and the features of rice field are spread in the lowlands situated south. The rice field was well established with taking geographical advantage. It was largely divided by wide paths equipped with a role of stakes and lined boards, and also, smaller paths were recognized in the division.

In one of the wide paths, in the south of SK-6 point, a wooden handled iron sickle was found. Judging from accompanied objects such as potteries, it highly likely belongs to the late Yayoi period. There has been no other example of excavation of a sickle and its wooden handle attached together, which belongs to the Yayoi period. This discovery can help revealing how to join a blade with a handle and its angle, and structure of wooden handle itself.

Key words: iron sickle with wooden handle, handle of sickle, blade of sickle, wide baulk with row of stake, Oleaster (*Elaeagnus L.*), parts of building, Shida plain, identification of wood species, wet rice field site, site of settlement in late Yayoi period

静岡県埋蔵文化財調査研究所

研究紀要 第17号

2011年1月31日

編集・発行 財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL 054-262-4261(代)
FAX 054-262-4266

印刷所 みどり美術印刷株式会社
〒410-0058 静岡県沼津市沼北町2-16-19
TEL 055-921-1839(代)

BULLETIN
of
SHIZUOKA PREFECTURE RESEARCH INSTITUTE
FOR BURIED CULTURAL PROPERTIES

CONTENTS

Preface *Akira ISHIDA*

ARTICLES, RESEARCH NOTE

Lithic Industry in the Early Part of Late Upper Paleolithic around Mt. Ashitaka and Hakone
: Its Chronological Division and Dating
Yuuki NAKAMURA 1

Study on the Radiocarbon Ages in the Jomon Period
Motoki MIYOSHI15

Use of the Tanged Points in Shizuoka
Ryohei SHIBATA, Motoki MIYOSHI, Yuuki NAKAMURA25

Emergence of Iron Implements in Tokai Region
Kazunori SUGIYAMA39

Meaning of Covered Tang Iron Arrowhead Used in Totoumi and Suruga
-Comparing with Stemless Iron Arrowhead-
Hiroshi OOYA53

Jinrikibo and Container for Sutra Scrolls of Sankan Shonin of Suruga
-Carried Container for Sutra Scrolls in West Japan 2-
Junji ADACHI65

Mishimagadake Sutra Mound
-Examination of Photographs Owned by Fujisan Hongu Sengen Taisha-
Naoto KATSUMATA79

Process of Loss of the Coins Minted in 19th Century in Shizuoka
Kentaro IWANA93

The Chikaraishi Stone, from Archeological Point of View
-Presentation of Chikaraishi Stone Excavated at the Nittayakata Site in Kannami Cho-
Takashi IWAMOTO..... 101

REFERENCE MATERIALS

Wooden Handled Iron Sickle Excavated at Jikemae Site in Fujieda City
Ritsuko NAKAGAWA 111